地域づくりを巡る小さなまち旅～時間 空間 旅～

－ 画一化する街並みの中で地域個性を巡る旅 －



（公財）福岡アジア都市研究所 会員研究員（2019～2020 年度）
大　塚　政　徳



唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業直後に熊本地震で甚大な被害を受けた熊本城を訪問（2016 年6月）。
これをきっかけとして「地域づくりや建築の原点に返る旅」と「熊本の復興の過程を巡る旅」をスタートした。



復旧が進み、2021 年4月 26 日の特別公開第3弾開始（天守閣内部公開）を待つ熊本城（2021 年3月）。
熊本地震から5年の節目に完全復旧する天守閣は、震災復興の象徴であり、筆者も感慨深いものがある。

※表紙写真：筆者が提唱する「博多湾姪浜　夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」エリアの福岡タワーから見た景観（2021 年1月）。筆者にとって身近な「職・住・遊・活」のエリアでもある。

はじめに（研究の目的）

筆者は、(公財)福岡アジア都市研究所の会員研究員として 2017 年度に行った「身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究～姪浜でのまちづくり活動と地域づくりを巡る小さなまち旅を通して～」の最後に次のように述べている。

> インターネットの発達した現在においては、その地域や場所に行かなくてもいろいろな情報を入手できるが、時間をかけてその地域や場所に行く移動の過程でいろいろなことを想像し、思考を深めることができる。また、実物を見て空間を体験し地域の方々と対話することで、新たな考えが生まれ、地域づくりのヒントを得ることができる。近代建築の教科書と呼ばれる「空間 時間 建築」（ジークフリード・ギーディオン著）のタイトルを引用するわけではないが、情報化時代の地域づくりにおいてこそ「空間 時間 旅」の視点が求められているのではないだろうか。
>
> （中　略）
>
> 今後、「地域づくりを巡る小さなまち旅」の訪問地の情報や感想を加えながら、機会を見つけて「まちづくり読本」としてわかりやすく編集していきたいと考えている。
>
> 筆者は 2018 年３月末で福岡市役所を退職するが、これまでの 32 年にわたる市役所での業務経験（景観づくり、広域連携、空き家対策、耐震対策等）や姪浜での 10 年間の精力的なまちづくり活動、そして学生時代から続けている小さなまち旅の実践等を踏まえ、今後も執筆活動や講演活動等を通して、いろいろな地域の「身近な地域資源を活かしたまちづくり」を支援していきたいと考えている。筆者が伝えていきたいことは、「それぞれの地域の風土・歴史・文化を活かしたまちづくり」「こだわり、おもてなし、本物志向の地域づくり」、そして「それを進める地域内の各団体の協働・連携のあり方」である。

さて、筆者の小さなまち旅の歴史は、熊本大学建築学科に入学した 1976 年に遡る（この頃の旅は「建築を巡る旅」）。もちろんそれ以前にも修学旅行で京都や奈良の古建築等を見に行ったことはあるが、本格的に建築見学を始めたのは大学に入学した時からである。当時の九州地方は「現代建築の宝庫」と言われ、建築を学ぶ多くの学生たちが磯崎新氏や黒川紀章氏、白井晟一氏等が設計した建物の見学に訪れていた。筆者も磯崎新氏の作品を中心にエネルギッシュに見て回った。

４年間の大学生活を経て、会社員になった 1980 年からは現代建築に加え、京都や奈良等の古建築や庭園巡り、川越や栃木等の歴史的町並み巡りを始めた。その中でも何回も足を運んだのは、京都の桂離宮や修学院離宮、円通寺、奈良の薬師寺、川越の歴史的町並みである。そして、６年間の会社員生活の締め括りはギリシャ、イタリア、エジプトの古建築巡りであり、大学で学んだことを実際に見て大いに感激したものである。

1986 年に福岡市役所に入庁したが、今までの旅に転機が訪れたのは 1993 年に都市景観室に配属された時であり、京都や奈良、横浜、神戸等の景観づくりの先進地を数多く視察した。また、海外派遣調査で３週間にわたりヨーロッパの先進都市の都市デザインの調査を行い、景観づくりや地域づくりの手法を学ぶことができた。その後、2000 年度から３年間在籍した福岡都市科学研究所（現(公財)福岡アジア都市研究所）でも、国内外の多くの都市の景観づくりや地域づくりの研究を行う機会に恵まれた。

また、福岡市役所の業務とは別に、2007 年３月には自ら「唐津街道姪浜まちづくり協議会」を立ち上げ、2016 年５月に卒業するまで事務局長として地域固有の歴史・文化資源を活かしたまちづくりを推進してきた。この間も、景観づくりや地域づくりをテーマに多くの都市や地域を訪問し、見聞を広めてきた。

唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業直後の 2016 年６月からは、「地域づくりや建築の原点に返る旅」や「熊本の復興の過程を巡る旅」「身近なまち旅」を始めた。これらは、姪浜での 10 年間のまちづくり活動を振り返る旅であり、次の二毛作目の人生に向かって自分を見つめ直す旅でもある。いろいろな地域を旅し、その魅力を体感することは、地域づくりを考える上で大いに参考になるし、新たな出会いもある。特に、大学時代の思い出の多い熊本の復興の過程を見に定期的に熊本を訪問している。

筆者は 2018 年３月に福岡市役所を退職し、同年４月からは民間の建築確認検査機関の職員として九州各地を飛び回っており、いろいろな地域の歴史や風土に触れる機会も多い。そうした恵まれた職場環境も活かして「地域づくりを巡る小さなまち旅」を楽しみ、現在に至っている。

本研究は、2017 年度に行った「身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究～姪浜でのまちづくり活動と地域づくりを巡る小さなまち旅を通して～」の研究成果を活かすとともに、その後も充実させながら継続している小さなまち旅から得たことを「モノ（地域資源)」「ヒト（人、組織)」「コト（ストーリー)」の視点で整理し、『画一化する街並みの中で地域個性のあり方』について考察するものである。

また、筆者の身近な「職・住・遊・活」のエリアである博多湾姪浜エリアを対象として、これまでの小さなまち旅の成果をフィードバックし、まち歩きフィールドワークを行いながら、広域連携という視点で『博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想』を提案するものである。

さらに、筆者の小さなまち旅を踏まえ、景観づくりや地域づくりの魅力を考える旅のテーマを設定し、『地域個性を巡る小さなまち旅の事例集～身近な地域の魅力の再発見～』として写真と文章でわかりやすく伝えていくものである。

全国的に個性の感じられない同じような街並みの形成が進む中で、身近にある地域資源を見直すきっかけとなり、景観づくりや地域づくりのヒントにしていただければ幸いである。

なお、「本稿の構成と各章の要約」は次のとおりである。

【本稿の構成と各章の要約】

【Part.1】小さなまち旅～モノ・ヒト・コト～

まずは、大学時代からの「現代建築を巡る旅」、会社員時代からの「歴史的建造物と町並みを巡る旅」、公務員時代からの「景観づくりと地域づくりを巡る旅」、そして現在進行中の「地域づくりや建築の原点に返る旅」「熊本の復興の過程を巡る旅」「身近なまち旅」に至るまでの筆者の「小さなまち旅」の系譜を述べる（第１章)。

次に、建築や地域づくりに関連する筆者の「福岡市役所での関連業務」「姪浜でのまちづくり活動の実践」等の系譜を述べる（第２章)。

さらに、上記（第１章、第２章）を踏まえ、身近な地域資源を活かしたまちづくりを「モノ・

ヒト・コト」の視点で整理し、筆者が実際に訪問した地域の事例を紹介しながら、『画一化する街並みの中で地域個性のあり方』について考察するものである。また、熊本の復興の過程を巡る旅から得た「モノ・ヒト・コト」についても紹介する（第３章)。

最後に、小さなまち旅の成果を筆者の身近なエリアへフィードバックし、『博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想』を提案する（第４章)。

【Part.2】地域個性を巡る小さなまち旅の事例集～身近な地域の魅力の再発見～

Part.1 と重複する部分はあるが、小さなまち旅で筆者が感じたことをテーマごとに分類し、景観づくりや地域づくりの魅力を感じたり、身近にある地域資源を見直すヒントやきっかけとしてもらえるよう写真と文章でわかりやすく紹介する。

ページ数は多いが、各章ともできるだけ読み切り形式にしているので、興味のある部分だけでも読んでいただければ幸いである。

地域づくりを巡る小さなまち旅～時間 空間 旅～

－ 画一化する街並みの中で地域個性を巡る旅 －

目　次

はじめに（研究の目的）　…… 1

【Part.1】小さなまち旅～モノ・ヒト・コト～　…… 9

【第１章】 筆者の「小さなまち旅」の系譜　……１０

１　筆者の旅の系譜　……１０

（１）これまでの旅の整理　……１０

（２）現代建築を巡る旅（学生時代 1976.4～1980.3）　……１２

①建築との出会い（熊本大学建築学科入学）

②歴史的建造物への興味（木島安史先生との出会い）

③卒業論文

（３）歴史的建造物と町並みを巡る旅（会社員時代 1980.4～1986.3）　……１７

①建築巡り

②歴史的建造物への興味の増進

③歴史的町並みへの興味

④最初の海外への旅（古典建築を巡る旅）

（４）景観づくりと地域づくりを巡る旅（公務員時代Ⅰ 1986.4～2007.2）　……２４

①２回目の海外への旅（美しい街並みを巡る旅）

②都市景観室時代の先進都市調査

③海外派遣研修

④福岡都市科学研究所での先進都市調査

（５）地域主体の景観づくりと地域づくりを巡る旅（公務員時代Ⅱ 2007.3～2016.5）……３６

①唐津街道姪浜まちづくり協議会設立

②まちづくり協議会の活動の一環としての「身近な景観づくりを巡る旅」

③筆者自身の「景観づくりと地域づくりを巡る旅」

２　現在の旅（2016 熊本地震前後～）　……４１

（１）現在の旅のきっかけ（姪浜から熊本へ）　……４１

エッセイ　二毛作目の人生の始まりは、被災後の熊本城訪問から……４２

（２）地域づくりや建築の原点に返る旅 ……４８
【風景、気候、風土、文化】
【町並み、集落、地域、路地、市場】
【歴史的建造物、現代建築】
【季節、花、樹木、鉄道】
【モノ、ヒト、コト（ストーリー)】
（３）熊本の復興の過程を巡る旅 ……６３
エッセイ　熊本地震と私～オオクワガタから始まった旅は復興へと向かう旅へ～……６４
（４）身近なまち旅 ……７２
①身近な「職・住・遊・活」の場である博多湾姪浜エリア
②憩いの空間、現在の職場周辺
（５）「アート」「歴史」「旅」「生き方」等をテーマにした旅 ……７８
【マスコミ情報】
【書籍】
【映画】

【第２章】 建築や地域づくりに関連する筆者のこれまでの業務、活動等の系譜 ……８２
１　第２章の位置づけ ……８２

２　建築や地域づくりに関連する筆者のこれまでの業務、活動、経験等 ……８３
（１）学生時代の設計課題 ……８３
（２）会社員時代のコンペ ……８５
（３）福岡市役所での関連業務 ……８６
（４）姪浜でのまちづくり活動の実践 ……８９
（５）まちなみネットワーク福岡での活動 ……９１

【第３章】 画一化する街並みの中で地域個性のあり方についての考察
～小さなまち旅の実践等から得たモノ・ヒト・コトを通して～ ……９３
１　視点の整理 ……９３
（１）これまでの福岡市役所での業務やまちづくり活動の実践から得た視点 ……９３
（２）小さなまち旅から得た新たな視点 ……９４

２　画一化する街並みの中で地域個性のあり方についての考察 ……９５
（１）モノ（地域資源） ……９５
【その地域ならではの魅力資源の評価】
①重要伝統的建造物群保存地区
②重要文化的景観

③都市景観条例に基づく都市景観形成地区
④印象に残る制度
【画一化する街並みの中で見えにくくなりつつある地域資源の発掘・評価・活用】
①筆者が実践してきた姪浜
②小さなまち旅での地域個性の発見
③広域的な視点から探る地域の魅力
【多様なテーマから地域づくりのヒントを考える】
①風土、気候、地形等
②町並み景観、集落景観
③歴史的建造物
④樹木
（２）ヒト（人、組織） ……１１２
【地域のまちづくりに求められる視点、まちづくり人に求められるもの】
【地域に根ざしたまちづくり組織】
【地域内の各団体の連携による活動の広がり】
【小さなまち旅のすすめ】
①「空間 時間 旅」の視点
②小さなまち旅
【樹木や花から景観の美しさ、組織のあり方を考える】
①桜並木
②イチョウ、ケヤキの紅葉
③花
（３）コト（ストーリー） ……１１７
【各地域のそれぞれの魅力資源を活かしたまちづくり】
【まちづくりの課題や段階（ステージ）に対応した取り組み】
【場所性や地域固有の材料を活かした建築と地域づくり】
【広域連携による地域づくり】
事例紹介　北斎館に端を発した小布施の地域づくり＆北信濃地域への展開……１２２
【点・線・面による地域づくりがもたらす地域のアイデンティティ】

３　熊本の復興の過程を巡る旅から得たモノ・ヒト・コト ……１３０
【復興のシンボル熊本城：前向き思考、縁、人】
【町家の再生：大地震を乗り越え、脈々と受け継がれる文化都市・熊本】
【阿蘇：前向き思考、地域一丸で取り組む復興、鉄道でつながる地域】
【一つひとつのストーリーの積み重ね、人と人との出会いやつながり】

【第４章】 小さなまち旅の成果の筆者の身近なエリアへのフィードバック
～博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想～
……１３８
１　プロジェクトの対象エリアと取り組みの視点 ……１３８
（１）「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」の対象エリア……１３８
【筆者の身近な「職・住・遊・活」のエリア】
（２）取り組みの視点 ……１４１
【福岡市役所での業務、姪浜でのまちづくり活動の実践、小さなまち旅の実践を活かした視点】
（３）広域連携の視点を踏まえた博多湾姪浜エリアでの筆者のこれまでの提案及び実践活動
……１４２
【唐津街道姪浜地区を中心とした回遊ルートづくり】
【広域連携を視野に入れたこれまでの実践活動、姪浜まち旅プロジェクト計画の作成】
【広域的に見たコントラストのある景観と４つの視点場】
【都市・歴史・自然の風景を楽しむトライアングルフットパス構想】

２　小さなまち旅の一環としての身近なまち旅の実践 ……１４８
（１）広域連携の実践に向けたまち歩き ……１４８
（２）各地区の概要 ……１４８
【シーサイドももち地区】
【愛宕・豊浜地区】
【愛宕浜地区】
【姪浜地区】
【小戸・生の松原地区】
【能古島】
【博多湾】

３　博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想 ……１５３
（１）博多湾姪浜エリアのイメージ ……１５３
【博多湾に沿っては池泉回遊式庭園、内陸部は箱庭的都市のイメージ】
（２）博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想 ……１５４
【コントラストのある都市空間】
【博多湾姪浜 まち旅プロジェクト＝博多湾を通して地域（モノ・ヒト・コト）をつなぐ】
【博多湾姪浜と歴史的にゆかりのある都市との広域交流（五ヶ浦廻船等）】
エッセイ　日本海を隔てた広域交流の提案……１５９

【Part.2】地域個性を巡る小さなまち旅の事例集～身近な地域の魅力の再発見～
……１６１

１　小さなまち旅から考える景観づくりや地域づくりのテーマ　……１６２

２　景観づくりや地域づくりの魅力を伝える62のテーマと概要　……１６３

大テーマ		
地域づくりや建築の原点に返る旅		
	風景、気候、風土、文化	……１６４
	町並み、集落、地域、路地、市場	……１８１
	歴史的建造物、現代建築	……２２０
	季節、花、樹木、鉄道	……２６２
	モノ、ヒト、コト（ストーリー）	……２９８
熊本の復興の過程を巡る旅		……３２２
身近なまち旅		……３３７

おわりに　……３４９

参考文献等　……３５３

【参考資料】

参考資料１　筆者の旅の系譜

参考資料２　筆者の最近３年間（2018 年～2020 年）の小さなまち旅の訪問地
（小さなまち旅３年日記）

注）本稿における表現について

用 語	本稿での表現
「町家」「町屋」	団体名称や事業名称等の固有名詞、引用文献で「町屋」を使用している場合を除き「町家」としている。
「街並み」「町並み」	全体的には「街並み」を使用しているが、伝統的な町家が軒を連ねている地域や城下町等では「町並み」としている。
「まち」「町」	町名等の固有名詞を除き「まち」としている。

【Part.1】小さなまち旅～モノ・ヒト・コト～

第１章　筆者の「小さなまち旅」の系譜

１　筆者の旅の系譜

（１）これまでの旅の整理

筆者は大学時代から町並みや建築物に興味を持ち、多くの地域、集落、歴史的町並み、歴史的建造物、現代建築等を見て回った。

１ページの「はじめに（研究の目的)」の中で少し触れているが、筆者の旅は大きく次の５つの時代に区分される。具体的には、建築と出会った熊本での「①学生時代」、初めて就職した東京での「②会社員時代」、福岡に戻り福岡市役所に入庁し、主に景観形成や広域連携の業務に興味を持った「③公務員時代Ⅰ」、そして福岡市役所での業務を地域活動に活かしたいと思い、まちづくり活動を実践してきた「④公務員時代Ⅱ（唐津街道姪浜まちづくり協議会活動時代)」、さらには自分自身をステップアップするために新たな旅に取り組んでいる「⑤公務員時代Ⅲ～現在（地域づくりを巡る小さなまち旅実践時代)」である。

各時代の環境の変化、それに伴う筆者自身の興味や活動の変化等に伴い、それぞれの時代にテーマを持って旅に取り組んできた。これらに共通しているテーマは、各地域固有の歴史・文化・風土を活かした景観づくりと地域づくりの取り組みである。

なお、次ページ以降の旅の振り返り部分については、2016 年度の「身近な地域資源を活かしたまちづくり活動記録～姪浜での 10 年の実践活動を中心とした、建築と地域づくりへの想い」及び 2017 年度の「身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究～姪浜でのまちづくり活動と地域づくりを巡る小さなまち旅を通して～」を一部加筆修正している。

筆者の旅の整理

時代区分	時期	旅のテーマ
①学生時代	1976.4～1980.3 熊本大学時代	■建築を巡る旅（主に現代建築）
②会社員時代	1980.4～1986.3 鴻池組時代	■建築を巡る旅（現代建築、歴史的建造物） ■歴史的町並みや庭園を巡る旅
③公務員時代Ⅰ	1986.4～2007.2 福岡市役所時代Ⅰ	■歴史的町並みを巡る旅 ■都市デザインを巡る旅
④公務員時代Ⅱ	2007.3～2016.5 福岡市役所時代Ⅱ（唐津街道姪浜まちづくり協議会活動時代）	■地域主体の景観づくりや地域づくりを巡る旅
⑤公務員時代Ⅲ～現在	2016.6～ 福岡市役所時代Ⅲ～現在（地域づくりを巡る小さなまち旅実践時代）	■地域づくりや建築の原点に返る旅 ■熊本の復興の過程を巡る旅 ■身近なまち旅

また、次ページは筆者の旅の系譜（概要）である。筆者の旅に影響を与えた主な出来事を、筆者自身の年表、旅に関する動向、印象に残る建築物や町並み等により整理している。

「参考資料１　筆者の旅の系譜」

筆者の旅の系譜（概要）

		年齢	筆者の旅に影響を与えた主な出来事	
			筆者自身の年表	旅に関する動向● 印象に残る建築物、町並み等▲
①学生時代		18	1976.4 熊本大学建築学科入学 ■建築との出会い ■建築巡り ■卒業論文（三角西港）& 卒業設計（Architectural Complex）	●山口百恵「いい日旅立ち」 （国鉄ｷｬﾝﾍﾟｰﾝ） ▲九州の現代建築 （磯崎新、黒川紀章、白井晟一） ▲熊本の歴史的建造物の保存運動 （木島安史、長谷川堯）
		22	1980.3 熊本大学卒業	▲孤風院（木島安史） ▲旧帝国ホテル（ﾌﾗﾝｸ・ﾛｲﾄﾞ・ﾗｲﾄ）
②会社員時代		22	1980.4 鴻池組入社（東京本店設計部） ■建築巡り ■歴史的建造物への興味 ■歴史的町並みへの興味 ■最初の海外建築旅行	▲現代建築（村野藤吾、内井昭蔵） ▲寺社等（桂離宮、修学院離宮、円通寺、薬師寺、室生寺、伊勢神宮） ▲近代建築（中京郵便局、東京駅） ▲歴史的町並み（川越、栃木、倉敷） ▲海外の古典建築（ｷﾞﾘｼｬ、ｲﾀﾘｱ、ｴｼﾞﾌﾟﾄ）
		28	1986.2 鴻池組退社	
公務員時代（福岡市役所時代）	③公務員時代Ⅰ	28	1986.4 福岡市役所入庁 1993.4 都市景観室配属 ■景観形成地区の指定 ■海外派遣研修 2000.4 福岡都市科学研究所配属 ■研究「広域連携」 ■国内外都市調査	▲歴史的町並み（金沢、京都、奈良） ▲アーバンデザイン（横浜、神戸、ﾊﾟﾘ、ﾍﾞﾙﾘﾝ、ｼｭﾄｳｯﾂｶﾞﾙﾄ、ﾊﾞﾙｾﾛﾅ） ▲地域づくり（小布施、京都西陣） ▲ヨーロッパの町並み、集落、近代建築、現代建築（ﾛｰﾃﾝﾌﾞﾙｸ、ﾍﾞﾈﾁｱ、ﾊﾟﾘ、ﾍﾞﾙﾘﾝ、ｼｭﾄｳｯﾂｶﾞﾙﾄ、ﾊﾞﾙｾﾛﾅ、ｱﾑｽﾃﾙﾀﾞﾑ、ｴｼﾞﾝﾊﾞﾗ、ｺｯﾂｳｫﾙｽﾞ）
		49		
	④公務員時代Ⅱ	49	2007.3 唐津街道姪浜まちづくり協議会設立 ■事務局長として約 10 年間、各ステージの地域課題に対応した多彩な活動を企画・実践し、多くの成果を上げる。 姪浜及び協議会の名前を全国に発信してきた。	●2010.4 NHK「小さな旅」全国放送番組に移行 ▲歴史的町並み（横手増田、喜多方、大内宿、村上、倉敷、八女、鹿島） ▲近代建築（東京駅、八千代座、旧岩崎久彌邸、旧グラバー住宅） ▲現代建築（国立西洋美術館、長崎県立美術館、東京の新しい建築物） ▲寺社（会津さざえ堂、阿蘇神社）
		58	2016.5 唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業	●2016.4 熊本地震
	⑤公務員時代Ⅲ～現在	58	2016.6 地域づくりを巡る小さなまち旅 ■地域づくりや建築の原点に返る旅 ■熊本の復興の過程を巡る旅 ■身近なまち旅 2016.9 福岡アジア都市研究所会員研究員 ■身近な地域資源を活かしたまちづくり活動記録（2016 年度） ■身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究（2017 年度）	▲熊本の復興の過程を巡る旅（熊本城、阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村） ▲地域づくりや建築の原点に返る旅（三角西港、孤風院、出津教会、﨑津教会、磯崎新氏設計の建築物、小布施や松代の地域づくり） ▲寺社（国東・長崎・対馬の寺社） ▲城郭（五稜郭、松本城） ▲教会（長崎や天草の教会） ▲近代建築（富岡製紙場、旧開智学校） ▲現代建築（隈研吾氏設計の建築物） ▲港・都市計画（小樽運河、鞆の浦、柳川掘割、川尻、三角西港）
		60	2018.3 福岡市役所退職	
現在		60	2018.4 建築確認検査機関に再就職 2019.6 福岡アジア都市研究所会員研究員 ■小さなまち旅 ～時間 空間 旅～ ■博多湾姪浜 夢海道（回廊）&海遊（回遊）プロジェクト構想	▲歴史的町並み（函館、小樽、川越、鞆の浦、秋月、八女、有田、美々津） ▲身近なまち旅（庭園、集落、路地、坂道、石橋、棚田、風景） ▲ヨーロッパの町並み、世界遺産（ｹﾙﾝ、ﾊｲﾃﾞﾙﾍﾞﾙｸ、ﾋﾞｭﾙﾂﾌﾞﾙｸ、ﾛｰﾃﾝﾌﾞﾙｸ、ｶﾞﾙﾐｯｼｭﾊﾟﾙﾃﾝｷﾙﾍﾝ、ﾐｭﾝﾍﾝ） ●2020.1 新型ｺﾛﾅｳｨﾙｽ感染症発生。観光分野にも甚大な影響が出る。
		63		

（２）現代建築を巡る旅（学生時代 1976.4～1980.3）

①建築との出会い（熊本大学建築学科入学）

筆者の建築を巡る旅の歴史は、熊本大学建築学科に入学した 1976 年に遡る。もちろんそれ以前にも修学旅行で京都や奈良の古建築等を見に行ったことはあるが、本格的に建築の見学に行き始めたのは大学に入学した時からである。当時の九州には著名な建築家の作品が多く、関東や関西の学生たちも九州の建築巡りをしていた。磯崎新氏、黒川紀章氏、白井晟一氏が設計した作品等がそのコースに入っていたようだ。当時の新聞にも「九州は現代建築の宝庫」と掲載されていた。




現在の熊本大学

筆者も様々な設計課題に取り組む一方、休みを利用して建築巡りを始めた。九州にある磯崎新氏が設計した建物の大半を見て回ったと思う。福岡市内では、博多駅前の福岡相互銀行本店（※建築物の名称は当時のもの。以下共通）や３つの支店（大名、六本松、長住）、秀巧社ビルを見学した。大分市内では大分県立大分図書館、大分県医師会館、富士見カントリークラブ、北九州市内では北九州市立中央図書館、北九州市立美術館、西日本総合展示場等を見学した。大学３年生の春休みには、群馬県立近代美術館にも出かけている。

また、黒川紀章氏設計の福岡銀行本店、白井晟一氏設計の親和銀行本店、前川國男氏設計の福岡市立美術館や熊本県立美術館等も訪問した。このように学生時代は九州の現代建築を中心にかなりエネルギッシュに見て回った記憶がある。





福岡相互銀行本店　　秀巧社ビル



北九州市立中央図書館



西日本総合展示場



大分県立大分図書館



群馬県立美術館



福岡銀行本店



親和銀行本店



大学時代に使っていた
カメラ（フジカ ST605）

②歴史的建造物への興味（木島安史先生との出会い）

筆者は大学３年生頃になると歴史的建造物にも興味を持ち始めたが、これはプロフェッサーアーキテクトである木島安史先生との出会いが影響していると思う。木島先生は、建築設計や都市計画を教える傍ら、建築評論家の長谷川堯氏といっしょに熊本の歴史的建造物の保存に取り組み、1974 年１月～３月に熊本日日新聞の夕刊で「家は生きていた～熊本の洋館・和館めぐり」を連載されていた。熊本市内には多くの歴史的建造物が大切に残されており、文化都市・熊本を実感できたのは、先生方の努力が大きかったと思う。「都市住宅 7406（1974 年６月号）」では、「発掘文化都市熊本」を特集しており、今でも懐かしく読み返しているところである。



都市住宅 7406（1974 年6月号）「発掘文化都市熊本」より



今も息づく歴史的建造物（現在の熊本市古町）

また、木島先生を語る時には「孤風院」は欠かせない。孤風院は、1908 年（明治 41 年）、熊本高等工業学校の図書閲覧室（講堂）として建てられた熊本を代表する洋風木造建築であったが、1976 年（昭和 51 年）老朽化による解体決定に伴い、当時熊本大学助教授であった木島先生が買い取り、現在の地（阿蘇）へ移築し、住居として 1991 年（平成３年）まで利用されていた。移築後は住みながら改修を続けられ、木島先生が亡くなられてからは木島家の別荘としての利用の他、「孤風院の会」によってメンテナンスを含めた建築教育活動の場として利用されている。

大学の講堂としての役割を終え、買い取り手も見つからなかった建物を、自ら買い取り、改修し、住居として蘇らせ、明治～大正～昭和～平成～令和の５つの時代にわたり活用されていった。こうした建築への想いと行動力のある木島先生に大学時代に少しでも教わったことを今でも大変

誇りに思っている。こうして芽生えた歴史的建造物への興味は、大学４年次の卒業論文と卒業研究につながっていくことになる。

なお、孤風院については、木島先生の手記「孤風院白書」として出版されている。建築に携わる方には、ぜひ読んでいただきたい名著である。



孤風院白書



孤風院（2016 年８月）

③卒業論文

筆者の卒業論文のテーマは「熊本の洋風技術導入過程に関する研究～三角西港～」である。三角西港は 2015 年に世界文化遺産に登録されたが、当時は存在が知られているだけで、北野隆先生の指導を受け、筆者が最初に研究に取りかかることになった。











大学時代に研究していた頃の三角西港（1982 年２月。大学を卒業して２年後の写真）

三角西港は、明治政府の殖産興業の政策に基づいて、お雇い外国人のオランダ人水理工師のローエンホルスト・ムルドルによる設計で、1887 年（明治 20 年）に完成した。当時の最新の技術が盛り込まれた三角西港は、宮城県の野蒜（のびる）港、福井県の三国港と並び、近代国家の威信を懸けた明治三大築港の一つであった。有明海、不知火海の二つの海に面した三角町は、三角西港の整備により熊本県の海の玄関港として、人や物資が行き交う海上交通の要地として繁栄するとともに、宇土郡役所や三角裁判所の設置により宇土地域の行政や司法の中心地となった。

その後、港としての機能は三角港（東港）に移ったこともあり、756 メートルにも及ぶ石積みの埠頭や水路、建造物などは築港後 130 年の歴史を持ちながら、当時の佇まいを見せている。当時の都市計画がほぼそのままの形で残っているのは全国的にも珍しい。文化財的にも国際的にも価値ある生きた港として、2002 年 12 月に国の重要文化財に指定、2015 年 7 月に「明治日本の産業革命遺産　製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業」の構成資産として世界文化遺産に登録され、港町三角のシンボルとなっている。






現在の三角西港（2017 年 11 月）

こうして大学に入ってからの４年間、現代建築や歴史的建造物に興味を持ち、限られた時間と場所ではあるが建築を巡る旅を進めてきた。思い返せば、筆者が現在実践している「小さなまち旅～時間 空間 旅～」は、学生時代から脈々と続いているのである。

（３）歴史的建造物と町並みを巡る旅（会社員時代 1980.4～1986.3）

①建築巡り

1980 年４月、大阪に本社を置く鴻池組に入社。大阪での１週間程度の研修を経て、筆者は東京本店の設計部に配属された。前述のように筆者は、大学在学中から建築廻りをしていたが、建築を志す者にとって東京は憧れの都市であり、東京にいる間にいろいろな建物を見に行こうと思った。社会人になったこともあり、新しいカメラを購入。ボディはニコンの FE という中級機であるが、レンズは建築撮影用のあおり止め（ゆがみ補正）機能のある 28mm の PC レンズをまずは購入した。その後も 16mm の魚眼レンズと 80～200mm の望遠レンズを購入し、３つのレンズを 20 年以上愛用してきた（今でも使用可能である）。



ニコン FE と3つのレンズ



愛用のカメラで国内外の建築巡り

このカメラでいろいろな建築巡りをした。当時、村野藤吾氏の作品に興味があり、高輪プリンスホテル貴賓館、長野県小諸市の小山敬三美術館、長野県原村の八ヶ岳美術館、新潟県糸魚川市の谷村美術館等を見て回ったが、ディテールの写真をこれ程まで撮ることはなかった。村野氏は「建築家は 60 歳を過ぎてからが本来の仕事」と言われており、亡くなる直前まで仕事に情熱を傾けられていた。素材とディテールにこだわった職人的な手法から生み出された陰影に富む自在な造形は、独自の世界を生み出してきた。



小山敬三美術館



八ヶ岳美術館

また、「健康な家」をテーマに設計をしていた内井昭蔵氏の作品にも興味があった。横浜市青葉区にある桜台ビレッジや桜台コートビレッジ、銀座対鶴館ビル、千葉県鴨川市にある清澄寺祖師

堂、山梨県身延町の身延山久遠寺宝蔵、長野県野辺山の東京 YMCA 野辺山青少年センター等、ニコンの愛用カメラを持参し見て回った。40 年程前のことであるが、今でも記憶に新しい。本当に遠くまで見学に行ったものだ。建築への好奇心旺盛の時期であった。

この他、白井晟一氏の静岡市の芹沢銈介美術館や渋谷区立松濤美術館、表参道にある山下和正氏設計のフロム・ファースト・ビル、槇文彦氏の代官山プロジェクト、磯崎新氏の群馬県立近代美術館等が印象に残る。この時期は、素材とディテールにこだわった建物や、空間構成に人間味の感じられる建物に興味があったと思う。ちなみに建築巡りをする時は一人で行くことにしている。空間を体験して、自分で考えることが大切だと考えているからだ。自分の空間体験を大事にしたい。



清澄寺祖師堂



身延山久遠寺宝蔵



東京 YMCA 野辺山青少年センター





桜台コートビレッジ



芹沢銈介美術館



フロム・ファースト・ビル



代官山ヒルサイドテラス



群馬県立近代美術館

②歴史的建造物への興味の増進

歴史的建造物への興味もこの頃から増してきたように思う。奈良では法隆寺や薬師寺、室生寺が印象に残る。薬師寺は西塔が再建されたばかりであった。東塔と比較すると、壁や格子の色、屋根の反りが違うのが印象的であった。200 年経つと、同じような色や形になるという。とてもロマンを感じさせる話であり、薬師寺には愛用の PC レンズと望遠レンズを持って何回も通うことになった。東塔は 2020 年 12 月に 12 年に及ぶ大修理が完了しており、近いうちに訪問したいと考えている。

また、室生寺は自然豊かな山中に位置する、気品のあるお寺である。鴻池組の先輩である大隅さんが大好きだったお寺で、寮の大隅さんの部屋で五重塔の写真を見たことがある。五重塔とシャクナゲの組み合わせが印象に残っていた。五重塔は、法隆寺に次いで日本で二番目に古い塔である。高さは 16m 程度の小さな塔であるが、通常は上に行くに従い小さくなる屋根の出が、１重目と５重目であまり変わらないため、重厚感を感じさせる。また機会を見つけて見に行きたい。全国の五重塔巡りもいいかもしれない。



薬師寺



室生寺の五重塔

京都では桂離宮、修学院離宮の他、円通寺、苔寺、詩仙堂、曼殊院等にも何回も行った記憶がある。何れの建物も古い歴史があり、庭もきれいである。茶室や風景、ランドスケープにも興味が出てきたのはこの頃だろうか。この後、京都には週末の休みを利用して国鉄（現 JR）の夜間バス「ドリーム号」で何度も通ったものだ。いつの季節も素晴らしい印象がある。



桂離宮



修学院離宮

③歴史的町並みへの興味

歴史的町並みへの興味が出てきたのもこの頃だろうか。大学時代は日本建築史のゼミに所属していたが、町並みへの興味はそれほどではなかった。社会人になり、現実的な仕事をする中で、本来自分がやりたいことは何なのかを考えていたのだろう。歴史的町並み保存の実務的な手引書である「歴史的町並み事典（西山卯三氏監修）」を購入したのもこの頃である。

思い起こすと、歴史的町並みの価値が見直されてきたのは、1970 年頃であろうか。筆者が中学生の頃である。当時の国鉄のキャンペーン「ディスカバー・ジャパン」は、大阪万博終了直後に「日本を発見し、自分自身を再発見する」ことをコンセプトに個人旅行拡大キャンペーンとして全国的に進められた。美しい日本の再発見をテーマにしたものである。

また、同じ時期に永六輔氏出演のテレビ紀行番組「遠くへ行きたい」も始まった。各地域の名所紹介や住民との触れ合いをテーマにした番組であり、国民の旅行への憧憬を誘った。大学時代に山口百恵さんが歌っていた「いい日旅立ち」も思い出す。高度成長時代に多くの歴史的建造物や町並みが失われてきた反省もあるのだろう。

さて、東京時代に筆者が訪れた町並みは、栃木県栃木市や埼玉県川越市の蔵の町並み等である。栃木市は江戸時代から例幣使街道の宿場町として、また舟運で栄えた問屋町として、北関東の商都と呼ばれた。黒塗りの重厚な見世蔵や白壁の土蔵群が残り、当時の繁栄振りを偲ばせている。福岡市役所に入り都市景観の業務に関わってからも訪れたことはあるが、筆者が東京にいた頃はまだ道路が拡幅される前であり、現在より古い町並みが残っていた。





栃木市の町並み（1980 年 11 月）

川越の町並みも東京時代に数度訪れた。まだ、舗装整備や電線類の地中化がされる前であり、今のように観光客は多くなかった。何回もの大火の末に防火性を考慮して導入されたた土蔵づくりや重厚な開き扉、堅牢な瓦屋根の町並みが印象的であった。古き良き物を大切にしようとした先人の知恵が詰まった建物や町並みである。関係者の方々の努力に頭が下がる思いである。



川越の町並み（1980 年 10 月）

倉敷も当時は今のように道路や町並みも整備されておらず、まだ素朴な町並みであったと思う。観光客も今ほど多くなかった。後で行くことになるが、ドイツのローテンブルクに似たような印象を持っている。多分、倉敷の町並み保存の提唱者である大原総一郎氏が「倉敷を日本のローテンブルクにしよう」と言っていた言葉が記憶に残っていたのだろう。倉敷には 27 年後の 2013 年９月の「第 36 回全国町並みゼミ倉敷大会」で再訪したが、長い間、地域や行政が一体となって守り、育ててきた町並みである。みんなが共通の思いを持っているのは羨ましい。



倉敷の町並み（1986 年3月）

④最初の海外への旅（古典建築を巡る旅）

福岡市役所に入るまでの１ヶ月を利用して、ギリシャ、イタリア、エジプトの古建築を見て回ることになった。1986 年３月のことである。

アテネでは、やはりパルテノン神殿が強烈な印象として残っている。これはドーリア式（ドリス式）の神殿であるが、ドーリア式は古代ギリシャ建築における建築様式（オーダー）のひとつであり、イオニア式、コリント式と並ぶ３つの主要なオーダーに位置付けられている。大学で習ったことを実際に現地で見ることになるが、感激したことを今でも覚えている。また、エーゲ海

に浮かぶ島々の統一された集落景観も印象的であった。




パルテノン神殿（左）、エーゲ海に浮かぶイドラ島の集落景観（右）

イタリアではミラノのガレリア、フィレンツェの街並み、ベネチアの運河、サン・マルコ広場、リアルト橋、ローマのコロッセオ、パンテオン等が印象に残っている。ポンペイの遺跡にも足を伸ばした。イタリアも北部の都市と南部の都市で印象が大きく異なっていた。この時にベネチアの建物の立面図を並べた街並みポスターを購入したが、街並みへの興味を深めるきっかけになったと思う。



ガレリア（ミラノ）



フィレンツェの街並み



コロッセオ（ローマ）



ポンペイの遺跡



街並みポスター（ベネチア）

エジプトは、車とラクダが共存する不思議な国であった。ピラミッドは「いつ頃」「どのような労働力によって」造られたかと言う点についてはおおむね解明されているようであるが、「なんのために」「どのような建築方法で」造られたかについては定説が無い。「王墓説」「日時計説」「穀物倉庫説」「宗教儀式神殿説」「天体観測施設説」など様々な説があるが、王墓説が強い。ということで、最初の海外旅行は古典建築を巡る旅であった。





ピラミッド

（４）景観づくりと地域づくりを巡る旅（公務員時代Ⅰ 1986.4～2007.2）

①２回目の海外への旅（美しい街並みを巡る旅）

６年間の鴻池組の勤務を終え、福岡市役所に入庁したのは、1986 年４月である。私が 28 歳の時である。その翌年に建築や街並みを巡る 10 日間のヨーロッパ旅行に出かけた。国としてはドイツ、オーストリア、イタリア、スイス、フランスの５ヶ国である。ドイツで最初に訪れたのはハイデルベルク。ネッカー川沿いの旧市街地の伝統的な街並みが印象的であった。その後、ローテンブルクに移動。ここは中世の街並みが色濃く残り、お洒落なお店やサインも特徴的であった。



ハイデルベルクの街並み



ノイスバンシュタイン城





ローテンブルクの街並み

オーストリアのウィーンでは、映画「第三の男」に登場した大観覧車に乗ったが、そこから見た水と緑に囲まれた市街地の街並みが印象的であった。名物のウィーナーシュニッツェル（パン粉をつけて両面を焼いた仔牛のカツレツ）やワインの美味しさも印象に残っている。

イタリアでは、再度ベネチアを訪問。博物館見学やサン・マルコ広場での散策後に特産のベネチアングラスと刺繍、街並みのポスターを購入。夕食前にゴンドラ船に乗船。何度来てもイタリアらしい場所だと感じる。イタリアに憧れたのは、歴史作家の塩野七生氏が執筆したイタリアの古代の歴史小説を読んでいたことが影響しているのかもしれない。ベネチアの歴史は興味深い。

次はローマである。コロッセオやパンテオン、映画「ローマの休日」で有名なスペイン広場、トレヴィの泉等を見学。バチカン市国ではサン・ピエトロ大聖堂も見学。ミケランジェロが設計したといわれる大円蓋（クーポラ）は高さ 132.5m、直径 42m もあり圧倒された。




ウィーン：大観覧車（左）、都心部の街並み（右）





ベネチア：運河とゴンドラ船（左）、サン・マルコ広場（中央、右）



ローマ：コロッセオ



バチカン市国：サン・ピエトロ大聖堂

スイスではインターラーケンの山小屋風のホテルに宿泊。窓に飾られた花が可愛らしい。山と湖に囲まれたまちを散策した後、お土産として鳩時計を購入。夜は名物のチーズフォンデュを味わう。翌日、ユングフラウヨッホに登山列車で行くが、スイス旅行ならではの醍醐味であった。大自然が創り出す景色も山岳都市ならではの体験であった。

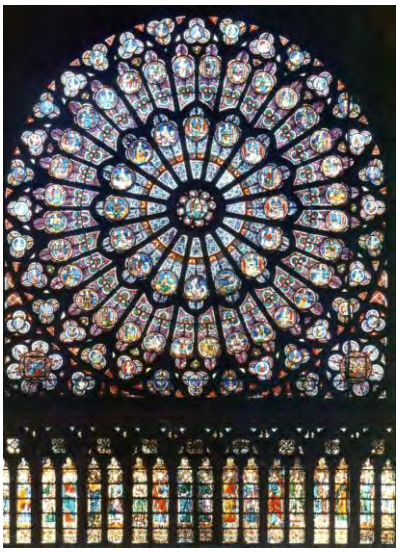



インターラーケン：街並み（左）、宿泊したホテル（右）




ユングフラウ：街並み（左）、高山列車（右）

最後はフランス。パリではノートルダム寺院に圧倒された。ステンドグラスも美しい。エッフェル塔から見たシンボリックで美しい都市軸は印象的であり、市街地の街並みも歴史を感じさせるものであった。セーヌ川の遊覧船に乗船した後、ヴェルサイユに移動し、ヴェルサイユ宮殿を見学。建物の優雅さ、絢爛豪華な装飾品など、その魅力は尽きなかった。宮殿近くのホテルに宿泊したが、部屋から見える庭園と飼われている羊がのどかな印象を与えていた。

パリ：市街地の街並み（左）、ノートルダム寺院のステンドグラス（右）




ヴェルサイユ：ヴェルサイユ宮殿（左）、宿泊したホテル（右）

②都市景観室時代の先進都市調査

福岡市役所入庁後８年目の 1993 年に都市景観室に配属された。都市景観室での筆者の主な業務は、都市景観条例に基づく「都市景観形成地区の指定」である。これは地域が主体となって、それぞれの地域の特性を活かした景観まちづくりを進めていく手法である。当時は「シーサイドももち地区」「御供所（ごくしょ）地区」「天神地区」等がその候補に挙げられていたが、具体的に進めていくために先進都市調査を重ねてきた。

国内で都市デザインの視点で取り組んでいたのが横浜市と神戸市であり、都心部や海浜部、歴史的環境地区等で様々な取り組みをしていた。筆者も何回も訪問したものである。

また、福岡市有数の歴史的環境地区である御供所地区の景観づくりの参考とするため、御供所まちづくり協議会の会員といっしょに京都、奈良、富田林、出石、長浜、金沢等に視察に行った。どこも歴史的な環境を活かしたまちづくりの先進地である。最初に京都に視察に行った時には、京都市の当時の景観担当係長の苅谷勇雅氏に説明していただいた。苅谷氏は後に文化庁に行かれ、全国町並み保存連盟でも活躍されている。その後、筆者は何回も苅谷氏の話を聴く機会に恵まれた。御供所地区の取り持つ縁であろう。




京都市西陣大黒町の視察

富田林では、まちづくり団体の代表が「まちづくりは焦るな、怒るな、根気よく」と言っていたことが印象に残っている。姪浜でも筆者がよく使った言葉である。出石は土色の町並みが特徴で、蕎麦やお酒も美味しかった。雪もかなり積もっていたことが記憶に残る。金沢でも雪を体験

することができた。金沢は雪国の印象があるが、雪が積もることは少ないそうだ。雪の兼六園や茶屋街、武家屋敷も風情があった。それぞれの視察を通じて、まちづくり協議会の会員とのコミュニケーションや信頼関係を築いていった。




金沢市：ひがし茶屋街（左）、主計町（かずえまち）茶屋街（右）




金沢市：雪の兼六園（左）、雪の武家屋敷（右）



長野県須坂市の町並み



長野県小布施町の町並み

③海外派遣研修

1995 年の海外派遣研修も市役所生活の思い出である。これは、「欧州における都市デザインの潮流」をテーマにロンドン、フランクフルト、ベルリン、シュトゥッツガルト、バルセロナ、パリの６都市の都市景観施策について約３週間にわたり調査を行ったものである。当時は御供所地区やシーサイドももち地区の景観形成地区指定の地元協議などを進めている最中であり、各地域固有の歴史や魅力資源を活かしたまちづくりや景観づくりの参考にすることが目的であった。

各都市の調査テーマ

〇ロンドン
- ・歴史・伝統を尊重したシティの街並み景観コントロール制度について
- ・歴史的文脈を現代建築に取り入れているドックランドの都市デザインについて

〇フランクフルト
- ・国際コンペの導入による公共建築の先導的役割について
- ・都市空間の質的改善を目的とした都市デザイン事業について

〇ベルリン
- ・都心居住をテーマにした、マスターアーキテクト方式及び住民参加方式によるまちづくり・都市デザインについて……IBA（国際建築展ベルリン）
- ・ベルリンの壁崩壊後の首都移転計画及び新都市計画について

〇シュトゥッツガルト
- ・B プランによる街並み形成状況について
- ・環境共生型の都市デザインについて
- ・人にやさしい公共交通と回遊性の高い歩行者空間について
- ・歴史的建造物群の保全と都心居住への一体的取り組みについて

〇バルセロナ
- ・ロマネスク、カタロニアゴシック、そしてアントニオ・ガウディに代表されるカタロニアモデルニスモの建築と現代建築が調和し、歴史的継続性・重層性を感じさせるバルセロナの都市デザインについて
- ・近年の都市再建プロジェクトについて

〇パリ
- ・主要軸線、シンボル広場及びそれらのネットワークについて
- ・歴史都市と先端建築が融合したグラン・プロジェのまちづくりについて



ロンドンの街並み




フランクフルトの街並み




ベルリンの街並み




シュトゥッツガルトの街並み




バルセロナの街並み




パリの街並み

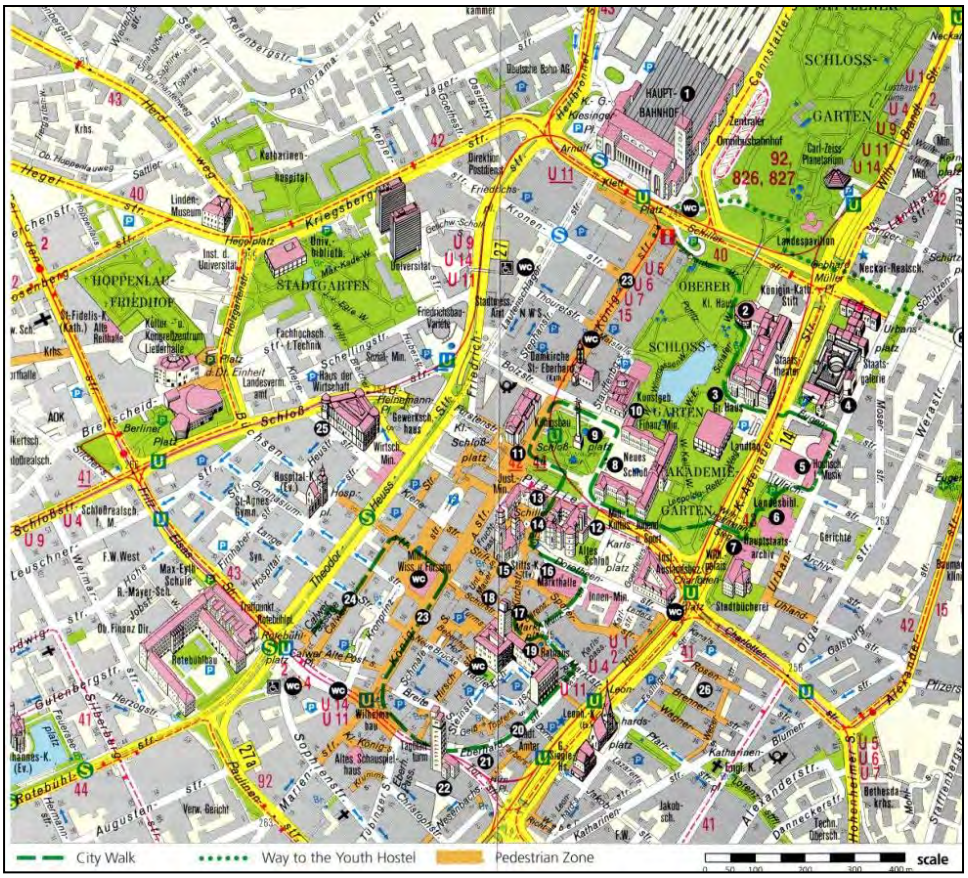
海外派遣研修を終えての当時の感想

今回調査した６都市は、どこに行っても画一化・均質化した日本の都市空間とは全く異なり、素晴らしい刺激を与えてくれた。フランクフルトのムゼウム・ウファープロジェクト（公共建築の先導性）、ベルリンの首都移転計画と IBA（国際建築展ベルリン）、シュトゥッツガルトの環境共生型の都市デザイン、歴史的重層性・継続性を感じさせるバルセロナの都市デザイン、度肝を抜くパリのグラン・プロジェは、どれも個性的で魅力あるプロジェクトであった。

特に感動したのが、シュトゥッツガルトの徹底的に人にやさしく、エコロジーに配慮された都市空間である。今後の日本のまちづくりの素晴らしい参考例となるだろう。また、ベルリンの首都移転計画をはじめとする各種のプロジェクトはとても感動的であった。東西冷戦後のベルリンの変容は驚くべきスピードで進んでおり、国際的な建築家による大胆なプロジェクトは未来の輝かしいベルリンを約束しているように思える。こうした取り組みは、すぐに福岡市のまちづくりに役立つものではないが、歴史的な文脈を現代に大胆に取り入れていくというスケールの大きな発想や、徹底した環境共生型の都市デザインなどは、大いに参考にしていきたい。




バルセロナ：ランドスケープ・デザイン（出典：現地で入手したパンフレット）



シュトゥッツガルト：徹底的に人に優しい公共空間（出典：現地で入手したマップ）









パリ グラン・プロジェの事例

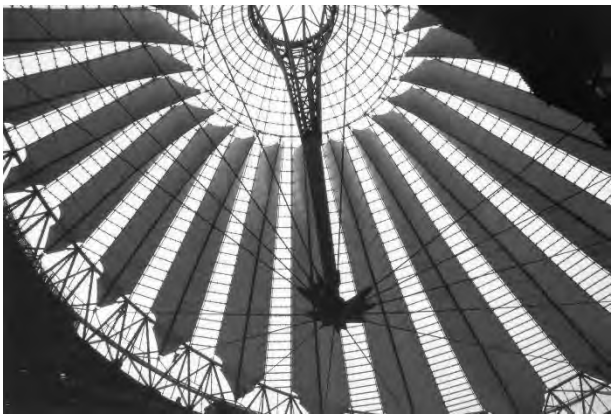
④福岡都市科学研究所での先進都市調査

2000 年４月から研究主査として福岡都市科学研究所（現(公財)福岡アジア都市研究所）に配属され、研究の一環で国内外の様々な都市に調査に行く機会に恵まれた。

１年目は「福岡の地下空間の利用に関する研究」を担当し、ドイツのベルリンやシュトゥッツガルト、オランダのアムステルダムやユトレヒト等を視察。各都市の地下空間の利用に関する取り組み、都市形成の歴史、街並みの変遷等について調査した。







ベルリン：地下ネットワーク（左）、新都市開発（右）





アムステルダム：運河沿いの空間利用と景観（左）、都心居住地区の街並み（右）

２年目と３年目は「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」を担当し、イギリスのウエスト・ミッドランド地域の多核連携的な都市ネットワークや地域計画、コッツウォルズ地方のグリーン・ツーリズム、セントラル・スコットランド地域の広域都市連携、ドイツの都市

ネットワークモデル地域等に関する取り組みについて調査研究を行うため、次の都市を訪問した。

○ウエスト・ミッドランド地域：バーミンガム、ストラトフォード・アポン・エイボン、ウォーリック

○コッツウォルズ地方：チェルトナム、カッスル・クーム、バイブリー

○セントラル・スコットランド地域：エジンバラ

○ニーダーザクセン州：ハノーバー



エジンバラの街並み：オールド・タウン（左）、ニュー・タウン（右）



ウエスト・ミッドランド地域の街並み：ストラトフォード・アポン・エイボン（左）、ウォーリック（右）



コッツウォルズ地方の街並み：カッスル・クーム（左）、バイブリー（右）

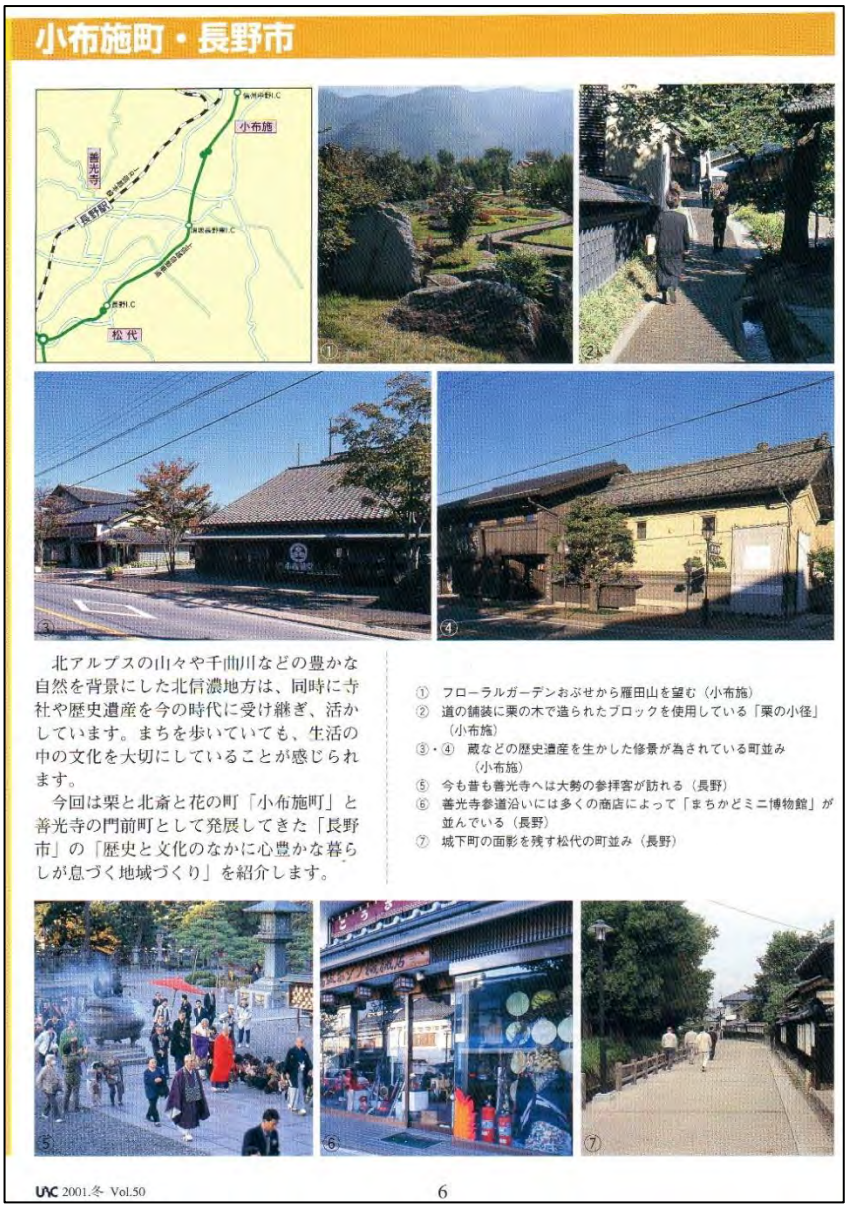




ハノーバーの街並み

また、国内の特色のある都市に調査に行く機会にも恵まれた。特に思い出に残るのは、長野県小布施町である。都市景観室時代に２回訪れていたが、何度訪れても面白いまちである。半径２㎞の範囲にいろいろな見どころが満載であり、１年間の観光客（約120万人）は人口（約１万２千人）の 100 倍にもなる。

「小布施流」のこだわりのまちづくりは、景観づくりや地域活性化等の様々な面で御供所や姪浜の参考になる。筆者が「姪浜流」のまちづくりを言い出したのは、小布施流から借りてきた言葉である。


小布施町・長野市

北アルプスの山々や千曲川などの豊かな自然を背景にした北信濃地方は、同時に寺社や歴史遺産を今の時代に受け継ぎ、活かしています。まちを歩いていても、生活の中の文化を大切にしていることが感じられます。

今回は栗と北斎と花の町「小布施町」と善光寺の門前町として発展してきた「長野市」の「歴史と文化のなかに心豊かな暮らしが息づく地域づくり」を紹介します。

① フローラルガーデンおぶせから雁田山を望む（小布施）
② 道の舗装に栗の木で造られたブロックを使用している「栗の小径」（小布施）
③・④ 蔵などの歴史遺産を生かした修景が為されている町並み（小布施）
⑤ 今も昔も善光寺へは大勢の参拝客が訪れる（長野）
⑥ 善光寺参道沿いには多くの商店によって「まちかどミニ博物館」が並んでいる（長野）
⑦ 城下町の面影を残す松代の町並み（長野）

URC 2001.冬 Vol.50 6

小布施町、長野市の都市リポート（URC 都市科学 2001 年冬号）

（５）地域主体の景観づくりと地域づくりを巡る旅（公務員時代Ⅱ 2007.3～2016.5）

①唐津街道姪浜まちづくり協議会設立

その後も、筆者は福岡市役所での仕事を続けていくことになるが、大きな転機が訪れた。それは、2005 年３月の福岡県西方沖地震である。筆者の住む姪浜でも多くの町家や寺社が被害を受けた。被害を受けて改めて気付くというのは残念であるが、しかし、「姪浜にはこんなに素晴らしい歴史的資源が残っていたのか。まだ遅くはない。歴史的な環境を活かしたまちづくりを進める上で、これが最初で最後のチャンスだ。」と前向きに考え、地域の関係者に声をかけ、２年後にまちづくり協議会を立ち上げた。筆者が 49 歳の時である（2007 年３月）。

それまで福岡市職員として長く景観行政に携わっていながら、自分が住む地域のことにはあまり関心がなかった。それからは今までの 20 年間を取り戻すかのように『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』を目標に様々な活動を精力的に展開してきた。

※「唐津街道姪浜まちづくり協議会の活動」については、2016～2017 年度の報告書参照

②まちづくり協議会の活動の一環としての「身近な景観づくりを巡る旅」

筆者は、唐津街道姪浜まちづくり協議会在籍中（2007 年３月～2016 年５月）に、まちづくり協議会の活動の一環として北部九州の「身近な景観づくりを巡る旅」を実践してきた。地域が主体となって景観づくりの取り組みを精力的に展開している地域の概要を紹介する。

鹿島市の肥前浜宿は、浜川の河口につくられた在方町（江戸時代の農村における小都市集落）である。江戸時代は長崎街道多良往還（多良海道）の宿場町として、また有明海に臨む港町として栄え、明治以降も酒造業や水産加工業に支えられ、豊かな町並みがつくられてきた。江戸時代から「浜千軒」といわれ、通り沿いには今でも白壁土蔵造りの酒蔵や草葺の町家が立ち並び、伝統的な景観を色濃く残している（伝統的建造物群保存地区）。




鹿島市肥前浜宿の町並み

嬉野市の塩田宿もかつて長崎街道沿いに栄えた宿場町である。すぐ近くを流れる塩田川は当時、嬉野や有田など、焼物の積み出しや陸揚げを行う港として利用され繁栄した。物資取引の中心地となった馬場下一帯は今も白壁造りの町家が残り、当時の様々な建築様式がかつての面影を伝えている（伝統的建造物群保存地区）。

島原市の森岳商店街は、島原市内の６つの商店街のひとつである。近くに島原城があり、この特性を活かしたまちづくりを進めている。伝統的建造物群保存地区ではないが、古い町家や商家

を「登録有形文化財（文化庁）」「まちづくり景観資産（長崎県）」「まち並景観賞（島原市）」の制度で認定することで、歴史的景観を活かしたまちづくりを進めている。




嬉野市塩田宿の町並み（左）、島原市森岳商店街の町並み（右）

雲仙市の神代小路（こうじろくうじ）は、天正 15 年（1584 年）の九州国割を経て、慶長 13 年（1608 年）鍋島信房が初代領主となったことに始まる。城跡の森と塀を兼ねた川に囲まれた武家地ならではの閉鎖的な空間を有している。江戸中期の地割りをよく残し、武家屋敷建築の主屋や長屋門が屋敷囲いを構成する生垣や石垣、水路等の環境要素と相まって美しい町並み景観を醸し出している（伝統的建造物群保存地区）。

豊後高田市の昭和の町は、昔どこにでもあった町並み（今は失われた町並み）を逆手にとり、『商業と観光』の一体的振興策として「昭和の町」づくりという明快なテーマをもとに、「店舗修景（お化粧直し）」「かつて 1 万俵の米を納めていた旧農業倉庫を活用した観光拠点づくり（昭和の夢町三丁目館）」「地元住民がまちを紹介する‘ご案内人’制度」など、オリジナリティある取り組みが行われている。




雲仙市神代小路の町並み（左）、豊後高田市昭和の町の町並み（右）

臼杵市の臼杵は城下町で、寺院、町家、商家、武家屋敷、洋館が混在しており、独特の町並みを形成している。特に二王座付近は、ゆるやかな坂道が続く静かな町であり、伝統的建造物群保存地区ではないが、質の高い建築が豊かな町並みを創出し、変化のある独特の風情を醸し出している。町家も狭い路地に密集して建ち並んでおり、迷路のようである。江戸時代から現在に至るまでの長い歴史を随所に感じることができた。

杵築市の北台南台は江戸時代の城下町の風情が残るまちである。杵築城を中心として南北の高台に武士が住み、その谷あいに商人が住んでいた町で、「サンドイッチ型城下町」の構造となっている。特に北台武家屋敷通りは、上級武士や家老たちの屋敷がずらりと並び、今でも色濃く江戸時代の面影を留めている（伝統的建造物群保存地区）。




臼杵市臼杵の町並み（左）、杵築市北台南台の町並み（右）

この他、木屋瀬（こやのせ）（北九州市）、赤間（宗像市）、津屋崎（福津市）、内野（飯塚市）、筑後吉井（うきは市）、八女福島（八女市）、小保・榎津（大川市）、山鹿（山鹿市）、新町・古町（熊本市）等を訪問し、それぞれの地域の景観づくりの取り組みを学んできた。この中で筆者が代表を務める「まちなみネットワーク福岡」に所属する主な地域の取り組みについては、2017年度の報告書に詳しく紹介しているので、ご参照いただきたい。

※「身近な景観づくりの取り組み」として、2017 年度報告書第２章４参照

③筆者自身の「景観づくりと地域づくりを巡る旅」

筆者は、唐津街道姪浜まちづくり協議会在籍中に個人的にも様々な地域を訪問している。まずは、新潟県最北の城下町「村上」。かつては観光客がほとんどいないまちであったが、道路拡幅問題を機に、地域の宝である伝統的な町屋に光を当てたイベントにより全国から多くの観光客が訪れるようになった。これがきっかけとなり、「黒塀プロジェクト」や「町屋再生プロジェクト」といった市民主体の景観づくりプロジェクトにつながり、「歴史を活かしたまちづくり」が展開されている。現在は、空き家問題にも取り組み、地域再生の大きな力になっている。




村上市安善小路の町並み

また、秋田県横手市増田は、江戸後期から昭和初期にかけて造られた内蔵（家屋の中にある蔵）が 40 棟以上残っている。しかし、外から目に触れることがないため、その存在は長い間ベールに包まれてきた。地元以外にも知られるようになったのはこの数年である。2012 年からは内蔵の個別公開も始まり、観光資源として生まれ変わりつつある。また、2013 年 12 月には国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、今後の町並み整備が大いに期待される。




横手市増田の町並み（左）、内蔵（右）

その他、伝統的町並みが残る地域として、角館（仙北市）、会津若松市、喜多方市、大内宿（下郷町）、川越市、長岡市、倉敷市、那覇市等を、また、路地が残る地域として谷中（台東区）、神楽坂（新宿区）等を訪問し、地域の個性を活かした景観づくりや地域づくりの参考にしてきた。




仙北市角館の町並み（左）、下郷町大内宿の町並み（右）




川越市川越の町並み（左）、長岡市谷内（やち）の町並み（右）




倉敷市倉敷川畔の町並み（左）、那覇市壺屋の町並み（右）




台東区谷中の町並み




新宿区神楽坂の町並み

※「思い出に残る地域づくりの取り組み」として、2017 年度報告書第２章５参照

２　現在の旅（2016 熊本地震前後～）

（１）現在の旅のきっかけ（姪浜から熊本へ）

前述のように筆者は、大学時代から町並みや建築物に興味を持ち、多くの地域、集落、歴史的町並み、歴史的建造物、現代建築等を見て回った。また、唐津街道姪浜まちづくり協議会在籍中は「地域主体の景観づくりと地域づくりを巡る旅」を実践してきた。ここでは、熊本地震前後から始めた旅について紹介する。

2016年４月の熊本地震を経て、５月末の唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業後に筆者がまず始めたことは「地域づくりや建築の原点に返る旅」「熊本の復興の過程を巡る旅」である。これは、姪浜での10年間のまちづくり活動を振り返る旅であり、次の二毛作目の人生に向かって自分を見つめ直す旅でもある。筆者は、被災後の熊本城や大学時代の卒業研究のフィールドであった三角西港訪問をきっかけとして、それぞれの風土や身近な歴史・文化を活かしたまちづくりを進めている地域や集落等を訪問している。各地域の風土や景観に触れ、それぞれの地域の取り組みを学ぶことで、地域づくりや建築への想いを新たにしている。

筆者の現在の旅は、熊本地震の直前に熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋等を訪れ、それらが甚大な被害を受けたことが大きなきっかけとなったことが次の表からもおわかりいただけると思う。

熊本地震前後の旅

年　月	主な訪問先
2016 年３月	■20 日～21 日 山鹿市（さくら湯、八千代座） 南阿蘇村（思い出のペンション、阿蘇大橋、免の石） 阿蘇市（阿蘇神社、草千里）
４月	■２日 南阿蘇村（一心行の桜、阿蘇大橋） 熊本市（熊本城） ※4/14、4/16　熊本地震（震度７）
５月	※5/31　唐津街道姪浜まちづくり協議会を卒業
６月	■18 日　熊本市（熊本城） ※6/18　熊本地震後の熊本城を訪問。これが「地域づくりや建築の原点に返る旅」「熊本の復興の過程を巡る旅」のきっかけとなる。
７月	■３日 宇城市（三角西港）※熊本大学時代の筆者の卒業研究のフィールド ■30 日～31 日 長崎市（外海集落と出津教会） 天草市（崎津集落と崎津教会）
８月	■１日 波佐見町（中尾山集落） ■15 日～16 日 益城町（熊本地震被害） 南阿蘇村（思い出のペンション、阿蘇大橋、黒川地区） 阿蘇市（阿蘇神社、孤風院）

※青字：地域づくりや建築の原点に返る旅　　赤字：熊本の復興の過程を巡る旅

次のエッセイは、第 13 回 JTB 交流文化賞（2017 年）に応募した筆者の執筆文である（写真追加）。熊本地震で大きな被害を受けた熊本城の訪問を機会に、二毛作目の人生に向けて始めた筆者の二つの小さなまち旅をエッセイにしたものである。

二毛作目の人生の始まりは、被災後の熊本城訪問から

二つの激震と私の決断

私は、福岡市西区姪浜で活動しているまちづくり協議会の初代事務局長の役を担った（2007 年３月～2016 年５月）。2007 年３月に自ら協議会を立ち上げて以来、『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』を目標に、地域固有の歴史・文化資源を活かしたまちづくりを牽引してきた。姪浜への熱い想いを込めた 10 年間の活動は、全国レベルのまちづくり賞を多数受賞するなど姪浜の魅力や協議会の活動を全国に発信することができた。

私は、今後も「姪浜のまちづくりの次のステージ」に向けて、地域の関係団体を巻き込みながら、さらに活動をステップアップさせていく予定であった。しかし、2016 年４月、まちづくりの進め方や協議会の運営方針などに対する他の会員との考え方の違いが表面化し、私は 10 年という節目を機会に断腸の想いで協議会卒業を決断した。地域のために精力的にまちづくり活動を推進してきた私にとっては、予期せぬ激震であり、大きな決断であった。



まちづくり協議会での私の活動のひとこま

また、協議会卒業を決断しかけた４月中旬、熊本で震度７の大地震が発生し、甚大な被害をもたらした。信じられない光景がテレビに映し出された。私は建築物の耐震関係の仕事をしていることもあり、また、建築を学ぶため学生時代を熊本で過ごしたこともあり、今回の熊本地震はとても考えさせられるものがあった。

ちょうど熊本地震前の３月中旬～４月上旬にかけて２回、熊本や阿蘇に出かけ、熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村などを見てきたばかりだった。訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。それはまさに『建築物の耐震化は重要な仕事である。大学時代の恩返しをしよう。地域づくりの原点に返ろう。』と私に伝えているようだった。姪浜という狭いフィールド、協議会という小さな組織を離れ、もっと大きな視点で世界を見てみようというメッセー

ジだったのだろう。そして、私は５月下旬の定期総会で協議会卒業の意志を伝え、思い出の多い事務所を後にした。





阿蘇大橋の崩落現場（左）、南阿蘇村黒川地区の家屋の倒壊（右）

被災後の熊本城訪問～失意のどん底からの立ち直り～

協議会卒業後、まちづくり活動というライフワークを失った私は、失意のどん底にあり途方に暮れていたが、2016 年６月中旬、気になっていた被災後の熊本城を訪れた。傷ついた熊本城の姿に自分の姿を重ね合わせていたのかもしれない。熊本地震以降、熊本城の被害状況はテレビや新聞で大きく報道されていたが、実際に見るとその被害の大きさに言葉を失った。石垣は大きく崩れ、天守閣は鯱を含め多くの瓦が落下するなど、無残な姿をさらけ出していた。

しかし、甚大な被害を受けながらも勇壮に佇んでいる姿はまさしく熊本のシンボルであり、私はとても勇気づけられた。飯田丸五階櫓や戌亥櫓は周囲の石垣が崩壊し、コーナーの石垣一本で辛うじて櫓を支えているだけであるが、この懸命な姿にも感動した。また、傷ついても勇壮に佇む熊本城を誇りに思い、来訪者に熊本城の魅力や地震後の状況を丁寧に説明しているボランティアガイドの皆さまの熱心な姿にも感銘を受けた。熊本城はこれまでにも戦、地震、火災にも負けずに何度も復活してきた歴史があり、彼らは今回の大地震やそれによる甚大な被害も、今までの 400 年そしてこれからも長く続くであろう歴史のひとこまとして大変前向きに考えているのだなと実感した。そう考えれば、私の姪浜での 10 年も長い人生のひとこまであり、これからの二毛作目の人生もより充実したものにできるのではないかと、私も前向きに考えることにした。




熊本地震で大きな被害を受けた熊本城。天守閣（左）と飯田丸五階櫓（右）

地域づくりや建築の原点に返る旅

被災後の熊本城訪問で勇気とエネルギーをもらった私は、少し息を吹き返した。まず、始めたことは「地域づくりや建築の原点に返る旅」である。これは、姪浜での 10 年間のまちづくり活動を振り返る旅であり、次の二毛作目の人生に向かって自分を見つめ直す旅でもある。初めての場所もあるし、思い出の場所もある。大学の卒業研究で関わった場所もあるし、建築を志した時に訪れた場所もある。テーマは地域づくりや建築の勉強でもいいし、人との出会いでもいい。何か感じ取ることができれば、それで十分なのである。そして、私が地域づくりや建築の原点に返る旅のスタートとして選んだのは、大学の卒業研究のフィールドであった「三角西港」と、建築を志した時に感銘を受けた「孤風院」という洋風建築である。

三角西港は、明治政府の殖産興業の政策に基づき、お雇い外国人のオランダ人水理工師ムルドルによる設計で 1887 年（明治 20 年）に完成した。当時の最新の技術が盛り込まれた三角西港は、近代国家の威信を懸けた明治三大築港の一つであり、三角町は熊本県の海の玄関港として、また、人や物資が行き交う海上交通の要地として繁栄した。その後、港としての機能は三角港（東港）に移ったこともあり、756 メートルにも及ぶ石積みの埠頭や水路、橋などは築港後 130 年の歴史を持ちながら、当時の佇まいを見せている。

私は、大学を卒業して 36 年後の 2016 年 7 月上旬に久し振りに三角西港を訪問した。石積みの埠頭や水路は当時とほとんど変わらないが、1987 年の築港 100 周年を機に、当時の建築物の復元や周辺の公園整備も行われ、観光地としても賑わいを見せていた。復元された小説家・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）ゆかりの旅館・浦島屋、倉庫を改修したカフェなど明治の面影を残す建築物が印象的であった。大学時代にはだれ一人として観光に訪れる者はいなかったが、突然の雷雨にも関わらず多くの観光客が訪れていた。当時をよく知る私にとっては、想像もできないことであった。

大学時代に私が始めた研究が一つのきっかけとなり、重要文化財の指定や世界文化遺産の登録が行われ、多くの観光客が訪れる港町になったことを本当に嬉しく思う。そして、三角西港の魅力をここまで高めていただいたすべての関係者の皆さまに感謝の気持ちでいっぱいである。エピソードになるが、長年使っている腕時計の針が三角西港を訪れた時に突然止まった。まるで大学時代にタイムスリップしたかのように。それは、私に「地域づくりの原点に返ろう」と示唆しているかのようだった。





現在の三角西港

次は孤風院である。孤風院は、1908 年（明治 41 年)、熊本高等工業学校の講堂として建てられた熊本を代表する洋風木造建築であった。しかし、1976 年（昭和 51 年)、老朽化による解体決定に伴い、当時熊本大学助教授であった木島安史先生が買い取り、現在の地（阿蘇）へ移築し、住居として 1991 年（平成３年）まで利用されていた。移築後は住みながら改修を続けられ、1992 年（平成４年）に木島先生が亡くなられてからは木島家の別荘としてのほか、「孤風院の会」によってメンテナンスを含めた建築教育活動の場として利用されている。大学の講堂としての役割を終えた建築物を自ら買い取り、改修し、住居として蘇らせ、明治～大正～昭和～平成の４つの時代にわたり活用されていった。

こうした建築への想いと行動力のある木島先生に大学時代に少しでも教わったことを今でも大変誇りに思っている。私は熊本地震から４ヶ月後の８月中旬に孤風院を訪問したが、外から見る限りは大きな損傷はなかったようだ。一安心である。木島先生の想いを受け継いだ建築物を訪問することで、建築への想いを新たにした。同行した長男は建築を学ぶ大学生であるが、私は木島先生の建築に込める想いを長男に伝えたかったのである。私にとっては、これこそ「建築の原点に返る旅」であり、「親から子へメッセージを伝える旅」でもある。




現在の孤風院

私は、三角西港や孤風院訪問をきっかけとして、それぞれの風土や身近な歴史・文化を活かしたまちづくりを進めている地域や集落、各地に残る歴史的建造物などを訪問している。それぞれの地域の取り組みを学び、地域の方々と出会い、対話することで、地域づくりや建築への想いを新たにしている。

熊本の復興の過程を巡る旅

また、私は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことが気にかかり、積極的に熊本県内を訪問している。被害を受けている熊本の状況をしっかり目に焼き付けておきたいからである。その中でも、熊本城、阿蘇神社、阿蘇大橋、そして益城町や南阿蘇村の被害はとても痛ましいものがあった。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖され、観光客も激減している。地震前とは違う光景が広がっていた。

折しも 2016 年８月上旬、熊本地震前に制作された映画「うつくしいひと」の上映会が福岡市内であった。熊本城、夏目漱石旧居、江津湖、菊池渓谷、草千里、通潤橋といった熊本の名所の地震前の姿が映し出された。私は、こうした名所がまた元の姿に戻るよう願わずにはいられなか

った。と同時に、これから長い時間をかけて進められていく復興の過程を見に定期的に熊本を訪問することとした。熊本城の復興には 20 年かかると言われている。私は現在 59 歳であり、熊本城が復興される頃には 80 歳近くになっているが、復興の過程を見に何度も訪問したいと考え、実践を続けている。

熊本地震から 1 年経った 2017 年 4 月上旬には満開の桜を見に訪れたが、石垣と桜の美しさは熊本だけでなく、日本の誇りだと改めて感じた。多くの市民や観光客も訪れ、賑わいを見せており、復興の足音を強く感じた。また、5 月下旬の訪問時には、天守閣再建に向けて一部解体工事が始められていた。城内にある加藤神社では、復興工事の様子をバックに結婚式の記念写真の撮影が行われていた。新郎新婦も熊本城の復興とともに今後の人生を歩んでいくのだろう。「いつまでもお幸せに」と祈りつつ、私も思わず記念写真撮影のシャッターを切っていた。





熊本地震から1年後の桜が満開の頃の熊本城（左）
天守閣再建に向けて一部解体工事が始められた頃の熊本城（右）

また、南阿蘇村の一心行の桜も地震前と同じように咲き誇り、黄色の菜の花や青い空とのコントラストが鮮やかであり、多くの来訪者で賑わっていた。落ちない石で有名な免の石は熊本地震で残念ながら落ちたが、地元の方々がそれを逆手に取り、石が落ちた後の空洞の姿を招き猫に例え PR していた。私は、逆転の発想に思わず猫のように「ニャッ（ニャー）」としてしまった。「ピンチをチャンスに」という前向き思考の考え方に私は勇気づけられた。





熊本地震から1年後の一心行の桜（左）、落石後の免の石（右）

倒壊した阿蘇神社も復興に向けて新たな歩みを始めていた。毎年のように訪問している南阿蘇村のペンションも地震後は一時休館していたが、３ヶ月後に再開。オーナー夫婦とも再会し、喜びを分かち合うことができた。




復興が始まった阿蘇神社（左）
毎年訪れる南阿蘇村のペンション。熊本地震から3ヶ月後に再開（右）

このように熊本の復興の過程を巡る旅は、私にとっては人との出会いの旅であり、感動の旅である。私は、今後も復興の過程を見に定期的に熊本を訪問し、地域の方々と対話・交流することを楽しみにしていきたい。それが私流の熊本復興への支援である。

今後の二毛作目の人生に向けて

この 10 年間は姪浜でのまちづくり活動にどっぷりと浸っていた私であるが、「地域づくりや建築の原点に返る旅」や「熊本の復興の過程を巡る旅」を通して、多くの人と出会い、いろいろなことを感じ、学んでいる。まちづくりに関わる人間は、外の風や空気に触れ、いろいろな地域の方々と対話・交流することが必要だと改めて痛感している。

被災後の熊本城訪問をきっかけに始めた二つの旅は、今までの姪浜でのまちづくり活動を振り返るとともに、今後何らかの形で地域活動や定年後の生活に役立てていきたいという趣旨もある。私がまちづくり協議会を卒業する時に、ある知人が「市役所でのいろいろな経験、そして 10 年にわたる姪浜での地域づくりの経験を活かして、姪浜という狭いフィールドではなく、もっと広いフィールドで活躍してほしい」ということを話してくれた。実践を始めた二つの旅を通して、熊本城の復興と重ね合わせた今後の二毛作目の人生を大いに楽しみたいと考えている。

（2017 年 9 月応募の「第 13 回 JTB 交流文化賞応募作品」に写真追加）

熊本地震をきっかけに始まった筆者の現在の旅は、大きくは「地域づくりや建築の原点に返る旅」「熊本の復興の過程を巡る旅」「身近なまち旅」等に分類される。それぞれの旅について次ページ以降に紹介する。

（２）地域づくりや建築の原点に返る旅

大学時代から「その場所の特性を最大限に活かし、そこでしかできない設計をする」という考え方を徹底的に身に付け始めた筆者は、現在までいろいろな地域や集落、建築物等の訪問を通して、各地域固有の風土や歴史・文化から生まれた歴史的町並みや建造物への興味を持ち続けている。

福岡市役所時代には、シーサイドももち地区の特性を活かした集合住宅「クリスタージュ」、御供所（ごくしょ）地区やシーサイドももち地区の地域個性を活かした「景観形成地区の指定」に取り組み、福岡都市科学研究所（現(公財）福岡アジア都市研究所）では個性豊かな地域間での交流・連携を目指した「広域連携」の研究等に取り組む他、プライベートでも浮羽町の棚田オーナーになったりしてきた。その根底には、常に「地域の風土・歴史・文化の尊重」ということがある。





地域性豊かな集落景観：エーゲ海に浮かぶイドラ島（左）、ハイデルベルク（右）



歴史的文脈を感じさせるパリのグラン・プロジェの例
（オルセー美術館）



浮羽町（現うきは市）の棚田オーナーの体験
（美しい棚田の風景を守る活動にも一市民として参加）

また、筆者が約 10 年間精力的に活動してきた姪浜においても、「地域に埋もれている身近な魅力資源を掘り起こしていくことが、姪浜ならではの地域特性を活かしたまちづくり・景観づくりの土台となる」ということをまちづくりの哲学としてきた。

わが国の多くの地域で、地域の個性や特性が都市化に埋没して見えにくくなってきている中、地域の人が見慣れて、当たり前だと見過ごしているものにスポットを当てていくことが、その地域ならではのまちづくりを進める上で重要になる。町並みとして連続していなくても、点在する身近な地域資源を発掘し、それを身近なまちづくりの中で活用していくことで、地域の方々にと

っては地域への誇りや愛着につながっていくのである。





筆者が精力的に活動してきた姪浜でのまちづくりの哲学：地域に埋もれている身近な歴史や物語の掘り起こし
興徳寺に伝わる白うさぎ伝説（左）、真根子神社に伝わる武内宿禰（たけしうちのすくね）伝説（右）

こうした経験も踏まえ、筆者は現在、「風景、気候、風土、文化」「町並み、集落、地域、路地、市場」「歴史的建造物、現代建築」「季節、花、樹木、鉄道」「モノ、ヒト、コト（ストーリー）」を大テーマに、それぞれ小テーマを設定し、固有の風土や身近な歴史・文化を活かしたまちづくりを進めている地域や集落、建築物等を訪問している。





テーマに沿った筆者の旅の例（左：佐世保市 展海峰、右：霧島市 霧島町蒸留所）

対象エリアは、九州一円の他、町並み保存の活動や家族旅行等で訪問する国内の諸都市、そしてトピック的には久し振りに訪問したドイツの諸都市も含まれる。基本的には休日を利用しての日帰りの旅が中心であるが、2018 年４月から新しい勤務先での職場環境を活用した旅（ちょこ旅）も加え、多彩なテーマで旅を続けている。2016 年６月～2021 年３月までのテーマと主な訪問地は次のとおりである。

地域づくりや建築の原点に返る旅（テーマ、主な訪問地）

テーマ	主な訪問地
【風景、気候、風土、文化】	
■原風景	信仰風景（小布施町、国東半島）、棚田の風景（うきは市つづら棚田、東峰村竹棚田、豊後高田市田染荘）、漁村風景（福山市鞆の浦、矢部川下流、天草市﨑津集落）
■大景観	坂・海・山・空（函館市）、坂・路地・斜面地（尾道市）函館山（函館市）、天寧寺・千光寺（尾道市）
■眺望景観	鏡山（唐津市）、諏訪神社・グラバー園（長崎市）、展海峰（佐世保市）、ローテンブルク
■流域景観	矢部川流域（農山村、市街地、大楠林、漁村）
■海の風景	戸畑～若松、島原～天草、熊本～島原
■港の風景	門司港、長崎港、佐世保港
■造船所のある風景	福岡市、長崎市、佐世保市
■夜景	函館市、長崎市
■気候、風土	有珠山（洞爺湖町）、阿蘇山（阿蘇市）、開聞岳（指宿市）
■異文化	教会群・長崎四福寺（長崎市）、萬松院（対馬市）
■温泉ツーリズム	長湯温泉（竹田市）
【町並み、集落、地域、路地、市場】	
■伝統的町並み（伝統的建造物群保存地区）	川越（川越市）、筑後吉井（うきは市）、八女福島（八女市）、有田内山（有田町）、美々津（日向市）
■ドイツの伝統的町並み	ケルン、ハイデルベルク、ビュルツブルク、ローテンブルク、ガルミッシュパルテンキルヘン
■集落	大川内山（伊万里市）、外海（そとめ）集落（長崎市）、中尾山（波佐見町）、﨑津集落（天草市）
■旧街道、宿場町	唐津街道と宿場町、長崎街道と宿場町
■寺町	尾道市、鞆の浦（福山市）、長崎市、中津市
■武家屋敷町	島原市、大村市、知覧町
■歴史的港町	鞆の浦（福山市）、三角西港（宇城市）
■川港と水運	塩田（嬉野市）、川尻・小島（熊本市）
■路地	谷中（台東区）、神楽坂（新宿区）、尾道市
■昔ながらの市場	旦過市場（北九州市）、とんねる横丁・三角市場・戸尾市場（佐世保市）
■まちなか歴史散策	若松（北九州市）、直方市、唐津市、諫早市、大村市、熊本市、中津市、鹿児島市
■思い出のまち・地域再訪	小樽市、函館市、小布施町、つづら棚田（うきは市）、三角西港（宇城市）、ローテンブルク
■思い出の通学路と地域再生	行橋市

地域づくりや建築の原点に返る旅（テーマ、主な訪問地）

テーマ	主な訪問地
【歴史的建造物、現代建築】	
■身近な世界遺産	国立西洋美術館、長崎の教会群、三角西港
■運河	小樽運河
■石橋	眼鏡橋（朝倉市、長崎市、諫早市）、石工の郷（八代市種山）、石橋記念公園（鹿児島市）
■寺社建築	長崎の寺院群、富貴寺（豊後高田市）、宇佐神宮（宇佐市）、霧島神宮（霧島市）
■赤煉瓦建築	金森赤レンガ倉庫（函館市）、東京駅、福岡市赤煉瓦文化館、旧唐津銀行（唐津市）、大分銀行赤レンガ館（大分市）
■わが国の近代化の歩みと建築	開成館（郡山市）、東京駅、和光ビル（銀座）、旧開智学校（松本市）、旧グラバー住宅（長崎市）
■今も息づく蔵	醤油蔵（川越市、熊本市）、味噌蔵（東峰村）、酒蔵（鹿島市、伊万里市）、焼酎蔵（霧島市）
■リノベーション建築	千綿駅周辺のリノベーション建築（東彼杵町）、大分市アートプラザ・大分銀行赤レンガ館（大分市）、マルヤガーデンズ・スターバックス仙厳園店（鹿児島市）、
■現代建築	隈研吾氏設計の建築物（根津美術館、長崎県立美術館、COMICO ART MUSEUM YUFUIN 等）、すみだ北斎美術館、大分県立美術館
■スターバックス建築	川越鐘つき通り店、中目黒店、仙厳園店（鹿児島市）、太宰府天満宮表参道店、門司港駅店
■思い出の建築再訪	磯崎新氏設計の建築物（高崎市、北九州市、大分市）、孤風院（阿蘇市）
■建築展	「日本の家 －1945 年以降の建築と暮らし－」、「国立西洋美術館の図面からたどる思考の軌跡」、「アジール・フロッタン再生展」、「安藤忠雄展 －挑戦－」、「磯崎新の謎」展
【季節、花、樹木、鉄道】	
■歴史的建造物と桜巡り	秋月城址（朝倉市）、熊本城・水前寺成就園（熊本市）
■桜巡り	松浦鉄道浦ノ崎駅（伊万里市）、健軍自衛隊通り（熊本市）、一心行（南阿蘇村）
■新緑巡り	秋月城址（朝倉市）、諫早神社（諫早市）、草千里・米塚（阿蘇市）
■歴史的建造物と紅葉巡り	秋月城址（朝倉市）、熊本城・水前寺成就園（熊本市）、富貴寺（豊後高田市）
■紅葉巡り	太原（たいばる）（広川町）、草千里・米塚（阿蘇市）

地域づくりや建築の原点に返る旅（テーマ、主な訪問地）

テーマ	主な訪問地
【季節、花、樹木、鉄道】	
■花巡り	九州各地（菜の花、紫陽花、ヒマワリ、コスモス）
■歴史的町並みとお雛様巡り	秋月城址（朝倉市）、筑後吉井（うきは市）、八女福島（八女市）、柳町（佐賀市）、有田内山（有田町）
■松原	生の松原（福岡市）、虹の松原（唐津市）
■並木	ケヤキ並木、桜並木、イチョウ並木
■樹木	巨樹、保存樹、被爆樹木
■ローカル線	松浦鉄道、島原鉄道、南阿蘇鉄道
■ローカル線と古い木造駅舎	JR 千綿駅（東彼杵町）、JR網田（おうだ）駅（宇土市）、JR嘉例川（かれいがわ）駅（霧島市）、JR 大隅横川駅（霧島市）
■鉄道ミュージアム	鉄道博物館（さいたま市）、九州鉄道記念館（北九州市）、人吉鉄道ミュージアム（人吉市）
【モノ、ヒト、コト（ストーリー）】	
■鳥の目、虫の目	函館市、長崎市、ローテンブルク
■平和の大切さと巡礼	長崎の教会群
■湾の魅力と広域連携	大村湾
■前向き思考	免の石（南阿蘇村）
■おもてなし（一人一花）	オープンガーデン（小布施町、長野市松代）、障がい者の作品発表会（大分市）
■筆者が定期的に訪問するこだわりのアートギャラリー、書店	アートギャラリーSoubi'56（長崎市）、橙書店（熊本市）、カモシカ書店（大分市）
■筆者が定期的に訪問するこだわりのお店	珈道庵（佐賀市三瀬村）、眼鏡橋周辺の店（長崎市）、大分銀行赤レンガ館（大分市）
■人の生き方への感動	太原（たいばる）のイチョウ並木（広川町）、トタン屋根のケーキ屋ア・ラ・モート（熊本市）、ペンション フライングジープ（南阿蘇村）
■思いがけない発見	鉄道博物館（さいたま市）、赤レンガ塀の町並み（須恵町）、石積み塀の町並み（別府市）
■まちづくり活動を通した思いがけない再会	全国町並みゼミ、熊本城、新町・古町（熊本市）



原風景 ― 信仰風景 ― 浄光寺薬師堂（小布施町）



原風景 ― 棚田の風景 ― つづら棚田（うきは市）



大景観 ― 坂・海・山・空（函館市）



大景観 ― 坂・路地・斜面地（尾道市）



眺望景観 ― 鏡山（唐津市）



眺望景観 ― 展海峰（佐世保市）



流域景観 ― 矢部川下流域（柳川市、みやま市）



海の風景 ― 島原～天草

地域づくりや建築の原点に返る旅【風景、気候、風土、文化】




港の風景 ー 左:長崎港(長崎市)、右:佐世保港(佐世保市)




造船所のある風景 ー 佐世保市　　夜景 ー 函館市




気候、風土 ー 左:有珠山(洞爺湖町)、右:開聞岳(指宿市)




異文化 ー 左:崇福寺(長崎市)、右:萬松院(対馬市)




伝統的町並み　ー　左：川越（川越市）、右：有田内山（有田町）




ドイツの伝統的町並み　ー　左：ローテンブルク、右：ガルミッシュパルテンキルヘン




集落　ー　左：外海（そとめ）集落（長崎市）、右：﨑津集落（天草市）




旧街道　ー　長崎街道多良海道と宿場町　ー　肥前浜宿（鹿島市）　　寺町　ー　中津市



武家屋敷町 ― 島原(島原市)



歴史的港町 ― 鞆の浦(福山市)



川港と水運 ― 川尻(熊本市)



路地 ― 尾道市



昔ながらの市場 ― 旦過市場(北九州市)



まちなか歴史散策 ― 若松(北九州市)





思い出のまち・地域再訪 ― 左:栗の小径界隈(小布施町)、右:三角西港(宇城市)



身近な世界遺産 ― 三角西港(宇城市)



運河 ― 小樽運河



石橋 ― 眼鏡橋(長崎市)



寺社建築 ― 富貴寺(豊後高田市)



赤煉瓦建築 ― 大分銀行赤レンガ館(大分市)



わが国の近代化の歩みと建築 ― 旧開智学校(松本市)



今も息づく蔵 ― 酒蔵(鹿島市)



今も息づく蔵 ― 醤油蔵(熊本市)




リノベーション建築 ― 千綿駅周辺（東彼杵町）



リノベーション建築 ― 大分銀行赤レンガ館（大分市）



現代建築 ― 長崎県立美術館（長崎市）



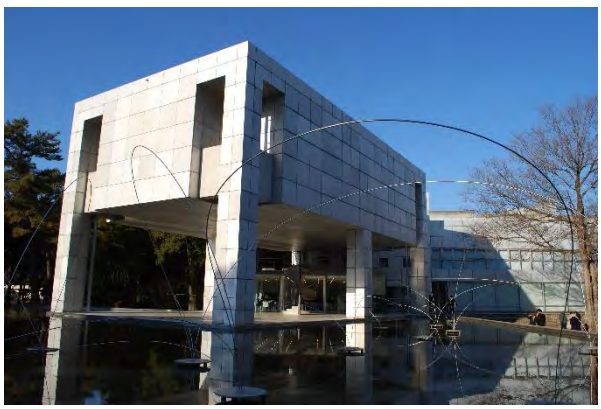
現代建築 ― 大分県立美術館（大分市）



スターバックス建築 ― 中目黒店（東京都目黒区）



スターバックス建築 ― 仙厳園店（鹿児島市）



思い出の建築再訪 ― 群馬県立美術館（高崎市）



建築展 ―「日本の家－1945年以降の建築と暮らし－展」



歴史的建造物と桜巡り ― 熊本城(熊本市)



桜巡り ― 草場川(筑前町)



新緑巡り ― 諫早神社(諫早市)



歴史的建造物と紅葉巡り ― 秋月城址(朝倉市)



紅葉巡り ― 太原(たいばる)のイチョウ(広川町)



花巡り ― 眼鏡橋付近の紫陽花(長崎市)



歴史的町並みとお雛様巡り ― 秋月城址(朝倉市)



歴史的町並みとお雛様巡り ― 筑後吉井(うきは市)




松原 ― 虹の松原（唐津市）



並木 ― 表参道のケヤキ並木（東京都渋谷区）



並木 ― 健軍自衛隊の桜並木（熊本市）



樹木 ― 被爆樹木（長崎市）



ローカル線 ― 松浦鉄道（佐賀県、長崎県）



ローカル線 ― 南阿蘇鉄道（南阿蘇村）



鉄道ミュージアム ― 九州鉄道記念館（北九州市）





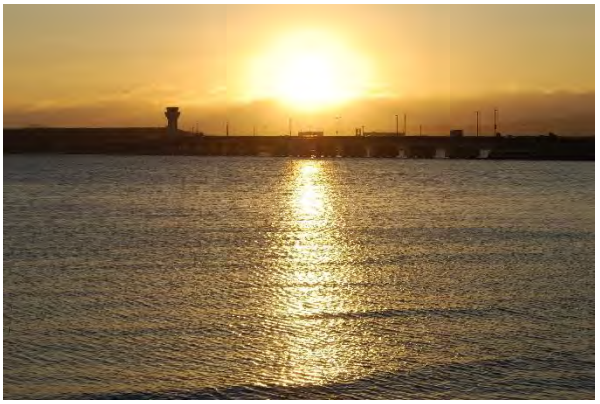
鳥の目、虫の目　ー　ローテンブルク





平和の大切さと巡礼　ー　浦上天主堂（長崎市）





湾の魅力と広域連携　ー　大村湾（長崎県）







前向き思考　ー　免の石（南阿蘇村）




おもてなし（一人一花） ― 左：オープンガーデン（小布施町）、右：ながさき紫陽花祭り（長崎市）




定期的に訪問するこだわりのアートギャラリー、お店 ― 左：Soubi’56（長崎市）、右：眼鏡橋周辺の店舗（長崎市）




人の生き方への感動 ― 左：太原（たいばる）のイチョウ並木（広川町）、右：トタン屋根のケーキ屋ア・ラ・モート（熊本市）



思いがけない発見 ― 石積み塀の町並み（別府市）



まちづくり活動を通した思いがけない再会 ― 熊本城（熊本市）

（３）熊本の復興の過程を巡る旅

前のエッセイ（P42）で紹介したように筆者は、熊本地震前の 2016 年３月下旬～４月上旬に熊本、阿蘇等を旅している。この時に訪問したのは、2000 年から毎年のように通っている南阿蘇村のペンション、阿蘇神社、一心行の桜、免の石、熊本城であり、２回の訪問で阿蘇大橋も４回渡った。その後の４月 14 日と 16 日の震度７の熊本地震で、行った先々の場所が大きな被害を受けた。信じられない光景がテレビに映し出された。筆者は熊本地震当時、福岡市役所で耐震関係の仕事もしていたこともあり、また、大学時代を熊本で過ごしたこともあり、熊本地震はとても考えさせられるものがあった。



熊本城（地震前）



熊本城（地震後）



阿蘇神社（地震前）



阿蘇神社（地震後）



阿蘇大橋の崩落



益城町のアパートの倒壊

次のエッセイは、筆者が第 12 回 JTB 交流文化賞（2016 年）に応募したものである（写真追加）。オオクワガタから始まった南阿蘇村のペンション「ふらいんぐジープ」との縁をきっかけに「熊本地震からの復興へと向かう旅」に舵を取り始めた筆者の気持ちをエッセイにしたものである。

熊本地震と私
～オオクワガタから始まった旅は復興へと向かう旅へ～

熊本地震と虫の知らせ

私にとって、2016 年 4 月 14 日と 16 日の熊本地震は大きな衝撃だった。私は、2000 年の夏から毎年のように訪問している南阿蘇のペンション「ふらいんぐジープ」に、５月３日の宿泊の予約を入れていた。しかし、用件が入り、４月 14 日の午後９時過ぎにキャンセルの電話を入れた。これが虫の知らせだったのだろうか、熊本で震度７の大地震（前震）が発生したのは、その約 20 分後である。私が住む福岡市西区でも震度３の揺れを観測した。

また、16 日未明に震度７の本震が発生し、甚大な被害をもたらした。震度７の大地震が短期間に連続して起こることは、我々の想定を超えるものである。翌日のテレビでは、阿蘇大橋が崩落したり、熊本城や阿蘇神社が大きな被害を受けた映像が流される。信じられない光景であった。

私の頭をよぎったのは、ふらいんぐジープやご家族は大丈夫なのかということであった。電話をしたが、つながらなかった。すぐ近くにある住宅団地や別荘地は、地震による土砂災害で大きな被害を受けており、不安が広がった。無事であることを、ただひたすら祈るばかりであった。




熊本地震で大きな被害を受けた熊本城（左）と阿蘇大橋の崩落現場（右）

実は、私は家内といっしょに、熊本地震の少し前の３月 20 日～21 日と４月２日に、熊本に旅行に出かけた。３月は山鹿の八千代座、さくら湯などに寄った後、阿蘇大橋を渡り、ふらいんぐジープに泊まった。翌日は、阿蘇神社や落ちない巨石で有名なパワースポット「免の石」などを見学した。４月は熊本城の桜や南阿蘇の一心行の桜などを巡る日帰りのバスツアーで、ここでも阿蘇大橋を渡った。２回の熊本旅行で阿蘇大橋を合わせて４回渡ったことになる。

しかし、阿蘇大橋を渡る時に、私には少し不安がよぎっていた。阿蘇大橋の西側にある山が、野焼きの関係かどうかわからないが、はげ山のようになっており、「土砂崩れが起きたら怖いな。」と感じていた。熊本地震でこれが的中し、現実のものとなってしまった。今思えば、これが最初の虫の知らせだったのかもしれない。

また、熊本城、阿蘇神社、免の石など訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。大学時代を熊本で過ごした私のショックは計り知れない。そして、建築物の耐震化の仕事にも従事している私にとっては、『大学時代にお世話になった熊本への恩返しをしよう。建築物の耐震化は重要な仕事である。』と私に伝えているようであった。





熊本地震で大きな被害を受けた阿蘇神社（左）と落石した免の石（中、右）

オオクワガタが取り持つペンションとの縁

さて、ふらいんぐジープの話に戻ろう。私がここを最初に訪問したのは、2000 年の夏である。家内の友人の紹介によるものであり、ふらいんぐジープが実施していたカブトムシツアーに憧れて訪れたものである。当時５歳の長男が昆虫好きで、喜んでくれると思ったからである。

夕食後の午後８時半頃に出発し、クヌギの木や町役場の明かりに集まってくるカブトムシやクワガタを捕まえた。長男や他の子どもたちが喜んだのは言うまでもない。私も童心に返り、久し振りのカブトムシツアーを楽しんだ。ペンションに戻ってからは、捕まえたカブトムシやクワガタを選ぶドラフト会議である。オーナーの進行で楽しく進んでいく。子どもたちの歓声がペンション内に響き渡った。

そして、ふらいんぐジープとのつながりを深くしたのは、帰り際にお土産としていただいた菌糸ビンに入ったオオクワガタの幼虫である。翌年の６月にメスの成虫として羽化した。ちょうど同じ時期に、私の住むマンションの知り合いから羽化したばかりのオスの成虫をいただき、ペアとして飼うことになる。

羽化したばかりのオオクワガタも人間で言えばまだ子どもであり、最初の交尾・産卵は翌年の夏であった。予め埋め込んだクヌギの朽ち木から、卵から孵化したばかりの幼虫を取り出した。15 匹ほどいただろうか。これを１匹ずつ菌糸ビンに入れて育てる。そして、2003 年の夏に成虫として羽化した。ふらいんぐジープのオーナーから幼虫をもらって３年が経っていた。

それ以来、世代交代を繰り返しながら多くのオオクワガタを育ててきた。2014 年に飼育をやめるまで 200 匹近くを羽化させた。ふらいんぐジープには毎年のように訪問していたが、カブトムシの季節である夏に行けない年が３回ほどあった。その時は、ペンションに毎年４～５ペアを送り、宿泊の子どもたちへのプレゼントとして使っていただいた。大変喜んでいただいたそうだ。たった１匹のオオクワガタの幼虫は、多くの成虫を生み出し、子どもたちの喜びにつながり、ペンションとの絆も深めていった。




捕まえたカブトムシやクワガタを選ぶドラフト会議（左）、羽化したばかりのオオクワガタ（右）

ペンション再開とオーナーとの再会

地震後の話に戻ろう。熊本地震発生から 40 日ほど経った５月 27 日にペンションのホームページが更新されていた。そこには、ご家族は無事で、７月９日からペンションを再開されるという嬉しいメッセージが掲載されていた。私も安心して、ペンションに電話し、無事であったこと、そしてペンションが再開されることを喜び合った。

それから、私が長男を連れてペンションを訪れたのは、地震から４ヶ月ほど経過した８月 15 日である。私は建築関係の仕事に従事、長男も建築や都市計画を学ぶ学生であり、ペンションに来る途中、益城町や南阿蘇村の被災現場も見てきた。多くの家屋が倒壊するなど想像以上の被害状況である。道路も至る所で閉鎖されており、なかなかペンションに辿り着かない。よく通り慣れた道に出たと思ったら、そこは何と阿蘇大橋の崩落現場ではないか。すさまじい光景であった。３月と４月に阿蘇大橋を渡る時に、悪い予感がしていた場所である。迂回してようやくペンションに到着し、ご家族との再会とペンションの再開を喜び合う。本当に無事でよかった。




ペンションに向かう途中で見かけた東海大学の学生たちが住んでいた2階建てのアパート。1階が押しつぶされている。

その日の夕食時や夜のケーキタイム時に、オーナーやご家族の地震での苦労話をお聴きし、考えさせられるものがあった。ご家族は地震後、２週間ほど高千穂に避難し、ペンションに戻ってからも車中泊を経験したという。電気も水道も来ない中、一時はペンション経営をやめようかと思った時期もあったらしいが、地震後に今までペンションを訪問した方など約 300 人から心配と激励のメッセージをいただき、それがペンション再開への後押しになったという。中には、大牟

田から毎日、ボランティアとして家の片付けなどの手伝いに来てくれた方もいたそうだ。これもオーナーやご家族の人柄に惹かれてのことであろう。

ふらいんぐジープでは、家具などが倒れたりする被害はあったが、幸いなことに建物の被害は少なかったとのことである。周辺では多くの建物が倒壊したり、土砂災害の被害を受けている中、本当に不幸中の幸いではなかったのだろうか。同じペンション村にあるペンションも比較的被害は少なかったようであるが、電気や水の問題、道路の閉鎖、オーナーの高齢化などもあり、ペンション経営を諦めたところもあると聞いた。

そんな中、約３ヶ月振りの再開である。周りがまだ宿泊客を受け入れる体制が整っていない中での勇気ある決断だったと思う。「夜の明けない朝はない。今できることをしたらいい。」というオーナーの前向きな気持ちがそうさせたのであろう。このペンション村には 15 軒のペンションがあるが、ふらいんぐジープが最初に再開。その後、少しずつ再開するところが出てきているとのことである。オーナーの思いが次第に周辺に広がりつつある。





左：ペンション「ふらいんぐジープ」のオーナーとの会話、右：オーナー夫妻と私の長男（中央が長男）

また、オーナーとの会話で得たものがある。オーナーは、「この 30 年間、ずっと働き続けてきた。今回の３ヶ月間の休みを充電期間として捉え、立ち止まって考えてみた。今までを振り返るいい機会であった。」「自分は現在 58 歳であり、いつまでペンション経営を続けられるかどうかわからないが、皆さんの思いを受けてできるだけ長く続けていきたい。」と話していた。熊本地震を乗り越えての大変前向きな考え方である。

ペンション開設 30 周年となる今年の秋には、外壁の塗り替えや屋根の葺き替えなどのリフォームを考えているという。「大地震というピンチ」を「今後のことを考えるチャンス」と捉え、常に前を向いて取り組んでいくことを応援したい。そして、私は「オオクワガタから始まる縁」を「熊本地震からの復興へと向かう縁」に変えて、今まで以上にオーナーやご家族との交流を深めていきたいと思う。

復興へと向かう旅

ふらいんぐジープのオーナーは、「被害を受けている今の熊本の状況をしっかり目に焼き付けておいてほしい。」とも話していた。宿泊した翌日は、被害の大きかった阿蘇神社にも行ってみた。建物は大きく倒れたままである。５ヶ月前とは違う光景が広がっていた。胸が痛む。

私は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことが気にかかり、積極的に熊本に出かけている。６月には熊本城、７月には三角西港、８月上旬には天草を訪問。そして、今回は益城町や南阿蘇村、阿蘇市などを訪問した。その中でも、熊本城、阿蘇神社、阿蘇大橋の被害は痛ましい。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖されている。観光客も激減している。

しかし、これを現実と受け止め、未来に向けて、今こそ観光や交流のあり方を考えてみたらどうだろうか。これから長い時間をかけて熊本が復興されていく中で、その過程を見に訪問することも素晴らしい交流ではないだろうか。熊本城の復興には 20 年かかると言われている。これを見届けようではないか。私は現在 58 歳であり、熊本城が復興される頃には 80 歳近くになっている。今後は、熊本城の復興を見届けることを目標に生きていきたいと思う。阿蘇神社の再建にも長い時間を要すると思われるが、その過程も見届けたい。




熊本地震前の熊本城（2015 年5月）




熊本地震前の阿蘇神社（左）と草千里（右）※共に 2016 年3月

折しも８月上旬に、熊本地震前に制作された映画「うつくしいひと」の上映会が福岡市内であった。熊本城、夏目漱石旧居、江津湖、菊池渓谷、草千里、通潤橋といった熊本の名所の地震前の姿が映し出された。こうした名所が、また元の姿に戻るよう願ってやまない。そして、復興の過程を定期的に見に行くことを今後の楽しみにしていきたい。

また、建築や耐震の仕事に加え、精力的に地域のまちづくり活動を推進してきた私にも、熊本の復興に何か役立てることがあるかもしれない。定年を前にして、新たな生きがいと楽しみが増

えたような気がする。ふらいんぐジープのオーナーと同じように、私も前向きに考えることにした。

「南阿蘇のペンション」「オオクワガタ」「熊本地震」というキーワードは、一見すると全くつながらない。しかし、私の中では切っても切れない縁として一貫してつながっている。そして、それは「熊本地震からの復興と観光交流」というテーマにつながっていくことになるのであろう。今後も大地震から復興していく熊本の姿と、南阿蘇のペンション「ふらいんぐジープ」との交流を楽しみに、確実に熊本に出かけける機会が増えそうである。私の復興へと向かう旅も始まる。





左：2016 年８月に福岡で上映された映画「うつくしいひと」
右：ペンション「ふらいんぐジープ」のオーナー夫妻と私（2016 年３月、中央が私）

（2016 年　第 12 回 JTB 交流文化賞応募作品に写真追加）

上記のようなこともあり、筆者は、熊本地震後の熊本の現状と復興の過程をしっかり目に焼き付けておくため、「熊本地震の脅威の実感」「熊本地震からの復興の過程」「自然の治癒力」をテーマに熊本城、新町・古町、阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村、益城町等を訪問している。2016 年６月～2021 年３月までのテーマと主な訪問地は次のとおりである。

熊本の復興の過程を巡る旅（テーマ、主な訪問地）

テーマ	主な訪問地
■熊本地震の脅威の実感	熊本城、阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村、益城町
■熊本地震からの復興の過程	熊本城、新町・古町、阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村、益城町
■自然の治癒力	草千里、水前寺成就園





熊本地震の脅威の実感 ― 左：阿蘇大橋の崩落（南阿蘇村）、右：2階建てのアパートの倒壊（益城町）





熊本地震の脅威の実感 ― 左：熊本城の石垣の崩壊（熊本市）、右：阿蘇神社の倒壊（阿蘇市）





熊本地震からの復興の過程 ― 熊本城（熊本市）





熊本地震からの復興の過程 ― 新町・古町（熊本市）





熊本地震からの復興の過程　ー　左：阿蘇大橋崩落現場、右：黒川地区の復興イベント（ともに南阿蘇村）





熊本地震からの復興の過程　ー　左：阿蘇神社（阿蘇市）、右：益城町の復興状況





自然の治癒力　ー　草千里（阿蘇市）





自然の治癒力　ー　左：米塚（阿蘇市）、右：水前寺成就園（熊本市）

（４）身近なまち旅

①身近な「職・住・遊・活」の場である博多湾姪浜エリア

筆者の身近な「職・住・遊・活」の場である博多湾姪浜エリア（シーサイドももち～愛宕・愛宕浜・姪浜・生の松原～能古島～博多湾）を対象に、「眺望」「景観」「回遊」「歴史」「自然（海・山・松原）」「健康」「広域連携」「観光」「フットパス」等をテーマにまち歩きを実践している。

■職：福岡市役所時代の思い出のフィールド

・シーサイドももち住宅地開発（シーサイドももちクリスタージュ）

・シーサイドももち地区都市景観形成地区の指定





筆者の職のエリア（シーサイドももち）：クリスタージュ（左）、愛宕神社から見たシーサイドももち（右）

■住：姪浜～愛宕浜居住歴 34 年

・1987 年から姪浜校区や愛宕浜校区に居住

■遊：身近なレクリエーションエリア

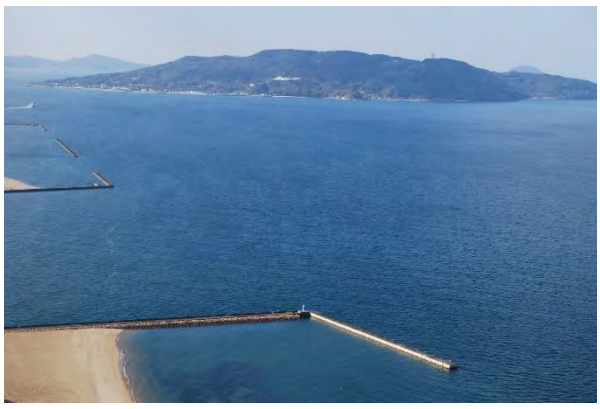
・シーサイドももち、愛宕神社、室見川、愛宕浜海浜公園、生の松原、能古島、博多湾

■活：身近なまちづくり活動エリア

・旧唐津街道を中心とした姪北校区

・広域的には姪北校区を中心とした姪浜エリア（姪北校区、姪浜校区、内浜校区、愛宕校区、愛宕浜校区）





筆者の住・遊・活のエリア：広域的な姪浜エリア（左）、博多湾と能古島（右）

②憩いの空間、現在の職場周辺

筆者の憩いの空間である大濠公園、舞鶴公園、福岡市役所時代の思い出のフィールドである御供所(ごくしょ)地区を中心とした博多部、現在の職場周辺である薬院、今泉、六本松、鳥飼等を散策し、身近な風景や空間を楽しんでいる。




筆者の憩いの空間:大濠公園(左)、舞鶴公園(右)




福岡市役所時代の思い出のフィールド:御供所地区　承天寺(左)、博多祇園山笠　追い山ならし(右)

筆者の身近なまち旅は、その場所に行くだけでなく、通勤途中のバスからの車窓景観や季節感を感じさせる樹木や花々、ちょっとした雨宿りの空間等も対象となる。2016 年 6 月～2021 年 3 月までのテーマと主な訪問地は次のとおりである。

身近なまち旅（テーマ、主な訪問地）

テーマ	主な訪問地
■筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア）	シーサイドももち、愛宕、豊浜、愛宕浜、姪浜、小戸、生の松原、能古島
■筆者の憩いの空間	大濠公園、舞鶴公園
■筆者の福岡市役所時代の思い出のフィールド	御供所(ごくしょ)地区を中心とした博多部
■筆者の現在の職場周辺の身近な空間	薬院、今泉、浄水通り、六本松、鳥飼




筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 博多湾




筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 百道浜




筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 愛宕（左：愛宕神社、右：観音寺）




筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 豊浜（左：室見川、右：枝垂れ梅）




筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 愛宕浜（左：愛宕浜海浜公園、右：ケヤキ並木）




筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 姪浜（左：住吉神社、右：3軒続きの町家）



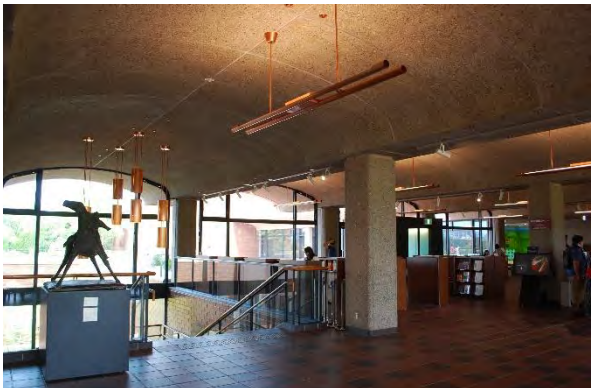

筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 小戸・生の松原（左：小戸の海岸、右：生の松原元寇防塁）




筆者の職・住・遊・活のエリア（博多湾姪浜エリア） ― 能古島（左：能古島アイランドパーク、右：思索の森）




筆者の憩いの空間 ― 左：大濠公園、右：大濠公園内の福岡市美術館




筆者の憩いの空間 ― 左：福岡市美術館、右：舞鶴公園（チームラボ光の祭）




筆者の憩いの空間 ― 舞鶴公園




筆者の福岡市役所時代の思い出のフィールド ― 御供所（ごくしょ）地区（左：聖福寺、右：承天寺）




筆者の現在の職場周辺の身近な空間 ー 薬院周辺（左：高層ビルの足元のケヤキ並木、右：小烏神社）




筆者の現在の職場周辺の身近な空間 ー 今泉周辺（左：若宮神社、右：店舗）




筆者の現在の職場周辺の身近な空間 ー 六本松周辺（左：蔦屋書店、右：西日本シティ銀行本店ココロ館）

（５）「アート」「歴史」「旅」「生き方」等をテーマにした旅

筆者は、今まで説明してきた旅の他、書籍や新聞、テレビ等で得た情報を基に「アート」「歴史」「旅」「生き方」「哲学」等をテーマに小さなまち旅を実践している。旬な情報を基に旅をし、いろいろな方々にお会いすることで、筆者の旅もより充実したものとなっている。

2020 年５月に発行された『還暦からの底力　歴史・人・旅に学ぶ生き方』（出口治明著）の中に「たくさんの人に会い、たくさん本を読み、いろいろなところに出かけていって刺激を受ける、つまり、‘飯・風呂・寝る’の低学歴社会から‘人・本・旅’の高学歴社会へと切り替えなければならないのです。」と記されているが、筆者は正しくこれを実践しているのかもしれない。

新聞情報とそれを基に実践した「小さなまち旅」の一例を次に示す。



本屋探見

橙書店

@熊本市

コーヒーの香り 心通わす ひととき

初めて入る時は、ちょっとためらうかもしれない。熊本市の中心部にある古い雑居ビル。階段は何だか薄暗い。でも、2階にある扉を開けると、コーヒーの香りがふわり。暖かな色合いの木製の本棚が並んでいる。橙書店。別名は、カフェ「オレンジ」。店主の田尻久子さん（50）が2008年、元々経営していたカフェの隣に書店を開いたのがはじまり。8年前、熊本地震で被災したのを機に、一つにまとめて移転した。

翻訳小説や文書を中心に約2千冊。取次会社を通さず、田尻さん自身が選ぶ。多くは出版社から直接買い取って仕入れる「返本できると、私の場合、本選びに甘えが出そうなので」カフェスペースのカウンターで一服しながら、おすすめの本をたずねる人も。「熊本旅行の間に読めるものは」「親の介護の息抜きに」。田尻さんは少し考えて、すぐそばの本棚から一押しの一冊を差し出す。

「私もお客さんから教えてもらいます。お客さん同士、好きな本の話で盛り上がることもありますね」

くつろいだ雰囲気の店内で、詩人の伊藤比呂美さんが朗読会を開き、思想史家の渡辺京二さんが講演することも。作家で建築家の坂口恭平さんは、書斎がわりに原稿を書きに来る。

田尻さんは言う。「経営はいつもきりきり。すべての人の好みに対応できる書店ではありませんが、扉を開けて入って来てくれる幾人かの心に響けばと思って続けています」（原佳久）

カフェスペースで常連客と談笑する田尻久子さん（右）＝熊本市中央区

売れ筋

●『みぎわに立って』田尻久子著（亀山社）　橙書店の店主によるエッセー集。個性的なお客さんに加えて猫や蜂までやって来る。そんな日常を柔らかな筆致でつづる。

●『苦海浄土』石牟礼道子著（講談社文庫）　生の尊厳を求める水俣病患者を描いた名著。「石牟礼ファンのお客さんは多いです」と田尻さん。

熊本市中央区練兵町54松田ビル2階。☎096・355・1276。午前11時半～午後8時（日曜は午後5時まで）。火曜休み。

熊本の橙書店に関する記事（2019.5.27　朝日新聞）



「被爆十字架」の返還式が行われ、ウィルミントン大学平和資料センターのターニャ・マウス所長（右）から、高見三明・カトリック長崎大司教（中央）と信徒代表の藤田千歳さんに渡された＝7日午後、長崎市のカトリック浦上教会、小宮路勝撮影

被爆十字架 長崎に帰る　米国から

2019.8.8 朝日

米国による原爆投下で崩壊した長崎市の浦上天主堂のがれきの中で見つかり、米国で保管されていた「被爆十字架」が7日、被爆から74年を経て浦上教会に返還された。十字架を手にしたカトリック長崎大司教区の高見三明大司教（73）は「人間の残忍さを訴えると同時に、希望を与えてくれる。生きていてくれてよかった。被爆者はじくなっても、揺るがぬ原爆の証人になってくれる」と話した。

▼32面＝「原爆作った愚かさ伝える」

浦上教会などによると、十字架は1930年代半ばから旧天主堂内にあった。45年秋から長崎に駐留し、当時の山口愛次郎司教（故人）と親交を結んだ米海兵隊員のウォルター・フークさん（2010年死去）が譲り受けたとされる。82年、米ウィルミントン大学平和資料センターに寄贈された。十字架を返還したセンターのターニャ・マウス所長は「この十字架は核兵器を保有する米国と各国政府にその使用をやめるよう促している。浦上に返還することで、新たな意味が見いだされるだろう」と話した。（榎本瑞希、田井中雅人）

浦上天主堂と被爆十字架に関する記事
（2019.8.8　朝日新聞）



記事を基に橙書店を訪問（2019.7.5）



記事を基に改めて浦上天主堂を訪問（2019.8.9）

令和元年）12月2日（月）　朝日新聞（夕刊）

隠れ家の先 長崎愛した版画

木版画家・田川憲の作品展示室

異国情緒あふれる長崎の街並みを愛し、描き続けた長崎の木版画家、田川憲（1906～67）の作品を集めた展示室が、長崎市出島町にできた。築70年ほどの古びたビルの一室で、その魅力を孫夫婦が静かに伝えている。（田中脩平）

戦後まもなく建ったコンクリート打ちっ放しのビル。ちょうつがいで留められた色あせた扉を開くと、1階の通路の壁には「そうび」とかかれた木製の看板がひとつ。隠れ家のような一室に出合う。

田川の孫の俊さん（49）と妻でオーナーの由紀さん（48）が昨年1月に開いたアートルームだ。店の名「Soubi，56」は、田川が1956年に描いた作品「十字薔薇の窓」から。大浦天主堂の側面のステンドグラスを描いたこの作品の雰囲気とタイトルの響きにひかれた。展示するのは田川の作品や関連する手記で、テーマと作品は2カ月に1度替えている。

田川は長崎市で生まれ、東京や大分、上海などでの生活を経て終戦後に帰郷した。生涯にわたって居留地の洋館や石畳、唐寺など長崎の街並みをモチーフに多くの木版画を残した。

包装紙やお菓子の箱などさまざまなお店のパッケージデザインも手がけている。長崎では日常的に目にする機会が多かったが、没後52年たち、生前を知るファンも高齢化した。俊さんは、祖父の作品をまちで見かけたり、語られたりする機会が減っていると感じるようになった。「常に祖父の版画を見られる場所をつくろう」と思い立った。

「50年以上前につくられた作品だから、少しでも年季のあるところで展示したほうが自然なのでは」。そんな思いで空き部屋を探し、田川が多くの作品を描いた「出島エリア」で、この古びたビルと出合った。

外観からはそこに展示室があるようには見えず、迷ってしまうお客さんもいる。一方で、古いビルのたたずまいにひかれて偶然入ってきて、田川のファンになってくれた人たちもたくさんいた。「芸術とはもっと身近なものだ」と書き残した祖父の思いを受け継ぎ、俊さんは「原画を間近で見て、芸術作品を身近に感じてもらいたい」と願う。由紀さんは「地元の人には『あたりまえ』になっている長崎のよさ、おもしろさに気づき、語ってもらえる場になれば」と話している。



上 銘菓「南蛮おるこおる」のパッケージになっている田川憲の版画
下 孫の田川俊さん（左）とオーナーの由紀さん



築70年のビルの一室　孫夫婦、魅力伝える

田川憲と棟方志功　2人を描いた小説出版

川憲と青森出身の棟方志功、東西の2版画家を描いた小説「心を彫る」が8出版された。著者は、東京・渋谷にあ小劇場「ジァン・ジァン」の元劇場主の高嶋進さん（87）＝山梨県北杜市。文学のイメージを版画におこした2人の共通点を描いている。

金子光晴の詩を連作版画「十字架鮫（さめ）」に表現した田川と、ドイツの哲学者・ニーチェの「ツァラトゥストラはかく語りき」を板に彫り込んだ棟方。2人の共通点に首肯した高嶋さんは「本や新聞が読まれなくなり言葉にこだわらなくなった現代に、言葉に命をかけて死んでいった2人の芸術家をのこしたいと思った」と話す。

田川の孫、俊さんは「長崎の『あたりまえの風景』を多く残してきた祖父の作品も、この本を読んでから見るとまた違って見える。新たな発見を楽しめる小説です」と話した。

税抜き1800円。問い合わせは左右社（03・3486・6583）へ。

田川憲アートギャラリーSoubi’56 に関する記事（2019.12.2 朝日新聞）





左：記事を基に田川憲アートギャラリーSoubi’56 を訪問（2019.12.6）
右：2018 年に長崎県立美術館で開催された「長崎の美術　田川憲展」の図録





田川憲氏の作品を基に改めて崇福寺や眼鏡橋を訪問（2019.12.20～）

また、「小さなまち旅」に関して、筆者が影響を受けた書籍や映画は下表のとおりである。この中でも、特に小説家・原田マハ氏の本に関心があり、興味を持って読んでいる。筆者が最初に読んだ彼女の本は、国立西洋美術館誕生に隠された奇跡の物語「美しき愚かものたちのタブロー」であり、ちょうど国立西洋美術館開館 60 周年記念「松方コレクション展」を見た頃であった（2019 年６月）。この本を読んで以来、すっかり彼女のファンになっている。彼女の作品はアート小説が中心であるが、歴史や旅、生き方等の面でも参考になることが多い。

そして、筆者の主要な旅の一つである「熊本の復興の過程を巡る旅」の参考になるのが、熊本地震前に制作された映画「うつくしいひと」である。2016 年８月上旬、その映画の上映会が福岡市内であり、熊本城、夏目漱石旧居、江津湖、菊池渓谷、草千里、通潤橋といった熊本の名所の地震前の姿が映し出された。筆者はこうした名所がまた元の姿に戻るよう願わずにはいられなかった。と同時に、これから長い時間をかけて進められていく復興の過程を見に定期的に熊本を訪問することとし、実践を続けている。

「アート」「歴史」「旅」「生き方」等をテーマにした旅（テーマ、主な書籍）

テーマ	主な書籍、映画
【マスコミ情報】	
■アート、歴史、旅、生き方	熊本の橙書店に関する記事 浦上天主堂と被爆十字架に関する記事 田川憲アートルーム Soubi'56 に関する記事
【書　籍】	
■アート、歴史、旅、生き方	「風神雷神 Juppiter, Aeolus（上、下）」「美しき愚かものたちのタブロー」「たゆたえども沈まず」「フーテンのマハ」「旅屋おかえり」「さいはての彼女」(以上、原田マハ 著)
■アート、町並み	「長崎の美術６ 田川憲展 図録」
■旅	「還暦からの底力　歴史・人・旅に学ぶ生き方（出口治明著）」 「旅のつばくろ(沢木耕太郎 著)」 「曙光を旅する(葉室麟 著)」 「るろうにほん 熊本へ(佐藤健 著)」 「懐かしい笑顔に会える、九州の小さな町へ(旅 2012 年 3 月号)」 「建築への旅 建築からの旅(ｴｰﾃﾞｨｰｴｰ・ｴﾃﾞｨﾀ・ﾄｰｷｮｰ)」
■哲学	「ニーチェの言葉 人生を最高に旅せよ」
【映　画】	
■熊本地震からの復興	「うつくしいひと」「うつくしいひと サバ？」
■生き方、環境	「人生フルーツ」





アート、歴史、旅、生き方 ― 原田マハ氏の小説

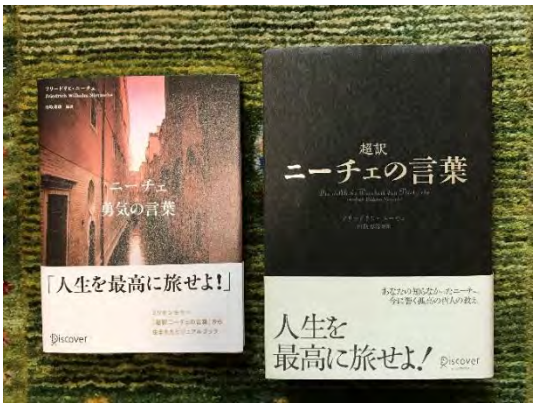




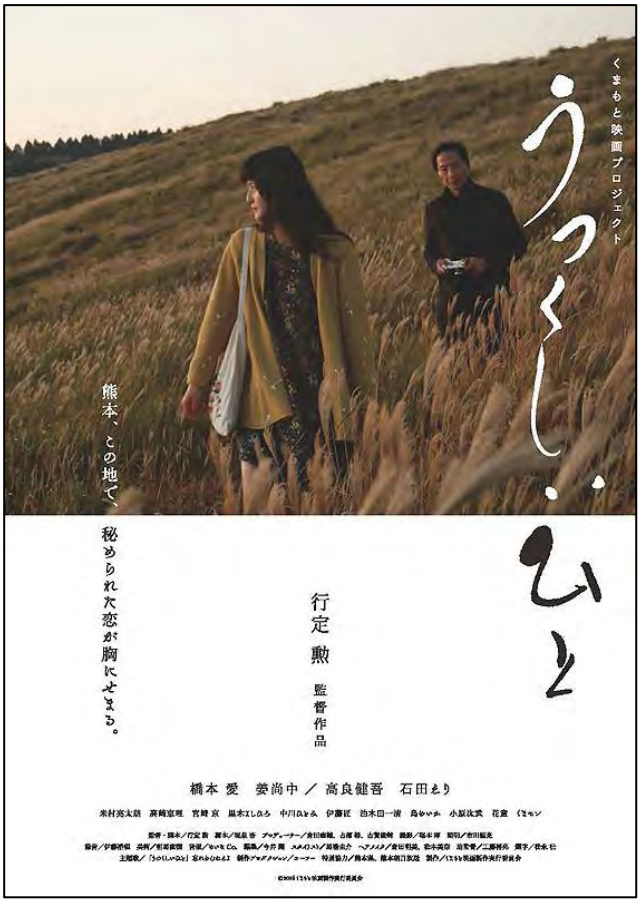
アート、町並み ― 田川憲氏の作品



旅 ― 左：沢木耕太郎 著「旅のつばくろ」
右：葉室麟 著「曙光を旅する」



哲学 ― ニーチェの言葉 人生を最高に旅せよ



熊本地震からの復興 ― 映画「うつくしいひと」

第２章　建築や地域づくりに関連する筆者のこれまでの業務、活動等の系譜

１　第２章の位置づけ

第１章では筆者の大学時代から現在に至るまでの「小さなまち旅」について紹介してきた。次の第３章で「モノ（地域資源)」「ヒト（人、組織)」「コト（ストーリー)」の視点で執筆を進めるにあたり、この第２章では建築や地域づくりに関連する筆者のこれまでの福岡市役所での業務及び姪浜でのまちづくり活動等を紹介することで、筆者の建築や地域づくりへの想いを伝えたい。

１　小さなまち旅

（１）現代建築を巡る旅

（学生時代～）

⇩

（２）歴史的建造物と町並みを巡る旅

（会社員時代～）

⇩

（３）景観づくりと地域づくりを巡る旅

（公務員時代～）

⇩

⇔

（４）現在の旅（2016熊本地震前後～）

①地域づくりや建築の原点に返る旅
②熊本の復興の過程を巡る旅
③身近なまち旅
④「アート」「歴史」「旅」「生き方」等をテーマにした旅

２　建築や地域づくりに関連する筆者のこれまでの業務、活動、経験等

（１）学生時代の設計課題（1976.4～1980.3）

①場所性・地域性・空間特性・歴史性の尊重
②空間体験

（２）会社員時代のコンペ（1980.4～1986.2）

①場所性・地域性・空間特性・歴史性の尊重

（３）福岡市役所での関連業務

（1986.4～2018.3）

①地域特性を活かした住宅地開発
②地域固有の景観づくりと地域づくり
③広域連携に関する研究

（４）姪浜でのまちづくり活動の実践

（2007.3～2016.5）

①多彩な地域資源の発掘
②地域の魅力の地域内外への発信
③地域協働のまちづくり計画の策定
④景観まちづくりの実践

（５）まちなみネットワーク福岡での活動

（2013.8～）

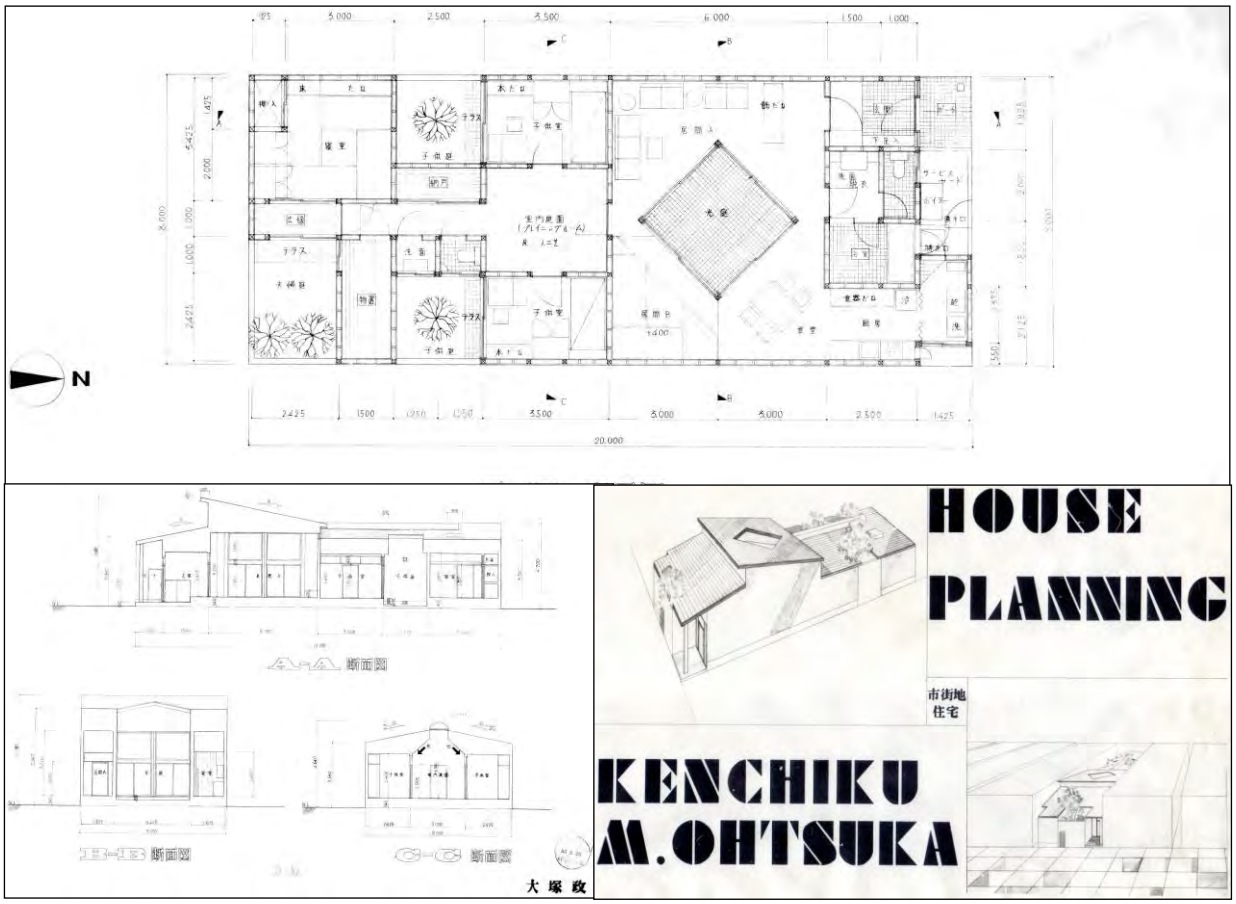
①福岡県内の歴史的町並み等の地域遺産の保存継承を目的としたまちづくりの情報交換及び交流

２　建築や地域づくりに関連する筆者のこれまでの業務、活動、経験等

（１）学生時代の設計課題

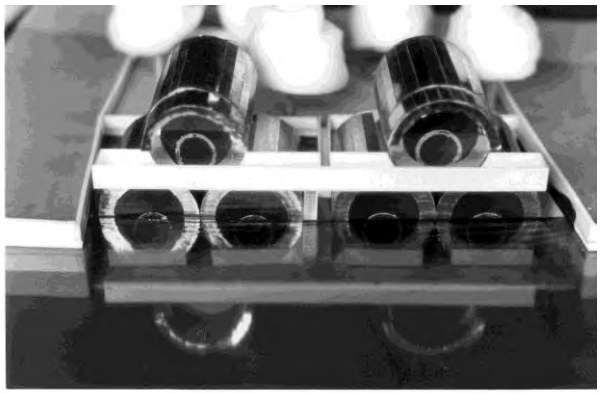
筆者の「その場所の特性を最大限に活かし、そこでしかできない設計をする」という徹底した考え方は、学生時代から身に付け始めたことであり、今でも筆者の建築やまちづくりでの哲学である。

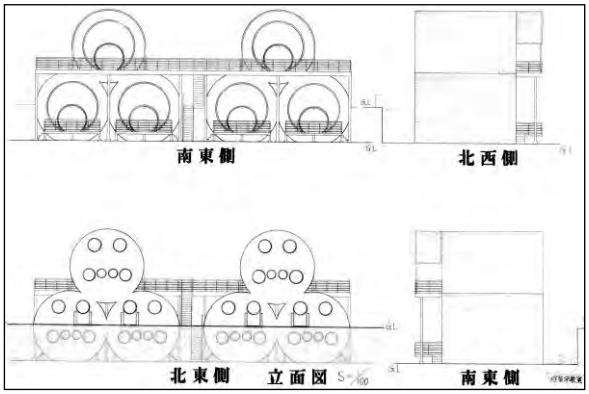
最初の設計は、２年生の時の都市型の敷地（間口８m、奥行き 25mのウナギの寝床状の敷地）の上に建つ木造住宅である。意識したのは、周辺の環境が大きく変化しても、採光や通風、プライバシーを確保できるような住宅である。そのため、平屋建の建物を敷地いっぱいに配置し、広いリビングルームやダイニングルームの中央に３m角の光庭を 45 度の角度で大胆に配置するなど、大小いくつもの光庭を取り入れた。



最初の設計課題（都市型住宅）

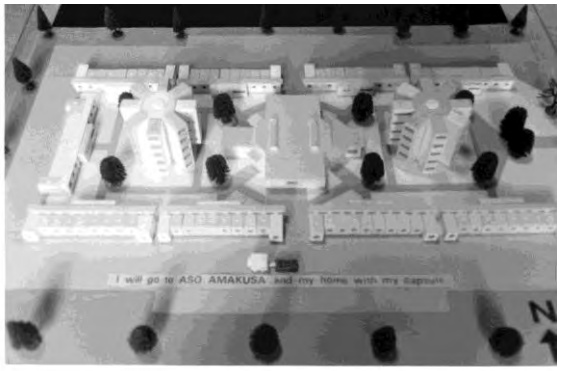
３年生になると、いろいろな設計課題に取り組むことになったが、ありきたりの設計ではなく、場所性やコンセプトにこだわることで、楽しさは倍増していった。海に面した６つの別荘である「SEASHORE WEEKEND COMPLEX」では、６つの円筒を使い、そのうち４つの円筒を海に沈め、干潮時には海に出て楽しめ、満潮時には窓越しに魚が見えるように計画した。上の２つの円筒では、満潮時に魚釣りもできる。また、海に面した大きな窓は、カメラの絞り機能をイメージし、外の明るさに合わせて光を調節できるように計画した。

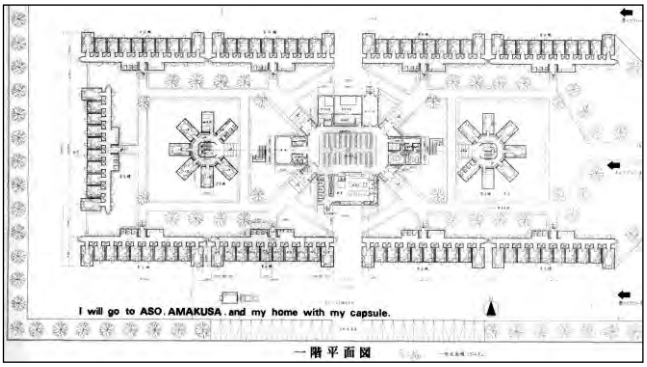




SEASHORE WEEKEND COMPLEX

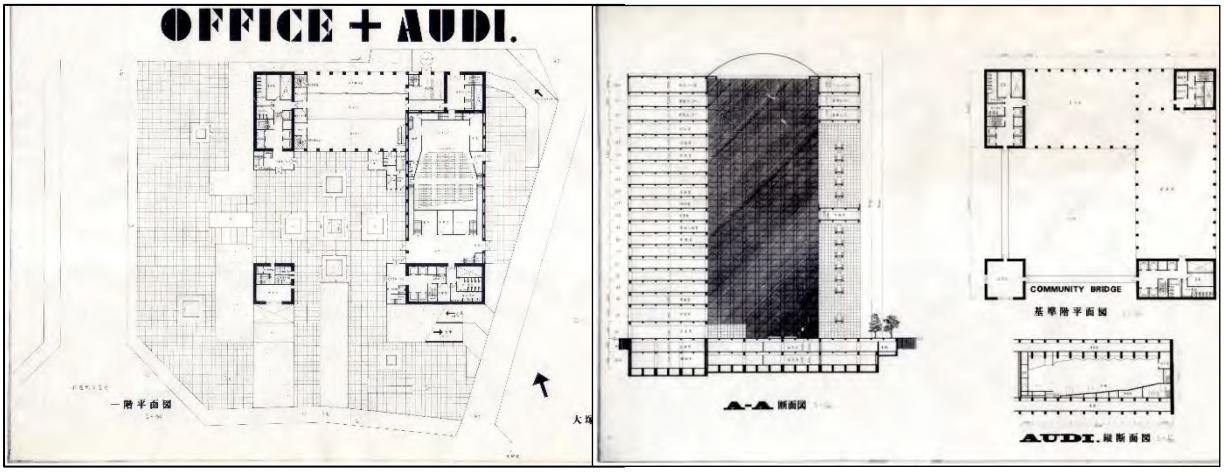
「熊本大学学生寮」の設計では、外周の１階のすべての部屋は取り外し可能なカプセル形式（タイヤ付き）とし、車で引いて移動できるモバイルハウスとした。阿蘇や天草等への旅行の他、自宅に帰る時にも使えるように計画した。





熊本大学学生寮

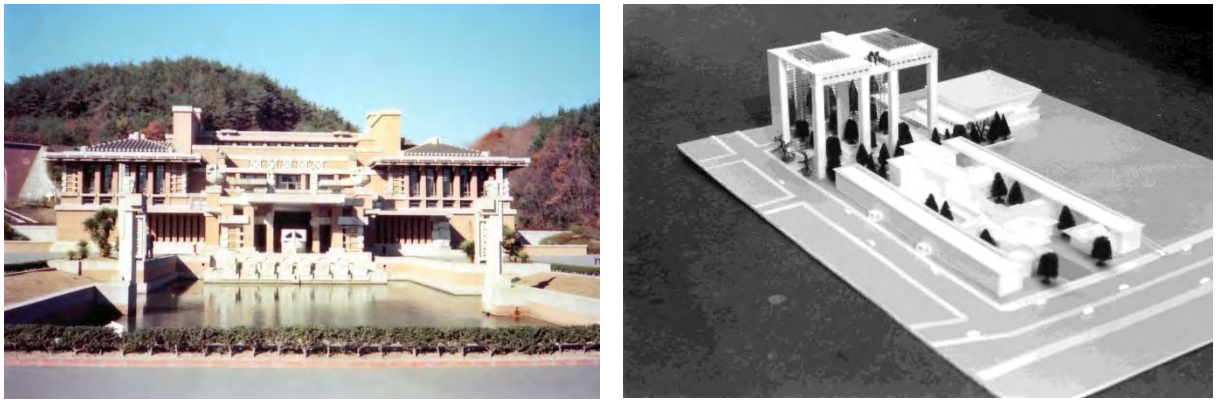
また、「オフィス＋オーディトリアム」の設計では、L字型のオフィスと独立したコア（休憩室空間）にコミュニティブリッジを配するとともに、最上階にガラスの屋根を架け、大規模なアトリウム空間を確保した。このブリッジを渡ることで、同じ会社に働くという一体感が生まれることを意図したものである。空間体験を通したコミュニティという意識が芽生えた時期である。



オフィス＋オーディトリアム

学生時代の締め括りとなる卒業設計では、筆者は当時話題になっていた建築会館の建て替えを参考として、建築に携わる方々が利用する複合施設「Architectural Complex」を計画した。まず考えたことは、『４年間建築を学んで、筆者が最も体験したい建築空間は何か』ということであった。いろいろな建築巡りをする中で、素晴らしい建築空間を体験することの重要性を痛感していたからである。

国内のいろいろな建築の中から、筆者はフランク・ロイド・ライトが設計した旧帝国ホテルの活用を考えた。旧帝国ホテルは既に解体され、一部は愛知県の明治村に移築されており、現実性はなかったが、旧帝国ホテルを博物館として活用しながら、会議室、オーディトリアムなどの機能を新たに付加させていったものである。



明治村にある旧帝国ホテル（左）と筆者の卒業設計時のボリューム模型（右）

（２）会社員時代のコンペ

会社員時代の前半の２年間は、時間外に建築のコンペに何回もチャレンジした。テーマは学生時代に引き続き、場所性・地域性・空間特性・歴史性の尊重である。入賞することはなかったが、場所性やコンセプトにこだわり、自分の想いを組み立てていく作業は、その後の景観づくりや地域づくりの取り組みに活かされていると思う。

ちなみに新建築社の住宅設計競技 1980 の「歴史と現代の接点にたつ家」という課題に対して、当時の筆者は原広司氏が設計した「粟津邸」をイメージしていた。粟津邸は住宅の中に都市が入り込んだ空間が特徴で、中央上部のトップライトからの光が内部のドーム型のトップライトを通して、各居室に光が入る仕組みになっている。世界中の集落調査を実施している原氏ならではの住宅であり、筆者も大学時代に影響を受けた住宅の一つである。



コンペへの参加

（３）福岡市役所での関連業務

32年にわたる福岡市役所での業務の中で、景観づくりや地域づくりへ活かされているのは、「地域特性を活かした住宅地開発」「地域固有の景観づくりと地域づくり」「広域連携に関する研究」である。

まず、地域特性を活かした住宅地開発の代表が「シーサイドももちクリスタージュ」である。クリスタージュでは、シーサイドももちに立地する最大の特徴である博多湾への眺望を最大限に活かし、外観計画や配置計画、住宅のプラン等を公社全体で検討した。今までの福岡のまちづくりは博多湾に背を向けてきたが、シーサイドももちでは博多湾に近いという特性を活かすことが求められた。建築計画においては、エレベーターや階段を二戸一形式にすることで、北側の居室からの眺望の確保が可能となった。また、冬は日当たりの良い南側の居室をリビングルームとして使い、夏は眺望の良い北側の居室（寝室）をリビングルームとして使う「リバーシブルリビング（ダブルリビング）」も採用し、これを積極的に PR していくことになった。




竣工直後のクリスタージュ（1992 年6月。福岡市住宅供給公社提供）

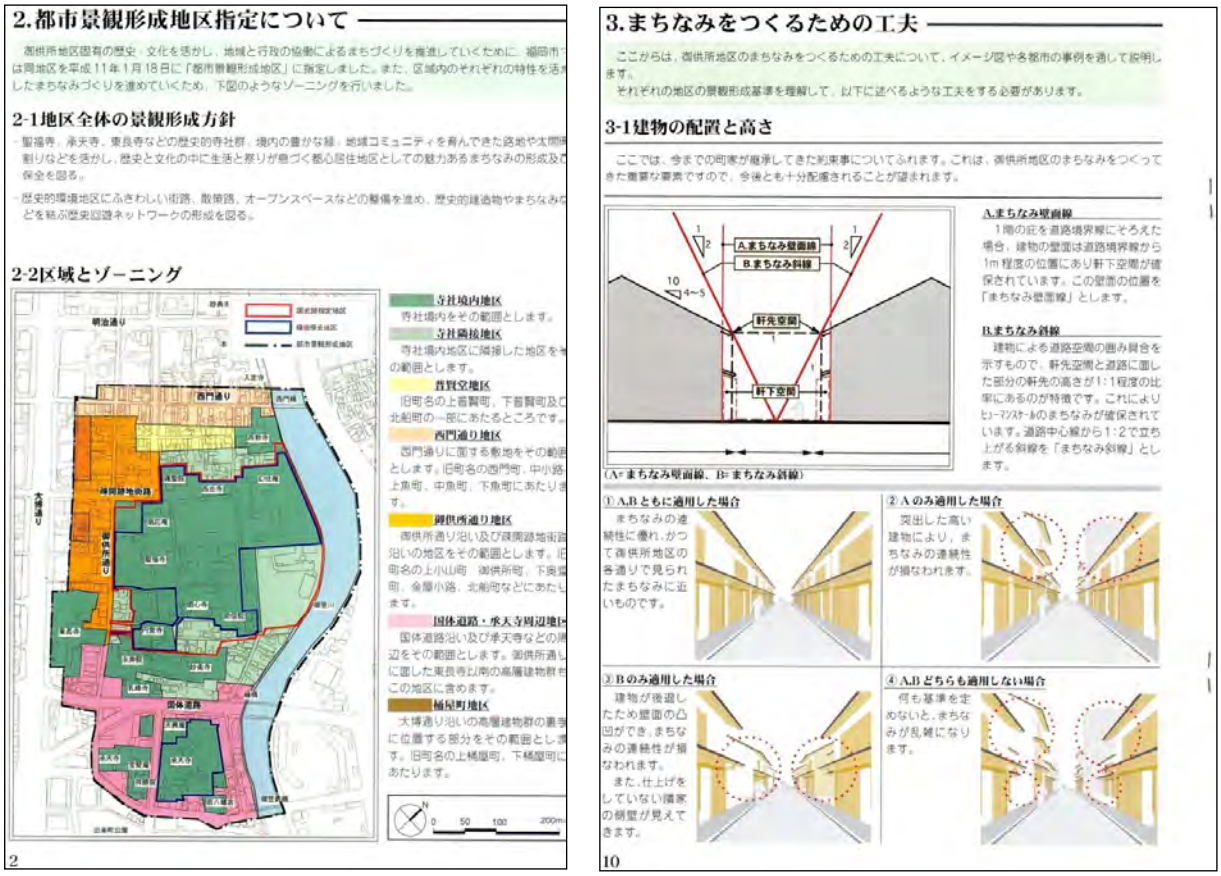
次は都市景観室時代の都市景観形成地区の指定である。これは、都市景観条例に基づき、地域が主体となって、それぞれの地域の特性を活かした景観まちづくりを進めていく手法である。この中で、筆者の思い出に残るのが新しいまちづくりが進むシーサイドももち地区と福岡市有数の歴史的環境地区である御供所（ごくしょ）地区である。都市景観形成地区に至るまでの経緯やその後の状況は2016 年度の活動記録に記しているが、景観に軸組を置いたまちづくりこそが地域の個性を創出していくものであり、そうした地域個性の集積が福岡市全体の魅力を高めていくものである。




都市景観形成地区：シーサイドももち地区（左）、御供所地区（右）



シーサイドももち都市景観形成地区　景観形成ガイドライン



御供所都市景観形成地区　景観形成ガイドライン

福岡市役所時代にもう一つ印象に残るのが「広域連携」についての研究である。これは福岡都市科学研究所（現(公財)福岡アジア都市研究所）が 2001～2002 年度に「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」を実施したもので、筆者は事務局を担当した。研究報告書の中で事務局が「事例にみる広域連携の意義と効果」を執筆したが、その時の考察の中で身近な地域づくりに関するものは次のとおりである。

なお、事例として筆者が実際に訪問し参考としたのは、長野県小布施町、長野市（善光寺周辺、松代地区）、須坂市、熊本県小国町、南小国町、東京都世田谷区、群馬県川場村、宮崎県五ヶ瀬町、

福岡県浮羽町（現うきは市）の他、海外ではドイツのシュトゥットガルト、イギリスのウエスト・ミッドランド地域等である。浮羽町のつづら棚田のオーナーとして都市と農村の交流・連携活動に参加したのもこの頃である。この時の経験がその後の姪浜でのまちづくり活動に活かされることになるのである。

「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」の中での
「事例にみる広域連携の意義と効果」より、筆者の地域づくりの考え方を示すものを抜粋

1　魅力ある地域づくりと広域連携

■広域連携は個性ある地域づくりの延長である。

・広域連携のベースにあるのは、それぞれの地域の資源（自然、歴史・文化、産業、人材等）を活かした地域づくりであり、広域連携は個性ある地域づくりの延長である。

■経済や人口規模の大小だけが都市の豊かさの指標ではない。真の豊かさとは、魅力ある地域づくりがもたらす人々の地域に対する誇りである。

・人を惹きつけるのは、都市規模（経済や人口規模）の大小ではなく、地域固有の資源を活かしたまちづくりである。今後は、「心の豊かさ」「文化の豊かさ」「環境の豊かさ」「景観の豊かさ」「人との関係の豊かさ」等が都市の豊かさの重要な指標となる。

・都市の豊かさとは、「真に魅力ある地域づくりがもたらす、人々の地域に対する誇り」である。

■交流人口（交流のまちづくり、観光のまちづくり）による地域の活性化

・人口減少社会において定住人口を増やすことは難しく、地域外からの来訪者（交流人口）をいかに増やしていくかが地域活性化の大きな課題である。そこでは、経済効果だけでなく、情報・文化の交流効果が求められている。

・今後は、従来の物見遊山的観光やテーマパーク型観光ではなく、個性豊かな町並みと地域づくりを体験する旅や、農山村の魅力（自然、食、人等）を体験するグリーンツーリズム等、地域社会（住民）、地域の資源、来訪者の三者がうまく調和した「観光まちづくり」という視点が重要になる。

・中心市街地を活性化するには、商業だけの魅力では限界があり、地域の歴史・文化資源のまちづくりへの活用、情報・文化の交流、そして楽しく歩いてもらえる歩行者優先の道路づくり等の視点を取り入れた「観光まちづくり」への転換が求められている。

■地域づくりの情報発信

・地域づくりで成功している市町村に共通することは、地域づくりや情報発信、交流の拠点となる組織や施設がしっかりしている。

・面白い地域づくりを展開している市町村には、地域の歴史・文化、特産品、まちづくり等の情報をわかりやすく発信する読み物としての「地域づくり読本」がある。地域づくり読本は、訪れる人が地域を知るうえで大変役に立つ編集・構成になっていると同時に、地域の人々が地域の資源を再確認することで、地域に対する誇りや愛着を創出するという効果もある。

2　相互に補完関係にある都市と農山村の継続的で対等な交流の推進
3　都市機能の相互補完と広域連携

省略

また、この研究では、広域連携のメリットをいかにわかりやすく伝えていくかが大きな課題であった。そのため、地域デザイナーの高山美佳氏に依頼して研究の成果を「ひろがる つながる」というわかりやすい絵本にしていただいた。筆者の長男が田主丸に遊びに行った時のことが印象に残り、長男をモデルにしたそうだ。研究には専門家だけでなく、市民にわかりやすく伝えていく視点が大切である。これは地域のまちづくりにも同じことが言えるのである。





左：筆者は浮羽町（現うきは市）つづら棚田のオーナーとして都市と農村の交流・連携活動に参加
右：「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」報告書概要版より抜粋

（4）姪浜でのまちづくり活動の実践

姪浜でのまちづくり活動については、2016～2017 年度の研究に詳しく記載しているが、それぞれの段階のまちづくりの課題や熟度に対応した目標を掲げ、「こだわり」「おもてなし」「多彩」「粘り強さ」「地道」をテーマにした 10 年間の精力的な活動により、姪浜の魅力及び協議会の活動を全国に発信してきた。





筆者の姪浜での活動のひとこま

姪浜における各段階の地域課題と活動目標

段　階	地域課題	活動目標
1st ステージ (2007～2009 年度)	○地域住民自身の地域の魅力の認識不足	○地域の魅力の再認識と地域内外への発信
2nd ステージ (2010～2013 年度)	○地域のまちづくりの方向性が不明確 ○まちづくりの効果の具現化 （具体的に目に見える形で示す）	○地域協働のまちづくり計画の策定 ○景観まちづくりの実践
3rd ステージ (2014～2015 年度)	○景観づくりの実践に向けた意識高揚 ○地域の歴史的･景観的シンボルであるマイヅル味噌のみそ蔵の再生･活用 ○みそ蔵に代わる地域のシンボルとなる新たな魅力スポットや、姪浜らしさにこだわった多彩な事業の発掘・発信	○国の登録文化財のみそ蔵を中心とした姪浜のまちなみの個性の再構築 ○次のステージに向けた『姪浜ネクスト』の推進

姪浜でのまちづくり活動のポイント（筆者が事務局長として工夫したこと）

①各段階の地域課題に対応した長期的展望に立った多彩なまちづくり活動の推進
②地域に埋もれている身近な魅力資源の掘り起こし
③ヨソモン（地域外の人間）、ワカモン（若者）の視点の活用
④計画策定における住民参加、地域との対話や双方向性の確保
⑤関係団体、住民、商店、寺社、大学、行政等との協働関係の構築
⑥姪浜らしさにこだわった多彩な事業の推進
⑦マスコミへの情報発信
⑧協議会に参加している地域内外の人々の多様なノウハウ・スキルの活用
⑨全国区の助成金へのチャレンジ
⑩各種賞の受賞による情報発信

⇩

継続的で多彩なまちづくり活動の成果

（筆者が在籍した 2016 年５月までの成果）

①地域住民の地域への誇りや愛着の創出
②活動の広がり
③地域の歴史・文化・暮らしを踏まえたまちづくりや景観づくりの方向性の共有
④まちづくりの効果を具体的に目に見える形で地域に示す（まちづくりの効果の具現化）。
⑤地域資源の保全・活用に向けた意識醸成と双方向のまちづくりへの展開
⑥全国的な評価及び姪浜の魅力の全国への PR、地域への情報発信
⑦身近な地域資源を活かしたまちづくりの他地域への波及効果（今後期待）

※「姪浜でのまちづくり活動の実践」については、2017 年度報告書第１章参照

（５）まちなみネットワーク福岡での活動

まちなみネットワーク福岡は、福岡県内の歴史的町並み等の地域遺産の保存継承を目的としてまちづくりを進めている様々な主体が、協調・連携を図りながらそれぞれ地域の歴史的文化遺産の保全に資することを目的として 2013 年８月に組織されたものであり、2013 年度から毎年１回、各都市持ち回りで「まちなみフォーラム福岡」を開催し、課題や対応策等について精力的に意見交換を行っている。

まちなみフォーラム福岡の開催状況

回数	開催年月日	開催地	スローガン等
1回	2014(H26)年 3月29日	福岡市 唐津街道姪浜	「住んでよし、訪れて楽し」のまちづくり
2回	2014(H26)年 11月29日	大川市 小保・榎津	町並みにふさわしい修理・修景の実践へ
3回	2015(H27)年 11月13～14日	飯塚市 内野宿	江戸の面影が今も残る 長崎街道・内野宿の復原へ
4回	2016(H28)年 9月17日	福津市 津屋崎	町家の再生活用と町並み景観の保全 （絶景の道100選・認定1周年記念）
5回	2017(H29)年 9月30日～ 10月1日	八女市 八女福島	再生・空き町家、つなげよう地域の活力 （重伝建地区選定15周年）
6回	2019(H31)年 2月23日	八女市 黒木	町家に輝きを まちに賑わいを 取戻そう （重伝建地区選定10周年）
7回	2019（R1）年 11月2日	福岡市 唐津街道箱崎宿	町並みや町家を未来につなぐ





まちなみフォーラム福岡の様子

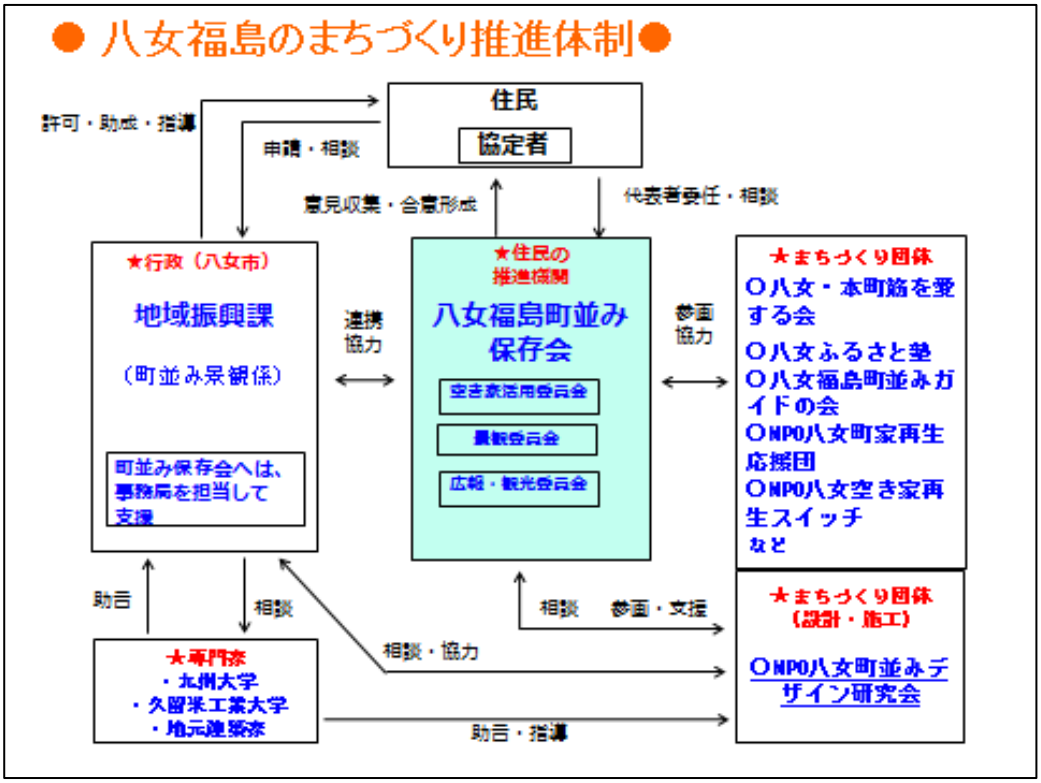
まちなみネットワーク福岡に所属する地域で、特に成果を上げているのが八女福島である。八女福島においては町並み保存会を中心に、住民、各まちづくり団体、専門家、行政が役割分担しながら連携を取り合ってまちづくりを進めている。特徴的なのは「町家の伝統様式や伝統構法を習得し継承していく活動を展開している団体」や「空き町家の保存活用を担う団体」が組織され、

相互に連携して活動を展開していることである。様々な地域課題に対し、いろいろな団体を巻き込み、地域全体として取り組んでおり、それが地域全体に波及し、地域の共感を得、その好循環を繰り返しながら町並みの保全整備が進んでいる。他の地域でも大いに参考にしていただきたい。





八女福島の町並み



八女福島のまちづくり推進体制

（「第5回九州・沖縄町並みゼミ八女福島大会&第5回まちなみフォーラム福岡　配布資料」より引用）

※「まちなみネットワーク福岡所属団体の取り組み」については、2017 年度報告書第２章６参照

第３章　画一化する街並みの中で地域個性のあり方についての考察 ～小さなまち旅の実践等から得たモノ・ヒト・コトを通して～

１　視点の整理

（１）これまでの福岡市役所での業務やまちづくり活動の実践から得た視点

筆者は2016～2017年度の研究で、これまでの福岡市役所での業務やまちづくり活動の実践を踏まえ、身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践に向けて提案している。これを「モノ（地域資源)」「ヒト（人、組織)」「コト（ストーリー)」の３つの視点で再整理すると次のようになる。

これまでの福岡市役所での業務やまちづくり活動の実践から得た視点

◆モノ（地域資源）

○その地域ならではの魅力資源の評価
- 明確な地域資源の維持継承
- 多彩な地域資源の評価

○画一化する街並みの中で見えにくくなりつつある地域資源の発掘・評価・活用
- 今あるモノを活かすことが大事。新しいモノは要らない。

◆ヒト（人、組織）

○地域のまちづくりに求められる視点、まちづくり人に求められるもの
- 老若男女それぞれの視点
- ヨソモノ（地域外の人間）の視点
- まちづくり人に求められるのは、「地域への想い」「前向き思考」「包容力」「相手への配慮（リスペクト)」

○地域に根ざしたまちづくり組織
- 組織の使命（ミッション）
- 地域資源の再認識と掘り起こし
- 地域ブランドの構築（地域らしさ、情報発信、地域の共感）
- ドーパミンの出るまちづくり（チャレンジの連続と自省）
- 巻き込み力

○地域内の各団体の連携による活動の広がり
- 各団体の垣根を越えた地域全体としての取り組み

◆コト（ストーリー）

○各地域のそれぞれの魅力資源を活かしたまちづくり
- 地域の風土・歴史・文化の尊重
- 各地域の風土・歴史・文化を活かした町並みの維持継承
- 身近な魅力資源を活かしたまちづくり

○まちづくりの課題や段階（ステージ）に対応した取り組み
- 各段階の地域課題⇒目標設定⇒活動の推進⇒振り返り
  ⇒新たな課題や動向への対応⇒新たな目標設定⇒活動の推進⇒振り返り

※この好循環の繰り返し

（２）小さなまち旅から得た新たな視点

次に、小さなまち旅（特に熊本地震前後から現在までの旅）から得た新たなことを「モノ（地域資源)」「ヒト（人、組織)」「コト（ストーリー)」の３つの視点で整理すると次のようになる。

小さなまち旅から得た新たな視点

◆モノ（地域資源）

○多様なテーマから地域づくりのヒントを考える

・鳥の目・虫の目の視点で地域を見る（風景、気候、地形等の広域的空間から見慣れた身近な空間まで多様なテーマが存在する)。

・多様なテーマの中にそれぞれの地域づくりのヒントがある。

○地域個性の把握

・人が十人十色なら、地域も十域十色

・地域の個性が見えにくくなっている中で、まちをじっくりと観察しながら歩くと、地域固有の環境や雰囲気、建築材料等を確認できる。

◆ヒト（人、組織）

○小さなまち旅のすすめ

・ネット上だけではなく、実際に旅に出て自分の眼で実物を見て、都市や地域、建築を見る感覚を磨く。旅のテーマは地域の風景、町並み、建築、食、特産品など様々である。

・それぞれの地域の空気と背景（歴史、気候、成り立ち等）を知ることで、地域の個性を把握する。

・旅で得た体験や情報を自分の住む地域に置き換えて考えてみる。

○樹木や花から景観の美しさ、組織のあり方を考える

・桜並木やイチョウ、ケヤキの紅葉のグラデーションに見る「多様性の中の統一」「組織運営（多様な個人と組織)」

◆コト（ストーリー）

○場所性や地域固有の材料を活かした建築と地域づくり

・場所性（空間特性)、地域に昔から存在する材料へのこだわりが、その場所ならではの建築や地域づくりにつながる。

○広域連携による地域づくり

・地域の個性が見えにくくなっている中で、広域的空間の中での対比によって地域の個性を浮き彫りにする（輝かせる)。

・広域連携により、それぞれの地域の個性をさらに増進させ、地域全体としての魅力も高める。

○点・線・面による地域づくりがもたらす地域のアイデンティティ

・魅力ある点（施設、空間等）を増やすことで線（沿道空間等）となり、さらに増やすことで面（個性ある地域）となる。魅力ある点の集積が線となり、面となり、地域全体の魅力を増進させ、地域のアイデンティティとなる。

２　画一化する街並みの中で地域個性のあり方についての考察

前述の２つの視点を統合し、身近な地域資源を活かしたまちづくりを「モノ（地域資源）」「ヒト（人、組織）」「コト（ストーリー）」に分けて再整理し、筆者が実際に訪問した地域の事例を紹介しながら、『画一化する街並みの中で地域個性のあり方』について考察する。

（１）モノ（地域資源）

【その地域ならではの魅力資源の評価】
- 明確な地域資源の維持継承
- 多彩な地域資源の評価

【画一化するまちなみの中で見えにくくなりつつある地域資源の発掘・評価・活用】
- 今あるモノを活かすことが大事。新しいモノは要らない（まちをじっくりと観察しながら歩くと、地域固有の環境や雰囲気、建築材料等を確認できる）。
- 地域は十域十色（広域的視点での対比により地域の個性を浮き彫りにする）

【多様なテーマから地域づくりのヒントを考える】
- 鳥の目・虫の目の視点で見ると、広域的空間から見慣れた身近な空間まで多様なテーマが存在する。
- 多様なテーマの中にそれぞれの地域の地域づくりのヒントがある。

【その地域ならではの魅力資源の評価】

①重要伝統的建造物群保存地区

魅力資源が明確で、地域の風土や歴史、文化が息づく最たる例は、我が国固有の歴史的な町並みであろう。北海道から沖縄まで気候、風土、文化等が異なり、それに応じた個性豊かな町並みが形成されてきた。宿場町や門前町、武家屋敷や城下町、在郷町、社寺町等の多くの歴史的な町並みが、少子高齢化の進行、後継者不足等の様々な課題を乗り越えて、多くの人々の地域への誇りと努力、そして自治体や国の強い支援によって維持継承されている。そして、国内外から多くの来訪者が訪れ、地域の方々との交流を通じて、その魅力を体験体感している。




重要伝統的建造物群保存地区：下郷町　大内宿（左）、倉敷市　倉敷川畔（右）

筆者がよく訪れる身近な場所としては、八女福島や筑後吉井、肥前浜宿等の町並みがあり、地域の生活や文化等に根ざした伝統的な町並みが形成されている。現在、全国には 123（2020 年 12 月 23 日現在）の国の重要伝統的建造物群保存地区がある。町並みの維持継承には様々な課題

があるが、今後も官民一体となって、各地域固有の風土や歴史を活かしたまちづくりを進めていってほしい。




重要伝統的建造物群保存地区:うきは市　筑後吉井(左)、鹿島市　肥前浜宿(右)

②重要文化的景観

重要伝統的建造物群保存地区以外にも各地域に根づく景観は多く存在する。筆者が訪問した地域で特に印象に残っているのが、国の重要文化的景観に選定されている長崎市外海(そとめ)集落と天草市﨑津集落である。外海集落は練壁（結晶片岩の石に赤土及び藁すさを練り込んで築いた伝統的な石壁）やド・ロ壁（パリ外国宣教会のド・ロ神父によって藁すさに代わり赤土に石灰を混ぜる練積みの石壁）等の多種多様な石積み構造物による景観が大きな特徴であり、初めて訪れてもその特徴がすぐわかる。

﨑津集落は羊角湾の穏やかで青緑色の海が印象的な漁村集落である。ゴシック様式の﨑津教会を中心にトウヤ（軒を連ねる家々に挟まれ形成された海に出るための小路）やカケ（船舶の碇泊や漁具の整備・魚干しなどの生業施設である海上に張り出した構造物）等により特徴的な漁村景観を形成している。




重要文化的景観:長崎市　外海(そとめ)集落(左)、天草市　﨑津集落(右)

この他にも筆者がよく訪れる身近な場所としては、阿蘇の草原景観や三角浦の文化的景観（宇城市）、小鹿田(おんた)焼の里（日田市）、田染荘(たしぶのしょう)小崎（豊後高田市）の農村景観等があり、日々の生活に根ざした身近な景観が形成されている。現在、全国で65の国の文化的景観が選定されており(2019年10月16日現在)、その文化的な価値を正しく評価し、地域で守り、次世代へと継承していっ

てほしい。




重要文化的景観：宇城市　三角浦（左）、日田市　小鹿田（おんた）焼の里（右）

③都市景観条例に基づく都市景観形成地区

市町村の景観条例に基づき指定されている都市景観形成地区等（市町村により名称が異なる）も地域の個性を将来にわたり保全活用する制度であり、歴史的環境地区や都心部地区、ウォーターフロント地区等それぞれの地域の特徴を活かした景観形成が進められている。こうした地域をモザイク的に増やしていくことが市町村の重層的な魅力形成につながっていくのであり、地域と行政の協働により様々な地域で展開していってほしい。




筆者が精力的に関わった福岡市の都市景観形成地区：御供所（ごくしょ）地区（左）、シーサイドももち地区（右）




那覇市の都市景観形成地域：首里金城地区（左）、壺屋地区（右）

筆者が福岡市で景観行政に関わり始めた 1990 年代は地域の方々から「景観で飯が食えるか」とよく言われたものであるが、現在は魅力的な景観を求めて国内外から多くの方々が訪れるようになったことを大変嬉しく思う。

④印象に残る制度

筆者が訪れた地域で制度的に印象に残っている地域がある。その一つが島原市の森岳商店街である。ここでは、古い町家や商家を「登録有形文化財（文化庁)」「まちづくり景観資産（長崎県)」「まち並景観賞（島原市)」の制度で認定することで、歴史的景観を活かしたまちづくりを進めており、古い町並みと調和した商店（酒屋、金物屋、レストラン等）が人気となっている。



島原市森岳商店街の町並み

長崎県の「まちづくり景観資産登録制度」を調べてみると、次のように記されている。

> **まばゆい海と豊かな山に囲まれた長崎県。**
>
> **それぞれの地域によって地理条件や歩んできた歴史は異なり、武家屋敷通りや町屋が残る商店街、坂沿いの洋館群、海辺の漁業集落や棚田など、県内は個性的で魅力あるまちなみや建造物にあふれています。**
>
> **景観資産登録制度は、そんなまちなみや建造物、さらに地域のシンボルとして愛されている樹木などを登録することで県内外に広く周知し、ゆるやかに保全を行う、長崎県独自の制度です。**
>
> （出典：長崎県ホームページ）

国や市の景観に関する支援制度はあるが、県レベルでこうした独自の取り組みを行っているところは珍しいのではないだろうか。長崎県では 2003 年の制度創設以来、まちなみ 29 件、建造物 195 件、樹木５件を登録している。

筆者は現在の仕事の関係もあり長崎県内のいろいろな場所を訪問する機会は多いが、その中で印象に残っているのがまちづくり景観資産に登録されている「陶郷・中尾山」の集落景観である。ここは江戸時代の正保元年（1644 年）の磁器の生産開始以来、国内有数の焼物の里として知られている波佐見町南東部の集落であり、谷間の空に伸びるレンガ造りの煙突群が陶芸の里としての佇まいを残し、個性的な産業景観を生み出している。こうした地域固有の景観を国、県、市町村の制度を最大限に活用して地域内外にその魅力を伝えていってほしい。




長崎県のまちづくり景観資産に登録されている波佐見町の中尾山集落の町並み

【画一化する街並みの中で見えにくくなりつつある地域資源の発掘・評価・活用】

地域の個性が明確な地域が一部にある一方で、多くの地域では都市化に埋没して地域の個性が見えにくくなってきているのも事実であり、むしろそうした地域の方が圧倒的に多いのではないだろうか。そうした中、地域の人が見慣れて、当たり前だと見過ごしているものにスポットを当てていくことが、その地域ならではのまちづくりを進める上で重要になる。町並みとして連続していなくても、点在する身近な地域資源を発掘し、それを身近なまちづくりの中で活用していくことで、地域の方々にとっては地域への誇りや愛着につながっていくのである。

① 筆者が実践してきた姪浜

筆者が 10 年間、精力的に活動してきた姪浜の場合は伝統的な町家が連続しているわけでなく、ややもすると通り過ごしてしまいそうな町並みであるが、じっくりと歩いてみると多彩な歴史、伝説・物語、数多くの寺社・町家、狭い路地、海、港、魚市場、美味しい魚等の多くの魅力資源が存在する。その中には、地域の方々によく聞いてみないとわからないような「身近なまちかど遺産」を発見することができる。そうした魅力資源をまち歩きマップやかわら版等で地域内外の方々にわかりやすく伝えていくことが重要である。それが地域への誇りや愛着につながっていくのである。筆者はこうした視点を大切にして姪浜での活動を展開してきたが、これは他の地域でも大いに応用できると考えている。




筆者がまちづくり活動を始めた 2007 年頃の姪浜の町並み



姪浜の多彩な魅力資源を紹介したまち歩きマップ（「唐津街道姪浜まちづくり協議会」発行）



姪浜の魅力資源集（唐津街道姪浜まちづくり協議会在籍中に筆者作成）

②小さなまち旅での地域個性の発見

いろいろな地域を歩いて観察してみると、ふとした発見をすることがある。その一つが別府石を使った塀である。筆者は仕事で別府市の上人ヶ浜温泉に行った時に、周辺の住宅地で数々の石積み塀を見かけたが、これこそが地域に根ざした景観なのではないかと直感した。

別府では別府駅から山の手にかけて多くの石塀を見かけるが、調べてみると大正時代前後に別荘地や高級住宅地が盛んに造成された時に掘り出された別府石（鶴見山が噴火した時の角閃安山岩が朝見川や境川を下り、丸石となってできた小石）が塀として使われたとのことである。

こうした地域固有の資源を活用し、景観形成に役立ててほしいものである。建物は建て替わっても塀を統一することで、多様性の中にも統一感と連続性の感じられる景観が実現でき、それが地域の個性になっていくのである。筆者が訪問した大村市の武家屋敷街や対馬市厳原でもそれを実感することができた。





別府市 上人ヶ浜温泉周辺の住宅地で見かけた別府石の塀





別府市 別府駅から山の手方面で見かけた別府石の塀





大村市 上小路武家屋敷街の町並み





対馬市 厳原の町並み

③広域的な視点から探る地域の魅力

仕事の関係で１～２両編成のローカル線に乗る機会も多いが、各駅や車窓からいろいろな発見をすることができる。例えば、松浦鉄道では多くの駅で桜を植えており、桜の咲く頃になると浦ノ崎駅や吉井駅、久原駅は多くの来訪者で賑わっている。また、松浦鉄道では沿線の学校に協力してもらって駅に壁画を飾る事業を進めており、全 57 駅中 40 駅で心のこもった絵を見ることができる（2019 年３月現在）。

そして、松浦鉄道の沿線には有田焼や伊万里焼、有田内山地区の伝統的な町並み、教会や集落、棚田、アジフライに代表される食等の多くの魅力資源が存在する。一つひとつの駅は点であるが、松浦鉄道沿線を一つのエリアと考えれば、それぞれの地域の個性がより明確になり、県域や市町村域を超えた様々な広域連携による地域づくりが可能になるのではないだろうか。




松浦鉄道浦ノ崎駅：桜並木（左）と壁画（右）



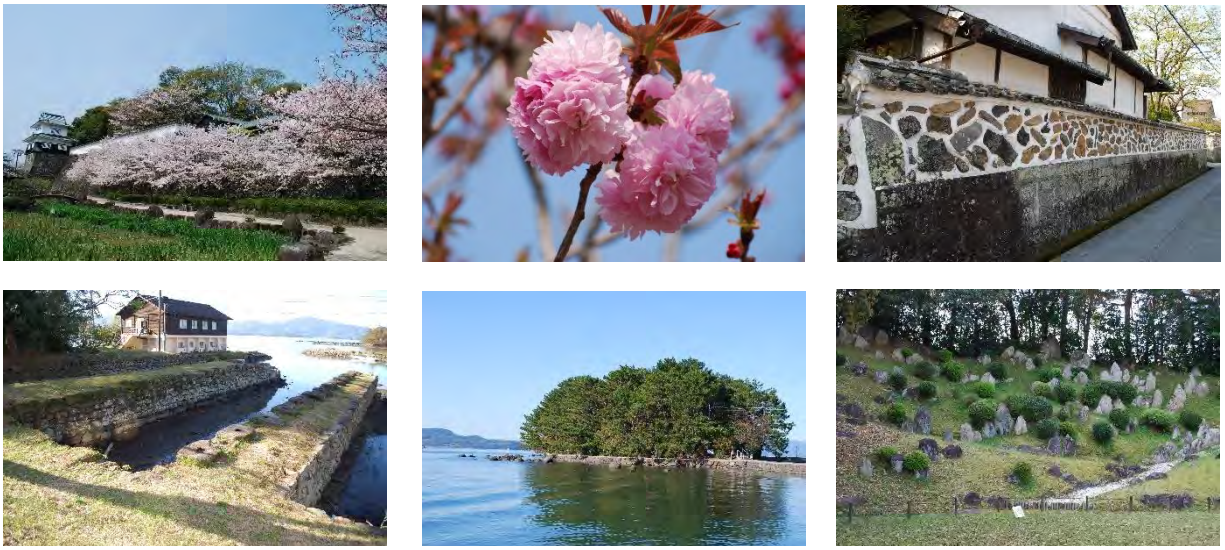


松浦鉄道沿線の魅力の一例：有田のドンバイ塀（左）、伊万里焼（中）、アジフライ（右）

また、広域連携という視点に立つと、大村湾沿岸の市町（長崎市、佐世保市、諫早市、大村市、西海市、時津町、長与町、東彼杵町、川棚町及び波佐見町）にも多くの魅力資源が存在する。筆者は JR 長崎本線や大村線を利用して各地域を訪問したり、車窓からの景観を楽しんでいるが、いろいろな魅力資源を確認することができる。両端にある長崎市や佐世保市の魅力は様々な形で紹介されているが、ここでは中間にある大村市や東彼杵町の魅力を中心に紹介したい。

大村市は大村藩の城下町であり、石垣や花の美しい玖島城跡、今も生活が息づく４つの武家屋敷通りと風情ある石垣、海と密接な関わりがあった大村藩や玖島城跡の性格を示すお船蔵跡、大河ドラマのロケ地となった古松の美しい寺島、斜面を利用した枯山水の庭園である旧円融寺庭園等の歴史的な資源がまちなかに集積し、散策しながらその魅力を楽しむことができる。また、長崎街道沿いの松原宿にも歴史的な雰囲気の町並みが継承され、500 年の伝統のある松原刃物も受

け継がれている。そして、市内の至る所から大村湾の景色を眺めることができ、とりわけ夕日の美しさが印象に残っている。



上：玖島城跡（左）、オオムラザクラ（中）、草場小路武家屋敷通り（右）
下：大村藩お船蔵跡（左）、寺島（中）、旧円融寺庭園（右）



歴史と伝統が息づく松原宿の町並み



大村湾の景観

次は東彼杵町である。以前はハウステンボスや嬉野温泉、焼物の町である波佐見や有田に向かう通過点に過ぎないとされていたようであるが、ここ数年の間に若い人たちが集う小さな店がいくつもできている。筆者が最初に訪問したのが JR 大村線の千綿駅。ここは大村湾に面した駅で、「海に最も近い駅」として海や電車の撮影にやってくる人が後を絶たない。ホームから見える大村湾の絶景、築 90 年以上のノスタルジックな木造駅舎に加え、駅舎内に併設された千綿食堂の美味しいスパイスカレーも魅力である。





JR 千綿駅から見た大村湾（左）、JR 千綿駅と千綿食堂（中）、千綿食堂のスパイスカレー（右）

千綿駅から大村湾に沿って 10 分ほど北へ歩くと、東彼杵町の新たな拠点となりつつある「Sorriso riso（ソリッソリッソ）千綿第三瀬戸米倉庫」が見えてくる。以前は JA の米倉庫だったが、現在は地産のそのぎ茶を購入できる体験型のショップとカフェが併設されている。古い米倉庫をリノベーションした空間はおしゃれで心地よい空間を提供している。すぐ近くには、同様に古い建物をリノベーションしたアンティークショップやパン屋、フランス料理店等があり、エリア全体として魅力ある空間となっている。

千綿食堂を含めてこれらの施設に共通しているのは、I ターン者や U ターン者、地元の若手が「千綿を魅力ある地域にしたい」という想いで「まるごとエリアリノベーション」に取り組んでおり、わずか５年の間に約 20 店舗がオープンし、50 人近くが新規に移住しているとのことである。今後の展開が楽しみなエリアである。





Sorriso riso（ソリッソリッソ）千綿第三瀬戸米倉庫





アンティークショップ（左）、パン屋（中）、それらが立地する周辺環境（右）

以上、大村市と東彼杵町千綿駅周辺の魅力を一部紹介してきたが、大村湾沿岸の地域はそれぞれ歴史、自然、食等の多彩な魅力資源を有しており、広域的エリアで対比することでそれぞれの地域の魅力をより明確にすることができるのではないだろうか。特に、地域の個性が明確な長崎

市と佐世保市の中間に位置する諫早市や大村市、東彼杵町がその魅力をさらに高め、地域内外にPRすることで、大村湾沿岸の地域の一層の広域連携が可能になると思う。筆者は小さなまち旅を通して、「大村湾沿岸の地域は十域十色」というポテンシャルを持っていると感じている。

【多様なテーマから地域づくりのヒントを考える】

筆者は小さなまち旅を実践する中で、様々な魅力資源を発見してきた。地域性が明確な地域もあれば、都市化に埋没して地域の個性がわかりにくくなっている地域もあるが、そのような地域であっても、テーマを持って歩いてみると様々な魅力資源を発見することができる。

①風土、気候、地形等

地域の個性を形成する重要な要素の一つが風土、気候、地形等であり、これらに沿って各地域独自の生活が営まれ、固有の歴史や文化、町並みが形成されてきた。中でも印象に残るのが、2018年１月に訪問した尾道の風景である。尾道市のパンフレットを見ると「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市～ああ、この風景に会いたかったんだ。」と記されている。尾道水道と尾道三山の間の限られた空間に、多くの寺社や家々がひしめき、坂道と路地でつながる景色が「箱庭」に例えられてきており、懐かしい心象風景を思い起こさせてくれる。



尾道を象徴する景観（尾道市）

また、福山市鞆の浦の港町の風景も印象的である。鞆の浦は伝統的建造物群保存地区に選定された時の資料によると「万葉の時代より潮待ちの港として栄えた瀬戸内海の港町」と表現されており、地形的に良好な港の条件を備え、古来より海上交通の要衝として栄えた。現在も雁木、波止、常夜灯、船番所、焚場といった江戸時代の港湾施設がほぼ完全な形で残っている。そして、

街路や海岸線も 300 年前の姿をよく留めており、伝統的な町家や寺社、石垣等の石造物、港湾施設等が一体となって良好に残り、瀬戸内の港町としての歴史的風致をよく伝えている。



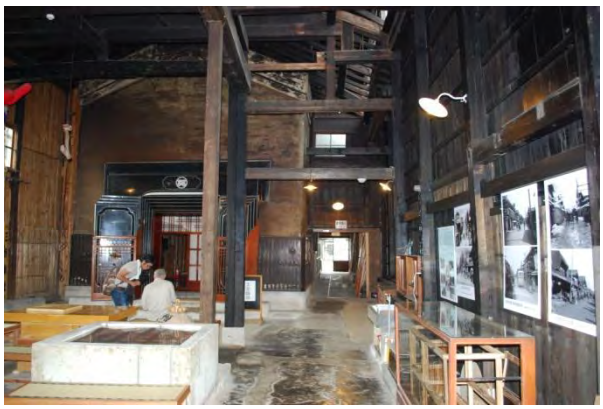
鞆の浦を象徴する景観（福山市）

②町並み景観、集落景観

もう少しブレイクダウンして町並み景観や集落景観という視点で見てみる。前述の風土、気候、地形等が町並み景観や集落景観に大きく影響するが、その中でも特に印象に残るのが、2013 年８月に訪問した横手市増田の町並みである（2017 年度の研究報告に記載）。

増田は江戸末期～昭和初期に、宮城県と秋田県を結ぶ交通の要所として発展し、葉タバコや蚕糸の生産等で商人文化が栄えた。特に明治時代になると、銀行事業や電力事業等の成功により商業活動が加速度的に活発化した。当時の商人たちが、成功の証しとして主屋の奥に蔵を造ったのが、「内蔵」の始まりとされている。内蔵は蔵を豪雪から守るため、全体を「鞘」と呼ばれる上屋建物ですっぽり覆った土蔵であるが、増田の内蔵は主屋の奥に建っており、道路からは見えず、ひっそりと佇んでいるのが特徴である。

町割りは間口が５～７間（９～12.6m）、奥行きが 50～100 間（90～180m）と極端な短冊型となっており、その上に町家建築が建ち並び、伝統的な町並みが形成されている。道路側からは、２階の正面に梁首と呼ばれる梁組を見せているのが特徴で、職人技術の粋を垣間見ることができる。明治前期から戦前にかけて建てられた短冊型の主屋が軒を連ねる景観は、当時の情緒を現在に留めており、主屋・内蔵・外蔵を「トオリ」と呼ばれる土間で結ぶ商家町家の特徴は、この地方独特のものとなっている。

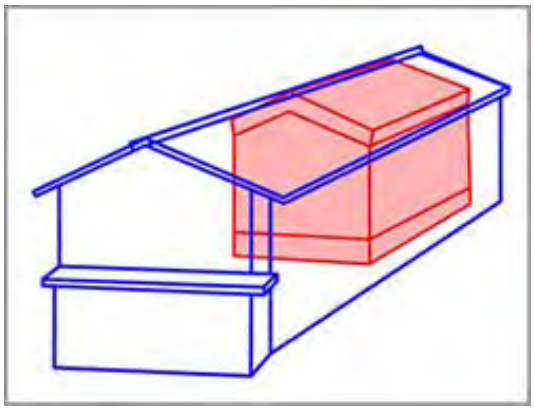




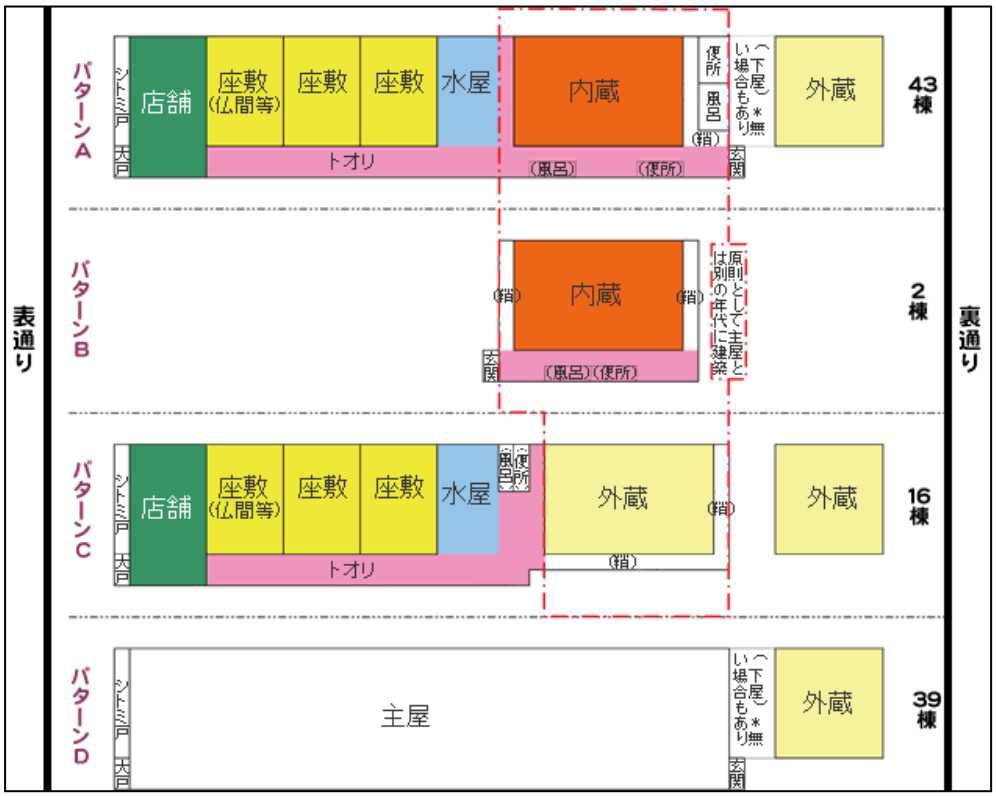
旧石平金物店（現在は増田町の観光案内所兼物産販売所「蔵の駅」）の内部（左）と内蔵（右）



蔵の駅の外観



内蔵の立地イメージ
（横手市 HP「奥ゆかしき商家の町並み ますだ」より引用）



増田の土蔵のパターン（横手市 HP「奥ゆかしき商家の町並み ますだ」より引用）

この他、伝統的な町並みを形成している地域を見ると、それぞれの地域の歴史や生活を反映しているものも見られる。長岡市谷内（やち）では豪雪地帯特有の雁木が続いており、冬季においても地域の生活活動や商業活動が営まれるよう「冬の生活道路」となっている。川越は何回もの大火の末に防火性を考慮して導入された土蔵づくりや重厚な開き窓、堅牢な瓦屋根が町並みの大きな特徴となっている。

八女福島では隣家との空間に半間ほどの屋根を架け、手前と奥で相互に利用しあう「もやい壁」の形式が見られ、細長い敷地を有効利用しているのも特徴である。有田のトンバイ塀は登窯の内壁に使われた耐火レンガの廃材や使い捨ての窯道具、陶片を赤土で固めた塀で、江戸時代から造られている。廃材を利用したリサイクルとしてだけでなく、陶工の技術の漏洩を防ぐ意味もあったとのことである。




長岡市　谷内（やち）の雁木の続く町並み（左）、川越市　川越の土蔵づくりの町並み（右）





八女市　八女福島のもやい壁のある町並み（左、中）、有田町　有田内山地区のトンバイ塀のある町並み（右）

③歴史的建造物

さらにブレイクダウンして歴史的建造物という視点で見てみる。まずは、煉瓦造りの建造物である。煉瓦造りの建造物は近代化とともに日本に導入され、教会堂等の文化財クラスだけでなく、注意深く見てみると、まちなかには幕末から明治の面影である煉瓦造りの建物や塀を発見することができる。なかには外観からは煉瓦造りの建物に見えないものもあったり、こんな場所にどうして煉瓦造りの塀の住宅地があるのかと思わぬ発見をすることもある。煉瓦の積み方が異なっているのも、見ていて楽しいものである。




大分市　大分銀行赤レンガ館（左）、唐津市　旧唐津銀行（右）




長崎市内で見かけた赤煉瓦造りの建物や塀：オランダ坂付近（左）、松森神社付近（右）




熊本市　防火壁の役割を果たしている町家の赤煉瓦の塀（左）、長崎市　煉瓦造りに見えない大浦天主堂（右）



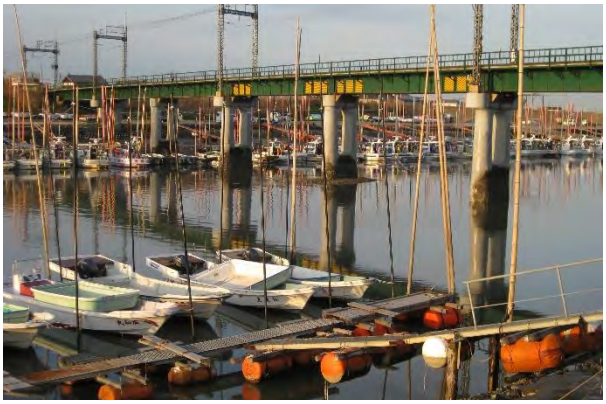


須恵町旅石で見かけた赤煉瓦造りの塀が続く住宅地

また、石橋や鉄橋も地域の魅力資源の一つである。文化財クラスのものもあれば、身近なものもあり、いずれも懐かしい感じを与えてくれる。周辺の漁村景観や河川景観と一体となっているものもあれば、秘かに佇んでいるものもある。筆者はいろいろな場所を旅する中で、石橋の魅力に惹かれ、八代市東陽町種山にある石工の郷を訪ねたこともあるが、その匠の技術が種山から熊本県へ、そして九州各地、全国へと伝承し展開していることを考えると、様々なストーリーがあることがわかる。そうした視点で地域を訪ね歩くことも楽しいのではないだろうか。




長崎市　中島川に架かる眼鏡橋（左）、朝倉市秋月　野鳥川に架かる眼鏡橋（右）




柳川市～みやま市　西鉄中島駅付近の矢部川に架かる鉄橋（左）、熊本市　川尻付近の加勢川に架かる鉄橋（右）




八代市　石工の郷・種山の重見橋（左）、鍛冶屋下橋（右）

④樹木

歴史的資源に乏しい地域でも身近に存在するのが、街路樹やまちなかにある樹木である。美しい並木道を形成しているものもあれば、樹齢数百年で地域のシンボルとなっているものもある。都市開発が進む中で意識的に残されてきた樹木もあれば、被爆で生き残ったものもある。そうした一本一本の樹木には様々なストーリーがある。花の咲く頃や紅葉の時期だけでなく。そうした視点で樹木を見て歩くことも楽しいのではないだろうか。




諫早市　諫早神社のクス群（左）、筑前町　草場川の桜並木（右）




長崎市　山王神社の被爆クスノキ（左）、福岡市　赤坂の JT 跡地のイチョウ（右）




福岡市　筆者の自宅近くの身近な樹木：豊浜の枝垂れ梅（左）、愛宕浜のケヤキ並木（右）

（２）ヒト（人、組織）

【地域のまちづくりに求められる視点、まちづくり人に求められるもの】
- 老若男女それぞれの視点
- ヨソモノ（地域外の人間）の視点
- まちづくり人に求められるのは、「地域への想い」「前向き思考」「包容力」「相手への配慮（リスペクト)」

【地域に根ざしたまちづくり組織】
- 組織の使命（ミッション）
- 地域資源の再認識と掘り起こし
- 地域ブランドの構築（地域らしさ、情報発信、地域の共感）
- ドーパミンの出るまちづくり（チャレンジの連続と自省）
- 巻き込み力

【地域内の各団体の連携による活動の広がり】
- 各団体の垣根を越えた地域全体としての取り組み

【小さなまち旅のすすめ】
- ネット上だけではなく、実際に旅に出て自分の眼で実物を見て、都市や地域、建築を見る感覚を磨く。旅のテーマは地域の風景、町並み、建築、食、特産品など様々である。
- それぞれの地域の空気と背景（歴史、気候、成り立ち等）を知ることで、地域の個性を把握する。
- 旅で得た体験や情報を自分の住む地域に置き換えて考えてみる。

【樹木や花から景観の美しさ、組織のあり方を考える】
- 桜並木やイチョウ、ケヤキの紅葉のグラデーションに見る「多様性の中の統一」「組織運営（多様な個人と組織)」

【地域のまちづくりに求められる視点、まちづくり人に求められるもの】
【地域に根ざしたまちづくり組織】
【地域内の各団体の連携による活動の広がり】

これら３項目については、2017年度の「身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究」の第３章７－（２）（３）に詳しく記載しているので、省略させていただき、残りの２項目について筆者の考えを述べる。

【小さなまち旅のすすめ】

①「空間 時間 旅」の視点

筆者は本研究の「はじめに（研究の目的）」の冒頭に次のように述べており、時間をかけて様々な地域や場所に移動し、様々な空間を体験することで、地域づくりのヒントを吸収している。

『インターネットの発達した現在においては、その地域や場所に行かなくてもいろいろな情報を入手できるが、時間をかけてその地域や場所に行く移動の過程でいろいろなことを想像し、思考を深めることができる。また、実物を見て空間を体験し地域の方々と対話することで、新たな考えが生まれ、地域づくりのヒントを得ることができる。近代建築の教科書と呼ばれる「空間 時

間 建築」（ジークフリード・ギーディオン著）のタイトルを引用するわけではないが、情報化時代の地域づくりにおいてこそ「空間 時間 旅」の視点が求められているのではないだろうか。』

②小さなまち旅

繰り返しになるが、「小さなまち旅」は筆者が熊本地震をきっかけに始めた２つの旅「地域づくりや建築の原点に返る旅」と「熊本の復興の過程を巡る旅」を総称したものとして使っている。その後、「身近なまち旅」を加え現在に至るが、学生時代から実践している「現代建築を巡る旅（1976 学生時代～）」「歴史的建造物と町並みを巡る旅（1980 会社員時代～）」「景観づくりと地域づくりを巡る旅（1986 公務員時代～）」も小さなまち旅の一環として改めて整理している。

前にも述べたが、筆者が小さなまち旅を進める背景には、全国どこに行っても同じような街並みの形成とそれに伴う地域の個性の喪失という強い懸念がある。地域づくりに携わる者は、インターネット上だけでなく、実際に旅に出て自分の眼で実物を見て、都市や地域、建築を見る感覚を磨くことが必要である。それぞれの地域の空気と背景（歴史、気候、成り立ち等）を知ることで、地域の個性を把握できる。第１章の２で紹介したが、旅のテーマは地域の風景、町並み、建築、食、特産品、人や絵画との出会いなど様々である。何か感じ取ることができれば、それで十分なのである。

そうして得た体験や情報については、まずは肯定的にも否定的にも受け入れ、自分の住む地域に置き換えて考えてみることが重要である。そこにはいろいろな地域づくりのヒントが広がっているのである。



筆者の小さなまち旅のテーマは、風景、町並み、建築、身近な空間まで様々である。

【樹木や花から景観の美しさ、組織のあり方を考える】

①桜並木

筆者は桜の花が好きで、春になるといろいろな桜を見に行くようにしている。桜の名所になっている場所もあれば、自宅近くの身近な桜もある。南阿蘇村の一心行の桜のように一本で桜の名所になっているものもあれば、一本一本の樹木の存在感は薄くても、並木になれば存在感を放つものもある。筆者は並木を構成する桜から美しさだけでなく、組織のあり方を感じている。

例えは、熊本市健軍の自衛隊通りの桜や朝倉市秋月の杉の馬場の桜は、一本一本の形は決して綺麗ではないが、よく見ると、人の人生と同じようにこれまでの桜の歴史を感じ取ることができる。それは、人の生き様と同様に桜の生き様である。

また、一本一本の桜の幹や枝の形は様々であるが、それが並木となると美しい景観を形成する。それは、「多様性の中の統一」という表現がピッタリであり、異なる性格や考え方等を持つ多様な個人により構成される人間社会のあり方をも考えさせるものだと感じている。これは職場や学校、地域団体等の様々な組織において、応用できるのではないだろうか。



熊本市 健軍の自衛隊通りの桜並木



朝倉市 秋月の杉の馬場の桜並木

②イチョウ、ケヤキの紅葉

紅葉の名所だけでなく、毎年 11 月になると、筆者の自宅近くのイチョウ並木やケヤキ並木も紅葉し、紅葉の具合により様々な色のグラデーションを感じることができる。これらの紅葉からも「多様性の中の統一」「組織運営（多様な個人と組織）」を感じることができるのである。




福岡市　筆者の自宅近くのイチョウと桜の紅葉のグラデーション（愛宕浜）




福岡市　筆者の自宅近くのケヤキの紅葉のグラデーション（愛宕浜）

③花

「一人一花運動」という言葉は、「市民主体の花のまちづくり」の一環として福岡市が 2018 年から推進しているので、福岡市民にとってはよく耳にする言葉である。筆者は 2018 年 12 月に大分市アートプラザを訪問した際、障がいのある方々が制作した作品の展示会を見る機会があり、その時の「ひとり一人の花を咲かせよう」という言葉が大変印象に残っている。それは、異なる環境にあるすべての人々の生き方が尊重される社会の実現を意味している。





大分市　障がいのある方々が制作した作品の展示会（大分市アートプラザ）

花をよく見ると同じ種類の花でも同じものは一つもなく、異なる個が集積して魅力ある花畑や樹木、並木を形成していることがわかる。それは、人間社会の「個と組織」の関係と類似している（異なる個の集積が魅力ある組織を形成する）。「一人一花」は花の世界だけでなく、人間の世界でも当てはまり、組織のあり方を考える上で参考になるのである。そうした視点で花を見て回ることも楽しいものである。

人間社会も身近な自然界から学ぶことがたくさんあるのではないだろうか。桜や紅葉、花の事例は、ほんの一例に過ぎないのであり、参考になる事例は身近に多く存在するのである。




長崎市　紫陽花（左：出島、右：眼鏡橋付近）




福岡市　能古島アイランドパークのコスモス畑

（3）コト（ストーリー）

「コト（ストーリー)」は、前述までの「モノ（地域資源)」を「ヒト（人、組織)」が活用することで成り立つもので、せっかくの素材があっても有効に活用する者がいなければ、宝の持ち腐れとなってしまう。数式として表現するのは難しいが、地域づくりで成果を上げている地域では『モノ（地域資源）×ヒト（人、組織）＝コト（ストーリー)』という感じであろうか。しかし、多くの地域ではポテンシャルを有していながら「モノ」が活かされずに埋もれている地域が多いと筆者は感じている。

筆者の地域づくりのベースにある考え方は『今あるモノを活かすことが大事。新しいモノは要らない。』ということであり、地域にある身近な宝を探求し、しっかり活用していくことにもっと目を向けるべきである。

【各地域のそれぞれの魅力資源を活かしたまちづくり】
- 地域の風土・歴史・文化の尊重
- 各地域の風土・歴史・文化を活かした町並みの維持継承
- 身近な魅力資源を活かしたまちづくり

【場所性や地域固有の材料を活かした建築と地域づくり】
- 場所性（空間特性)、地域に昔から存在する材料へのこだわりが、その場所ならではの建築や地域づくりにつながる。

【まちづくりの課題や段階（ステージ）に対応した取り組み】
- 各段階の地域課題⇒目標設定⇒活動の推進⇒振り返り
  ⇒新たな課題や動向への対応⇒新たな目標設定⇒活動の推進⇒振り返り

  ※この好循環の繰り返し

【広域連携による地域づくり】
- 地域の個性が見えにくくなっている中で、広域的空間の中での対比によって地域の個性を浮き彫りにする（輝かせる)。
- 広域連携により、それぞれの地域の個性をさらに増進させ、地域全体としての魅力も高める。

【点・線・面による地域づくりがもたらす地域のアイデンティティ】
- 魅力ある点（施設、空間等）を増やすことで線（沿道空間等）となり、さらに増やすことで面（個性ある地域）となる。魅力ある点の集積が線となり、面となり、地域全体の魅力を増進させ、地域のアイデンティティとなる。

【各地域のそれぞれの魅力資源を活かしたまちづくり】
【まちづくりの課題や段階（ステージ）に対応した取り組み】

この２項目については、筆者は2017年度の「身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究」の第３章７－（１）（４）に詳しく記載しているので、省略させていただき、残りの３項目について筆者の考えを述べる。主に「モノ×ヒト＝コト」という視点で展開していきたい。

【場所性や地域固有の材料を活かした建築と地域づくり】

筆者は建築に携わる者として、まずは場所性や空間特性にこだわりたい。設計を進める上でいろいろな制約はあるが、この場所でしかできないことは何なのかというこだわりが重要である。場所の持つ特性を読み取り、地域の中でどういう役割が期待できるのか、特に公共性の高い建築については地域課題（回遊性の強化、商店街の活性化等）への対応という大きな視点の中で考えていく必要がある。

例えば、隈研吾氏設計の長岡市のシティホールプラザ アオーレ長岡では、「ナカドマ」と呼ばれる開放感あふれる屋根付き広場が設けられ、地域の新しい核となる複合型の市役所となっている。ナカドマは、日本建築の土間の概念を取り入れ、市民が誰でも気軽に立ち寄ることができ、雨や雪の日でもイベントができる屋根付きの大空間であり、雪国ならではの空間となっている。筆者が訪問した時にも様々なイベントが行われており、多くの市民で賑わいを見せていた。

また、同氏設計となる富岡市役所は、上州富岡駅と富岡製紙場へ向かう経路上にあるという立地を活かして計画されており、分棟型で棟と棟の間を通り抜けできるストリート型の公共建築となっており、回遊性の強化が意図されていると感じた。市役所に隣接する富岡倉庫群では、繭等の保管倉庫から店舗等への改修プロジェクトも進行しており、富岡駅周辺の交流拠点づくりと地域の活性化が図られている。富岡駅～富岡製糸場の回遊性の強化につながっていくと思う。




長岡市 シティホールプラザ アオーレ長岡





富岡市 上州富岡駅（上）と富岡製糸場（下）へ向かう経路上にある立地を活かして計画された富岡市役所（右）




富岡市 改修プロジェクトが進む富岡倉庫群（2019 年1月）。現在は、店舗や世界遺産センター等が入居している。

次に、全国的に画一化した街並み形成が進む中で、各地域固有の気候や地形、風土、文化等から生まれた空間や材料を改めて見直していくことも必要である。その典型的なものがそれぞれの地域の風土に培われた暮らしの産物である民家であろう。

例えば、町並み修景事業の成功例として全国的に知られる長野県小布施町では、修然楼（ゆうぜんろう）周辺町並み修景事業において、江戸時代からの高い文化性を伝承したこの地域固有の建築景観（蚕室や納屋、長屋門等は小布施をはじめ北信濃地域の先人たちの営みの積み重ねを物語っている）を活用する形で行われ、その後に周辺に展開することになるまちづくりのイメージを具体的に提示することになった。



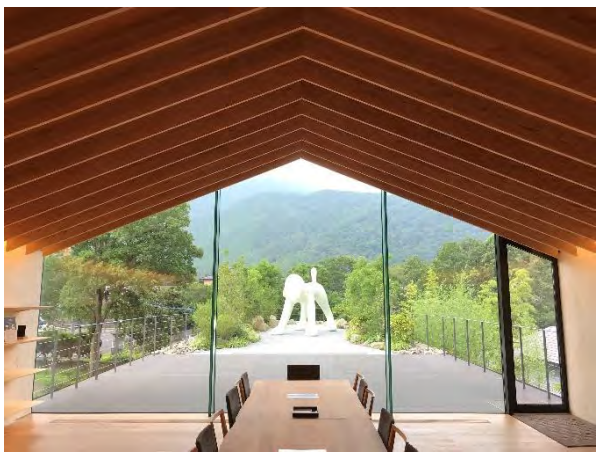

小布施町 修然楼周辺町並み修景事業




小布施町に見られる固有の建築景観

また、隈研吾氏設計の由布市のCOMICO ART MUSEUM YUFUINは、由布院の景観に溶け込みながらも個性と存在感を漂わせている。遠くから見ると漆黒に見える焼杉の外壁は、周囲の景色をくっきりと浮き上がらせて、その価値を引き立てているが、近寄って見ると木の温もりや風情を感じさせる。分節された小さな屋根の連なりは、小さな家々が集まって成り立つ由布院の景観と調和して、一体化しながら個性を漂わせている。



由布市 COMICO ART MUSEUM YUFUIN

まちづくりの規制やルールが有る無しに関わらず、各地域固有の風土から生まれた空間や材料を尊重し、現代の空間の中に活かしていくことが地域特性を活かしたまちづくりにつながっていくのである。

【広域連携による地域づくり】

「広域的な視点から探る地域の魅力」については、「モノ（地域資源）」の項で松浦鉄道沿線や大村湾沿岸の市町について筆者が小さなまち旅で感じた魅力を紹介してきたが、それぞれのエリアで自治体等が中心となって広域連携の取り組みを進めているので、今後の展開に期待したい。

さて、筆者は前述のように福岡都市科学研究所（現(公財)福岡アジア都市研究所）時代の 2001～2002 年度に「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」に携わり、事務局として「魅力ある地域づくりと広域連携」について自ら執筆した（繰り返しになるが、次ページに再掲する）。20 年経った今でもこの考え方は全く変わらない。コロナ禍の中では、筆者にとってはこ

の考え方がさらに強くなり、身近な地域づくりを進める上で「地域の個性が見えにくくなっている中で、広域的空間の中での対比によって地域の個性を浮き彫りにする（輝かせる）こと」や「広域連携により、それぞれの地域の個性をさらに増進させ、地域全体としての魅力も高めること」の重要性を痛感している。これは、県域や市町村域を超える広いエリアでの連携だけでなく、隣接する区や校区といった狭いエリアでの連携も該当する。

「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」の中での
「事例にみる広域連携の意義と効果」より、筆者の地域づくりの考え方を示すものを抜粋

【魅力ある地域づくりと広域連携】

■広域連携は個性ある地域づくりの延長である。

・広域連携のベースにあるのは、それぞれの地域の資源（自然、歴史・文化、産業、人材等）を活かした地域づくりであり、広域連携は個性ある地域づくりの延長である。

■経済や人口規模の大小だけが都市の豊かさの指標ではない。真の豊かさとは、魅力ある地域づくりがもたらす人々の地域に対する誇りである。

・人を惹きつけるのは、都市規模（経済や人口規模）の大小ではなく、地域固有の資源を活かしたまちづくりである。今後は、「心の豊かさ」「文化の豊かさ」「環境の豊かさ」「景観の豊かさ」「人との関係の豊かさ」等が都市の豊かさの重要な指標となる。

・都市の豊かさとは、「真に魅力ある地域づくりがもたらす、人々の地域に対する誇り」である。

■交流人口（交流のまちづくり、観光のまちづくり）による地域の活性化

・人口減少社会において定住人口を増やすことは難しく、地域外からの来訪者（交流人口）をいかに増やしていくかが地域活性化の大きな課題である。そこでは、経済効果だけでなく、情報・文化の交流効果が求められている。

・今後は、従来の物見遊山的観光やテーマパーク型観光ではなく、個性豊かな町並みと地域づくりを体験する旅や、農山村の魅力（自然、食、人等）を体験するグリーンツーリズム等、地域社会（住民）、地域の資源、来訪者の三者がうまく調和した「観光まちづくり」という視点が重要になる。

・中心市街地を活性化するには、商業だけの魅力では限界があり、地域の歴史・文化資源のまちづくりへの活用、情報・文化の交流、そして楽しく歩いてもらえる歩行者優先の道路づくり等の視点を取り入れた「観光まちづくり」への転換が求められている。

■地域づくりの情報発信

・地域づくりで成功している市町村に共通することは、地域づくりや情報発信、交流の拠点となる組織や施設がしっかりしている。

・面白い地域づくりを展開している市町村には、地域の歴史・文化、特産品、まちづくり等の情報をわかりやすく発信する読み物としての「地域づくり読本」がある。地域づくり読本は、訪れる人が地域を知るうえで大変役に立つ編集・構成になっていると同時に、地域の人々が地域の資源を再確認することで、地域に対する誇りや愛着を創出するという効果もある。

ここで筆者が魅力的だと感じている長野県小布施町を中心とした北信濃地域の広域連携の取り組みを紹介する。なお、小布施町の地域づくりについては、2017 年度の「身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究」の第２章５－(１)に詳しく記載している。

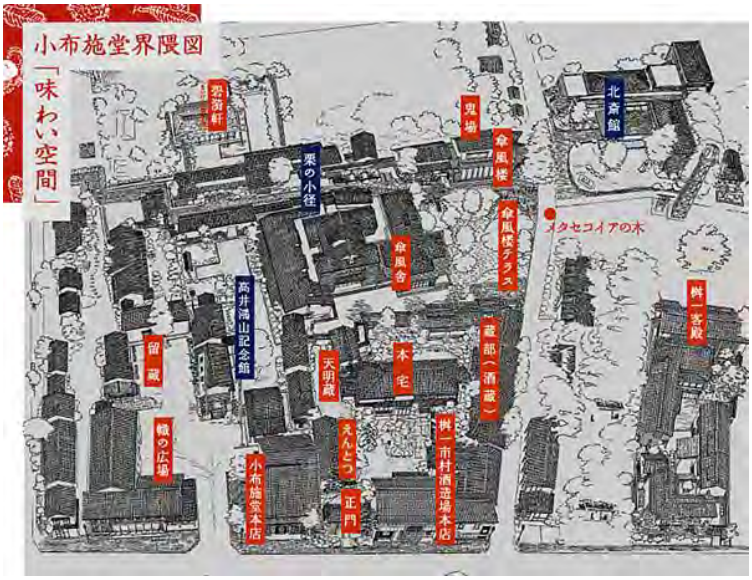
北斎館に端を発した小布施の地域づくり＆北信濃地域への展開

（「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」より筆者執筆部分を時点修正）

小布施の地域づくりは、「こだわり」「もてなし」「歴史・文化」「地域への愛着・誇り」「暮らしやすさ」「地域資源の発掘・活用」「身の丈に合ったまちづくり」「地域づくりは人づくり」等の成功のための多くのキーワードを提供している。そこには、時代の波に左右されないまさしく本物志向のまちづくりが展開されている。

小布施のまちづくりを象徴するものとして、「外はみんなのもの、内は自分のもの」という言葉があり、小布施人が町並み修景を語る時によく使う言葉である。小布施の場合は、まず生活する人々の快適な暮らしを優先し、その上で町並みに調和した外観づくりを工夫している。これは、「住む人が快適に思わない町は、来訪者にとってもきっと居心地の悪い場所に違いない」という小布施流のまちづくりの理念が貫かれているからであり、日々の魅力的な生活文化や暮らしぶり＝「美日常」を大切にしたまちづくりを強く志向する姿勢がうかがえる。観光地化を目指したまちづくりとは対極的に、きちんと足元を見つめた本物志向のまちづくりが長期的に持続する秘訣といえるのではないだろうか。

1965 年代（昭和 40 年代）はりんごを中心とする農業と栗菓子産業の他はこれといった産業もない、ありふれた町であったが、「葛飾北斎」という小布施ゆかりの人物をきっかけに（北斎館の開館）、「町並み修景」や「花のまちづくり」を進めるなど、暮らしやすく面白いまちづくりを展開し、多くの人が訪れる町になった。





小布施堂界隈町並み修景鳥観図（左）と小布施の魅力やまちづくりを紹介した「遊学する小布施」（右）

こうした小布施のまちづくりは、町内にとどまらず、須坂市、長野市（善光寺周辺、松代等）へも波及し、「歴史的な環境を活かしたまちづくり」「文化・芸術を中心にしたまちづくり」をベースに「地域づくり」「町並み」「食文化」「情報発信・交流拠点」等、テーマ性を持った広域ツーリズムへと展開を見せている。次ページにその一例を紹介する。

北信濃広域ツーリズムメニューの一例

■見る（個性豊かな町並みと地域づくりを体験する）

小布施町に隣接する須坂市は、江戸時代は須坂藩の城下町として、また、明治から昭和にかけては製糸の町として繁栄してきた。現在も、まちの随所に当時の面影を残す土蔵造りや大壁造りの商家や民家等が見られ、それらを活かした町並み修景事業を展開している。

長野市の善光寺は、年間 600 万人もの人が訪れる我が国有数の観光地であるが、JR 長野駅から善光寺に至る約２㎞の中央通りには、蕎麦、おやき、味噌、酒饅頭等を扱う老舗の商店が軒を連ねており、歴史的な雰囲気を感じさせる建築物も数多く残っている。これらの中には、店の一部を改修してガラス博物館、絵画工芸博物館、消防博物館等の「まちかどミニ博物館」として公開しているものもあり、善光寺七福神巡りや長野県信濃美術館・東山魁夷館等とあわせて楽しむことができる。

また、長野市南部にある城下町・松代は、1622 年（元和８年）に徳川幕府の命により、真田信之が上田城から移封になって以降、明治維新に至るまで真田氏 10 代、約 250 年間にわたって質実剛健な武家文化を育ててきた。ここには、往時の風情を残す武家屋敷、真田氏ゆかりの由緒ある寺院や庭園等が点在し、江戸の昔さながらの魅力的な歴史散策を楽しめる。信州松代まるごと博物館構想（2001 年策定）に基づき、「城下町らしさを演出する町並みの形成」「歴史と文化を活かした観光商業の振興」「来訪者を迎え入れる“もてなしの心”の醸成」「人にやさしい交通環境の整備」を目標に各種の事業が展開されている。





須坂市 須坂の町並み（左）、長野市 中央通りの町並み（右）





長野市 松代の町並み

■学ぶ（地域文化に触れる）

これらの四つの地域（小布施町、須坂市、長野市善光寺周辺、長野市松代）には、文化・芸術を学べるアーティスティックな施設が大変充実している。各地域とも多彩な文化人を輩出しており、そうしたゆかりの人物に焦点を当てた施設が多いのが特徴である。小布施には「北斎館」「高井鴻山記念館」「おぶせミュージアム・中島千波館」、須坂には「須坂版画美術館」「須坂クラシック美術館」、善光寺周辺には「長野県信濃美術館・東山魁夷館」、松代には「池田満寿夫美術館」、また、少し須坂寄りになるが「北野美術館」等がある。小布施の北斎館に端を発した「文化・芸術を中心にしたまちづくり」は、文化地帯として次第に広がっている。





小布施町　北斎館（左）と高井鴻山記念館（右）

■味わう（地域の食文化を味わう）

「見る」「学ぶ」ときたら、次は「味わう」である。恵まれた自然環境の中で、いずれの地域も豊かな食文化を育んできており、伝統的な郷土食も継承されている。小布施では特産品の栗を使った「栗おこわ」や「栗菓子」、須坂では「紫おこわ（紫米と呼ばれる古代米を使っている）」、長野では「善光寺の精進料理」や「松代の長芋料理」、そして北信濃に共通するものとして「蕎麦」「おやき」等が代表的な料理として挙げられる。また、特産品のりんごやぶどうを使った「ジュース」「ワイン」が美味しいのはいうまでもない。日本酒も美味しく、小布施の「桝一市村酒造場」や長野の「西之門よしのや」、須坂の「遠藤酒造場」等は、江戸時代からの伝統を誇っている。





小布施町　小布施堂の栗菓子（左・中、小布施堂 HP より）



小布施町　桝一市村酒造場の日本酒（右、信州小布施観光情報 HP より）

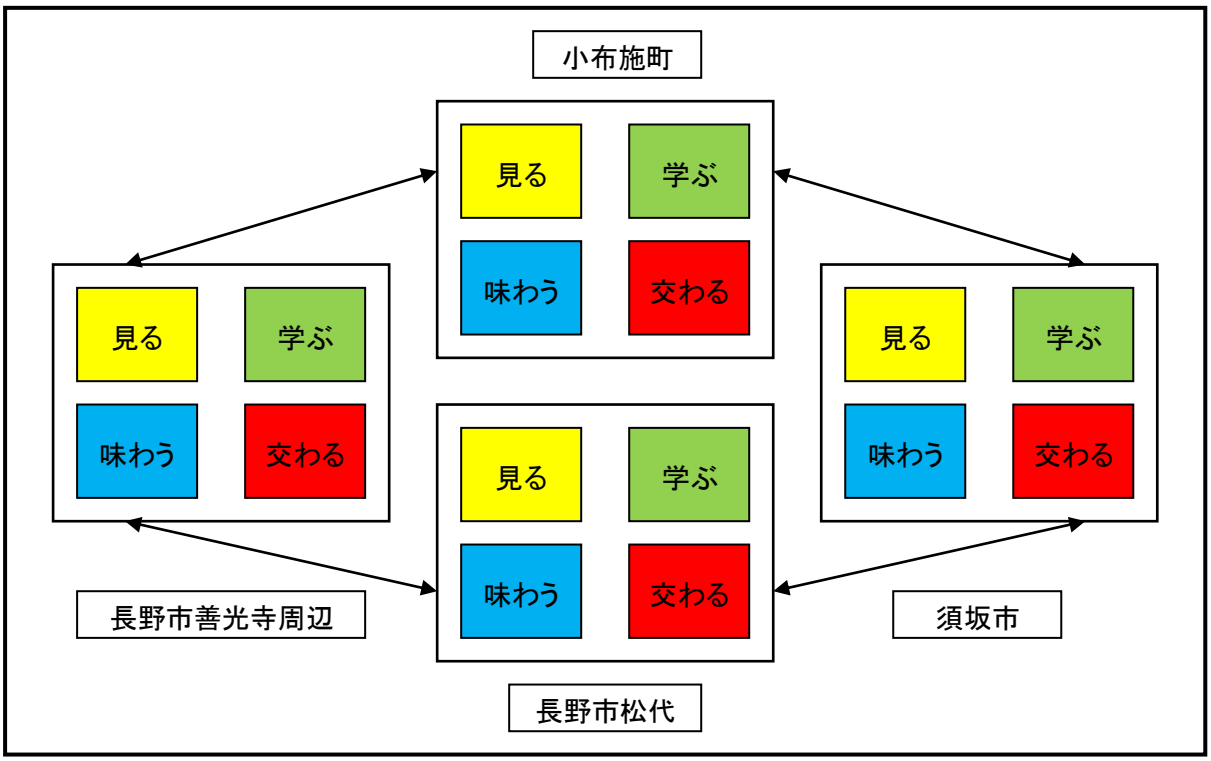
■交わる（地域と交流する）

最後は「交わる」である。それぞれの地域に着いたら、まずはまちづくりの情報発信拠点や交流拠点となっている施設を訪ねることを勧める。小布施では「ア・ラ・小布施」、須坂では「信州須坂町並みの会」、松代では「NPO 法人夢空間松代のまちと心を育てる会」等がその役割を担っている。また、宿泊施設については、長野市やその周辺の由緒ある温泉地（野沢温泉、湯田中渋温泉郷、信州温泉郷等）に収容人数の多い大規模なホテルや旅館は数多くあるが、地域の方々と交流するには、小布施の「ゲストハウス小布施」のように情報や文化の交流が期待できる規模の小さな心のこもったプチ・ホテルや民宿がふさわしいと思う。





小布施町 ア･ラ･小布施（左）、長野市松代 NPO 法人夢空間松代のまちと心を育てる会の会員による案内（右）

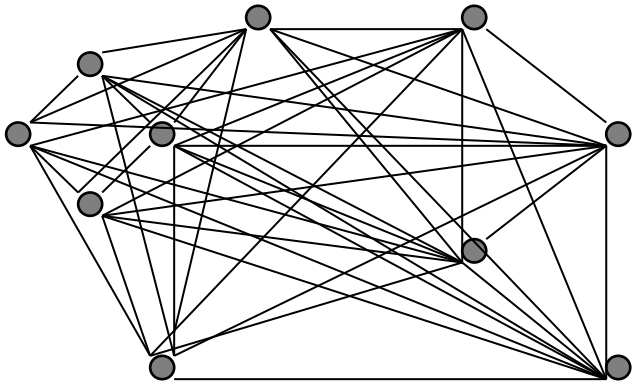


北信濃地域の連携イメージ
地域間連携やテーマ型連携等、市民や来訪者のニーズに対応した多彩な連携が可能である。

北信濃の各地域は現在では、それぞれ明確な個性を有しており、広域的空間の中での対比によって地域の個性がより浮き彫りになっている。また、広域的なエリアで連携することにより、それぞれの地域の個性をさらに増進させ、北信濃地域全体としての魅力も高めることに成功している好事例でないかと思う。小布施の北斎館から始まった地域づくりは、北信濃地域全体へと広がりを見せており、アイデンティティが確立されている。

【点・線・面による地域づくりがもたらす地域のアイデンティティ】

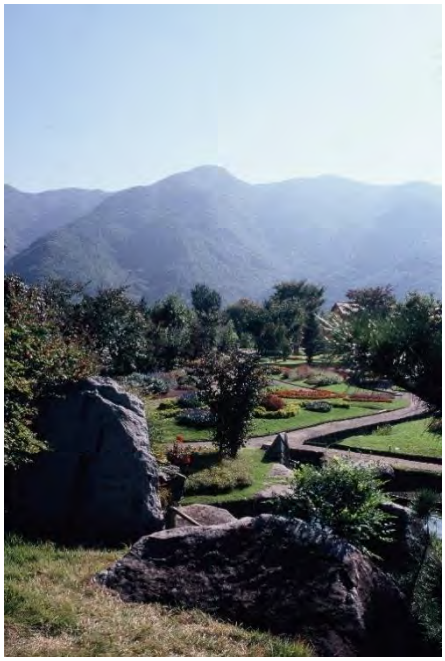
魅力ある施設や空間は単体（点）として各地に存在するが、それを結ぶ魅力ある施設や空間が増えれば、線になる可能性がある。線は商店街や道路、路地、河川や鉄道等が考えられる。さらに魅力ある施設や空間が増えれば、線がどんどん増えていくことになり、面となっていくのである。こうしてできた面が個性ある地域であり、地域のアイデンティティとなっていくのである。



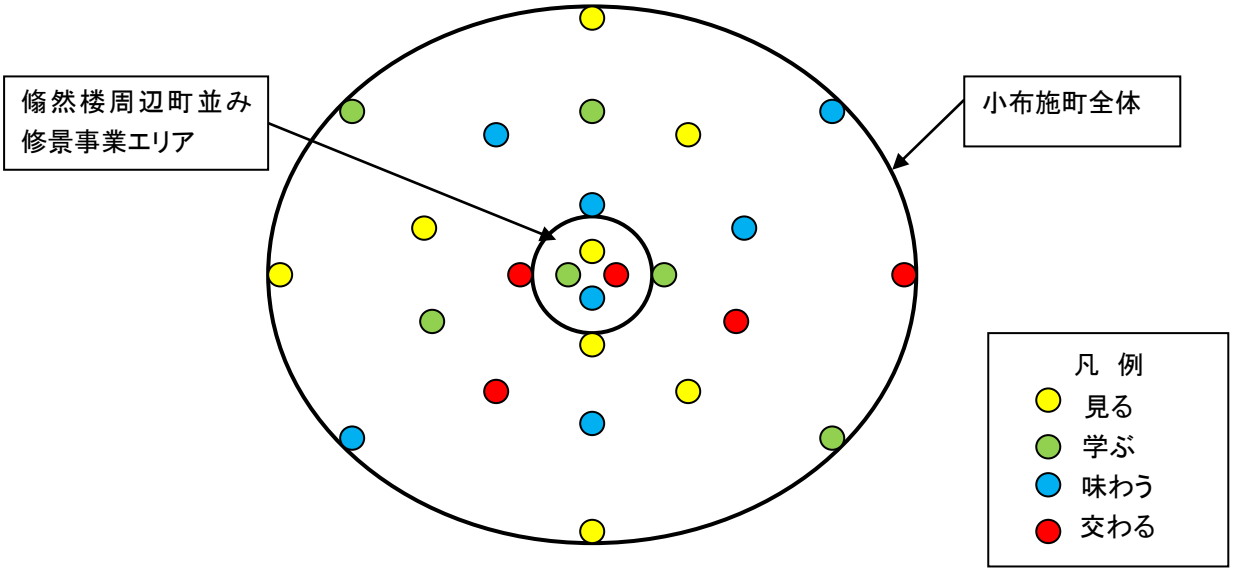
筆者が考える地域づくりの点・線・面の展開イメージ

具体的な事例としては、先に紹介した小布施町が考えられる。当初はまちの中心部の約1.6haの範囲がまちづくりの対象であったが（修然楼（ゆうぜんろう）周辺町並み修景事業）、元々あった自然資源や歴史資源、文化資源、食資源等を連携させながら有効に活用することで、魅力あるまちづくりが次第に町内全体に広がり、半径約２㎞全体で地域固有の資源を活かした面白い地域づくりが展開されている。りんごや栗といった特産品以外に、何もない町から出発した小布施町であるが、「北斎」という小布施ゆかりの人物をきっかけに「町並み修景」「花のまちづくり」を進めるなど、暮らしやすく面白いまちづくりを展開し、多くの人が訪れる町になった。

小布施の場合は、修然楼周辺の小さな面が大きな点となり、周辺の魅力資源と複数の線としてつながり、それが次第に大きな面となり、地域全体の魅力を増進させ、地域のアイデンティティとなった好事例である。



小布施町 フローラルガーデンおぶせから雁田山を望む



小布施町の地域づくりの点・線・面の展開イメージ

以下に筆者がこれまでに撮影した小布施町の多彩な魅力資源の一部を紹介する（これまでに掲載したものは除く）。



脩然楼周辺町並み修景事業で生まれたオープンスペース



賑わいのあるまちの中心部



歴史のある寺院





信仰のある風景





松尾芭蕉の句碑







店舗の暖簾やサイン





まちのそこかしこで展開される花のまちづくり



花のまちづくりの拠点であるフローラルガーデンおぶせ



小布施のおもてなしのまちづくりの象徴でもあるオープンガーデン。約 130 箇所の個人庭園が公開されている。

【参考】小布施町のまちづくりの経緯（1976 年の北斎館開館～2000 年頃）

	地域住民や団体の動き	行政の動き	
		景観形成を中心とした動き	その他関連事項（花のまちづくり等）
北斎館開館	1976 来訪者の増加 ← ↓ 地域に対する住民の誇りの創出	1965 頃 人口過疎化問題→長野市のベッドタウン化の動き ↓ 1970 頃 北斎に着目、北斎館建設へ 1976 北斎館開館	
町並み修景事業と波及効果	1982 翁然楼周辺の町並み ← 整備について提案。 修景を柱とするまちづくり 計画策定（～1984） ↓	1981 第二次総合計画策定。 北斎館・翁然楼周辺地区を「歴史文化ゾーン」に位置付ける。 1982 高井鴻山隠宅「翁然楼」を譲り受け、記念館建設へ 1983 高井鴻山記念館開館	1980 28 自治会に「町を美しくする事業推進委員会」を結成。花のまちづくり始まる。
	1984 翁然楼周辺町並み修景事業（～1987） 以降、1992 年までレストラン等の整備が行われ、現在に至る。		
	↓ 住民のまちづくりへの参加意識の高揚 ↓ 景観形成活動の展開 修景事業の周辺への展開 ↓ 1991 小布施景観研究会発足	1986 総合計画後期基本計画策定 環境デザイン協力基準の骨子作成 ← うるおいのあるまちづくり優良公共団体として「自治大臣賞」受賞 1988 地域住宅計画（HOPE 計画）策定 環境デザイン協力基準の具体化 1989 住まいづくり相談所の開設 1990 うるおいのある美しいまちづくり条例制定。まちづくり貢献者表彰制度や助成制度を盛り込む。 1991 第三次総合計画策定 1992 住まいづくりマニュアル作成 広告物設置マニュアル作成	1989 ヨーロッパ花のまちづくり町民海外研修開始（～1992） 1992 フローラルガーデンおぶせ開設
新たな展開へ	1993 （株）ア・ラ・小布施（第3セクター）設立		
	↓ 1995 栗どっこ市始まる。 （ア・ラ・小布施） 1997 ゲストハウス小布施開館 （ア・ラ・小布施）	1994 「都市景観 100 選建設大臣賞」受賞 1997 あかりづくりマニュアル作成 2001 第四次総合計画策定	1994 花のあるまちづくりコンクール「農林水産大臣賞最優秀賞」受賞 1996 シャトルバス「おぶせ浪漫号」運行開始 1997 おぶせフラワーセンター開設 1998 「緑化推進功労内閣総理大臣賞」受賞 第3回国際北斎会議を小布施町で開催 中学生ヨーロッパまちづくり視察研修開始 2000 小布施オープンガーデン開設 小布施国際音楽祭開始

（小布施町提供の資料、パンフレット等をもとに筆者作成）

３　熊本の復興の過程を巡る旅から得たモノ・ヒト・コト

【復興のシンボル熊本城：前向き思考、縁、人】

筆者は熊本地震後の熊本の現状と復興の過程をしっかり目に焼き付けておくため、熊本城、新町・古町、阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村、益城町等を定期的に訪問している。

この中でも特に訪問回数が多いのが熊本城である。筆者が熊本地震後に最初に訪問したのが地震から２ヶ月後の 2016 年６月 18 日。お城全体が甚大な被害を受けたが、その中でも強く印象に残っているのが「飯田丸五階櫓の一本足の石垣」と「戌亥櫓の一本足の石垣」である。二つの櫓とも周囲の石垣が大きく崩れ、今にも崩れ落ちそうな状態でコーナーの石垣一本で辛うじて櫓を支えているだけであるが、この懸命な姿を見て多くの人々が感動し、勇気をもらったことだろう（奇跡の一本石垣で知られる飯田丸五階櫓については櫓倒壊防止のため、崩落石材回収工事を経て櫓を移設）。




熊本城 飯田丸五階櫓（左）、戌亥櫓（右）

その後も進捗の節目や特別公開の時期であったり、桜や紅葉の時期であったりと 2016 年６月～2021 年３月までの訪問回数は 25 回に及ぶ。復興の状況は新聞やテレビでよく報道されており、筆者もできるだけそのタイミングで見に行くようにしている。恒例になっているのが、桜の満開の時期の訪問であり地震前の 2015 年から続けている（残念ながら 2020 年はコロナ禍の影響で自粛）。石垣の被害は甚大なものであるが、それでも石垣と桜の美しさは見事であり、多くの市民や観光客が訪れ、賑わいを見せている。どんなに傷ついていても熊本城は市民にとって常に熊本のシンボルであり、誇りなのである。




桜が満開の頃の熊本城

特筆すべきことは、熊本市が約 20 年にわたる復興の過程を市民の目に見えるようにしていることである。進捗状況を定期的にマスコミに公開することで新聞やテレビで報道され、県内外から多くの人々が訪れている。特別公開も段階的に行われ（これまで第１弾～第２弾）、熊本市の職員、ボランティアの方々、警備の方々が精一杯のおもてなしをしてくれる。ホームページや現地でのガイダンスも充実しており、進捗の過程がよくわかるようになっている。「熊本地震というピンチ」を「復興の過程を市民に見ていただくチャンス」と捉えた前向き思考の考え方は素晴らしいと思う。





第１弾特別公開の様子（2019年10月）





第２弾特別公開の様子（2020年６月）

2021 年４月 26 日からは第３弾特別公開が予定されており、震災から５年の大きな節目に完全復旧した天守閣の内部も見学することができる。筆者も震災復興のシンボルである天守閣の公開をとても楽しみにしている。唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業と同時にスタートした筆者の「熊本の復興の過程を巡る旅」も一つの節目を迎えるが、今後も熊本城の復興の歩みと自分自身を重ね合わせながら定期的に訪問していきたい。



第３弾特別公開に向けて復興工事が進められている天守閣（2020 年 11 月）

また、熊本城を 25 回も訪れているといろいろな光景に出会う。熊本地震から 1 年程経った 2017 年 5 月の訪問時には、城内の加藤神社で復興工事の様子をバックに結婚式の記念撮影が行われていたが、新郎新婦も今後の人生を熊本城とともに歩んでいくのだと思い、筆者もカメラのシャッターを切っていた。今でも印象に残る光景である。

2018 年 4 月の「天守閣の鯱設置イベント」の際には、唐津街道姪浜まちづくり協議会活動時代に取材や記事掲載等で大変お世話になった西日本新聞社の濱口妙華記者にも再会し、久し振りの会話を楽しむことができた。濱口記者は当時、益城町を担当されており、復興の状況も聞くことができた。姪浜を離れた二人が熊本城で思いがけない再会を果たすのも、筆者の姪浜でのまちづくり活動がもたらした縁なのであろうか。「縁を大事にする」ことも小さなまち旅で改めて学んだことである。





天守閣再建に向けて一部解体工事が始められた熊本城をバックに結婚式の記念撮影（左、2017 年5月）
姪浜のまちづくり活動でお世話になった新聞記者と再会した天守閣の鯱設置イベント（右、2018 年4月）

【町家の再生：大地震を乗り越え、脈々と受け継がれる文化都市・熊本】

2017 年 5 月 26 日の朝日新聞によると、熊本都心部の新町・古町では、地震前は 343 棟の町家があったが、そのうち 282 棟が損壊した。熊本地震後に筆者が最初に新町・古町を訪問したのが 2016 年 12 月。その時には既に解体が進み更地が目立っていたが、その一方、改修に着手したものもあれば、傾いたり、屋根や壁が剥がれ落ちたりしたままのものもあった。解体するのか残して改修するのかという選択を迫られているものも多かったようだ。難しい判断であったと推測できる。





熊本地震から8ヶ月後の熊本市新町・古町の町家。既に改修が始まっていた。（2016 年 12 月）

それから現在に至るまで、新町・古町地区の町家の復興の過程を見てきたが、解体され高層のマンションやホテルに建て替わったものもあれば、駐車場として利用されているものもある。その一方、行政や財団の財政的支援を得ながら、NPO や市民等の粘り強い取り組みにより、改修されたものもある。改修を終えた町家の所有者と話をする機会もあったが、先代から受け継いだ家や商売を何とか次の世代に引き渡したいという想いと地元熊本への愛着・誇りを強く感じた。

また、筆者が熊本大学に入学する前から熊本大学の木島安史先生や建築評論家の長谷川堯氏らが中心となって熊本の歴史的建造物の保存に取り組んでこられたが、新町・古町地区の復興にあたり熊本大学時代の先生方や先輩、同級生等が様々な場面で活躍する姿も見て、「文化都市・熊本」の歴史は脈々と受け継がれていると感じた。筆者はそうした方々の活躍を同窓生として大変誇りに思っている。




熊本地震を乗り越え、見事に蘇った新町の町家






熊本地震を乗り越え、見事に蘇った古町の町家

【阿蘇：前向き思考、地域一丸で取り組む復興、鉄道でつながる地域】

筆者は阿蘇神社や阿蘇大橋、南阿蘇村、益城町等にもできるだけ出かけ、復興の進捗状況や市民、NPO 等の活動を見てきた。南阿蘇村の一心行の桜は地震前と同じように咲き誇り、黄色の菜の花や青い空とのコントラストが鮮やかであり、多くの来訪者で賑わっていた。落ちない石で有名な免の石は熊本地震で残念ながら落ちたが、地元の方々がそれを逆手に取り、石が落ちた後の空洞の姿を招き猫に例え PR していた。これこそ「ピンチをチャンスに」という前向き思考の考え方であろう。

阿蘇神社は２度の地震で重要文化財である楼門が倒壊するなど神社内の施設が大きな被害を受けた。楼門の両サイドにある還御門と神幸門は 2018 年度に部分解体修理が完了し、倒壊した拝殿及び翼廊は 2021 年６月の完了を目標に再建工事が進められている。楼門は 2018 年度までに解体格納工事が完了し、2023 年度の完了を目指して復旧工事が進められている。2020 年８月に訪問した時には仮囲いに楼門の写真がプリントされており、関係者の粋な計らいを感じた。

南阿蘇村の黒川地区には九州東海大学の学生が多く暮らしていたが、熊本地震により多くのアパートや住宅が倒壊し、解体・更地化が進み、町並みだけでなく地域コミュニティが大きく変貌した。筆者は 2019 年４月に開催された復興イベント「南阿蘇・黒川ウォーク」に参加し、地域の方々や東海大学の学生と交流する中で、黒川地区の震災から３年の現状と復興への歩みを知ることができ、大変有意義な一日となった。黒川地区は阿蘇大橋の崩落現場も目の当たりにでき、震災の歴史を後世に伝えることのできる貴重な場所である。地域の方々の熱い想いで地域が再生していくことを願ってやまない。



南阿蘇村 一心行の桜





南阿蘇村 落石前の免の石（左）、落成後の免の石（右）



阿蘇市 阿蘇神社の楼門では解体格納工事を経て、2023 年度の完了を目指して復旧工事が進められている（仮囲いに楼門の写真がプリントされている）。



南阿蘇村 黒川地区の復興イベントへの参加

また、熊本地震では鉄道も甚大な被害を受け、地域の方々の生活にも多大な影響を与えた。南阿蘇鉄道（立野～高森間 17.7km）は熊本地震から３ヶ月後の 2016 年７月に一部区間（中松～高森間 7.1km）で開通しており、筆者は 2019 年 11 月と 2020 年５月に乗車した。職員だけでなく沿線の住民の皆さんが地域に誇りを持っていることをいろいろな場面で感じることができた。なお、残りの区間（立野～中松間 10.6km）は 2023 年夏の全線開通を目標に整備が進められている。

JR 豊肥本線は熊本地震で肥後大津～立野～阿蘇駅間（27.3km）で不通になっていたが、2020 年８月８日に全線復旧。筆者も復旧から８日後の８月 16 日に乗車し（阿蘇～立野往復）、久し振りに車窓からの風景と立野駅でのスイッチバックを楽しんだ。コロナ禍の中での全線復旧となったが、沿線の方々の喜びで溢れていた。




南阿蘇村　南阿蘇鉄道への乗車（左）、沿線の方々の歓迎（右）




南阿蘇村～阿蘇市　JR豊肥本線（立野～阿蘇駅間）への乗車（左）、車窓からの風景（右）

補足になるが、筆者は 2019 年４月に南阿蘇村黒川地区で開催された復興イベント「南阿蘇・黒川ウォーク」に参加する朝、建築評論家の長谷川堯氏の訃報を新聞で目にした。長谷川氏は前に紹介したとおり、1970 年代はじめに熊本大学の木島安史先生らと熊本の歴史的建造物の保存に取り組まれ、「文化都市・熊本」の原点を創ってこられた先生である。筆者は当日、阿蘇にある木島家の別荘「孤風院」を訪ね、1992 年に亡くなられた木島先生に長谷川氏の訃報を伝えた。熊本地震を乗り越え、熊本の歴史的建造物が受け継がれていくベースを創った２人の先生のご冥福を改めてお祈り申し上げるとともに、感謝の気持ちを伝えたい。

また、2021 年１月４日に放送された NHK の番組「ファミリーヒストリー」では、大河ドラマ

「麒麟がくる」の主人公・明智光秀を演じている長谷川博己氏（長谷川堯氏の長男）が特集されており、長谷川家の歴史とともに長谷川堯氏の知られざる素顔やエピソードが紹介され、感慨深いものがあった。

【一つひとつのストーリーの積み重ね、人と人との出会いやつながり】

「熊本の復興の過程を巡る旅」を進める中で、2017 年度の研究で紹介させていただいた熊本市上之裏通りの「トタン屋根のケーキ屋 ア・ラモート」の店主・新本高志さんを熊本城やその周辺で何度も見かけた。新本さんは 30 年以上自転車のペダルをこいで、丹精込めて作られたパウンドケーキだけでなく、地域の方々に元気をお届けしている。熊本市内だけでなく、益城町や阿蘇、八代、天草、そして福岡県内にも配達することもあるそうだ。

夢の実現に向けて頑張っている姿や、人と人との出会いやつながり、笑顔を大切にされている新本さんを町で見かけたり、お店で話したりする時に筆者はいつも元気とエネルギーをもらっている。新本さんとの出会いや彼から学んだ「一つひとつのストーリーの積み重ね」や「人と人とのつながりを大切にした生き方」を今後も実践していきたいと考えている。





左：「トタン屋根のケーキ屋 ア・ラモート」の店主・新本高志さん（右）と筆者（左）
右：店内の様子

また、オオクワガタが縁で筆者が 2000 年から毎年のように訪問している南阿蘇村のペンション「ふらいんぐジープ」は 2016 年の熊本地震で被害を受けたが、約３ヶ月後に営業を再開。筆者も同年８月に訪れ再会を喜び合った。熊本地震を乗り越えてのオーナー夫妻の前向きな考え方は、筆者にも大変参考になり、「オオクワガタから始まる縁」を「熊本地震からの復興へと向かう縁」に変えて、今後もペンションのオーナー夫妻との交流を深めていきたいと考えている。



ペンション「ふらいんぐジープ」のオーナー・酒井清行さんと室内の様子

このように熊本の復興の過程を巡る旅は、筆者にとっては人との出会いの旅であり、感動の旅である。筆者は、今後も復興の過程を見に定期的に熊本を訪問し、地域の方々と対話・交流することを楽しみにしていきたい。これが筆者のできる熊本復興への継続的な支援である。




復旧が進み 2021 年4月 26 日の特別公開第3弾開始(天守閣内部公開)を待つ熊本城(左)。
長塀は 2021 年1月末に復旧工事が完了し、城内にある被災した 13 棟の国重要文化財の復旧第一号となった(右)。




2023 年度の完了を目指して復旧工事が進められている阿蘇神社の楼門(左)。
拝殿は 2021 年6月の完了を目指して再建工事が進められている(右)。




2021 年3月7日に開通した新阿蘇大橋。旧阿蘇大橋から約 600m下流に建設された(左)。
旧阿蘇大橋は 2016 年4月の熊本地震で崩落したままになっている(右)。

※6枚の写真は 2021 年3月 26 日撮影

第４章　小さなまち旅の成果の筆者の身近なエリアへのフィードバック ～博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想～

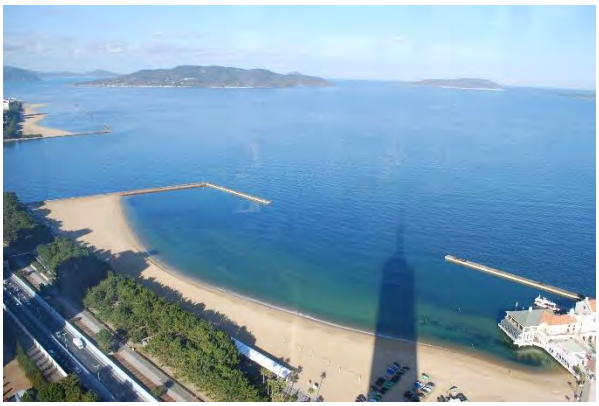
１　プロジェクトの対象エリアと取り組みの視点

（１）「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」の対象エリア

【筆者の身近な「職・住・遊・活」のエリア】

筆者は主に九州一円を対象に小さなまち旅を展開している。旅のテーマは風景や気候、文化といった大きなテーマから、花や樹木といった身近なテーマまで様々である。旅を重ねる中で地域の個性を至る所で発見し、様々な魅力資源（モノ）やそれらの資源を活かして活動している人々や組織（ヒト）を見てきた。また、「モノ」と「ヒト」が結合して「モノ×ヒト＝コト（ストーリー）」となり、まちづくりの成果を上げている地域も見てきた。

一方、筆者の身近な場所にも多くのテーマを内包するエリアがある。それは筆者が提唱する「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」のエリアであり、筆者にとっては身近な「職・住・遊・活」の場でもある。第４章では、これまでの小さなまち旅の成果をこのエリアにフィードバックし、プロジェクトの実現に向けて何ができるのか提案する。



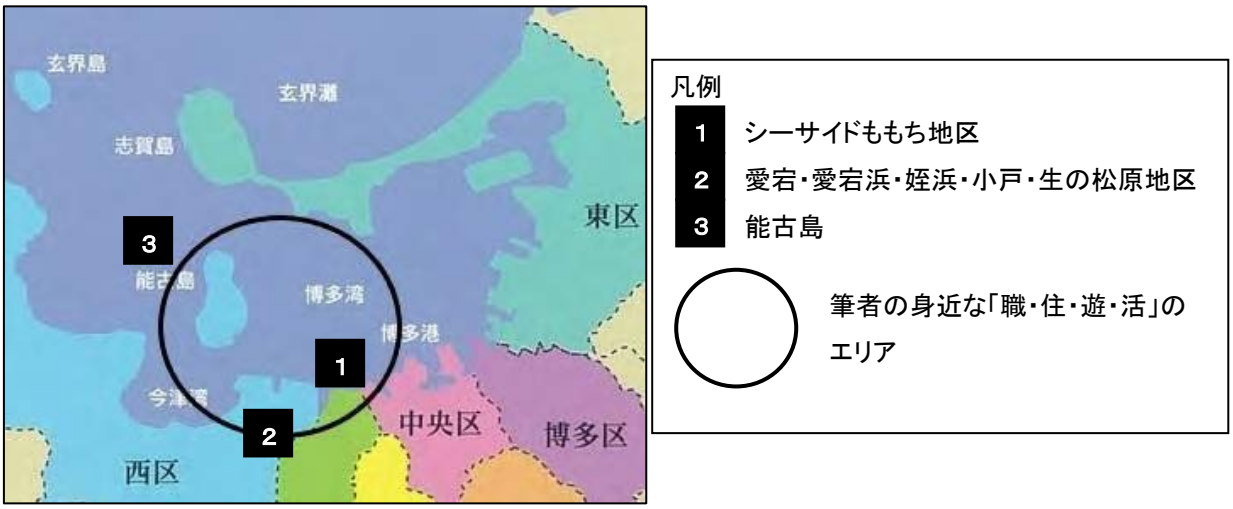

シーサイドももち海浜公園・能古島方面（左）、愛宕浜方面（右）




室見川・愛宕山方面（左）、姪浜・小戸・生の松原方面（右）
福岡タワーから見た筆者の職・住・遊・活のエリア

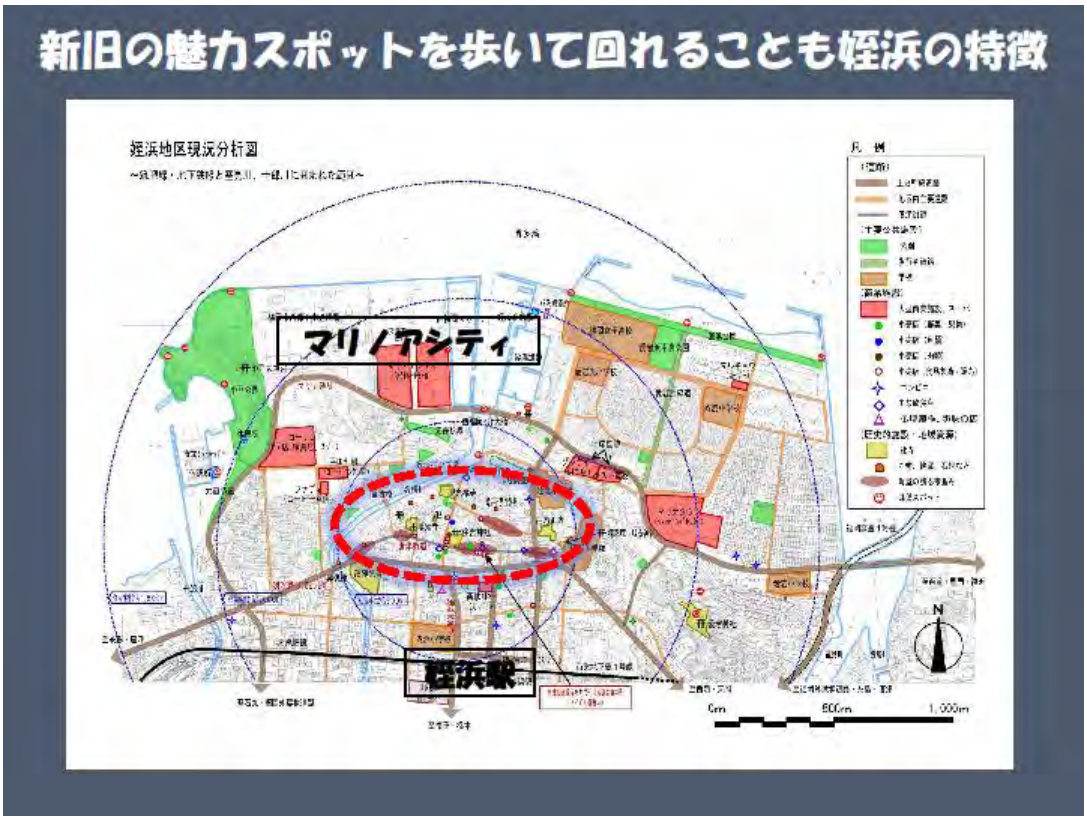
「職」のエリアは福岡市役所時代の業務での思い出のフィールドのひとつであるシーサイドももち地区であり、住宅地開発（シーサイドももちクリスタージュ）と都市景観形成地区の指定が該当する。これについては、第２章（P72）にも概要を紹介している（2016 年度の報告書に詳しく紹介）。「住」のエリアは 1987 年から居住している姪浜校区（12 年）及び愛宕浜校区（22 年）であり、通算 34 年になる。「遊」のエリアは博多湾に沿った身近なレクリエーションエリアであり、シーサイドももち地区、愛宕山、室見川、愛宕浜海浜公園、生の松原、能古島、博多湾等が

該当する。



博多湾と筆者の身近な「職・住・遊・活」のエリア

また、「活」は筆者が 2007 年～2016 年まで活動を牽引してきた唐津街道姪浜まちづくり協議会での活動であり、活動エリアとしては旧唐津街道を中心とした姪北校区、広域的には姪北校区を中心とした姪浜エリア（姪北校区、姪浜校区、内浜校区、愛宕校区、愛宕浜校区）が該当する。姪浜エリアでは寺社、町家、路地、老舗のお店等の古くからの魅力資源に加え、マリノアシティ福岡や愛宕浜海浜公園等の博多湾を埋め立てて誕生した新しい魅力資源が存在し、距離的にはそれらの新旧の魅力スポットを歩いて回れることも大きな特徴である。



筆者が唐津街道姪浜まちづくり協議会活動時に作成した「新旧の魅力スポットを巡る姪浜の回遊ルート」




職のエリア：シーサイドももちクリスタージュ（左）、愛宕浜から見たシーサイドももち（右）




住のエリア：現在住んでいる西福岡マリナタウン（左）、愛宕浜海浜公園（右）




遊のエリア：能古島アイランドパーク（左）、愛宕神社の参道（右）




活のエリア：興徳寺（左）、姪浜住吉神社（右）

（２）取り組みの視点

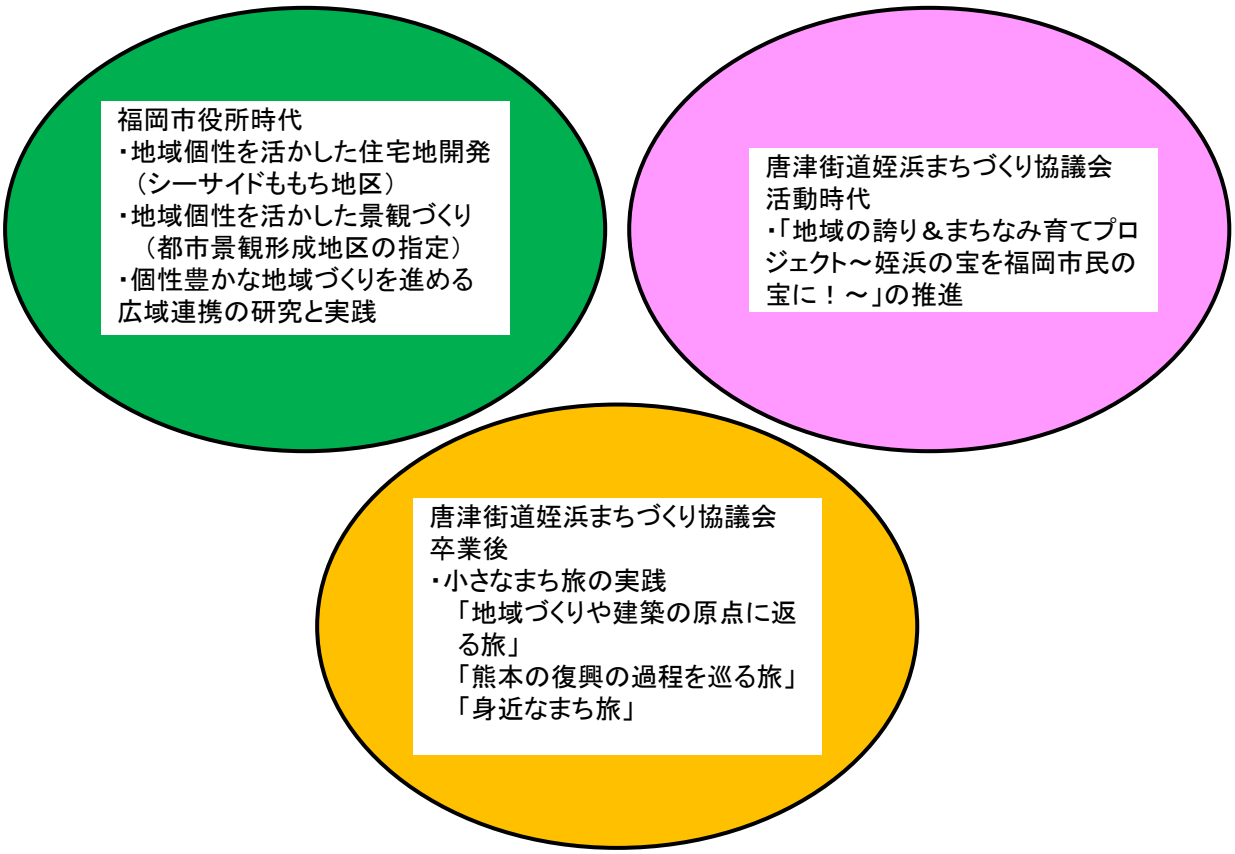
【福岡市役所での業務、姪浜でのまちづくり活動の実践、小さなまち旅の実践を活かした視点】

繰り返しになるが、福岡市役所時代に印象に残るのは、「地域の個性を活かしたシーサイドももち地区の住宅地開発（クリスタージュ）」、「地域の個性を活かした景観づくりを進める都市景観形成地区の指定（新しいまちづくりが進むシーサイドももち地区、歴史的環境地区である御供所地区）」「個性豊かな地域づくりを進める広域連携の研究と実践」の３つの業務であり、共通しているのは「地域の個性を最大限に活用したまちづくりと景観づくり」である。

また、唐津街道姪浜まちづくり協議会での活動時代（2007.3～2016.5）には、それらの経験を活かして「地域の誇り＆まちなみ育てプロジェクト～姪浜の宝を福岡市民の宝に！～」をテーマに活動し、様々な成果を上げてきた（第２章にも概要紹介、2016～2017 年度の報告書に詳しく紹介）。

唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業後は、「身近なまち旅」の一環として、シーサイドももち地区～愛宕・愛宕浜・姪浜・生の松原地区～能古島～博多湾を対象に、「眺望」「景観」「回遊」「歴史」「自然（海・山・松原）」「健康」「広域連携」「観光」「フットパス」等の多彩なテーマでまち歩きを実践している。

このように筆者の身近な「職・住・遊・活」のエリアである「博多湾姪浜エリア」は、筆者ならではのエリアであり、筆者の福岡市役所時代の業務経験、姪浜でのまちづくり活動の実践、そしてポスト姪浜として始めた小さなまち旅の実践を活かした提案が可能なのである。



福岡市役所での業務、姪浜でのまちづくり活動の実践、小さなまち旅の実践を活かした視点

（３）広域連携の視点を踏まえた博多湾姪浜エリアでの筆者のこれまでの提案及び実践活動

【唐津街道姪浜地区を中心とした回遊ルートづくり】

筆者が姪浜のまちづくり活動に取り組んでいた頃の初期の取り組みとして姪浜の魅力資源集『唐津街道姪浜 「見て歩き」「食べ歩き」～地域の魅力資源の再発見～』を作成し、その中で唐津街道姪浜地区を中心とした回遊ルートづくりを提案し、中核となる唐津街道姪浜地区の魅力の創造と発信を目指してきた（2008 年３月）。



唐津街道姪浜の周辺には、愛宕神社や小戸大神宮などの歴史的資源の他、マリノアシティなどの新しい魅力スポットがあります。神話の時代（神功(じんぐう)皇后伝説など）と関わりの深いとされる小戸大神宮、中世の元寇防塁、近世の愛宕神社、現代のマリノアシティなど、いくつもの時代が交差し、様々な時代の歴史が息づいています。今後は、それぞれの魅力資源の連携による回遊ルートづくりと相互の活性化がまちづくりのテーマとなります（愛宕神社～唐津街道姪浜～小戸大神宮が東西の歴史回遊軸とすれば、姪浜駅～唐津街道姪浜～マリノアシティは南北の賑わい回遊軸となる可能性を秘めています。）。

そのためには、中核となる唐津街道姪浜の魅力の創造と発信が求められます。

筆者による唐津街道姪浜地区を中心とした回遊ルートづくりの提案（2008年３月）

【広域連携を視野に入れたこれまでの実践活動、姪浜まち旅プロジェクト計画の作成】

筆者の唐津街道姪浜まちづくり協議会活動時代における広域連携の取り組みとしては、遊覧船に乗って博多湾から福岡の街並みや花火大会を見る事業があり、地域内外から多くの方々に参加いただくなど好評を博した。海や港との関わりの深い姪浜らしさにこだわったもので、筆者にとっては「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト」を見据えたものであった。

また、筆者が2016年３月に作成した『姪浜まち旅プロジェクト計画』の中では、東西の歴史回遊軸（愛宕神社～唐津街道姪浜～小戸大神宮～生の松原）のまち歩きに加え、南北の賑わい回遊軸（姪浜駅～唐津街道姪浜～マリノアシティ・能古島）のまち歩きやレンタサイクルについても提案している（詳細は2017年度研究報告書「参考資料４」に紹介）。




「とっておきの姪浜！遊覧船で巡る福岡の歴史とまちなみ」の様子（2014 年9月）




「夏休み親子まちなみ探検隊」の様子（2015年８月）




「遊覧船から見る福岡のまちなみと花火大会」の様子（2015年８月）

姪浜まち旅プロジェクト計画（概要）

1　活かすべき多彩な魅力資源

（1）寺社　（2）町家町並み　（3）路地　（4）海、港
（5）まちかど遺産　（6）歴史、物語　（7）食　（8）お薦めのお店

2　今後考えられるプログラム

（1）総合型まち歩き（今までの景観歴史発掘ガイドツアー）

○ショートコース（半日コース）　○ロングコース（一日コース）
○東コース（住吉神社～愛宕神社）　○西コース（住吉神社～小戸大神宮～生の松原）

（2）テーマ型まち歩き

○白うさぎ伝説を巡るツアー（姪浜駅南口モニュメント～興徳寺～龍王館～旦過だるま堂）
○寺社巡りツアー（今まで案内していない寺社も含む寺社限定ツアー）
○歴史巡りツアー（古代～現代までを体験できるコース設定）
○海に特化したツアー（魚市場～造船工場～海豚の慰霊碑～姪浜漁協～双胴船～クルーザー）
○路地巡りツアー（住吉神社周辺の路地、光福寺周辺の路地、順光寺周辺の路地など）
○伝説・物語巡りツアー（白うさぎ伝説、武内宿禰伝説、探題塚伝説、元寇伝説）

（3）季節型イベント

○歴史散策と桜の名所巡りツアー（春）　○歴史散策と紅葉巡りツアー（秋）
○着物でそぞろ歩き（春、秋）

（4）講話

○寺社講話（住職や宮司の講話&境内散策）

（5）コンサート

○寺社での灯明コンサート
○町家コンサート
○町家コンサート&姪浜ブランド料理

（6）体験型イベント

○お寺での座禅体験、点茶体験
○蒲鉾作り体験、削り節削り体験

（7）まち歩き&お薦めのお店でランチ

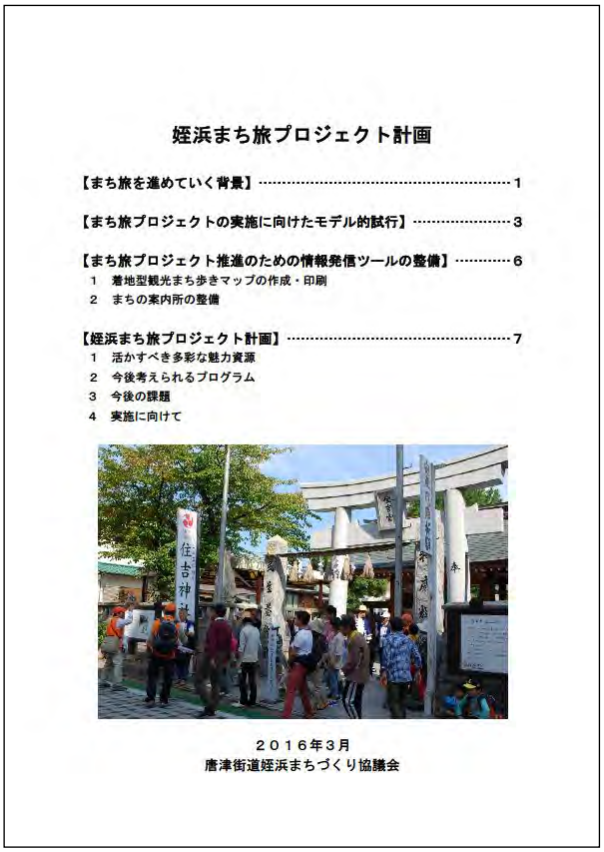
○白うさぎ伝説を巡るコース&
　姪浜ブランド店でランチ
○景観歴史発掘ガイドツアー&
　姪浜ブランド店でランチ

（8）ウォークラリー

○姪浜駅～唐津街道・魚町通り周辺～
　マリノアシティ or 能古島
　※JR 九州や福岡市交通局との連携検討

（9）子どもたちを対象にしたイベント

○夏休み親子まちなみ探検隊



姪浜まち旅プロジェクト計画

【まち旅を進めていく背景】……1
【まち旅プロジェクトの実施に向けたモデル的試行】……3
【まち旅プロジェクト推進のための情報発信ツールの整備】……6
1　着地型観光まち歩きマップの作成・印刷
2　まちの案内所の整備
【姪浜まち旅プロジェクト計画】……7
1　活かすべき多彩な魅力資源
2　今後考えられるプログラム
3　今後の課題
4　実施に向けて

2016年3月
唐津街道姪浜まちづくり協議会

筆者が2016年3月に作成した『姪浜まち旅プロジェクト計画』より抜粋

【広域的に見たコントラストのある景観と４つの視点場】

筆者は2017年度の研究報告の中で、姪浜周辺の４つの視点場とそれらの視点場から見たコントラストのある景観について次のように述べている。

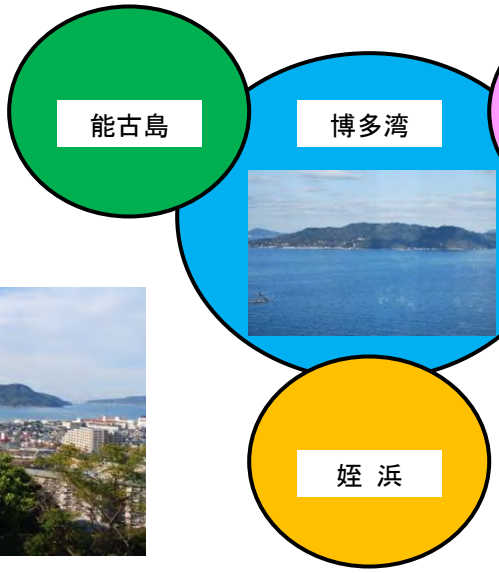
> 姪浜周辺を広域的に見ると「福岡タワー」「愛宕神社」「能古島」「博多湾」という４つの眺望ポイントが存在する。こうした視点場から見る福岡市のコントラストのある景観は魅力的であり、福岡市の都市形成の歴史を垣間見ることができる。



能古島からシーサイドももち方面を見る



福岡タワーから姪浜方面を見る





愛宕神社から能古島方面を見る



愛宕神社からシーサイドももち方面を見る

【都市・歴史・自然の風景を楽しむトライアングルフットパス構想】

筆者は2017年度の研究報告の中で、近隣地域と連携した多彩なフットパスの推進について次のように述べている。

> 「フットパス」とは、イギリスを発祥とする『森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径（こみち）【Path】』のことである。 本場イギリスではフットパスが国土を網の目のように縫い、国民は積極的に歩くことを楽しんでいる。 近年、日本においても様々な地域において、各々の特徴を活かした魅力的なフットパスが整備されてきている（日本フットパス協会 HP より）。
>
> 都市化の進んだ姪浜やその近郊においては、こうした定義通りのフットパスは難しいかもしれないが、多彩な魅力資源（自然的資源、歴史的資源、都市的資源）を歩いて巡るコースの設定は可能であり、福岡型の新たなフットパスの実現も可能である。以下に筆者の私案を紹介したい。

【都市・歴史・自然の風景を楽しむトライアングルフットパス構想】

対象エリアは「シーサイドももち」「姪浜」「能古島」の３つのエリアと「博多湾」である。シーサイドももちは新しい都市景観、姪浜は多彩な歴史、能古島は歴史と自然が特徴であり、各エリアで特徴的な緑道、海浜公園、路地、自然の探勝路等があり、多彩な魅力を体感できる。また、前述したとおり「福岡タワー」「愛宕神社」「能古島」「博多湾」という４つの眺望ポイントがあり、福岡市のコントラストのある景観や都市形成の歴史を感じることができる。

ルートとしては、各エリア内、２つのエリア、３つのエリアといった組み合わせが可能であり、広域的で変化に富んだまち歩きを楽しむことができる。健康ブームの中、多くの市民がウォーキングを楽しまれており、各エリアの多彩な魅力資源を巡るいろいろなコース設定をすることで、地域の魅力を体感体験しながらまち歩きを楽しむことができる。

全国で進められつつあるフットパスは、地域の魅力を再発見し、ウォーキングを中心にした現地での体験・交流の中で、その魅力を来訪者に感じていただくことで、地域への誇りや愛着の向上、ひいては地域の活性化につながると考えられている。

筆者は、フットパスは自然の風景の中だけでなくても、成り立つのではないかと考えている。シーサイドももちは埋立地であり、近代的な都市景観や建築物が特徴であるが、東西南北の緑道、河川沿いの緑道、海浜公園等の公共空間の他、民有地においても緑豊かな景観づくりが進められており、都市的な環境の中にも豊かな自然環境が形成されている。また、姪浜においても愛宕神社参道、海浜公園、小戸から生の松原にかけての海沿いの遊歩道や松林の中の散策路（元寇防塁等の史跡もある）等がルートとして考えられ、その中で地域の歴史や文化等を感じてもらうことができる。大上段に考えることなく、地域や個人でできることから取り組んだらいいのではないだろうか。

「シーサイドももち」「姪浜」「能古島」、そして「博多湾」の組み合わせによる『都市・歴史・自然の風景を楽しむトライアングルフットパス構想』については、今後、筆者自身が取り組んでみたいテーマでもある。

各エリアの特徴等

	ｼｰｻｲﾄﾞももち	姪　浜	能古島	博多湾
魅力資源	都市景観 景観に配慮された建築物	歴史 寺社 町家町並み 路地 元寇防塁跡	自然 歴史 ｱｲﾗﾝﾄﾞﾊﾟｰｸ	海（博多湾） 周囲の自然景観（海、山、緑）
眺望ポイント	福岡タワー	愛宕神社	島の至る所（ｱｲﾗﾝﾄﾞﾊﾟｰｸ、自然探勝路等）	フェリー
考えられるルート	東西南北の緑道 河川沿いの緑道 海浜公園	愛宕神社参道 唐津街道 狭い路地 海浜公園 海沿いの遊歩道 松林の中の散策路	自然探勝路	能古渡船場～能古島（フェリー、海上タクシー）
推進体制	各エリアのまち歩きのガイド団体・グループ・人 まちづくり団体・グループ・人			
必要なツール	お薦めのコースを紹介した全体のマップ 各エリアの魅力資源を紹介するマップ			

【能古島】



【シーサイドももち】



【自然、歴史】





【都市景観】

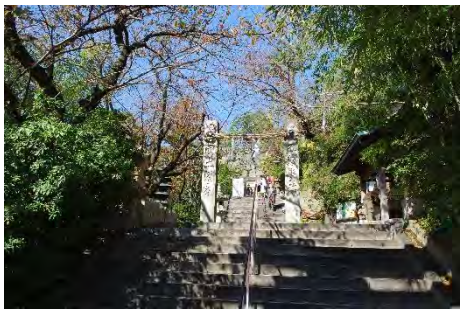


【歴史】

【姪　浜】















都市・歴史・自然の風景を楽しむトライアングルフットパスのイメージ

２　小さなまち旅の一環としての身近なまち旅の実践

（１）広域連携の実践に向けたまち歩き

筆者は九州一円をフィールドに様々なテーマでまち旅を実践しているが、多くのテーマを内包している魅力的な博多湾姪浜エリアにおいても「眺望」「景観」「回遊」「歴史」「自然（海・山・松原）」「健康」「広域連携」「観光」「フットパス」等の多彩なテーマでまち歩きを実践している。

何よりも４つの眺望ポイントを有していることが魅力であり、それらからは都市のコントラストや都市形成の歴史を見ることができる。また、シーサイドももち地区～生の松原を歩くと生業や日々の生活、レクリエーションが息づいた博多湾の多彩な風景を見ることができる。小戸の海岸や室見川から見る夕景もきれいであり、夕日と雲が織り成す風景にも非日常を感じることもある。

特徴がないと考えられている住宅地や普段何気なく歩いている地域であってもテーマを持って歩くと、いろいろな魅力資源を発見することができる。例えば、住宅街の庭に植えている花や樹木に季節感を感じることも多い。枝垂れ梅やミモザの花の美しさにハッとすることもある。ケヤキやイチョウの街路樹は、新緑や紅葉の時には特に印象的である。

（２）各地区の概要

【シーサイドももち地区】

シーサイドももち地区は、住宅地開発（シーサイドももちクリスタージュ）や都市景観形成地区の指定に深く関わってきており、筆者の福岡市役所時代の思い出のフィールドであり、現在は身近なレクリエーションエリアの一つでもある。近代的な都市景観や建築物が特徴であるが、東西南北の緑道、河川沿いの緑道、海浜公園等の公共空間の他、民有地においても緑豊かな景観づくりが進められてきており、都市的な環境の中にも豊かな自然環境が形成されている。








愛宕浜から見たシーサイドももち（上）
福岡タワーからの眺望（下）

よかトピア通りの街並み（上）
世界の建築家通りの街並み（下）

集合住宅地区の街並み（上）
室見川沿いの緑道（下）

シーサイドももち地区

【愛宕・豊浜地区】

室見川を挟んでシーサイドももちに隣接する愛宕・豊浜地区は、愛宕神社をはじめとした歴史資源や愛宕山、室見川といった自然資源が特徴である。筆者は姪浜に住んで 34 年になるが、今でもよく訪れるのが愛宕神社とその参道沿いにある観音寺、音次郎稲荷神社である。桜の咲く頃になると参道沿いの桜だけでなく、観音寺の桜、愛宕山観光道路沿いの河津桜、ケーブルカー山上駅跡付近の桜等が美しさを競演する。冬から初夏にかけては、各種のサギが飛来し営巣の風景を見ることができる。

また、豊浜団地を歩くと季節感豊かな様々な花を楽しむことができる。室見川での初夏の潮干狩りの風景や冬の鴨の群れを見ることも楽しい。朝日や夕日の風景もきれいである。一般的な住宅地であっても、いろいろな個性を発見できるのである。








愛宕神社（上）
参道の桜並木（下）

愛宕神社参道沿いにある観音寺（上）
豊浜団地内の枝垂れ梅（下）

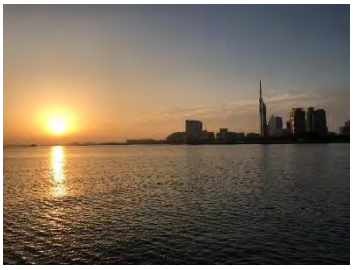
室見川での潮干狩りの風景（上）
室見川の夕景（下）

愛宕・豊浜地区

【愛宕浜地区】

筆者が現在暮らしている愛宕浜地区は豊浜・姪浜地区の博多湾側に位置し、埋め立てによって生まれた比較的新しい街であり（1980 年代後半から住宅地開発）、博多湾に面した海浜公園と緑豊かな居住環境が特徴である。海浜公園ではウォーキングやランニングをする人、犬と散歩する人、釣りやサーフィンをする人などで賑わいを見せている。海浜公園からはシーサイドももちや能古島、志賀島等を臨むことができ、海に開かれた福岡の景観的な特徴を満喫できる場所でもある。朝日が昇る風景や夕日が沈む風景も愛宕浜ならではの風景である。

また、愛宕浜中央公園や地域を南北に縦断する緑道、外周の道路では樹木が成長し、季節感を演出している。普段何気なく過ごしているまちであるが、テーマを持ってまちを歩くといろいろな発見をすることができる。





福岡タワーから見た愛宕浜の街並み（上）
愛宕浜海浜公園（下）

シーサイドももち方面の朝景（上）
糸島方面の夕景（下）

街路樹の紅葉

愛宕浜地区

【姪浜地区】

唐津街道を中心とした姪浜地区には寺社、町家、路地、魚市場、古くからのお店等が息づき、福岡市内でも有数の歴史的環境を有している。しかし、近年の町家の減少やマンションの建設に歯止めがかからず、町並みが大きく変貌するとともに、多くのワンルームアパートの進出により古くからのコミュニティも大きく変化してきている。筆者はここで約 10 年間活動してきたが、近年の町並みやコミュニティの変化には危機感を覚えている。

この地域を歩く機会は激減したが、歩く度に様々な課題が見えてくる。地域内にはまちづくりを標榜する団体がいくつかあるが、各団体の連携に加え、広域的な観点で地域を評価し、広域的エリアとして個性を打ち出していく必要がある。筆者が提唱する「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」はこうした視点から生まれた構想でもある。








姪浜住吉神社（上）
興徳寺（下）

探題塚（上）
唐津街道沿いの西構口付近の町家町並み（下）

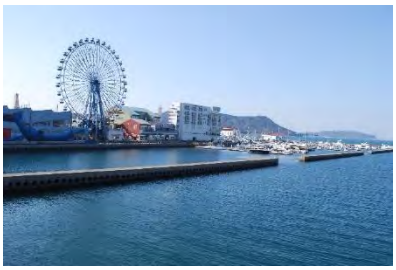
姪浜魚市場（上）、多くの高層マンションの進出による町並みの変貌（下）

姪浜地区

【小戸・生の松原地区】

名柄川を挟んで姪浜地区の西側に位置する小戸・生の松原地区には、マリノアシティ福岡をはじめとする商業施設、小戸公園や小戸ヨットハーバー等のレクリエーション施設、小戸大神宮や元寇防塁跡等の歴史的資源があり、それらを回遊できる博多湾沿いの遊歩道等も整備されている。「都市」「自然」「歴史」の３つの要素を巡る福岡型のフットパスを展開できるエリアである。

また、小戸や生の松原の海岸から見た博多湾の景観はダイナミックであり、海、空、山、島のコントラストが素晴らしい。特に小戸の夕景はきれいであり、古くからの歴史を感じる瞬間でもある。博多湾を行き交うフェリーや漁船、ヨットの風景もこのエリアならではのものであり、筆者の身近なフットパスのコースの一つでもある。













マリノアシティ福岡（上）
小戸大神宮（下）

小戸の夕景（上）
生の松原元寇防塁跡（下）

生の松原（上）
生の松原から見た博多湾（下）

小戸・生の松原地区

【能古島】

姪浜渡船場からフェリーで 10 分の能古島も筆者の身近なまち旅のエリアである。一番の見どころはアイランドパークであり、桜とコスモスのコントラストが美しい春、コスモスが咲き乱れる秋には毎年のように訪問している。夏のひまわりや冬の水仙など季節ごとに様々な花を楽しむことができる。また、そこで作られたサツマイモを使ったイモ天や能古島名産の甘夏 100%ジュースも久保田睦子さんらの手作りで本当に美味しい。

能古島にはこの他、白髭神社や永福寺、能古焼古窯跡、能許万葉歌碑、能古博物館等の魅力スポットがあり、フットパス感覚で回遊できる。また、能古島から見るシーサイドももちの景観は「海に開かれたアジアの交流拠点都市・福岡」を象徴する景観である。自然探勝路から見え隠れする博多湾の風景は、大陸との関わりの深い福岡の歴史を感じさせる。








福岡タワーから見た博多湾と能古島（上）
能古島から見た博多湾とシーサイドももち（下）

季節ごとに様々な花を楽しめる能古島
アイランドパーク（上）、白髭神社（下）

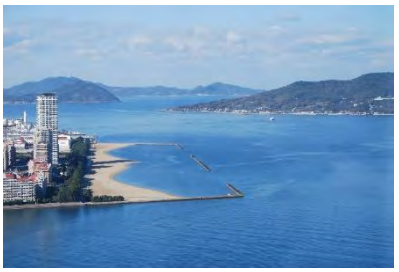
能古焼古窯跡（上）
自然探勝路（下）

能古島

【博多湾】

今まで紹介してきた「シーサイドももち地区」「愛宕・豊浜地区」「愛宕浜地区」「姪浜地区」「小戸・生の松原地区」「能古島」をつなぐのが博多湾である。筆者は愛宕浜に暮らして 22 年になるが、これらの地区から見る博多湾の街並み、博多湾から見る福岡の街並みは筆者のお気に入りの景観である。また、オランダ出身で姪浜漁港に停泊するヨットで暮らして 30 年以上になるヤップ・モルダーさん夫妻は、世界 55 ヶ国を旅して博多湾、そして福岡、姪浜に魅了された方で「博多湾に帰ってくるとほっとする。博多湾から見る福岡の景観は素晴らしい。美しい海と山に囲まれた福岡が好き」と語っていた。

筆者は「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」「福岡型フットパス構想」を提唱し、その実現に向けて身近なまち旅を実践している。








福岡タワーから見た博多湾（上）
博多湾を背景にした花火大会（下）

博多湾に浮かぶヨットの風景（上）
姪浜漁港の漁船が並ぶ風景（下）

筆者のマンションから見た博多湾の朝景（上）
博多湾から見た糸島方面の夕景（下）

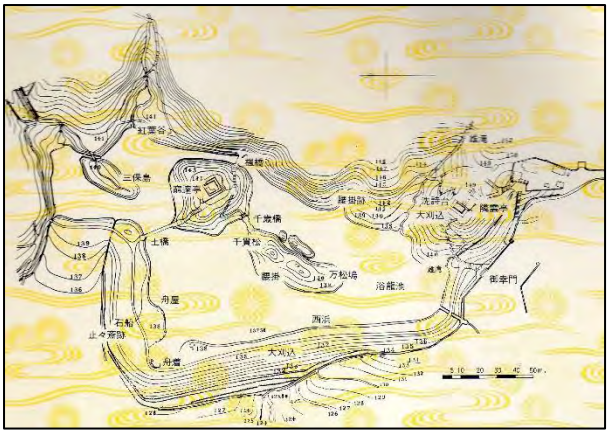
博多湾

３　博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想

（１）博多湾姪浜エリアのイメージ

【博多湾に沿っては池泉回遊式庭園、内陸部は箱庭的都市のイメージ】

このエリアは、博多湾を大きな池水、博多湾岸の回遊路（海浜公園等）を園路、その周囲の山や丘を築山、能古島や志賀島を小島、フェリーを小船と捉えて回遊式庭園をイメージできる。日本庭園の池泉回遊式庭園と比較するとスケールはかなり大きくなるが、イメージとしては成り立つのではないだろうか。





代表的な池泉回遊式庭園である修学院離宮（出典:㈶有識文化協会 1981 年 12 月発行「修学院離宮」）

また、都市の様々な景観構成要素を有する博多湾と姪浜周辺を一体的に捉えて箱庭的都市をイメージすることも可能である。箱庭的都市は尾道市の風景が代表的である。尾道市のパンフレットを見ると「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市～ああ、この風景に会いたかったんだ。」と記されている。尾道水道と尾道三山の間の限られた空間に、多くの寺社や家々がひしめき、坂道と路地でつながる景色が「箱庭」に例えられてきており、懐かしい心象風景を思い起こさせてくれる。

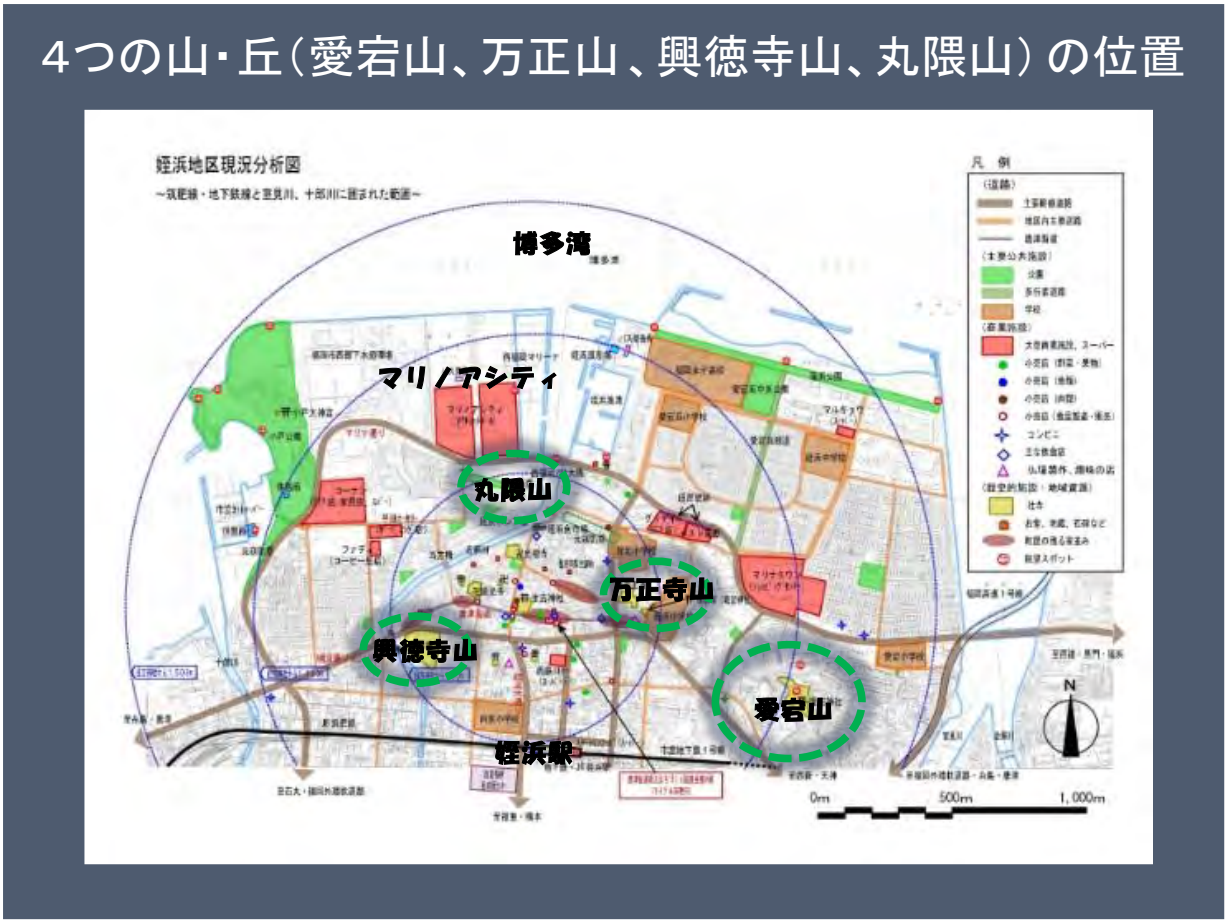







箱庭的都市と呼ばれる尾道市の景観

博多湾と４つの山（愛宕山、万正寺山、興徳寺山、丸隈山）の間に多くの寺社、町家、路地等が集積し、「宿場町」「商人町」「漁師町」「寺町」の４つの顔を備えた姪浜地区は箱庭的空間と呼んでもいいのかもしれない。博多湾に沿っては池泉回遊式庭園、内陸部は箱庭的都市をイメージできる。



4つの山･丘（愛宕山、万正寺山、興徳寺山、丸隈山）の位置

（２）博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想

【コントラストのある都市空間】

福岡市は数年前からコントラストの感じられる都市づくりを打ち出しているが、その最たる例が天神地区や博多駅地区の現代的な景観と御供所地区に代表される博多部の歴史的な景観であろう。ヨーロッパの旧市街の存在に象徴されるように、新旧の景観が存在してこそ都市は深みを増し、時間を超えた重層的な空間が形成されるのである。

博多湾姪浜エリアについては、シーサイドももち地区やマリノアシティ博多、姪浜駅周辺が新しい景観ゾーンを構成し、唐津街道を中心とした姪浜地区（唐津街道姪浜地区）が歴史的な環境ゾーンを構成することで、深みとコントラストのある都市空間を形成することができる。そのためには、まずは広域的エリアの中で各地域の魅力を再評価し、エリア全体としてコントラストのある都市空間の魅力を再認識し、地域内外にその魅力を発信していくことが重要である。

その中で、ここ数年の唐津街道沿道の高層マンションや路地沿いのワンルームアパートの建設ラッシュ等により地域の個性である古い町家や路地の魅力が次第に失われ、歴史的環境地区とし

ての魅力が低減している唐津街道姪浜地区のまちづくりの取り組みが重要となってくる。コントラストのある都市空間というテーマは、唐津街道姪浜地区の個性を浮き彫りにするテーマでもある。



福岡都心部におけるコントラストのある景観づくりのイメージ（上）
広域的視点からの唐津街道姪浜地区の魅力の再評価のイメージ（下）
※2019 年 11 月の「第7回まちなみフォーラム福岡 in 唐津街道箱崎宿」での発表資料より（筆者作成）

【博多湾姪浜 まち旅プロジェクト＝博多湾を通して地域（モノ・ヒト・コト）をつなぐ】

筆者は 2007 年～2016 年に姪浜で多彩なまちづくり活動を実践するとともに、姪浜の多彩なよかとこを再発掘・活用する「姪浜まち旅プロジェクト計画」（前述）を作成した。これは、姪浜の魅力を地域内外に発信し、身の丈にあった観光スタイル（着地型観光）の定着を目指すとともに、コミュニティ交流や商店街活性化、地域に対する誇りや愛着の醸成につなげていくことを意図したものであった。そうした活動は、マスコミ取材回数の格段の増加や全国的な賞の受賞につながり、地域への来訪者が増えるなど地域の魅力発信や活性化に大きな成果を上げてきた。



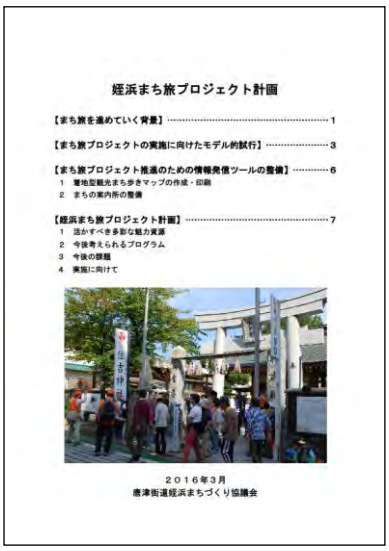
筆者が企画・実践してきた姪浜でのまち旅プロジェクトの例

また、シーサイドももち地区や能古島アイランドパークは多くの人が訪れる魅力スポットであるが、多彩な魅力資源を有する博多湾姪浜エリアで考えるとコントラストのある都市空間のイメージが明確になり、様々なテーマに沿ったまち旅が可能になる。以下に筆者の思いつくままに、まち歩きを中心としたテーマを挙げてみたい。

博多湾姪浜 まち旅計画のテーマの一例（まち歩きを中心としたテーマ）

○博多湾風景回廊を楽しむ
○福岡型トライアングルフットパスで博多湾の都市・歴史・自然（海・川・山）の多彩な風景を楽しむ
○４つの眺望ポイント（福岡タワー、愛宕山、能古島、博多湾）からの景観を楽しむ
○海のレクリエーション（ヨット、サーフィン、ビーチバレー、釣り、潮干狩り等）と生業（姪浜漁港、姪浜魚市場、海苔養殖、造船業、新鮮な魚を扱うお店等）が息づく博多湾の風景を楽しむ
○五感で８Ｋウォーキング（景観、観光、健康、回遊、海遊、回廊、海道、広域空間）を楽しむ
○「見る」「学ぶ」「食べる」「交わる」の４つの視点で博多湾の広域連携の旅を楽しむ
○能古島の歴史と自然、食を楽しむ
○博多湾ならではの地産地消を楽しむ
○シーサイドももちと姪浜の新旧の景観のコントラストを楽しむ
○身近な四季を楽しむ（桜巡り、新緑巡り、紅葉巡り）
○福岡市博物館～西新～姪浜～小戸～生の松原の元寇防塁を巡る
○博多湾と姪浜の歴史を学ぶ
○五ヶ浦廻船の歴史を学ぶ
○シーサイドももちのまちづくりと景観づくりを学ぶ
○シーサイドももちの現代建築を巡る

上記のような大テーマに沿って中小テーマを設定することで、様々なまち旅を企画できるのではないだろうか。久留米市や柳川市では精力的に「まち旅」や「ゆるり旅」を推進しているが、これは博多湾姪浜エリアでも十分成り立つと考えている。それだけの魅力資源を有しているエリアなのである。


姪浜まち旅プロジェクト計画

【まち旅を進めていく背景】……1
【まち旅プロジェクトの実施に向けたモデル的試行】……3
【まち旅プロジェクト推進のための情報発信ツールの整備】……6
1 着地型観光まち歩きマップの作成・印刷
2 まちの案内所の整備
【姪浜まち旅プロジェクト計画】……7
1 活かすべき多彩な魅力資源
2 今後考えられるプログラム
3 今後の課題
4 実施に向けて

2016年3月
唐津街道姪浜まちづくり協議会

筆者が作成した姪浜まち旅プロジェクト計画（2016 年3月）





久留米まち旅博覧会（左）と水郷柳川ゆるり旅（右）のパンフレット

様々なテーマが考えられる「博多湾姪浜 まち旅プロジェクト」は、博多湾を通して地域（モノ・ヒト・コト）をつなぐプロジェクトでもある。数年前、愛宕浜で新たな花火大会の計画があったが、交通渋滞や生活騒音等の懸念により住民の賛成を得られず、未だに実現していない。筆者の住むマンションでも説明会があったが、花火の美しさ、大きさ、高さ等が強調され、「花火を通して博多湾に面した地域をつなぐ」といったコンセプトが不足していたのではないかと思っている。

そうした大きな視点で取り組んでいれば、また違った展開があったかもしれない。大規模な花火大会もいいが、まち旅のような身近な取り組みを地道に粘り強く展開していくことも重要なのである。

また、博多湾姪浜エリアにはモノ（地域の魅力資源）は豊富にあり、それを活かしたコト（ストーリー、こだわり）を成立させるにはヒト（人材、組織）が重要になる。このエリアには様々な団体があるが、夢のあるプロジェクトに取り組んでいこうとすると、関係する団体との連携も必要になるし、まちづくりの志のある新たな人材も必要になってくる。筆者は現在、一人や家族で博多湾姪浜の旅を楽しんでいるが、今後賛同してくれる有志が集まれば、具体的な「博多湾姪浜 まち旅プロジェクト計画」を作成し、実践に取り組んでいきたいと考えている。





「博多湾姪浜 まち旅プロジェク」トを進めるにあたっては、姪浜周辺で多彩なまち歩きを実践している「西区歴史よかとこ案内人あこめグループ」との連携が不可欠である。

コロナ禍の中で「マイクロツーリズム」という旅行のスタイルがクローズアップされている。これは自宅から１～２時間以内の移動距離圏での近距離旅行を指し、近場で気軽に旅を楽しもうというものである。筆者の提案する「博多湾姪浜 まち旅プロジェクト」は小さなマイクロツーリズムといったところだろうか。筆者は今後も、九州圏域を中心とした「小さなまち旅」とあわせて、博多湾姪浜エリアを対象として五感で８Ｋウォーキング（景観、観光、健康、回遊、海遊、回廊、海道、広域空間）を楽しみながら、筆者の「職・住・遊・活」が息づく博多湾姪浜エリアの魅力資源を改めて掘り起こしていきたいと考えている。

【博多湾姪浜と歴史的にゆかりのある都市との広域交流（五ヶ浦廻船等）】

最後に、「広域交流」について夢のある話を紹介したい。下記のコラムは、筆者が 2013 年８月に秋田県横手市増田の町並みと内蔵を訪問した時の想いを書いた紀行文（抜粋）であり、北前船や五ヶ浦廻船を通じて縁があったかも知れない姪浜と増田の今後の交流について記したものである。地域づくりには現実的な課題への対応とともに、こうした夢も必要であり、その夢の実現に向けて活動していくのが「地域づくり活動」ではないかと筆者は考えている。

日本海を隔てた広域交流の提案

「内陸部のまち・横手市増田と海辺のまち・福岡市姪浜～日本海を隔てて 1100 ㎞離れた地域の新たな交流の芽生え～」（2013 年　第９回 JTB 交流文化賞応募作品）より抜粋

増田の内蔵との出会い

2013 年８月 30 日、公務員の傍ら、福岡市姪浜で地域活動のリーダーをしている私は秋田県横手市増田にいました。仕事で出張した時の最後の視察地が増田でした。観光物産センター「蔵の駅」で説明を受け、中の蔵を見せていただきましたが、雪国ならではの独特の構法と重厚な造りに圧倒されました。視察はその蔵の見学と 10 分程度の町並み散策だけでしたが、もう少し居残って見てみたいと思い、視察のバスが他のメンバーを乗せ秋田駅に向かう中、私は帰りの飛行機の時間が許す限り、他の蔵を見ることにしました。

（中略）

福岡市・姪浜の蔵と町並み

一方、私が暮らし、まちづくり活動を実践している福岡市の姪浜にも、時代時代の状況に応じて様々な使い方をされてきた蔵があります。築 180 年以上になる江戸時代後期の建物で、戦前までは酒蔵、戦時中は飛行機の部品工場、戦後は味噌の製造・販売、現在はパンの製造・販売及びまちの案内所（地域のまちづくり活動の拠点）として使われ、今でもオーナーが住み続けておられます。また、時にはコンサートや講演会、展示会等のイベント会場になるなど、地域のシンボル的空間となっています。増田の内蔵とは造られた背景、歴史、構造はかなり異なりますが、「蔵」の持つ不思議な縁を感じました。

（※この時に紹介した姪浜の蔵は解体され、現存しない。）



増田の蔵



姪浜の蔵

（次ページに続く）

（中略）

北前船で関係する増田と姪浜

ある蔵で説明を受けている中で、増田は北前船とも関わりがあることを知りました。なぜ、内陸部の増田が北前船と関係あるのか、詳しく話を聞いてみました。

昔、北前船が秋田の港に寄港し様々な物資を降ろしました。増田は雄物川支流の成瀬川と皆瀬川の合流に位置し、秋田の港に着いた物資は、これらの川を使って増田にも運ばれたそうです。当時は食品保存が未熟なため、新鮮な魚は横手のような内陸部には流通が困難でした。しかも秋田は冬が長いため、食品を加工し保存食として冬を越しました。そこで当時の人々は保存食をより美味しく、来客にもてなしたいという想いから、昆布に代表される保存食の加工技術に磨きがかかったということです。

姪浜も江戸時代には廻船業で栄え、五ヶ浦廻船や北前船とも関わりがあります。製塩業や漁業で栄え、藩米を廻送する千石船で賑わったほか、全盛期には江戸、大阪はもちろん東北、北海道にまで船足を伸ばし、江戸幕府や他藩の米、民間の材木、海産物の物流をも担いました。海辺のまち・姪浜と内陸部のまち・増田は 1100 ㎞も離れており、一見関わりがないように見えますが、「姪浜の塩や海産物が増田で消費されていたかもしれない」「増田の昆布を姪浜の人も食べていたかもしれない」など、何らかの交流があったことを想像すると、とてもわくわくしてきます。



江戸時代の交通路（安藤達朗著「いっきに学び直す日本史」に筆者が姪浜と増田の位置を記載）

姪浜　増田

今後の交流に向けて（増田の皆さんへのメッセージ）

急遽決断した４時間足らずの増田滞在でしたが、とても有意義な時間でした。「蔵」や「北前船」が取り持つ縁、これは決して偶然ではないと思います。私を増田に引き寄せたもの、それは「増田にはこれからの日本の社会、そして姪浜の地域づくりを考えるヒントがたくさんある」ということを私に伝えたかったのではないでしょうか。こうした縁を大切にし、日本海を隔てて遠く 1100 ㎞も離れた増田と姪浜で「地域づくり」や「町並み」「観光」をテーマに新たな交流が生まれればいいなと感じています。

最後になりますが、丁寧に説明していただいた増田の皆さん、本当にありがとうございました。福岡市の姪浜から厚くお礼申し上げます。これを機会に「日本海を隔てた広域交流」を始めましょう。

【Part. ２】地域個性を巡る小さなまち旅の事例集
～身近な地域の魅力の再発見～

1　小さなまち旅から考える景観づくりや地域づくりのテーマ

Part.２では、筆者の小さなまち旅を踏まえ、景観づくりや地域づくりの魅力を考える旅のテーマを設定し、「地域個性を巡る小さなまち旅の事例集」として写真と文章でわかりやすく伝えていく。最近５年間の旅が中心であるが、一部それ以前に旅した事例も含んでいる。

大テーマ		テーマ
地域づくりや建築の原点に返る旅	風景、気候、風土、文化	私の目指す風景と地域づくりを巡る旅
		素朴な日本の風景を実感する旅
		大景観を実感する旅
		眺望景観の魅力を実感する旅
		流域景観の魅力を実感する旅
		港の風景と風土を巡る旅
		造船所のある風景を巡る旅
		気候や風土の違いを体感する旅
		異文化を体感する旅
		自然・歴史・食を楽しむ温泉ツーリズムの旅
	町並み、集落、地域、路地、市場	伝統的建造物群保存地区を巡る旅
		歴史的町並みを巡る旅
		ヨーロッパの伝統的町並みを巡る旅
		重要文化的景観を巡る旅
		集落を巡る旅
		身近な街道の旅
		寺町を巡る旅
		武家屋敷を巡る旅
		歴史的港町を巡る旅
		川港のまちを巡る旅
		路地の魅力を体感する旅
		昔ながらの市場を巡る旅
		まちなか歴史散策の旅
		思い出の場所を再訪する旅
		思い出の通学路を巡りながら故郷の再生を考える旅
	歴史的建造物、現代建築	身近な世界遺産を巡る旅
		石橋の魅力を体感する旅
		歴史あるお寺や神社を巡る旅
		赤煉瓦建築を巡る旅
		わが国の近代化の歩みを体感する旅
		今も息づく蔵を巡る旅
		時代を超えて使われ続ける建築を巡る旅

大テーマ		テーマ
地域づくりや建築の原点に返る旅	歴史的建造物、現代建築	現代建築を巡る旅 スターバックス建築を巡る旅 思い出の建築を巡る旅 建築展を巡る旅
	季節、花、樹木、鉄道	歴史的建造物と桜巡りの旅 桜巡りの旅 歴史的建造物と紅葉巡りの旅 紅葉巡りの旅 四季を実感する旅 歴史的町並みとお雛様巡りの旅 松原の魅力を実感する旅 樹木を巡る旅 ローカル線の旅 鉄道ミュージアムを巡る旅
	モノ、ヒト、コト（ストーリー）	鳥の目・虫の目・魚の目の旅 一つひとつのストーリーの積み重ねを実感する旅 平和の大切さを実感する長崎巡礼の旅 前向き思考の旅 一人一花を実感する旅 こだわりの書店とアートギャラリーを巡る旅 本や画に魅了されてアートと歴史を巡る旅 こだわりの場所を定期的に訪問する旅 出張先での思いがけない発見の旅 まちづくり活動を通した思いがけない再会の旅
熊本の復興の過程を巡る旅		熊本地震の脅威を実感する旅 熊本の復興の過程を巡る旅 自然の治癒力を実感する旅
身近なまち旅		「博多湾姪浜 夢海道(回廊)&海遊(回遊)」の旅 お気に入りのフィールドを巡る旅 職場近くや仕事ついでのちょこ旅

2　景観づくりや地域づくりの魅力を伝える62のテーマと概要

次ページ以降に 62 のテーマに沿って、小さなまち旅を通して筆者が感じたことを紹介する（Part.1 で紹介したものと重複するものあり）。それぞれの事例に関することは、関連するホームページで検索していただければ、より詳しい内容を知ることができる。

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	私の目指す風景と地域づくりを巡る旅①	場所	尾道市

地域の個性を形成する重要な要素の一つが風土、気候、地形等であり、これらに沿って各地域独自の生活が営まれ、固有の歴史や文化、町並みが形成されてきた。中でも印象に残るのが、尾道の風景である。尾道市のパンフレットを見ると「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市～ああ、この風景に会いたかったんだ。」と記されている。

尾道水道と尾道三山の間の限られた空間に、多くの寺社や家々がひしめき、坂道と路地でつながる景色が「箱庭」に例えられてきており、懐かしい心象風景を思い起こさせてくれる。








尾道市　尾道を象徴する景観

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	私の目指す風景と地域づくりを巡る旅②	場所	福山市

福山市鞆の浦の港町の風景も印象的である。鞆の浦は伝統的建造物群保存地区に選定された時の資料によると「万葉の時代より潮待ちの港として栄えた瀬戸内海の港町」と表現されており、地形的に良好な港の条件を備え、古来より海上交通の要衝として栄えた。

現在も雁木、波止、常夜灯、船番所、焚場といった江戸時代の港湾施設がほぼ完全な形で残っている。そして、街路や海岸線も 300 年前の姿をよく留めており、伝統的な町家や寺社、石垣等の石造物、港湾施設等が一体となって良好に残り、瀬戸内の港町としての歴史的風致をよく伝えている。








福山市 鞆の浦を象徴する景観

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	素朴な日本の風景を実感する旅①	場所	うきは市、天草市等

いろいろな地域を旅していると素朴な日本の風景に出会うことがある。農山村の風景であったり、漁村の風景であったり、信仰の風景であったりと様々であり、懐かしさを感じさせるとともに、ほっとする空間を提供している。地元の人にとっては見慣れた風景かもしれないが、地域外からの来訪者にとっては日本の原風景といえるものである。

全国的に個性のない画一的な街並みの形成が進む中で、それぞれの地域に根ざした魅力資源を探求し、最大限に活用していくことが地域固有の風景の保全・創出につながり、地域のアイデンティティを確立していくのである。




うきは市　つづら棚田の農山村の風景




天草市　崎津集落の漁村の風景



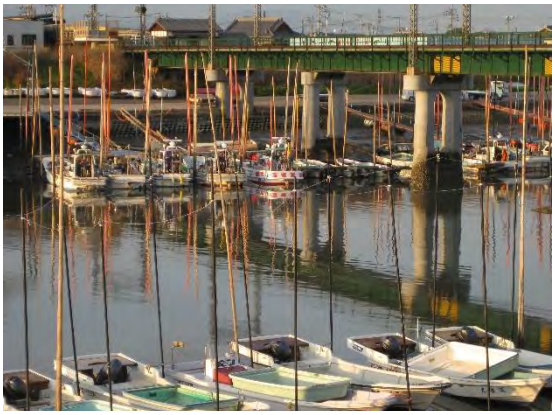

小布施町　信仰の風景

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	素朴な日本の風景を実感する旅②	場所	柳川市、別府市

名の知れた地域や場所でなくても、素朴な日本の風景にふと出会うことがある。普段見慣れない風景に思わず電車を途中下車して訪ねてみたり、観光名所となっている場所から一歩入った路地で予期せぬ空間に出会ったりと、旅先では思わぬ発見がある。共通しているのは、懐かしさを感じさせる風景である。地元の人にとっては見慣れた風景でも、来訪者にとっては日本の原風景といえるものである。

こうした身近な資源を活用し、地域固有の風景の保全・創出につなげ、地域のアイデンティティを確立していってほしい。





柳川市　矢部川橋梁付近の漁村風景







柳川市　沖端の漁村集落





別府市　上人ヶ浜温泉周辺の住宅地の別府石の塀による統一感のある街並み

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	素朴な日本の風景を実感する旅③－１	場所	伊万里市

今回の研究の終盤となる 2021 年の春に、松浦鉄道沿線の風景で気になっていた伊万里市山代町の楠久(くすく)地区と東山代町の里地区を訪問する機会があった。

楠久地区は隣の楠久津(くすくつ)地区とともに佐賀藩が海上交通の要衝であった伊万里湾の抑えとして番所を整備した歴史があり、今でも船奉行宅地や本陣、寺社、港湾施設等の史跡が約 50 ヶ所にわたって点在している。また、創業 300 年余を有する松浦一酒造を中心に当時の名残を感じさせる町並みが続いている。フットパスのコースもあり、こだわりのカフェや飲食店、和菓子屋等とともに、まち歩きの楽しさを演出している。

（次ページに続く）
















伊万里市 山代町楠久(くすく)地区の町並みと魅力資源

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	素朴な日本の風景を実感する旅③－２	場所	伊万里市

（次ページから続く）

里地区では、1589 年に筑後国柳川の鷹尾城主だった田尻氏が山代の地に移封され、山代郷を支配することになった際に、里集落を東西に伸びる「小路(くうじ)」と呼ばれる街路が整備された。その両側には田尻氏の家臣たちが屋敷を構えていたとされ、緑豊かな矢竹の生垣が整然とならぶ姿が往時の武家屋敷の姿を偲ばせている。また、周辺には寺社等の史跡や田園も多く、素朴な日本の風景を感じさせている。

楠久地区や里地区においても、身近な資源を活用し、地域固有の風景の保全・創出につなげ、地域のアイデンティティを確立していってほしい。












伊万里市 東山代町里地区の町並みと魅力資源

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	大景観を実感する旅①－１	場所	鹿児島市、阿蘇市等

画一化する街並みの中で地域の個性を感じにくくなっているが、市域等の広い空間で見てみるとそれを実感しやすい。代表的なものが、地形がもたらす風景（＝大景観）である。シンボルとなる山が見える景観であったり、広大な草原景観や海の景観であったりする。市街地においても美しい海・山・空で構成される景観や坂・海・山で構成される景観がある。いずれも景観のダイナミズムを感じさせるものであり、地域のシンボルとなっている。

景観づくりにあたっては、大景観から考えることで地域の個性を明確にすることが重要である。




鹿児島市　市内の至る所から見える桜島




阿蘇市　四季折々の変化がある草千里




佐世保市　展海峰から見た九十九島の景観（左）と佐世保湾の景観（右）

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	大景観を実感する旅①－２	場所	唐津市、函館市等

画一化する街並みの中で地域の個性を感じにくくなっているが、市域等の広い空間で見てみるとそれを実感しやすい。代表的なものが、地形がもたらす風景（＝大景観）である。シンボルとなる山が見える景観であったり、広大な草原景観や海の景観であったりする。市街地においても美しい海・山・空で構成される景観や坂・海・山で構成される景観がある。いずれも景観のダイナミズムを感じさせるものであり、地域のシンボルとなっている。

景観づくりにあたっては、大景観から考えることで地域の個性を明確にすることが重要である。




唐津市　鏡山からの景観（左）、福岡市　福岡タワーからの景観（右）




函館市　坂・海・山・空が織り成す景観（左）、市街地・海・山・空が織り成す景観（右）




小樽市　運河・山・空が織り成す景観（左）、由布市　市街地・山・空が織り成す景観（右）

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	眺望景観の魅力を実感する旅	場所	長崎市、尾道市等

大景観と関連するが、眺望ポイント（山、丘、海、河川、展望台、高層ビル等）に行くと、地形や都市の骨格がよくわかる。それらを理解することは、地域特性の把握につながり、地域への誇りや愛着につながると筆者は考えている。

地勢（港町や山間のまち、平野部等）、都市規模の大小等でそれぞれ異なった地域特性があり、眺望ポイントから見える景観（市街地の広がり・形、山、海岸線、道、川、線路、建物等）を通して、地域づくりや景観づくりのヒントを得ることができる。




長崎市　グラバー園からの景観（左）、尾道市　千光寺付近からの景観（右）




唐津市　鏡山からの景観（左）、高森町　高森殿の杉付近からの景観（右）




ハイデルベルク城からの景観（左）、ローテンブルク市庁舎からの景観（右）

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	流域景観の魅力を実感する旅	場所	矢部川流域

大景観や広域景観を実感しやすいのが河川流域の景観である。山間部の上流域から中流域を経て、海につながる下流域に至るまで治水利水だけでなく生態系、歴史、文化、営み等の面で相互につながりを持つ多様な景観が創出されている。各流域の地域特性を大切にし、そこに暮らす人々の誇りや愛着を醸成しながら、流域全体で市町村の境界を超え相互に連携して景観保全に取り組み、各地域及び流域全体のアイデンティティを確立していってほしい。

ここでは、八女市矢部村～柳川市・みやま市の有明海に注ぐ矢部川流域を紹介する。




矢部川上流域　八女市矢部村の山村景観




矢部川中流域　八女市黒木町の歴史的町並み




矢部川下流域　筑後市～みやま市の矢部川と大楠林の景観（左）、柳川市～みやま市の漁村景観（右）

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	港の風景と風土を巡る旅	場所	長崎市、佐世保市等

港には工業製品・エネルギー・食料等の貿易・輸送を支える機能、津波や高潮等の自然災害に対する防災機能の他、観光やレクリエーション機能等の各地域に根ざした様々な役割があり、それらの役割に応じて停泊する船も貨物船やフェリー、客船、漁船など様々であり、独特の風景が創出されている。

また、軍港や豪華客船が停泊する大きな港から漁村の小さな港まで規模も様々であり、それぞれの歴史や生活が息づく風景が創られ、地域のアイデンティティとなっている。




長崎市　長崎港（左）、佐世保市　佐世保港（右）




北九州市　門司港（左）、函館市　函館港（右）




福山市　鞆の浦港（左）、唐津市　呼子港（右）

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	造船所のある風景を巡る旅	場所	長崎市、佐世保市等

造船所は造る船の大きさや種類に応じて大小様々なものがあり、特に大きなクレーンを有する造船所は市内の各所から見え、ランドマークとなっている。長崎市にある三菱重工長崎造船所は前身の長崎鎔鉄所時代を含め 160 年以上の歴史があり、世界遺産の構成資産の一つであるジャイアント・カンチレバークレーンは 110 年以上経た今も現役で稼働し、長崎市のシンボルの一つとなっている。

また、佐世保市にある佐世保重工業佐世保造船所は旧海軍時代から続く歴史ある造船所で、佐世保市ならではの景観を形成している。




長崎市　三菱重工長崎造船所




佐世保市　佐世保重工業佐世保造船所




福岡市　福岡造船福岡工場

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	気候や風土の違いを体感する旅	場所	洞爺湖町、阿蘇市等

全国各地を旅していると、気候や風土の違いを実感することが多い。わかりやすいのが、山の表情や建物の屋根の形・材料かもしれない。北海道の有珠山（洞爺湖町等）や熊本県の阿蘇山（阿蘇市等）、鹿児島県の開聞岳（指宿市）を比較すると、火山の種類や撮影時期は異なるが、植生の違いが明らかである。

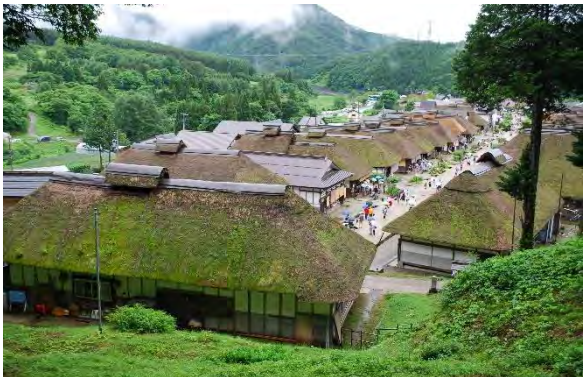
町並みを比較すると、秋田県の横手市増田地区の内蔵は雪国特有のものであり、地域の個性を醸し出している。また、福島県下郷町の大内宿の茅葺き屋根や沖縄県那覇市の首里金城地区の赤瓦葺きの屋根も地域固有のもので、地域のアイデンティティを確立している。




洞爺湖町等　有珠山（左、2018 年 10 月）、阿蘇市等　阿蘇山（右、2018 年８月）




指宿市　開聞岳（左、2018 年１月）、横手市　増田地区の内蔵（右）




下郷町　大内宿の茅葺き屋根の町並み（左）、那覇市　首里金城地区の赤瓦葺きの屋根（右）

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	異文化を体感する旅①	場所	長崎市

長崎市を旅していると、外国との交流の歴史（中国やオランダとの貿易、キリスト教の布教と幕府や明治政府からの迫害の歴史）とそれに伴う外国の文化を市内の随所に感じることができる。そうした歴史や文化を伝える寺院（崇福寺、興福寺、福済寺、聖福寺等）、孔子廟、教会（大浦天主堂、浦上天主堂等）、日本二十六聖人記念館、出島等が今も市民生活や観光・交流の中に息づき、長崎市の大きな個性となっている。




長崎市　崇福寺




長崎市　孔子廟（左）、長崎市　大浦天主堂（右）




長崎市　浦上天主堂（左）、長崎市　二十六聖人記念館（右）

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	異文化を体感する旅②	場所	長崎市、天草市等

長崎市の出津教会は石積みの外海（そとめ）集落、また、天草市の崎津教会は漁村の崎津集落の中にあって（両集落とも国の重要文化的景観に選定されている）、潜伏キリシタンの歴史が色濃く感じられ、世界遺産の構成資産の一つとなっている。

また、対馬市の厳原町にある萬正院は宗家累代の菩提寺であり、400 年以上の歴史がある。百雁木と呼ばれる対馬島内の石を使って作られた 132 段の階段は荘厳な雰囲気を感じさせ、九州本土と朝鮮半島の間に位置する離島という地域性が強く感じられる場所である。





長崎市 石積みの外海（そとめ）集落と出津教会





天草市 漁村の崎津集落と崎津教会





対馬市 萬松院

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	自然・歴史・食を楽しむ温泉ツーリズムの旅①－１	場所	竹田市

2020 年の秋、ふとしたきっかけで大分県竹田市の長湯温泉を2回訪問した。芹川沿いに老舗の温泉旅館が建ち並び、風情ある景観を醸し出している。長湯温泉は「日本一の炭酸泉」と呼ばれ、血管を拡張させる重炭酸イオンが溶け込んでいるのが特徴とされ（重炭酸泉）、ぬるめの湯に長めに浸かると体が芯から温まるのが実感できる。

阿蘇くじゅう国立公園等の雄大な自然の中にある長湯温泉には特徴のある温泉の他、古くからの歴史を伝える神社やお寺、薬師堂、多くの文化人が詠んだ歌碑、大自然が育んだ豊かな湧き水、きれいな空気と水で育った地元食材を使った料理を提供する飲食店等があり、温泉に浸かるだけでなく、地域の自然や歴史、文化、食を楽しむことができる。長期滞在できる施設もあり、時間を見つけて長湯ならではの温泉ツーリズムや温泉療行を計画したいと考えている。











竹田市 長湯温泉 芹川沿いの温泉街の景観

大テーマ	風景、気候、風土、文化		
テーマ	自然・歴史・食を楽しむ温泉ツーリズムの旅①－２	場所	竹田市

2020 年の秋、ふとしたきっかけで大分県竹田市の長湯温泉を2回訪問した。芹川沿いに老舗の温泉旅館が建ち並び、風情ある景観を醸し出している。長湯温泉は「日本一の炭酸泉」と呼ばれ、血管を拡張させる重炭酸イオンが溶け込んでいるのが特徴とされ（重炭酸泉）、ぬるめの湯に長めに浸かると体が芯から温まるのが実感できる。

阿蘇くじゅう国立公園等の雄大な自然の中にある長湯温泉には特徴のある温泉の他、古くからの歴史を伝える神社やお寺、薬師堂、多くの文化人が詠んだ歌碑、大自然が育んだ豊かな湧き水、きれいな空気と水で育った地元食材を使った料理を提供する飲食店等があり、温泉に浸かるだけでなく、地域の自然や歴史、文化、食を楽しむことができる。長期滞在できる施設もあり、時間を見つけて長湯ならではの温泉ツーリズムや温泉療行を計画したいと考えている。




ラムネ温泉館（左）、お食事処 正直屋のとり天定食（右）





湯乃原天満社（左）と境内にある薬師如来（中）、陽光院薬泉堂という飲泉場（右）





長湯温泉街で見かけた文化人が読んだ歌碑
竹田市 長湯温泉

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	伝統的建造物群保存地区を巡る旅①	場所	函館市、仙北市等

地域の風土や歴史、文化が息づく最たる例は、伝統的建造物群保存地区に代表される歴史的な町並みであろう。北海道から沖縄まで気候、風土、文化等が異なり、それに応じた個性豊かな町並みが形成されてきた。宿場町や門前町、武家屋敷や城下町、在郷町、社寺町等の多くの歴史的な町並みが、少子高齢化の進行、後継者不足等の様々な課題を乗り越えて、多くの人々の地域への誇りと努力、そして自治体や国の強い支援によって維持継承されている。そして、国内外から多くの来訪者が訪れ、地域の方々との交流を通じて、その魅力を体験体感している。





函館市　元町末広町（左）、仙北市　角館（右）





喜多方市　小田付（おたづき）（左）、下郷町　大内宿（右）





川越市　川越（左）、倉敷市　倉敷川畔（右）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	伝統的建造物群保存地区を巡る旅②	場所	八女市、うきは市等

北部九州にも八女福島（八女市）や筑後吉井（うきは市）、浜中町八本木宿（鹿島市）、有田内山（有田町）、東山手（長崎市）、神代小路（雲仙市）等、各地域の気候、風土、文化等に根ざした固有の町並みが形成されている。

現在、全国には 123（2020 年 12 月 23 日現在）の国の重要伝統的建造物群保存地区がある。町並みの維持継承には様々な課題があるが、今後も官民一体となって、各地域固有の風土や歴史を活かしたまちづくりを進めていってほしい。




八女市　八女福島（左）、うきは市　筑後吉井（右）





鹿島市　浜中町八本木宿（左）、有田町　有田内山（右）




長崎市　東山手（左）、雲仙市　神代小路（右）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	歴史的町並みを巡る旅①	場所	小樽市、長岡市等

重要伝統的建造物群保存地区以外にも地域の気候、風土、文化等に根ざした歴史的な町並みは数多く存在する。筆者が最近訪問した地域では、小樽運河とその周辺に点在する歴史的建造物による港町・小樽を象徴するノスタルジックな町並み、20 世紀初め頃のレトロな建物が建ち並ぶ会津若松市七日町通りの町並み、長岡市谷内（やち）の雁木のある雪国特有の町並み、連続した黒塀により城下町らしさが感じられる村上市安善小路の町並み、武家屋敷や白壁の土蔵等が建ち並び城下町の名残を色濃く残す臼杵市二王座周辺の町並み等が印象に残っている。




小樽市　小樽運河周辺（左）、会津若松市　七日町通り（右）




長岡市　谷内（やち）（左）、村上市　安善小路（あんぜんこうじ）（右）




臼杵市　臼杵（左）、那覇市　首里金城地区（右）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	歴史的町並みを巡る旅②	場所	北九州市、福岡市等

筆者の身近な福岡県内では、木屋瀬（北九州市）や御供所（福岡市）、内野（飯塚市）、小保・榎津（大川市）、赤間宿（宗像市）、津屋崎（福津市）等において、各地域固有の歴史的な環境を活かした町並みが形成されている。この中には伝統的建造物群保存地区を目指して活動を推進している地域もある。

町並みの維持継承には様々な課題があるが、地域内の連携強化と行政との協働のまちづくりの推進により、その地域ならではの個性を活かしたまちづくりを進めていってほしい。




北九州市 木屋瀬（左）、福岡市 御供所（右）




飯塚市 内野（左）、大川市 小保・榎津（右）




宗像市 赤間宿（左）、福津市 津屋崎（右）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	ヨーロッパの伝統的町並みを巡る旅①－１	場所	ドイツ

ヨーロッパにおいては、スクラップ＆ビルドの繰り返しで地域固有の町並みが大きく失われた日本と違い、各地域の風土や歴史、文化を活かした美しい町並みが形成され、現在も継承されている。中世の面影が色濃く残るまちやカラフルに彩られたまち、自然景観豊かなまちなど様々であるが、地域に根ざした固有の町並みが創出され、国内外から多くの来訪者が訪れ、賑わいを見せている。

ここでは、筆者の訪問回数が比較的多いドイツの中で、2019 年5月に訪れた都市の町並みを紹介する。






ローテンブルク




ハイデルベルク

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	ヨーロッパの伝統的町並みを巡る旅①－２	場所	ドイツ

ヨーロッパにおいては、スクラップ＆ビルドの繰り返しで地域固有の町並みが大きく失われた日本と違い、各地域の風土や歴史、文化を活かした美しい町並みが形成され、現在も継承されている。中世の面影が色濃く残るまちやカラフルに彩られたまち、自然景観豊かなまちなど様々であるが、地域に根ざした固有の町並みが創出され、国内外から多くの来訪者が訪れ、賑わいを見せている。

ここでは、筆者の訪問回数が比較的多いドイツの中で、2019 年5月に訪れた都市の町並みを紹介する。




ビュルツブルク




リューデスハイム




ガルミッシュパルテンキルヘン

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	ヨーロッパの伝統的町並みを巡る旅②	場所	イギリス

コッツウォルズ地方はロンドンから約 200 ㎞西に位置し、イギリスで最もイギリスらしいカントリーサイドの風景が残る地方であり、自然景勝地域に指定されている。コッツウォルズ地方固有の景観を創り出しているのは魚卵状石灰岩であり、人々はそれを材料にして、知恵と労力と見事な技巧を駆使し、小さな田舎家や壮大な邸宅、そびえ立つ教会等を生み出した。

今回は典型的なイギリスの美しい村と言われているカッスル・クームと、コッツウォルズ地方の中でもひと際その美しさを讃えられているバイブリーを紹介する。











カッスル・クーム



バイブリー

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	重要文化的景観を巡る旅①	場所	長崎市、天草市

伝統的町並みを有する地域以外にも日々の生活に根ざした身近な景観は多く存在する。その代表的なものが重要文化的景観である。長崎市の外海(そとめ)集落は練壁（結晶片岩の石に赤土及び藁すさを練り込んで築いた伝統的な石壁）やド・ロ壁（パリ外国宣教会のド・ロ神父によって藁すさに代わり赤土に石灰を混ぜる練積みの石壁）等の多種多様な石積み構造物による景観が大きな特徴である。

また、天草市の崎津集落はゴシック様式の崎津教会を中心にトウヤ（軒を連ねる家々に挟まれ形成された海に出るための小路）やカケ（船舶の碇泊や漁具の整備・魚干し等の生業施設である海上に張り出した構造物）等により特徴的な漁村景観を形成している。 （次ページのコラム参照）











長崎市 外海(そとめ)集落と出津教会



天草市 崎津集落と崎津教会

【参考】外海集落と﨑津集落

（2017 年 12 月までに執筆したコラムより）

2016 年の夏に長崎市外海（そとめ）と天草市﨑津の集落を巡る旅に出た。外海は初めての訪問であり、目的は出津教会を見ることであった。出津教会に到着するまで至る所に見られる石積みがこの集落の特徴であることがすぐにわかった。

長崎市のホームページによると、集落の中には、斜面地を開墾した際に出土した結晶片岩を用いて、土留めの石垣、防波・防風の石築地、居住地の石塀、住居・蔵の石壁など多種多様の石積み構造物が築かれてきた。石積みは、結晶片岩の石に赤土及び藁すさを練り込んで築いた伝統的な石壁である「練塀」のほか、明治期にはパリ外国宣教会のド・ロ神父によって藁すさに代わり赤土に石灰を混ぜる練積みの「ド・ロ壁」が導入され、現在もこうした石積み構造物が数多く残されている。このように、外海の石積集落には、生活生業に関連した多種多様な石積み構造物がみられ、この地域特有の石積文化の集落景観が形成されている（2012 年に国の重要文化的景観に選定）。









外海（そとめ）の石積集落景観

（次ページに続く）

また、﨑津は 2004 年の夏以来、12 年振りの訪問となった。前回は車で立ち寄る程度で﨑津教会のイメージしか残っていなかったが、今回は教会を中心とした漁村集落を散策した。羊角湾の穏やかで青緑色の海が印象的で、漁船が港に集い、町の中心部にゴシック様式の﨑津教会がそびえている。肩を寄せ合うように建つ民家や路地、「トウヤ」と呼ばれる軒と軒の間にある路地が景観を特徴付けている。名物の「杉ようかん」のお店、寿司屋の他、最近ではカフェや資料館もオープンし、地域づくりを目指す人たちが町の魅力を伝えようと動き始めている。

集落の約 70%がキリシタンだった﨑津集落は、禁教期にも信仰が密かに続いた小さな漁村であり、1873 年のキリスト教の禁教が解かれるまでの 250 年もの間の弾圧・潜伏・キリスト教復活に至る痕跡を見ることができる。2011 年に国の重要文化的景観に選定され、現在、﨑津集落を含む「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が、2018 年の世界文化遺産の登録を目指し、改めて推薦候補に選定されている。（※2018 年 7 月に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として世界遺産に登録された。）

外海集落や﨑津集落を訪問することで、改めて地域の風土や歴史を活かしたまちづくりの重要性を痛感した。







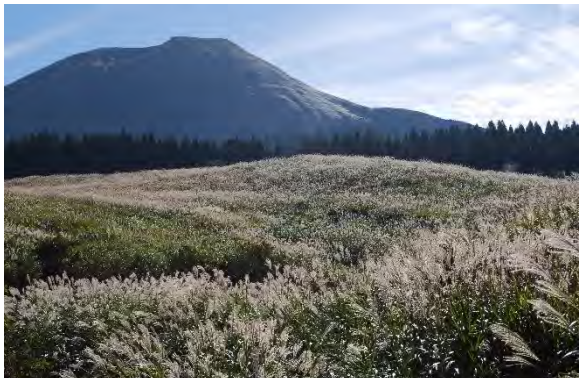


﨑津の集落景観

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	重要文化的景観を巡る旅②	場所	阿蘇市、宇城市等

この他にも筆者がよく訪れる身近な場所としては、阿蘇の文化的景観・草原景観・森林景観（阿蘇市、南阿蘇村等）や三角浦の文化的景観（宇城市）、小鹿田焼の里（日田市）、田染荘小崎の農村景観（豊後高田市）等があり、日々の生活に根ざした身近な景観が形成されている。

現在、全国で 65（2019 年 10 月 16 日現在）の重要文化的景観が選定されており、その文化的な価値を正しく評価し、地域で守り、次世代へと継承していってほしい。




阿蘇市等 阿蘇の草原景観




宇城市 三角浦の文化的景観（三角西港）




日田市 小鹿田焼の里

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	集落を巡る旅①	場所	波佐見町、有田町等

筆者は現在の仕事の関係もあり長崎県内や佐賀県内のいろいろな場所を訪問しているが、その中で印象に残っているのが波佐見町の「陶郷・中尾山」の集落景観である。ここは江戸時代の正保元年（1644 年）の磁器の生産開始以来、国内有数の焼物の里として知られている波佐見町南東部の集落であり、谷間の空に伸びる煉瓦造りの煙突群が陶芸の里としての佇まいを残し、個性的な産業景観を生み出している。

また、伊万里市の大川内山の煙突群や有田町のドンバイ塀も独特の景観を創出している。



波佐見町中尾山 煙突群が創り出す集落景観



伊万里市大川内山 煙突群が創り出す集落景観



有田町 ドンバイ塀が創り出す集落景観

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	集落を巡る旅②	場所	東峰村、うきは市等

筆者は広域連携や都市と農山村の交流・連携に興味があることもあり、身近な棚田を訪問する機会も多い。農山村では住民の高齢化が進んでいることもあり、棚田の維持・継承にも様々な課題を抱えている。それは都市の中で伝統的町家を維持・継承していくことと同じ状況であり、筆者はそれらを重ね合わせながら各地域を訪問している。

農山村の棚田オーナー制度や都市部の町家の保存・活用等は、地域の宝を将来にわたり継承していくための方策であり、いろいろな地域を訪問して見聞する中で、地域づくりのヒントを得ることができるのである。




東峰村　竹地区の棚田




うきは市　つづら棚田




豊後高田市　田染荘（たしぶのしょう）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	集落を巡る旅③	場所	唐津市

漁村集落については、今まで福山市の鞆の浦や天草市の﨑津集落等を紹介してきたが、筆者の身近な場所にも漁師町の雰囲気が感じられる場所がある。唐津市の呼子町は松浦半島の入江に面する細長い港町で、古くから海上交通の要塞、捕鯨船の根拠地として繁栄した。

名物のイカや朝市が多くの人を惹きつけ、捕鯨とゆかりのある商家や屋敷、寺社等が建ち並ぶ一方、来訪者があまり足を踏み入れない路地には古い町並みが広がり、江戸時代の面影を残す建物も多い。地域内のいろいろな場所で捕鯨や漁師町の痕跡を感じることができる。




唐津市呼子町　海の風景





唐津市呼子町　朝市の風景（左）、瓦屋根が続く町並み（右）




唐津市呼子町　商家が建ち並ぶ町並み（左）、鯨組主中尾家屋敷（右）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	身近な街道の旅①－１	場所	唐津街道

筆者の身近な街道の旅は、唐津街道と長崎街道である。ここ数年で訪問回数が多いのは、唐津街道沿いでは宗像市、福岡市、唐津市、長崎街道沿いでは鳥栖市、佐賀市、鹿島市、諫早市、大村市、長崎市である。宿場町や寺町、門前町、松並木であったり、街道の起終点や分岐点、脇街道であったりと様々な特性を有しており、それぞれの地域の歴史や魅力を感じることができる。

特性を持った各地域が相互に補完連携し、個性を磨きながら有機的にネットワークすることで、街道全体及び各地域のさらなる魅力向上につながると筆者は考えている。




唐津街道　宗像市赤間宿（左）、福岡市箱崎宿（右）




唐津街道　福岡市　御供所（ごくしょ）地区の聖福寺（左）、福岡城址（右）




唐津街道　唐津市　虹の松原（左）、唐津城（右）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	身近な街道の旅①－２	場所	長崎街道

筆者の身近な街道の旅は、唐津街道と長崎街道である。ここ数年で訪問回数が多いのは、唐津街道沿いでは宗像市、福岡市、唐津市、長崎街道沿いでは鳥栖市、佐賀市、鹿島市、諫早市、大村市、長崎市である。宿場町や寺町、門前町、松並木であったり、街道の起終点や分岐点、脇街道であったりと様々な特性を有しており、それぞれの地域の歴史や魅力を感じることができる。

特性を持った各地域が相互に補完連携し、個性を磨きながら有機的にネットワークすることで、街道全体及び各地域のさらなる魅力向上につながると筆者は考えている。




長崎街道　北九州市木屋瀬（こやのせ）宿（左）、飯塚市冷水峠（右）




長崎街道　佐賀市柳町（左）、脇街道である多良海道の鹿島市肥前浜宿（右）




長崎街道　大村市松原宿（左）、長崎市崇福寺（右）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	身近な街道の旅②	場所	日向街道等

いろいろな地域に出かけて行くと予期せぬ街道に出会うことがある。古い町並みが連続しているわけではないが、道の形や建物の並び方、道標等により、かつては街道に面して栄えていたことが推測できる。現在は商店街の衰退、空き家の増加、少子高齢化等によりかつての賑わいはほとんど感じられないが、まちの形成の歴史や痕跡を感じることができる。

こうした歴史を後世に伝え、地域の活性化にどうつなげていくのかが大きな課題であるが、それは地域づくりの楽しさでもある。





日向街道　豊後大野市三重町市場





中津街道　行橋市　行事（ぎょうじ）付近（左）、大橋付近（右）





御厨（みくりや）・今福街道　松浦市今福

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	寺町を巡る旅①	場所	福岡市、福山市等

寺町は日本全国の都市に見られ、多くの城下町においては寺院や墓地を市街の外縁にまとめ、敵襲に対して防衛線とする意図があって計画的に配置された。身近な場所であれば、筆者が福岡市役所時代に携わった博多区の御供所（ごくしょ）地区が代表的な寺町であり、多くの寺院により都心部に位置しながらも福岡市内でも有数の歴史的環境を有し、コントラストのある都心づくりの一翼を担っている。

また、福山市の鞆の浦や中津市、島原市もお城周辺に寺院が集積して寺町と呼ばれるエリアを形成し、当時の面影を現在に伝えている。




福岡市　御供所（ごくしょ）の寺町




福山市　鞆の浦の寺町




中津市の寺町（左）、島原市の寺町（右）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	寺町を巡る旅②	場所	東京都台東区等

防衛の目的とは別に形成された寺町もある。台東区谷中は江戸時代に町人町に寺院が集められ、寺町が形成され門前町として繁栄していった。戊辰戦争の戦火や第二次世界大戦の空襲を免れ、坂と寺と路地のあるまちとして下町の風情を現在に伝えている。周辺の根津、千駄木を含め「谷根千（やねせん）」と呼ばれ、江戸情緒あふれるエリアとして人気を博している。

また、尾道市や長崎市の斜面地にも寺院が集積し、寺町と呼ばれるエリアを形成し、坂と寺と路地のあるまちとして多くの来訪者が訪れる魅力スポットとなっている。




東京都台東区　谷中の寺町




尾道市の寺町

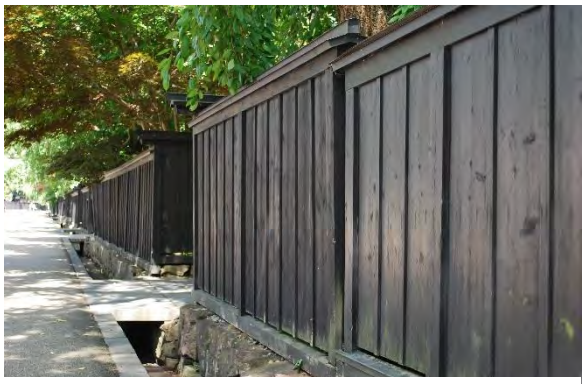



長崎市の寺町

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	武家屋敷を巡る旅①－１	場所	仙北市、高梁市等

16 世紀末から 17 世紀初めにかけて建設された城下町では、軍事的配慮と封建的な身分制度に基づき武士、商人、職人等の居住区や寺社等が配置され、武家町は主にお城の近くに置かれた。広い敷地割と生垣や板塀、石塀による町並みが特徴で、道路に面して建つ町家と異なり、建物が建て替わっても町並みの連続性が維持され、当時の面影を現在に伝えている。

また、生垣の種類や塀の造り方により地域性が感じられるのも武家屋敷の特徴である。その一方、過疎化、少子高齢化、空き家の増加等が町並みを維持継承していく上での大きな課題となっている。

仙北市　角館の武家屋敷




高梁市　旧城下の武家屋敷




島原市　下ノ丁（したんちょう）の武家屋敷

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	武家屋敷を巡る旅①－２	場所	雲仙市、大村市等

16 世紀末から 17 世紀初めにかけて建設された城下町では、軍事的配慮と封建的な身分制度に基づき武士、商人、職人等の居住区や寺社等が配置され、武家町は主にお城の近くに置かれた。広い敷地割と生垣や板塀、石塀による町並みが特徴で、道路に面して建つ町家と異なり、建物が建て替わっても町並みの連続性が維持され、当時の面影を現在に伝えている。

また、生垣の種類や塀の造り方により地域性が感じられるのも武家屋敷の特徴である。その一方、過疎化、少子高齢化、空き家の増加等が町並みを維持継承していく上での大きな課題となっている。




雲仙市　神代小路（こうじろくうじ）の武家屋敷




大村市　上小路（うわこうじ）の武家屋敷（左）、草場小路（くさばこうじ）の武家屋敷（右）




対馬市　厳原の武家屋敷

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	武家屋敷を巡る旅①－３	場所	杵築市、臼杵市等

16 世紀末から 17 世紀初めにかけて建設された城下町では、軍事的配慮と封建的な身分制度に基づき武士、商人、職人等の居住区や寺社等が配置され、武家町は主にお城の近くに置かれた。広い敷地割と生垣や板塀、石塀による町並みが特徴で、道路に面して建つ町家と異なり、建物が建て替わっても町並みの連続性が維持され、当時の面影を現在に伝えている。

また、生垣の種類や塀の造り方により地域性が感じられるのも武家屋敷の特徴である。その一方、過疎化、少子高齢化、空き家の増加等が町並みを維持継承していく上での大きな課題となっている。




杵築市 北台の武家屋敷




臼杵市 臼杵の武家屋敷




那覇市 首里金城地区の武家屋敷

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	歴史的港町を巡る旅①	場所	福山市、尾道市等

港町は中世や近世の頃から発達したものもあれば、明治時代に港湾都市として繁栄したものもある。中世から港町を形成している地域には、福山市の鞆の浦や尾道市の市街地地区、唐津市の呼子等があり、交易と流通の拠点として発展し、当時の名残を伝える町並みや新旧の多彩な歴史的建造物等により、今でも歴史的な港町の風情を感じることができる。

それぞれ港町としての都市形成の歴史は異なるが、それを伝える施設も充実し、港町らしさを感じることができる眺望ポイントもあり、町並み散策とあわせて楽しむことができる。




福山市　鞆の浦




尾道市　市街地地区




唐津市　呼子

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	歴史的港町を巡る旅②	場所	函館市、小樽市等

明治時代に港湾都市として繁栄した地域には、函館市の元町末広町や小樽市の小樽、宇城市の三角西港等があり、海や運河に沿ってまちが発展した。また、同時に都市計画も行われ、関連する倉庫群や石橋群、住区等が造られた。

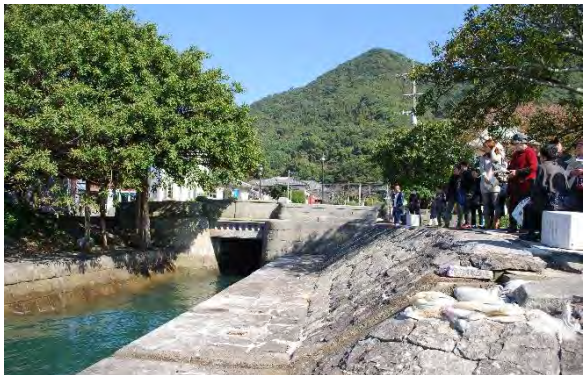
函館や小樽は観光地として、現在も国内外からの多くの来訪者で賑わっている。三角西港は建設当時と役割は変わり、港としての機能は三角港（東港）に移ってしまったが、当時の面影を残し、世界文化遺産の構成要素の一翼を担っている。




函館市　元町末広町




小樽市　小樽

宇城市　三角西港

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	川港のまちを巡る旅①	場所	嬉野市、柳川市

鉄道が普及する以前は物資の移送は舟運が中心であり、荷物の荷揚げ等の中継地点は経済の集積地点となり、米や木材、石材等の多くの物資が舟運によって運ばれ、川港町が発展していった。嬉野市の塩田津は川港としての特徴を伝える塩田石工による石垣や石段、土蔵、座蔵が建ち並び、長崎街道の陸運と有明海の水運を活かして商家町として発展した。

また、柳川市沖端は有明海に注ぐ沖端川河港の漁村集落の顔を持つ一方、沖端川と掘割とをつなぐ船溜りは柳並木、信仰の中心である水天宮等により魅力的な水辺空間を形成している。











嬉野市　塩田津



柳川市　沖端

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	川港のまちを巡る旅②	場所	熊本市

熊本市川尻地区は古くから海外との交易港として開け、江戸時代以降は緑川流域の物資の集散地や熊本藩の水軍基地として、また薩摩街道の宿場町として栄えた。今でも当時の石造りの船着き場跡や藩の米蔵跡（国指定史跡）等が残り、酒蔵を中心とした古い町並みも継承されている。

また、熊本市小島（おしま）地区もかつての河港都市で、2016 年の熊本地震で多くの商家が被害を受け伝統的な商家等は少なくなったが、船着き場跡や荷揚げ用の石段、航海の安全を祈念した恵比須像、醤油蔵等が当時の面影を伝えている。











熊本市　川尻地区



熊本市　小島（おしま）地区

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	路地の魅力を体感する旅①－１	場所	東京都台東区等

人通りの多い大通りから一歩脇道に入ったり、下町に行ったりすると様々な路地がある。ひっそりと佇む路地もあれば、賑わいのある路地もある。また、人情味溢れる路地や向こう三軒両隣のようなコミュニティ豊かな路地もあり、それぞれの地域の生活が見えてくる。共通しているのは、建物や塀、生垣に囲まれ、車が少なく安心して歩ける空間になっていることである。

そして何よりも新しい都市空間にはない「迷路のようなワクワク感」や「進んでいく先に何があるのかのドキドキ感」が路地の最大の魅力ではないだろうか。




東京都台東区谷中　人通りの多い通り（左）から一歩脇道に入った静寂の路地（右）




尾道市　市街地地区の路地




福山市　鞆の浦の路地

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	路地の魅力を体感する旅①－２	場所	長崎市、福岡市

人通りの多い大通りから一歩脇道に入ったり、下町に行ったりすると様々な路地がある。ひっそりと佇む路地もあれば、賑わいのある路地もある。また、人情味溢れる路地や向こう三軒両隣のようなコミュニティ豊かな路地もあり、それぞれの地域の生活が見えてくる。共通しているのは、建物や塀、生垣に囲まれ、車が少なく安心して歩ける空間になっていることである。

そして何よりも新しい都市空間にはない「迷路のようなワクワク感」や「進んでいく先に何があるのかのドキドキ感」が路地の最大の魅力ではないだろうか。




長崎市　東山手の路地（左）、唐人屋敷跡の路地（右）




長崎市　寺町の路地




福岡市御供所（ごくしょ）　聖福寺境内の路地（左）、普賢堂の路地（右）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	路地の魅力を体感する旅①－３	場所	天草市、小布施町等

人通りの多い大通りから一歩脇道に入ったり、下町に行ったりすると様々な路地がある。ひっそりと佇む路地もあれば、賑わいのある路地もある。また、人情味溢れる路地や向こう三軒両隣のようなコミュニティ豊かな路地もあり、それぞれの地域の生活が見えてくる。共通しているのは、建物や塀、生垣に囲まれ、車が少なく安心して歩ける空間になっていることである。

そして何よりも新しい都市空間にはない「迷路のようなワクワク感」や「進んでいく先に何があるのかのドキドキ感」が路地の最大の魅力ではないだろうか。





天草市﨑津集落　賑わいのある通り（左）から一歩脇道に入った「トウヤ」と呼ばれる路地（右）




東京都新宿区　神楽坂の路地（左）、小布施町　「栗の小径」と呼ばれる路地（右）





北九州市　鳥町食道街（左）、鹿児島市　名山堀の路地（右）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	昔ながらの市場を巡る旅①－１	場所	佐世保市

シャッター街が多くなる商店街の中で、大正から昭和にかけての昔ながらの市場が今でも息づいている場所がある。近海から水揚げされた海産物や水産加工品、青果、日曜雑貨、衣料品等の店が軒を並べ、古き良き大正や昭和のにおいがあちこちからしてきそうな生活感と人情味、コミュニティ溢れる商店街は、都市化が進展する中でレトロでディープな雰囲気を漂わせている。

働く人々の高齢化と建物の老朽化が進む中で、昔から親しまれてきた市場を維持継承していくことは大変なことであるが、地域の貴重な宝物（魅力資源）として活用していってほしい。











佐世保市　とんねる横丁



佐世保市　戸尾市場街

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	昔ながらの市場を巡る旅①－２	場所	北九州市、別府市

シャッター街が多くなる商店街の中で、大正から昭和にかけての昔ながらの市場が今でも息づいている場所がある。近海から水揚げされた海産物や水産加工品、青果、日曜雑貨、衣料品等の店が軒を並べ、古き良き大正や昭和のにおいがあちこちからしてきそうな生活感と人情味、コミュニティ溢れる商店街は、都市化が進展する中でレトロでディープな雰囲気を漂わせている。

働く人々の高齢化と建物の老朽化が進む中で、昔から親しまれてきた市場を維持継承していくことは大変なことであるが、地域の貴重な宝物（魅力資源）として活用していってほしい。




北九州市小倉北区　旦過市場





北九州市若松区　大正町商店街えびす市場





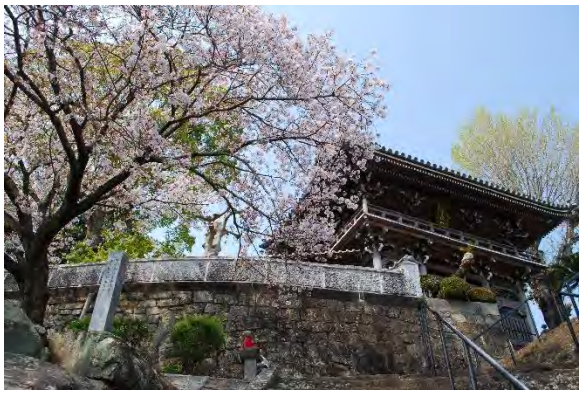
別府市　べっぷ駅市場

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	まちなか歴史散策の旅①－１	場所	諫早市

歴史のある都市に行くと、まちなかにそれぞれの都市の歴史を物語る痕跡がある。現存するものとしては寺社や町家、石橋、樹木等、過去にあったものとしては旧〇〇、〇〇跡等がある。それらがまとまったエリアに集積していると、行政や観光協会等が出しているマップを片手に歩いて散策・回遊できる。案内サインや説明版が掲示されているところも多く、散策の手助けになる。

一つひとつは点であるが、回遊することで線や面としてつながり、都市の歴史を垣間見ることができる。実際に歩いて都市を知ることこそ、地域づくりの基本である。ここでは、諫早市や大村市、北九州市若松の事例を紹介する。





諫早市 まちなか歴史散策（島原鉄道本諫早駅周辺に多くの歴史資源が集積）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	まちなか歴史散策の旅①－２	場所	大村市

歴史のある都市に行くと、まちなかにそれぞれの都市の歴史を物語る痕跡がある。現存するものとしては寺社や町家、石橋、樹木等、過去にあったものとしては旧〇〇、〇〇跡等がある。それらがまとまったエリアに集積していると、行政や観光協会等が出しているマップを片手に歩いて散策・回遊できる。案内サインや説明版が掲示されているところも多く、散策の手助けになる。

一つひとつは点であるが、回遊することで線や面としてつながり、都市の歴史を垣間見ることができる。実際に歩いて都市を知ることこそ、地域づくりの基本である。ここでは、諫早市や大村市、北九州市若松の事例を紹介する。








大村市 まちなか歴史散策（JR大村駅～大村公園にかけて多くの歴史資源が集積）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	まちなか歴史散策の旅①－３	場所	北九州市

歴史のある都市に行くと、まちなかにそれぞれの都市の歴史を物語る痕跡がある。現存するものとしては寺社や町家、石橋、樹木等、過去にあったものとしては旧〇〇、〇〇跡等がある。それらがまとまったエリアに集積していると、行政や観光協会等が出しているマップを片手に歩いて散策・回遊できる。案内サインや説明版が掲示されているところも多く、散策の手助けになる。

一つひとつは点であるが、回遊することで線や面としてつながり、都市の歴史を垣間見ることができる。実際に歩いて都市を知ることこそ、地域づくりの基本である。ここでは、諫早市や大村市、北九州市若松の事例を紹介する。









北九州市若松　まちなか歴史散策（若松港～JR若松駅にかけて多くの歴史資源が集積）

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	思い出の場所を再訪する旅①－１	場所	宇城市

筆者は大学に入学してから建築や都市を巡る旅を始め 2021 年３月で 45 年になるが、この間、思い出の場所や印象に残る場所を再訪することもある。例えば、大学の卒業研究のフィールドであった三角西港（宇城市）、広域連携や都市と農村の交流・連携に興味を持つきっかけとなったつづら棚田（うきは市）、地域づくりの原点である小布施町等である。海外の都市では、ベネチアやローテンブルク、ハイデルベルクの街並み、ベルリンの都市開発、シュトゥットガルトの環境にやさしい都市づくり等が印象に残り、再訪する機会に恵まれた。

筆者にとって、思い出の場所を再訪する旅は、建築や地域づくりの原点に返る旅でもある。









左：宇城市三角西港　寂れた漁村のイメージが強く、ほとんど来訪者のいなかった 1982 年２月。
右：2015 年に世界文化遺産に登録され、多くの来訪者で賑わうようになった 2017 年 11 月。

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	思い出の場所を再訪する旅①－２	場所	うきは市

筆者は大学に入学してから建築や都市を巡る旅を始め 2021 年３月で 45 年になるが、この間、思い出の場所や印象に残る場所を再訪することもある。例えば、大学の卒業研究のフィールドであった三角西港（宇城市）、広域連携や都市と農村の交流・連携に興味を持つきっかけとなったつづら棚田（うきは市）、地域づくりの原点である小布施町等である。海外の都市では、ベネチアやローテンブルク、ハイデルベルクの街並み、ベルリンの都市開発、シュトゥットガルトの環境にやさしい都市づくり等が印象に残り、再訪する機会に恵まれた。

筆者にとって、思い出の場所を再訪する旅は、建築や地域づくりの原点に返る旅でもある。








左：うきは市つづら棚田　棚田オーナーとして都市と農村の交流活動に参加していた 2005 年５月、９月。
右：久し振りに訪問した 2018 年９月。黄金色に輝く稲穂と彼岸花が見頃を迎えていた。

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	思い出の場所を再訪する旅①－３	場所	小布施町

筆者は大学に入学してから建築や都市を巡る旅を始め 2021 年３月で 45 年になるが、この間、思い出の場所や印象に残る場所を再訪することもある。例えば、大学の卒業研究のフィールドであった三角西港（宇城市）、広域連携や都市と農村の交流・連携に興味を持つきっかけとなったつづら棚田（うきは市）、地域づくりの原点である小布施町等である。海外の都市では、ベネチアやローテンブルク、ハイデルベルクの街並み、ベルリンの都市開発、シュトゥットガルトの環境にやさしい都市づくり等が印象に残り、再訪する機会に恵まれた。

筆者にとって、思い出の場所を再訪する旅は、建築や地域づくりの原点に返る旅でもある。








小布施町　1997 年～2000 年に3度訪問。「外はみんなのもの、内は自分のもの」「美日常」「小布施流のまちづくり」の考え方に刺激を受ける。2018 年 11 月に久し振りに訪問。多くの来訪者で賑わっていた。

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	思い出の場所を再訪する旅①－４	場所	ドイツ

筆者は大学に入学してから建築や都市を巡る旅を始め 2021 年３月で 45 年になるが、この間、思い出の場所や印象に残る場所を再訪することもある。例えば、大学の卒業研究のフィールドであった三角西港（宇城市）、広域連携や都市と農村の交流・連携に興味を持つきっかけとなったつづら棚田（うきは市）、地域づくりの原点である小布施町等である。海外の都市では、ベネチアやローテンブルク、ハイデルベルクの街並み、ベルリンの都市開発、シュトゥットガルトの環境にやさしい都市づくり等が印象に残り、再訪する機会に恵まれた。

筆者にとって、思い出の場所を再訪する旅は、建築や地域づくりの原点に返る旅でもある。









ローテンブルク（左）、ハイデルベルク（右）。1987 年に初めて訪問、2019 年に再訪。ローテンブルク市庁舎やハイデルベルク城から見る統一された瀟洒な市街地の街並みはほとんで変わっていなかった。

大テーマ	町並み、集落、地域、路地、市場		
テーマ	思い出の通学路を巡りながら故郷の再生を考える旅	場所	行橋市

筆者の故郷は福岡県行橋市であり、高校卒業まで過ごした。当時は商店街も賑やかで北九州市のベッドタウンとして発展していた。当時から人口は増えているが、実家に帰る度に商店街が衰退し、まちの中心部の活気がなくなっていくのが気になっていた。ウォーキングを兼ねて小中高時代の通学路を中心に散策してみると、当時からある寺社や行橋赤レンガ館（旧百三十銀行行橋支店）、町家、煉瓦造りの塀等が懐かしく感じられた。

2020 年の春に図書館もまちなかに移転し、JR 行橋駅～商店街～図書館の回遊動線が強化された。これをきっかけてとして、商店街に活気が戻ってくることを期待したい。高齢社会ゆえに周辺の歴史的資源も含めて活性化策を検討していったらいいのではないだろうか。





行橋市 JR 行橋駅（左）、活気と賑わいに欠ける駅前通り（右）





1914 年に辰野金吾監修によって建てられた行橋赤レンガ館と 2020 年の春にオープンした図書館等の複合施設（左）、行事飴屋の門と赤煉瓦造りの塀（右）。市の中心部には赤煉瓦造りの塀が点在している。





小倉と中津を結ぶ旧中津街道の行事付近の町並み（左）、江戸時代に年貢米を川船で運ぶために造られた掘割（右）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	身近な世界遺産を巡る旅①	場所	天草市、長崎市

筆者にとって身近な世界遺産は、まず「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」である。これは長崎と天草地方の潜伏キリシタンが、禁教期に密かに信仰を続ける中で育んだ宗教に関する文化的伝統を物語る 12 の構成資産より成り、北は平戸市、南は天草市、東は南島原市、西は五島市まで幅広い範囲に分布している。

このうち筆者が訪問したのは、天草市の﨑津集落、長崎市外海(そとめ)の出津集落、大浦天主堂であるが、キリスト教禁教政策の中で潜伏キリシタンが仏教や神道等の在来の宗教を装い、組織的で独特な信仰形態を育んでいった歴史と物語を感じることができる。残りの構成資産を訪ねることで、さらにストーリーを紡いでいきたい。





天草市 﨑津集落




長崎市 外海(そとめ)の出津集落




長崎市 大浦天主堂

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	身近な世界遺産を巡る旅②	場所	宇城市、長崎市等

次に身近な世界遺産は、「明治日本の産業革命遺産」である。これは幕末期の西洋技術の導入や、その後、国家主導で進めた3つの重工業分野（製鉄・製鋼、造船、石炭産業）の近代工業化の過程を証明する資産として評価されたものであり、九州内には 16 構成資産、23 施設があり、8施設が現役で稼働中である。

このうち筆者が訪問したのは、三角西港、端島炭鉱（軍艦島）、旧グラバー住宅、旧集成館であるが、約半世紀という短い期間に急速な産業化を成し遂げていった歩みを感じることができる。残りの構成資産を訪ねることで、さらに日本の近代化の歩みとそれに秘められたストーリーを紡いでいきたい。




宇城市　三角西港（左）、長崎市　三菱重工長崎造船所　ジャイアント・カンチレバークレーン（右）




長崎市　端島炭鉱（軍艦島）




長崎市　旧グラバー住宅（右）、鹿児島市　旧集成館機械工場（右）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	身近な世界遺産を巡る旅③	場所	東京都台東区

筆者が最も訪問する機会が多い世界遺産は、「ル・コルビュジエの建築作品－近代建築運動への顕著な貢献－」として世界遺産に登録されたコルビュジエの建築作品（7ヶ国 17 作品）の中の国立西洋美術館である。これは日本に唯一残されたコルビュジエの建築作品で、コルビュジエが提唱した近代建築の五原則を表現し、「無限発展美術館」の思想を体現している。松方コレクションや美術館建設の経緯、物語を踏まえて訪問すると、より身近に感じられる美術館である。

筆者はドイツのシュトゥッツガルトのヴァイセンホフ・ジードルングを見学したことはあるが、国境や大陸をまたいだ世界遺産は貴重なものであり、今後、フランスのサヴォア邸やロンシャンの礼拝堂を訪ね、コルビュジエを通した近代建築の歩みを辿ってみたい。








東京都台東区 国立西洋美術館

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	石橋の魅力を体感する旅①	場所	長崎市、朝倉市等

石橋も地域の魅力資源の一つである。文化財クラスの有名なものもあれば、人知れず秘かに佇んでいるものもある。石橋の魅力は周辺の自然景観と調和し、自然の移ろいに合わせて四季折々の変化を見せてくれることである。そして何よりの魅力はアーチが作る曲線美であり、特に眼鏡橋では水に映ると懐かしい眼鏡の形が現れる。

先人たちが築き上げてきた技術と知恵には驚かされるものがあり、また、その技術と知恵を後世に伝え、全国各地に展開していることも特筆すべきことである。




長崎市　中島川に架かる眼鏡橋




朝倉市秋月　野鳥川に架かる眼鏡橋




上益城郡山都町　通潤橋

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	石橋の魅力を体感する旅②	場所	鹿児島市、諫早市

石橋の中には集中豪雨による洪水で流失したものも少なくない。その代表的なものが鹿児島市の甲突川に架かっていた五石橋（武之橋、高麗橋、西田橋、新上橋、玉江橋）であり、1993 年の集中豪雨による洪水で武之橋と新上橋が流失、残りの3橋が石橋記念公園に移設復元された。

また、諫早市の本明川に架かっていた眼鏡橋は、1957 年の諫早大水害では橋そのものの被害は少なかったが、眼鏡橋がせき止めた流木やがれきが水の流れを変え、被害を拡大させたという指摘により解体する案も浮上した。しかし、市のシンボルかつ文化財であることを理由に当時の市長らが尽力し、日本の石橋として初めて国の重要文化財に指定、諫早公園内に移設され、今も美しい姿を水面に映している。




鹿児島市 石橋記念公園内の高麗橋




鹿児島市 石橋記念公園内の玉江橋（左）、西田橋（右）




諫早市 諫早公園内の眼鏡橋

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	石橋の魅力を体感する旅③	場所	八代市

筆者は石橋の魅力に惹かれ、八代市東陽町種山にある石工の郷を訪ねたこともあるが、その匠の技術と知恵が種山から熊本県へ、そして九州各地、全国へと伝承し展開していることを考えると、様々なストーリーがあることがわかる。そうした視点で地域を訪ね歩くことも楽しいと思う。

また、石橋は世界のいろいろな場所に存在する。それぞれの石橋の歴史や日本の石橋との比較をすることも、石橋の技術や地域性を考える上で有効である。『石橋』をテーマとした国際的な広域連携の取り組みも可能ではないだろうか。



八代市　石工の郷・東陽町に残る石橋群の一部



八代市　石工の郷・東陽町にある橋本勘五郎作のひねり灯籠（左）、種山石工の祖・林七の墓（中）、種山石工たちの技術と知恵を伝える石匠館（右）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	歴史あるお寺や神社を巡る旅①－１	場所	霧島市、長崎市等

身近に存在するお寺や神社であるが、その数はお寺が約 77,000 社、神社が約 81,000 社、合わせて約 158,000 社である（2019 年度 宗教統計調査）。その数はコンビニよりも多く、いかに市民生活に根付いたものであるかが理解できる。その中には著名な寺社もあれば、寺町や門前町として地域全体として魅力スポットとなっている地域もある。

その一方、都市化の中でポツンと取り残されたような寺社もあるが、信仰の場所としてだけでなく、地域の歴史を伝え、鎮守の森として環境に貢献する空間となっている。人々の生活が息づく空間、パワースポット、癒しの空間等として再評価し、地域のまちづくりの中でもっと活用していってほしい。




霧島市　神々しい雰囲気が漂う霧島神宮




長崎市　諏訪神社（左）、鹿島市　祐徳稲荷神社（右）




宇佐市　宇佐神宮（左）、阿蘇市　熊本地震前の阿蘇神社（右）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	歴史あるお寺や神社を巡る旅①－２	場所	高森町、諫早市等

身近に存在するお寺や神社であるが、その数はお寺が約 77,000 社、神社が約 81,000 社、合わせて約 158,000 社である（2019 年度 宗教統計調査）。その数はコンビニよりも多く、いかに市民生活に根付いたものであるかが理解できる。その中には著名な寺社もあれば、寺町や門前町として地域全体として魅力スポットとなっている地域もある。

その一方、都市化の中でポツンと取り残されたような寺社もあるが、信仰の場所としてだけでなく、地域の歴史を伝え、鎮守の森として環境に貢献する空間となっている。人々の生活が息づく空間、パワースポット、癒しの空間等として再評価し、地域のまちづくりの中でもっと活用していってほしい。




高森町 上色見熊野座神社（かみしきみくまのいます）の参道（左）、パワースポットとなっている穿戸岩（うげといわ）（右）




諫早市 諫早神社とクス群（左）、長崎市 松森神社とクス群（右）




福岡市 鎮守の森となっている小烏神社（左）、大木町 鎮守の森となっている天満神社（右）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	歴史あるお寺や神社を巡る旅②	場所	国東市、豊後高田市

寺町の魅力については前に触れたが、お寺にもそれぞれの地域に息づく信仰文化が存在する。筆者が訪問した地域では国東半島の六郷満山と呼ばれる寺院群が特に印象に残っている。宇佐・八幡神の影響を強く受けながらも、厳しい地形での修行を好む山岳宗教との融合を経て、神仏習合の色が濃い独特の六郷満山文化を花開かせた。

2018 年に開山 1300 年を迎え、神仏習合の文化が今日まで脈々と受け継がれており、宇佐神宮、両子寺、文殊仙寺、富貴寺等 31 の霊場巡りを楽しむことができる。




国東市 両子寺




国東市 文殊仙寺





豊後高田市 富貴寺

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	歴史あるお寺や神社を巡る旅③－１	場所	長崎市

昔から中国文化の影響を色濃く受けてきた長崎市には、唐寺と呼ばれるいくつかの寺院がある。唐寺とは日本在住の中国人（華僑）が自分たちの出身地別に建てた寺院で、「媽祖（まそ）」と呼ばれる海の安全を守る神様が祀られているのが特徴である。

そのうちの代表的な寺院は「長崎四福寺」と呼ばれる崇福寺、興福寺、福済寺、聖福寺であり、日本の一般的な寺院とは異なり独特の文化を育んできており、建物の意匠や形態等にもそれが表れている。国宝や文化財に指定されている建造物も多い。



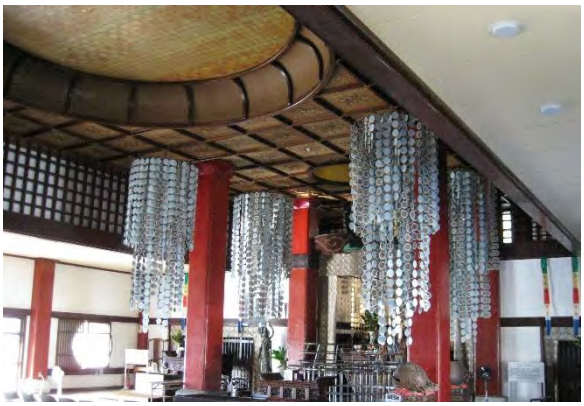






長崎市　崇福寺





長崎市　福済寺

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	歴史あるお寺や神社を巡る旅③－２	場所	長崎市

昔から中国文化の影響を色濃く受けてきた長崎市には、唐寺と呼ばれるいくつかの寺院がある。唐寺とは日本在住の中国人（華僑）が自分たちの出身地別に建てた寺院で、「媽祖（まそ）」と呼ばれる海の安全を守る神様が祀られているのが特徴である。

そのうちの代表的な寺院は「長崎四福寺」と呼ばれる崇福寺、興福寺、福済寺、聖福寺であり、日本の一般的な寺院とは異なり独特の文化を育んできており、建物の意匠や形態等にもそれが表れている。国宝や文化財に指定されている建造物も多い。






長崎市　興福寺




長崎市　聖福寺

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	赤煉瓦建築を巡る旅①－１	場所	東京都千代田区等

北海道から九州まで各地に残る赤煉瓦建築は、明治以降の日本の近代化の歴史を象徴するものである。多くの赤煉瓦建築が解体される一方、文化財や地域のシンボルとして保存・活用されているものもある。優雅な意匠とともに、近代化の過程で失われてきたもの、忘れてきたものに想いを馳せながら赤煉瓦建築を見て回ることも、今後の都市づくりや地域づくりを考える上で参考になる。

赤煉瓦は東京駅や富岡製糸場のような規模の大きな建物から小さな教会、町家の防火塀まで大小様々な建造物で使われており、その積み方にもイギリス積み、フランス積み、ドイツ積み等があり、それぞれの建造物の歴史とあわせて様々な視点で楽しむことができる。




東京都千代田区　東京駅丸の内駅舎




富岡市　富岡製糸場





函館市　金森赤レンガ倉庫

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	赤煉瓦建築を巡る旅①－２	場所	福岡市、大分市等

北海道から九州まで各地に残る赤煉瓦建築は、明治以降の日本の近代化の歴史を象徴するものである。多くの赤煉瓦建築が解体される一方、文化財や地域のシンボルとして保存・活用されているものもある。優雅な意匠とともに、近代化の過程で失われてきたもの、忘れてきたものに想いを馳せながら赤煉瓦建築を見て回ることも、今後の都市づくりや地域づくりを考える上で参考になる。

赤煉瓦は東京駅や富岡製糸場のような規模の大きな建物から小さな教会、町家の防火塀まで大小様々な建造物で使われており、その積み方にもイギリス積み、フランス積み、ドイツ積み等があり、それぞれの建造物の歴史とあわせて様々な視点で楽しむことができる。




福岡市　福岡市赤煉瓦文化館




大分市　大分銀行赤レンガ館




唐津市　旧唐津銀行「辰野金吾記念館」

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	赤煉瓦建築を巡る旅①－３	場所	大刀洗町、熊本市等

北海道から九州まで各地に残る赤煉瓦建築は、明治以降の日本の近代化の歴史を象徴するものである。多くの赤煉瓦建築が解体される一方、文化財や地域のシンボルとして保存・活用されているものもある。優雅な意匠とともに、近代化の過程で失われてきたもの、忘れてきたものに想いを馳せながら赤煉瓦建築を見て回ることも、今後の都市づくりや地域づくりを考える上で参考になる。

赤煉瓦は東京駅や富岡製糸場のような規模の大きな建物から小さな教会、町家の防火塀まで大小様々な建造物で使われており、その積み方にもイギリス積み、フランス積み、ドイツ積み等があり、それぞれの建造物の歴史とあわせて様々な視点で楽しむことができる。




大刀洗町　今村天主堂




熊本市　古町の西村邸




長崎市　オランダ坂横の赤煉瓦塀（左）、孔子廟横の赤煉瓦塀（右）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	わが国の近代化の歩みを体感する旅①－１	場所	長崎市、郡山市等

日本の近代化を象徴するものの一つに鉄道と建築がある。鉄道が導入されると大工の棟梁たちによる擬洋風建築が現れた。筆者が訪問した建物としては、旧グラバー住宅（1863 年完成）や開成館（1874 年完成）、旧開智学校（1876 年完成）等がある。

その後、工部大学校（現東京大学工学部）が 1877 年に開校すると、ジョサイア・コンドルの下で学んだ辰野金吾や曽禰達蔵、片山東熊らが新しい建築の担い手となり、ルネッサンス様式の建物が東京を中心に建設されていった。その頃の代表的な建物が日本銀行本店（1896 年完成）、赤坂離宮（1909 年完成）、中央停車場（東京駅丸の内駅舎、1914 年完成）等である。




長崎市 旧グラバー住宅




郡山市 開成館




松本市 旧開智学校

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	わが国の近代化の歩みを体感する旅①－２	場所	東京都台東区等

日本の近代化を象徴するものの一つに鉄道と建築がある。鉄道が導入されると大工の棟梁たちによる擬洋風建築が現れた。筆者が訪問した建物としては、旧グラバー住宅（1863 年完成）や開成館（1874 年完成）、旧開智学校（1876 年完成）等がある。

その後、工部大学校（現東京大学工学部）が 1877 年に開校すると、ジョサイア・コンドルの下で学んだ辰野金吾や曽禰達蔵、片山東熊らが新しい建築の担い手となり、ルネッサンス様式の建物が東京を中心に建設されていった。その頃の代表的な建物が日本銀行本店（1896 年完成）、赤坂離宮（1909 年完成）、中央停車場（東京駅丸の内駅舎、1914 年完成）等である。




東京都台東区　岩崎久弥茅町本邸（ジョサイア・コンドル設計）




東京都中央区　日本銀行本店（左）、大阪市　大阪市中央公会堂（右）※共に辰野金吾設計
※この2枚の写真は、2008 年度の「福岡市赤煉瓦文化館誕生 100 年祭実行委員会」より提供




東京都千代田区　中央停車場（東京駅丸の内駅舎）※辰野金吾設計

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	わが国の近代化の歩みを体感する旅②	場所	富岡市、宇城市等

日本の建築の近代化の歴史は、洋風建築の導入に関する歴史でもある。前に紹介した事例と建設時期は前後するものはあるが、筆者が訪問した建物の中で印象に残るものを紹介する。

富岡製糸場（1872 年完成）はお雇い外国人バスチャンによるもので、木骨レンガ造が特徴である。また、学生時代の研究のフィールドであった三角西港（1887 年完成）もお雇い外国人ムルドルの設計によるもので、港の整備と合わせて都市計画も行われ、洋風の建物も建設された。フランク・ロイド・ライトが設計した旧帝国ホテル（1923 年完成、1968 年解体、その後明治村に移転）も西洋建築と日本建築が融合した建物として筆者の好きな建物の一つである。




富岡市 富岡製糸場




宇城市 三角西港に残る洋風建築




犬山市 明治村に移転された旧帝国ホテル

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	今も息づく蔵を巡る旅①	場所	川越市、倉敷市等

日本の伝統的な建物に蔵がある。川越や倉敷、喜多方では土蔵、小樽では石蔵、富岡や函館、門司では煉瓦蔵の美しい建物が今なお多く残され、当初の用途を変えながらも現代的視点で活用されているものも多い。また、川越や倉敷、喜多方のように「蔵のまち」をPRし、観光交流エリアとして面的に活用している地域もあれば、鹿島のように蔵のネットワークを活かした「酒蔵ツーリズム」を展開している地域もある。そして、南島原市有家町のように地域の生業として多様な蔵が連携して「庄屋の町」を盛り上げている地域もある。

蔵の構造・用途、時代背景等を学びながら蔵の町並みを散策することも「生業を活かした地域づくり」の参考になる。




川越市　川越の土蔵の町並み（左）、倉敷市　倉敷川畔の土蔵の町並み（右）




小樽市　小樽運河沿いに並ぶ石蔵（左）、市内に点在する石蔵（右）




富岡市　上州富岡駅前の煉瓦蔵の富岡倉庫（左）、函館市　煉瓦造の倉庫群（右）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	今も息づく蔵を巡る旅②	場所	熊本市

様々な蔵がある中で生業が息づく身近な蔵を紹介する。まずは、熊本市小島（おしま）にある操業 1818 年の浜田醤油。江戸時代からそれぞれの時代を経て建てられた蔵では当時の面影を随所に残し、200 年の時が創造した蔵の息づかいを感じることができる（木桶、天井に昔の姿をそのまま残す滑車、煉瓦造りの受水槽、樹齢 400 年の守り樹クスノキ等）。

最近では隈研吾氏監修によるリノベーションも行われ、和小屋の姿をそのまま活かしたり、竹をやたら組みした廊下の天井等により歴史的建造物が見事に息を吹き返した。




熊本市 浜田醤油 外観（左）、天井に昔の姿をそのまま残す滑車（右）




浜田醤油 樹齢 400 年の守り樹クスノキと煉瓦造りの受水槽（左）、醤油造りに欠かせない木桶（右）




浜田醤油 竹をやたら組みした天井が続く廊下（左）、和小屋の姿をそのまま活かした2階のカフェ（右）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	今も息づく蔵を巡る旅③	場所	川越市、霧島市

操業 1764 年の川越市の松本醤油商店の天保蔵も 1830 年に建てられた建物で、川崎市の都市景観重要建築物に指定され、醤油作りの伝統を肌で感じることができる。熊本市の浜田醤油と同じように大きな木桶が並び、天井の構造をそのまま見ることができ、醤油の香り漂う空間となっている。

また、霧島市にある霧島町蒸留所（1911 年創業）は焼酎の製造を行っており、かめ壺焼酎の仕込みの過程を見学できる。蒸留所から高千穂峰を望むことができ、その高千穂峰から流れてくる清流・霧島川がすぐ近くにあるなど、恵まれた自然環境の中で焼酎が製造されていることがわかる。











川越市　松本醤油商店

霧島市　霧島町蒸留所（右）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	今も息づく蔵を巡る旅④	場所	熊本市、鹿島市

次に筆者が定期的に訪問している酒蔵を紹介する。熊本市川尻の「瑞應」は 1867 年創業で、清酒の他に焼酎、発酵調味料、赤酒等も製造販売し、特に東肥赤酒は有名である。2016 年の熊本地震で蔵の各所が被害を受けたが、それを乗り越え熊本の風土に合った地酒を作り続けている。

また、江戸時代から昭和初期にかけての古い建物が建ち並ぶ鹿島市の浜中町八本木宿地区には3つの酒蔵がある。毎年春と秋には市内の他の3つの酒蔵といっしょに「酒蔵ツーリズム」が開催され、多くの人々が訪れ、お酒が生まれた土地の食や文化、歴史を感じながら白壁の町並みを楽しんでいる。イベント空間として利用されている酒蔵もある。











熊本市川尻 瑞應の酒蔵



鹿島市 浜中町八本木宿の酒蔵

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	今も息づく蔵を巡る旅⑤	場所	伊万里市

今回の研究の終盤に伊万里市内にある老舗の酒造場を訪問する機会に恵まれた。山代町にある松浦一酒造は、1716 年創業で 300 年余以上にわたり、伊万里の気候・風土・人情に合った独特の味わいを求めてお酒を造り続けており、先人の技を伝承しながらも新たなチャレンジにも取り組んでいる。酒蔵には水神カッパのミイラの他、古い酒造道具や農機具等を展示している。

また、二里町にある古伊万里酒造は、1909 年創業で 100 年余にわたり佐賀県産米・有田白磁泉の名水を使い、昔ながらの寒造りで一つひとつの作業に手間をかけて丁寧にお酒を造り続けている。その中で、有田焼の伝統的な文様を施した古伊万里カップ酒「NOMANNE」は、地域らしさを象徴する商品であり、伊万里や有田のブランド化にも貢献していると思う。











伊万里市山代町　松浦一酒造



伊万里市二里町　古伊万里酒造

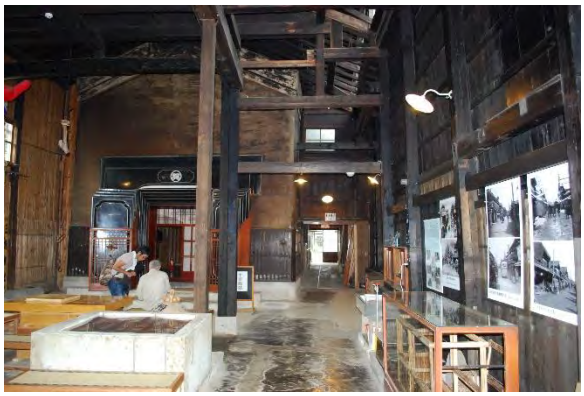
大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	今も息づく蔵を巡る旅⑥	場所	横手市

最後は秋田県横手市増田の内蔵である。内蔵は蔵を豪雪から守るため、全体を「鞘」と呼ばれる上屋建物ですっぽり覆った土蔵であるが、増田の内蔵は主屋の奥に建っており、道路からは見えず、ひっそりと佇んでいるのが特徴である。町割りは間口が5～7間（9～12.6m）、奥行きが 50～100 間（90～180m）と極端な短冊型となっており、その上に町家建築が建ち並び、伝統的な町並みが形成されている。道路側からは、2階の正面に梁首と呼ばれる梁組を見せているのが特徴で、職人技術の粋を垣間見ることができる。

明治前期から戦前にかけて建てられた短冊型の主屋が軒を連ねる景観は、当時の情緒を現在に留めており、主屋・内蔵・外蔵を「トオリ」と呼ばれる土間で結ぶ商家町家の特徴は、この地方独特のものとなっている。













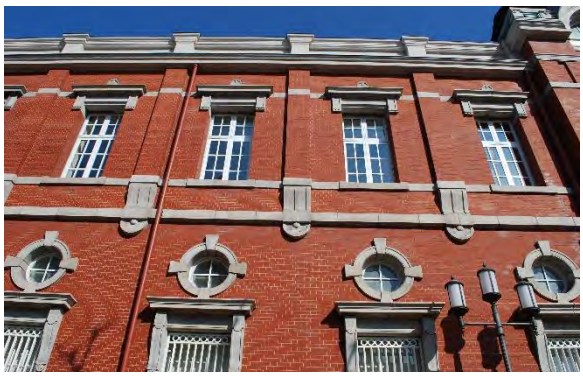
増田市横手　旧石平金物店
現在は増田町観光案内所兼物産販売所「蔵の駅」

増田市横手　筆者が訪問した内蔵
職人技術の粋を垣間見ることができる。

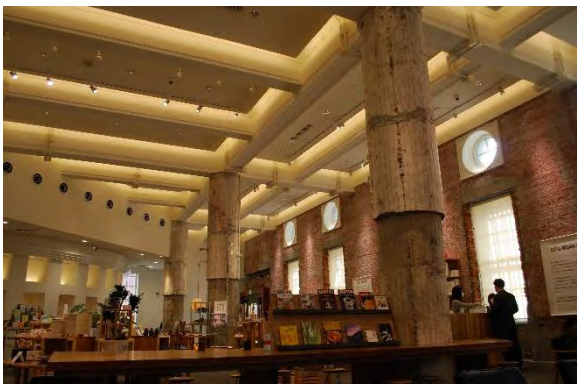
大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	時代を超えて使われ続ける建築を巡る旅①	場所	大分市

ここでは、明治から昭和にかけて建てられ、当初の役割を終え、新たな用途として使われ続けている建築物を紹介する。大分銀行赤レンガ館は、1913 年に旧第二十三国立銀行本店として辰野金吾氏の設計により建てられた。第二次世界大戦で空襲を受け、壁のみを残して焼失したが、戦後修復され 1966 年まで大分銀行本店として使用、その後、貸しホール等として使われ、2018 年にリニュアルオープンし、県産品を販売する地域商社「Oita Made」や地場のコーヒー専門店が入居している。

リニュアルにあたっては、1913 年竣工当時の赤レンガを内装に使用したり、1949 年の改築時に建てられたコンクリートの柱や化粧梁を修復再現した。大正、昭和、平成、令和の時代にわたり様々な使い方をされ、地域のシンボルとして愛され続けている建築である。

大分市 大分銀行赤レンガ館 外観

竣工時の赤レンガを内装に使用したり、改築時に建てられたコンクリートの柱や化粧梁を修復再現





1993 年の大分銀行創立 100 周年記念竣工時のプレート（左）や大理石の時計（右）を展示

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	時代を超えて使われ続ける建築を巡る旅②	場所	鹿児島市、北九州市

鹿児島市の仙厳園に隣接するスターバックス仙厳園店は、旧芹ヶ野島津家金山鉱業事業所（1904年建設）をリノベーションしたものである。旧建物のストーリーや歴史を尊重し、地域性を大切にしたデザイン（薩摩切子のカッティング形状、鹿児島県産の杉材の使用等）が時間（過去、現在）、空間（東洋、西洋）、技術（手仕事、工業）の融合を感じさせている。

また、スターバックス門司港駅店は、1914 年に創建され、2019 年に大正時代の姿に復原された門司港駅舎の1階（旧三等待合室）にある店舗である。ここでも門司港駅の歴史を尊重し、地域性を大切にしたデザイン（鉄道レールの再利用、福岡県産のセンダン材の使用、列車のヘッドマークを用いたスターバックス歴代のロゴマークの設置等）が時間と空間を感じさせている。











鹿児島市 スターバックス仙厳園店



北九州市 門司港駅（上）と1階に入居しているスターバックス門司港駅店（中、下）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	時代を超えて使われ続ける建築を巡る旅③	場所	大分市、鹿児島市

大分市アートプラザは、磯崎新氏の代表作である旧大分県立大分図書館（1966 年完成）をリノベーションしたもので、1998 年に開館。市民ギャラリーやアートホールの他、磯崎氏の建築作品の模型や資料を常設展示する磯崎新建築展示室も設けられている。2018 年 12 月には磯崎氏の大学時代の卒業制作のパネル展と講演会も行われた。

また、鹿児島市のマルヤガーデンズは、当初は 1961 年に丸屋デパートとして開業したもので、1984 年から 2009 年まで三越鹿児島店として使用。その後、大規模なリノベーションを行い、2010 年にマルヤガーデンズとしてオープンした。三越時代のデパートメントストアではなく、人、モノ、コトが有機的につながり合うユナイトメントストアを標榜しているのが特徴である。











大分市　大分市アートプラザ



鹿児島市　マルヤガーデンズ。壁面緑化や屋上緑化も特徴で、多様なテナントが入居しながらも全体としての一体感を感じさせる。

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	時代を超えて使われ続ける建築を巡る旅④	場所	東彼杵町

東彼杵町の千綿駅周辺では、I ターン者や U ターン者、地元の若手が「千綿を魅力ある地域にしたい」という想いで「まるごとエリアリノベーション」に取り組んでいる。その代表的なものが「Sorriso riso（ソリッソリッソ）千綿第三瀬戸米倉庫」である。以前は JA の米倉庫だったが、現在は地産のそのぎ茶を購入できる体験型のショップとカフェが併設されている。古い米倉庫をリノベーションした空間はおしゃれで心地よい空間を提供している。

すぐ近くには、同様に古い建物をリノベーションしたアンティークショップやパン屋、フランス料理店等があり、千綿駅内にある千綿食堂を含めてエリア全体として魅力ある空間となっている。わずか5年の間に約 20 店舗がオープンし、50 人近くが新規に移住しているとのことである。今後の展開が楽しみなエリアである。





東彼杵町　千綿駅兼千綿食堂（左）、Sorriso riso（ソリッソリッソ）千綿第三瀬戸米倉庫（右）





東彼杵町　Sorriso riso 千綿第三瀬戸米倉庫内のカフェ（左）とショップ（右）





東彼杵町　Sorriso riso 千綿第三瀬戸米倉庫のすぐ近くにあるアンティークショップ（左）とパン屋（右）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	現代建築を巡る旅①	場所	長岡市、富岡市

比較的新しい建物の中でも、筆者は地域性（気候、景観、材料等）や地域との関わり、地域内の回遊性を尊重した建物に興味がある。建物単体で魅力的なものもあるが、地域や社会に対する提案等が盛り込まれた建物により興味があり、機会を見つけて訪問するようにしている。

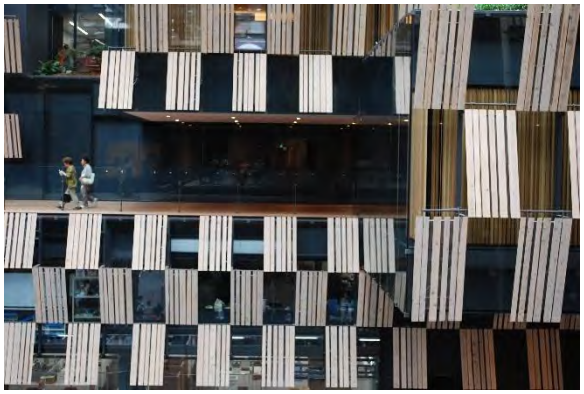
特に隈研吾氏設計の建物を見に行く機会が多く、その中でも長岡市の「シティホールプラザ アオーレ長岡」や富岡市の「富岡市役所新庁舎」は、地域全体の中での回遊動線を考慮して建物が設計され、地域や社会に対する様々な提案が盛り込まれており、印象に残っている。











長岡市 シティホールプラザ アオーレ長岡。市庁舎を含む複合施設で、地域に開かれた開放的な空間が特徴で様々なイベントで活用されている。



富岡市 富岡市役所新庁舎。上州富岡駅と富岡製糸場の間に位置し、回遊動線の強化も図られている。

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	現代建築を巡る旅②	場所	由布市、長崎市等

隈研吾氏設計の建物は九州にも多くあり、筆者がよく訪問するのが「COMICO ART MUSEUM YUFUIN」であり、由布院の景観に溶け込みながらも個性と存在感を漂わせている。遠くから見ると漆黒に見える焼杉の外壁は、周囲の景色をくっきりと浮き上がらせて、その価値を引き立てているが、近寄って見ると木の温もりや風情を感じさせる。分節された小さな屋根の連なりは、小さな家々が集まって成り立つ由布院の景観と調和して、一体化しながら個性を漂わせている。

また、「長崎県立美術館」「スターバックス太宰府天満宮表参道店」「浜田醤油」も地域性が強く感じられる建物で、筆者がよく訪れる建物である。











由布市 COMICO ART MUSEUM YUFUIN



長崎市 長崎県立美術館（上）、太宰府市 スターバックス太宰府天満宮表参道店（中）、熊本市 浜田醤油（下）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	現代建築を巡る旅③	場所	東京都渋谷区

新しい建物を見に行く時には、まちづくりの視点や地域社会の中での役割を含めて訪問するようにしている。表参道ヒルズは同潤会アパートメントの建替え、再開発によって建設されたもので、新しいまちに生まれ変わった。同潤会アパートメント時代から現在に至る過程の中でまちの歴史やストーリーを振り返りながら建物を見て回ることも楽しい。

また、古くからの歴史と豊かな緑が残る代官山では、「ヒルサイドテラス」が上質な空間と歴史を継承して文化を育んできており、それが「T-SITE」にも受け継がれ、緑の木立の中に大小の建物が佇む設計で、代官山らしい魅力的な商業空間となっている。













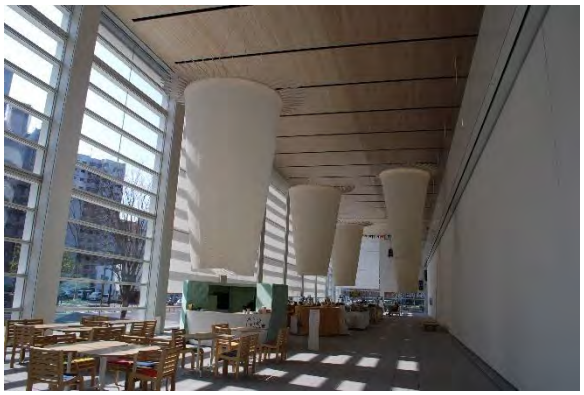
渋谷区表参道　紅葉の頃のケヤキ並木（上）、
2006 年に開業した表参道ヒルズ（中）、
忠実に再現された表参道ヒルズ同潤館（下）

渋谷区代官山　重要文化財の旧朝倉家住宅の
庭園（上）、1967 年から整備が進められた代官山
ヒルサイドテラス（中）、2011 年に完成した代官山
T-SITE（下）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	現代建築を巡る旅④	場所	大分市等

有名建築家設計による美術館巡りも楽しい。「大分県立美術館」（坂茂氏設計）は開放的な展示空間やアトリウムが特徴で、美術館に行かない人でも関心を高める機会を提供するとともに、日常的に人々が集まる‘まちに開かれた空間’となっている。大分県産材の木材を建築に使っているのも特徴である。

また、美術館の歴史と作品の特性に合わせて和の設計が施された「根津美術館」（隈研吾氏設計）や、近代的ながらも下町に溶け込むデザインと地域に開かれた空間が特徴の「すみだ北斎美術館」（妹島和世氏設計）も印象に残っている。



大分市　大分県立美術館




東京都港区　根津美術館（左）、東京都墨田区　すみだ北斎美術館（右）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	スターバックス建築を巡る旅	場所	川越市、太宰府市等

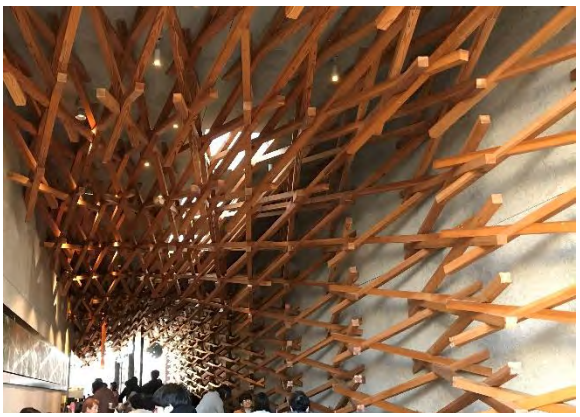
スターバックス仙厳園店、門司港駅店については前に紹介したが、スターバックス建築の中でも特に地域性が感じられるものを紹介する。川越鐘つき通り店は伝統的な蔵造りの町並みが残るエリアにあり、町並みへ配慮されたデザインが特徴である。内部も地域の歴史を尊重した材料や色彩を採用している。また、太宰府天満宮表参道店は「自然素材による伝統と現在の融合」というコンセプトのもとに設計され、伝統的な木組み構造を用いたデザインが特徴である。

中目黒にあるリザーブロースタリー東京は日本初のリザーブロースタリーで、世界で5番目の進出である。目黒川沿いに位置し、桜並木を尊重したデザインを取り入れており、ロースタリーの独自性と日本の感性を活かしたデザインとなっている。

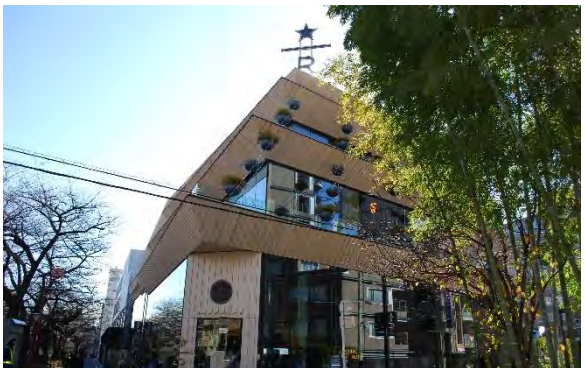
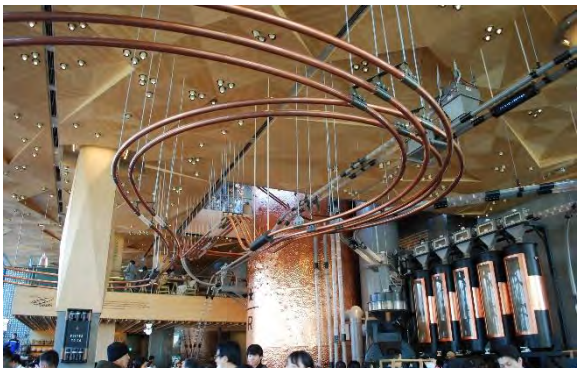



川越市　スターバックス川越鐘つき通り店





太宰府市　スターバックス太宰府天満宮表参道店

東京都目黒区　スターバックスリザーブロースタリー東京

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	思い出の建築を巡る旅①	場所	北九州市、大分市

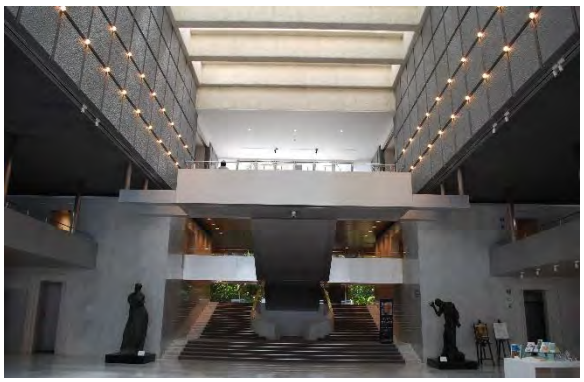
筆者が本格的に建築の見学に行き始めたのは大学に入学した時からである。当時の九州には著名な建築家（磯崎新氏、黒川紀章氏、白井晟一氏等）の作品が多く、当時の新聞にも「九州は現代建築の宝庫」と掲載されていた。関東や関西の学生たちも九州の建築巡りをしていたが、筆者も磯崎新氏の作品を中心に見学に出かけた。

その後、東京勤務時代に訪れているものもあるが、約 30 年振りに北九州市立中央図書館、北九州市立美術館、大分県立大分図書館、群馬県立近代美術館を訪問した（2017 年1月～現在）。筆者にとっては、これこそ建築の原点に返る旅である。

※北九州市立中央図書館については次ページのコラムに掲載




北九州市　北九州市立中央図書館（現北九州市立図書館、北九州市立文学館）

北九州市　北九州市立美術館




大分市　大分県立大分図書館（現大分市アートプラザ）

【参考】北九州市立中央図書館再訪

（2017 年 12 月までに執筆したコラムより）

大学に入り、建築を志した時に磯崎新氏が設計した建築巡りを始めた。北九州市立中央図書館は、その中でも群馬県立近代美術館と並んで筆者の印象に残る作品である。大学時代と社会人時代に数度訪れているが、今回は約 30 年振りの訪問となった（2017 年 1 月 20 日）。

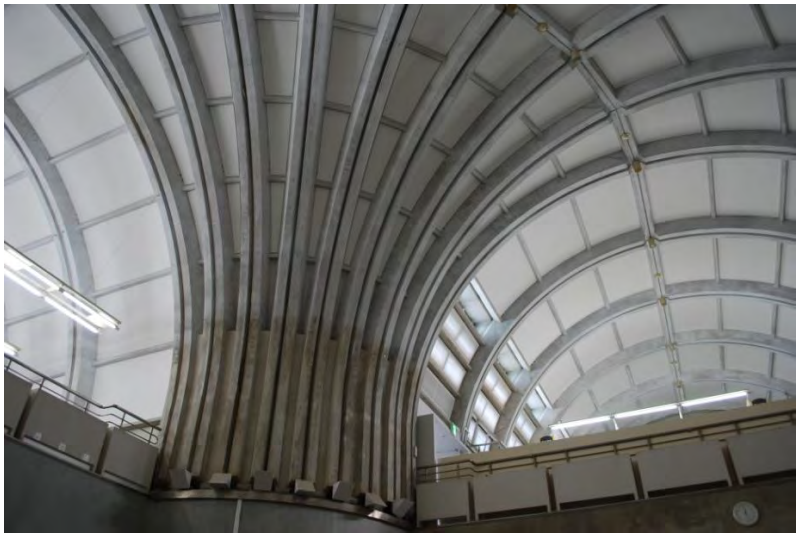
リブヴォールトの空間が新鮮さと懐かしさを感じさせる。築 40 年以上経っているが、改修を続けながら大切に使われている。ガラス張りのスロープからは小倉城や北九州市役所、リバーウォーク北九州などを見ることができる。また、スロープに沿って閲覧室が分節配置され、各自が好きな居場所を確保することができる。落ち着いて本を読める空間でありながら、吹き抜けのヴォールト天井によって空間の連続性も感じることができる。レストランのガラスのモンローカーブが懐かしい。

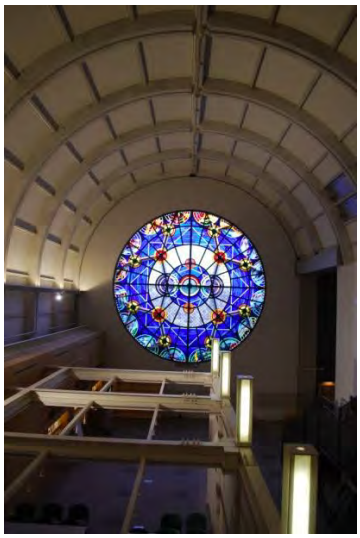
2012 年に映画「図書館戦争」のロケが行われたこともあり、この日も図書館関係者や文学関係者など多くの団体が視察に訪れていた。併設されていた北九州市立歴史博物館が「いのちのたび博物館」に統合されたこともあり、2006 年から一部は北九州市立文学館として使われている。文学館にあるステンドグラスも久し振りに見ることができた。

なお、この建物は筆者が福岡市住宅供給公社時代にクリスタージュの設計でお世話になった三浦紀之氏が磯崎新アトリエ時代に担当されていた。これも何かの縁であろう。いつまでも大切に使われ続けてほしい建物である。









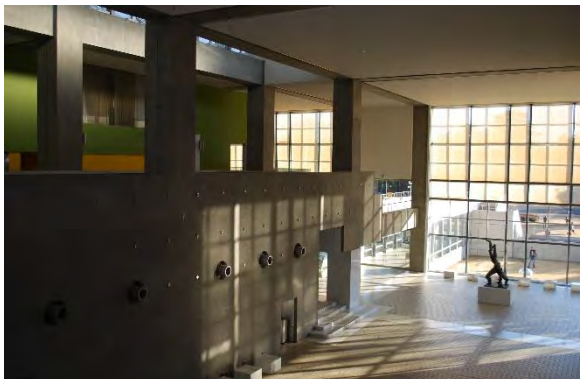
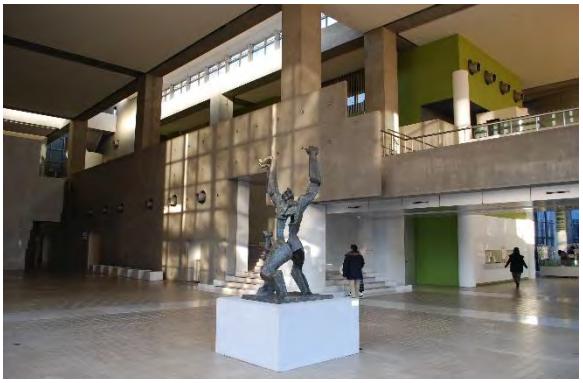
大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	思い出の建築を巡る旅②	場所	高崎市

磯崎氏の代表作のひとつである群馬県立近代美術館については、大学時代～東京勤務時代に3回訪問していたが、2019 年1月に約 30 年振りに訪問する機会に恵まれた。12mグリッドの立方体をベースに構成され、外壁のアルミパネルも 1.2mのグリッドになっている。エントランス廻りもグリッドが使われており、四角のフレームが基本となって空間構成が行われている。フレームの中のフレームが印象的な建物である。

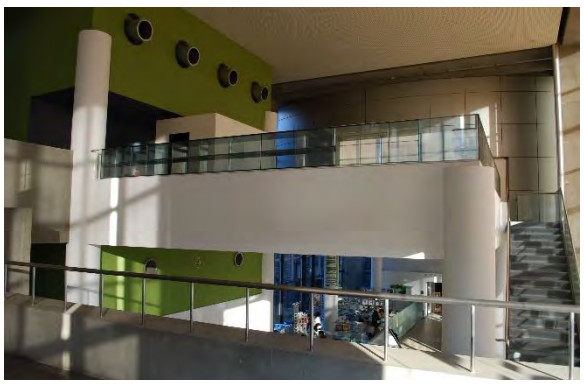
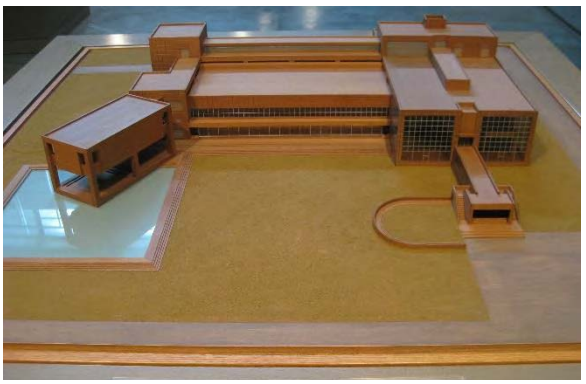
2時間程度の滞在であったが、太陽の光の方向により外壁のアルミパネルが微妙に変化する姿も見ることができた。竣工から 45 年以上経過しているが、古さをほとんど感じさせない建築である。いつまでも大事に使われ続けてほしい。




高崎市 群馬県立近代美術館の外観

群馬県立近代美術館 エントランスホール付近

群馬県立近代美術館エントランスホール付近（左）
大分市 大分市アートプラザに展示されている群馬県立近代美術館の模型（右）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	思い出の建築を巡る旅③	場所	熊本市

筆者は大学3年生頃になると歴史的建造物にも興味を持ち始めた。熊本市内には多くの歴史的建造物が大切に残されていたが、その中でも印象に残っている建物が新町の吉田松花堂と長崎次郎書店である。筆者は熊本地震前の 2015 年5月に新町を訪問し、長崎次郎書店の2階の喫茶店も訪ねている。それから約1年後の熊本地震では吉田松花堂の建物は大きな被害を受けたが、粘り強く改修を行い現在に至っている。

筆者は「熊本の復興の過程を巡る旅」も続けているが、歴史と伝統のある建物を後世に残していこうとする姿は頭が下がる思いである。長崎次郎書店にも定期的に訪問し、熊本ならではの書籍や喫茶店でのお薦めの水出しコーヒーを楽しんでいる。




熊本市 吉田松花堂（熊本地震後の 2016 年 12 月）




熊本市 現在の吉田松花堂




熊本市 長崎次郎書店

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	思い出の建築を巡る旅④	場所	宇城市、阿蘇市

大学の卒業研究のフィールドであった「三角西港」と、建築を志した時に感銘を受けた「孤風院」という洋風建築も思い出の場所である。近代国家の威信を懸けた明治三大築港の一つである三角西港は、港としての機能が三角港（東港）に移った後は寂しい漁村の雰囲気を漂わせていたが、1987 年の築港 100 周年を機に、当時の建築物の復元や周辺の公園整備も行われ、観光地としても賑わいを見せていた。

また、孤風院は大学の講堂としての役割を終えた建築物を当時熊本大学助教授であった木島安史先生が自ら買い取り、改修し、住居として蘇らせ、明治～大正～昭和～平成～令和の5つの時代にわたり活用されていった。私は熊本地震後に孤風院を訪問したが、木島先生の想いを受け継いだ建築物を訪問することで、建築への想いを新たにした。




宇城市　三角西港（左）、復元された小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）ゆかりの旅館・浦島屋（右）




宇城市　三角西港　倉庫を改修したレストラン・西港明治館（左）、旧宇土郡役所の九州海技学院（右）




阿蘇市　熊本地震後の孤風院

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	思い出の建築を巡る旅⑤	場所	東京都千代田区

1980 年に社会人になって新しいカメラを購入し、関東を中心とした現代建築や歴史的町並み、関西を中心とした古建築や庭園等を見て回り、今でも印象に残っているものが多い。

その中でも筆者が何回も見てきたのは東京駅である。今でこそ東京のシンボルとなっているが（もちろん竣工した当時もそうであったが）、筆者が東京にいた頃（1980 年～1986 年）はそんなに大事にされているという印象はなかった。赤煉瓦駅舎の保存運動が起こったのは、筆者が東京を離れた頃であろうか。その後、2003 年に国の重要文化財に指定、2007 年から復原工事が行われ、創建時の意匠も忠実に再現された。

また、筆者は 2008 年度に「福岡市赤煉瓦文化館誕生 100 年祭」の実行委員会のメンバーとしても活動し、改めて辰野建築を振り返るいい機会となった。




東京都千代田区 1980 年頃の東京駅丸の内駅舎






現在の東京駅丸の内駅舎（2014 年6月撮影）

大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	思い出の建築を巡る旅⑥	場所	豊後高田市

この他、高校の時に訪ねた国東半島の富貴寺も大変印象に残っており、新緑や紅葉の時期に再訪している。富貴寺の大堂は九州最古の木造建築とされ（平安時代後期建立）、屋根は宝形造の行基葺という珍しい形式で、軒下の垂木が二重になっているのが特徴で、国宝にふさわしい重厚さとともに優美な雰囲気が伝わってくる。

なお、Part.1 で紹介した筆者の思い出の建築である京都の桂離宮、奈良の薬師寺、明治村の旧帝国ホテル、海外ではベネチアやフィレンツェの歴史的建造物等を再訪できていないが、近い将来訪問し、当時訪問した時の初心に帰るとともに、筆者の今後の活動に活かしていきたいと考えている。




豊後高田市 富貴寺大堂 紅葉の頃の外観




富貴寺大堂 宝形造で行基葺の屋根

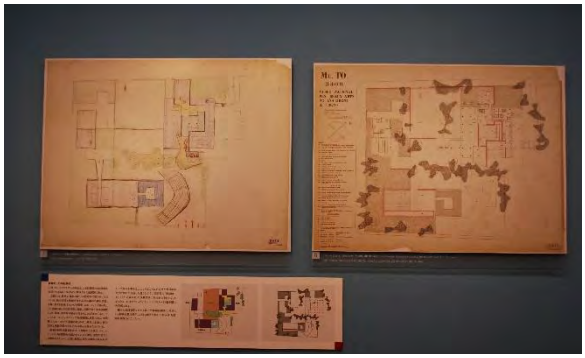



富貴寺大堂 軒下の二重繁垂木も特徴

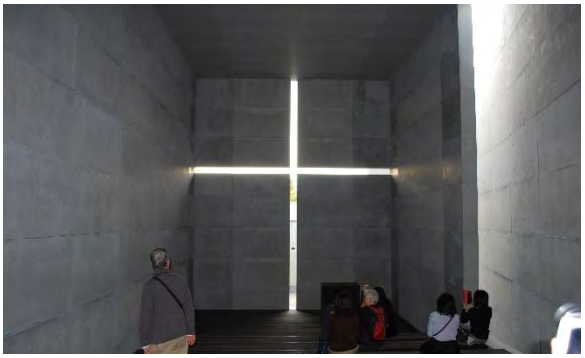
大テーマ	歴史的建造物、現代建築		
テーマ	建築展を巡る旅	場所	東京都、福岡市等

建築展を巡る旅は、「地域づくりや建築の原点に返る旅」を進めている筆者にとって、大変刺激的なものであり、社会人になって忘れかけていた「建築への想い」を新たにするものである。例えば、「日本の家　－1945 年以降の建築と暮らし－」では、筆者が大学時代に学んだ多くの作品の図面や模型を目の当たりにし、住宅設計の楽しさと面白さを改めて感じたところである。また、「安藤忠雄展－挑戦－」では、展覧会場を巡りながら安藤氏の歩んできた道程はもちろん、建築という文化の豊かさや建築の無限の可能性を感じることができた。

※「建築の原点に返る展覧会」については、次ページのコラムに掲載

「日本の家　－1945 年以降の建築と暮らし－」（左）
「ル・コルビュジェの芸術空間　－国立西洋美術館の図面からたどる思考の軌跡－」（右）

「アジール・フロッタン再生展　－浮かぶ避難船　ル・コルビュジェが見た争乱・難民・抵抗から－」（左）
「安藤忠雄展　－挑戦－」（右）




田根剛「未来の記憶」展（左）、「磯崎新の謎」展（左）

【参考】建築の原点に返る展覧会

（2017 年 12 月までに執筆したコラムより）

2017 年８月～11 月にかけて東京に行く機会を利用して次の４つの建築展を見てきた。

Ａ展：日本の家 －1945 年以降の建築と暮らし－

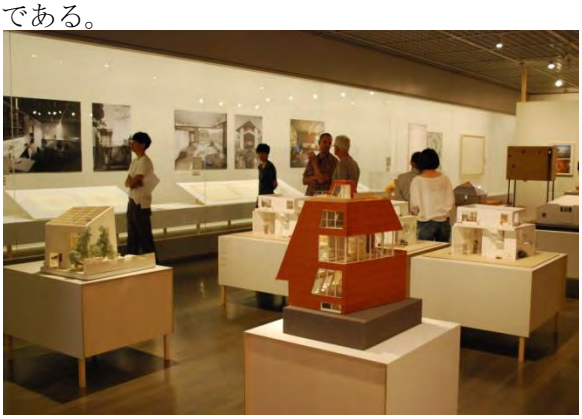
Ｂ展：ル・コルビュジェの芸術空間 －国立西洋美術館の図面からたどる思考の軌跡－

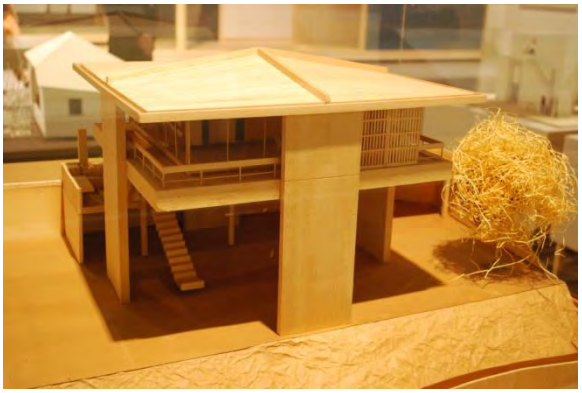
Ｃ展：アジール・フロッタン再生展

－浮かぶ避難船 ル・コルビュジェが見た争乱・難民・抵抗から－

Ｄ展：安藤忠雄展 －挑戦－

Ａ展は、日本の建築家が設計した 1945 年以降の戸建住宅を紹介するもので、ローマとロンドンで開催された後に、東京国立近代美術館で巡回展示されたものである。丹下健三氏の「自邸」、清家清氏の「斎藤助教授の家」、篠原一男氏の「白の家」、東孝光氏の「塔の家」、白井晟一氏の「呉羽の舎」、黒川紀章氏の「中銀カプセルタワービル」など、筆者が大学時代に学んだ多くの作品の図面や模型を目の当たりにし、住宅設計の楽しさと面白さを改めて感じたところである。

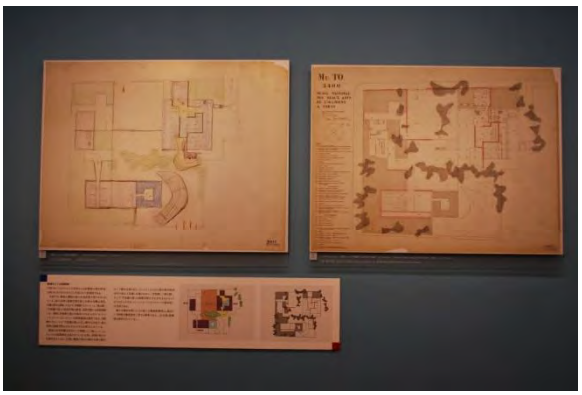




日本の家 －1945 年以降の建築と暮らし－

Ｂ展は、2016 年に世界文化遺産に登録された国立西洋美術館の本館を取り上げ、ル・コルビュジェがその設計の過程で描いた習作図面をもとにコルビュジェの本館構想のプロセスを紹介するものである。コルビュジェが提案した「ピロティ」「屋上庭園」「自由な平面」「水平連続窓」「自由なファサード」という近代建築の５原則や、所蔵品の増加とともに展示室を増築していくことを基本理念とするプロトタイプ「無限成長美術館」の考え方に触れることができた。





ル･コルビュジェの芸術空間 －国立西洋美術館の図面からたどる思考の軌跡－

（次ページに続く）

Ｃ展の主役である「アジール・フロッタン（浮かぶ避難所）」は、コルビュジェの知られざるプロジェクトであり、パリのセーヌ川（ノートルダム大聖堂から約１km の上流）に浮かんでいる。世界救世軍の依頼により設計し、船を改造したもので、第一次世界大戦の混乱によって生じた女性の難民を収容すべく、1929 年に完成したものである。もともとは石炭を運ぶコンクリート造の船だったが、箱型の船体に柱と屋根・水平窓を増築し、建築としてリノベーションされた。その後、老朽化により建築としての機能を失っていたが、2005 年から修復工事が施され、2018 年からギャラリー機能を持った建築として再生されることになっている。

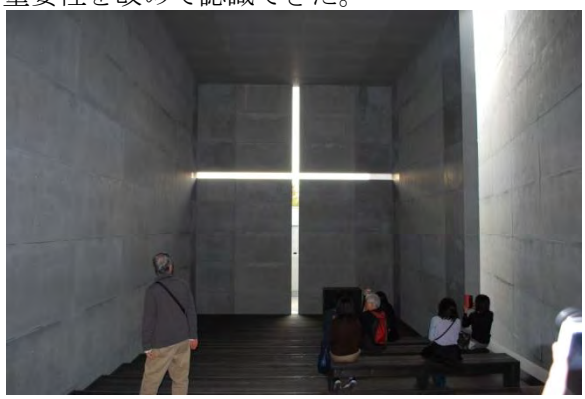
この新しい船出を祝して、完成当時の資料、設計のスタディ、現在の写真・映像、模型等により紹介されたものである。ここでも、コルビュジェが提唱する近代建築の５原則が貫かれている。パリに行く機会を設けて、ぜひ実物を見てみたいものだ。





アジール･フロッタン再生展　－浮かぶ避難船　ル･コルビュジェが見た争乱･難民･抵抗から－

Ｄ展は、建築家・安藤忠雄氏の半世紀に及ぶ設計活動の軌跡と未来への展望を「原点／住まい」「光」「余白の空間」「場所を読む」「あるものを生かしてないものをつくる」「育てる」という６つのセクションに分けて紹介したものである。建築の設計だけでなく、環境再生や震災復興といった社会活動にも果敢に取り組まれており、展覧会場を巡りながら安藤氏の歩んできた道程はもちろん、建築という文化の豊かさ、建築の無限の可能性を感じることができた。その中でも、「場所性」「新旧の対話」というキーワードは筆者が常々考えていることであり、その重要性を改めて認識できた。





安藤忠雄展　－挑戦－

４つの展覧会は、「地域づくりや建築の原点に返る旅」を進めている筆者にとって、大変刺激的なものであり、タイムリーなものであった。社会人になって忘れかけていた「建築への想い」を新たにしたところであり、今後の人生を考える上で大いに参考にしていきたい。

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	歴史的建造物と桜巡りの旅①	場所	朝倉市、熊本市

四季があるのが日本の気候の特徴であり、それが美しい風景となって季節感を演出する。なかでも桜や新緑、紅葉の時期は美しい花や眩い葉、赤色や黄色に染まる葉が彩を添える。

九州では3月下旬から4月上旬にかけて一斉に桜が開花し、この時期の筆者のまち旅のテーマは「桜巡りの旅」に絞られる。特に伝統的町並みや城郭、寺院、神社等の歴史的建造物と桜が見事に調和した風景は、多くの人々に感動を与えている。筆者がこの時期によく訪問するのが、桜並木が続く秋月城址周辺、お城や石垣を背景とした桜が美しい熊本城、水面や築山と調和した桜が美しい水前寺成就園である。




朝倉市 秋月城址周辺




熊本市 熊本城




熊本市 水前寺成就園

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	歴史的建造物と桜巡りの旅②	場所	福岡市、太宰府市等

石垣やお堀を背景とした桜が美しい福岡城址、山門や六角堂を背景とした東長寺の夫婦枝垂れ桜、階段状の参道に沿って立体的に桜が続く宝満宮竈門神社、権現川沿いの桜が石垣と調和した伊万里の大川内山、ソメイヨシノだけでなくオオムラザクラ、クシマザクラ等の遅咲きの桜により長い期間にわたって桜が楽しめる大村公園も、筆者がよく訪問する桜の名所である。

これらは四季それぞれに魅力がある場所であるが、特に桜の時期は城址や寺社等の歴史的空間と一体となって、美しさと日本の情緒を醸し出している。




福岡市　福岡城址（左）、東長寺（右）




太宰府市　宝満宮竈門神社（左）、伊万里市　大川内山（右）




大村市　大村公園　ソメイヨシノ（左）、オオシマザクラ（右）

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	歴史的建造物と桜巡りの旅③	場所	福岡市

筆者が暮らす身近な姪浜周辺にも桜の名所がいくつもある。筆者が姪浜で活動をしていた頃は「歴史的建造物と桜巡り」と銘打って毎年のようにまち歩きを実施し、多くの来訪者に喜んでいただいた。普段何気なく過ごしている場所でも桜の時期はその魅力が倍増して「桜の名所」となり、地域資源を見直すきっかけとなったりする。

こうした視点で改めて地域資源を発掘していくことも、「身近な魅力資源を活かしたまちづくり」を進めていく上で大切である。








福岡市　姪浜周辺の桜の名所（※枝の剪定により環境が変わっている場所もある）

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	桜巡りの旅①	場所	熊本市、朝倉市等

桜をテーマとした旅は「歴史的建造物と桜巡り」に限らない。筆者は並木を構成する桜から美しさだけでなく、組織のあり方を感じている。例えは、熊本市健軍の自衛隊通りの桜や朝倉市秋月の杉の馬場の桜は、一本一本の形は決して綺麗ではないが、よく見ると、人の人生と同じようにこれまでの桜の歴史を感じ取ることができる。それは、人の生き様と同様に桜の生き様である。

また、一本一本の桜の幹や枝の形は様々であるが、それが並木となると美しい景観を形成する。それは、「多様性の中の統一」という表現がピッタリであり、異なる性格や考え等を持つ多様な個人により構成される人間社会のあり方をも考えさせるものだと感じている。職場や学校、地域団体等の様々な組織において、応用できるのではないだろうか。




熊本市 健軍自衛隊通りの桜並木




朝倉市 秋月杉の馬場の桜並木




筑前町 草場川の桜並木

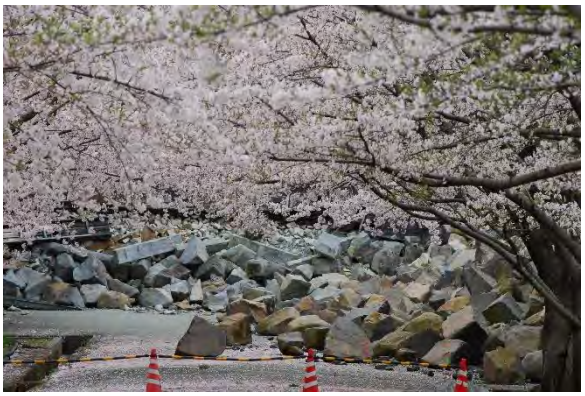
大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	桜巡りの旅②	場所	熊本市、南阿蘇村

筆者には忘れられない桜が2つある。熊本城の桜と南阿蘇村の一心行の桜である。両桜とも熊本地震前の 2016 年4月2日に訪問したばかりで、同月の 14 日と 16 日に震度7の地震で熊本市や南阿蘇村は甚大な被害を受け、様変わりしてしまった。それから1年後に熊本城の満開の桜を見に訪れたが、石垣と桜の美しさは熊本だけでなく、日本の誇りだと改めて感じた。多くの市民や観光客も訪れ、賑わいを見せており、復興の足音を強く感じた。

また、一心行の桜も地震前と同じように咲き誇り、黄色の菜の花や青い空とのコントラストが鮮やかであり、多くの来訪者で賑わっていた。熊本城や一心行の桜を巡る旅は、まさしく熊本の復興の過程を巡る旅であり、感動の旅である。そして、それが筆者流の熊本復興への支援である。











熊本市　熊本城の桜
（熊本地震から1年後の 2017 年4月）



南阿蘇村　一心行の桜
（熊本地震から1年後の 2017 年4月）

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	桜巡りの旅③	場所	伊万里市

次は鉄道のローカル線の桜である。ここ数年は仕事の関係で1～2両編成のローカル線に乗る機会が多く、いろいろな駅で桜を目にすることが多い。なかでも印象的なのが松浦鉄道である。松浦鉄道では多くの駅で桜を植えており、桜の咲く頃になると浦ノ崎駅や吉井駅、久原駅は多くの来訪者で賑わっている。特に浦ノ崎駅は「桜の駅」とも呼ばれ、美しい桜並木を形成している。

一つひとつの駅は点であるが、松浦鉄道沿線を一つのエリアと考えれば、桜をテーマにしたネットワークも可能となり、「桜の鉄道」として県域や市町村域を超えた広域連携による地域づくりが可能になるのではないかと筆者は考えている。桜はそうしたヒントを与えてくれている。











伊万里市　松浦鉄道　浦ノ崎駅の桜



伊万里市　松浦鉄道沿線の桜（久原駅等）

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	桜巡りの旅④	場所	福岡市

普段は周辺の風景に埋没して目立たない桜であるが、花の咲く時期は一躍スターとなり、日本全国で桜の見ごろの時期が話題となる。まちを歩くとこんな所に桜の木があったのかと思うこともよくある。建物の建て替え等に合わせて伐採されていく桜が多い中で、ポツンと残っている美しい桜を見ると心が和むものである。それらは「残した桜、残った桜」という表現がピッタリである。

また、市民団体の環境保全活動により森の中に埋もれていた桜が見事に再生されている場所もある。残した桜も再生された桜も魅力的な地域資源の一つであり、地域の中で誇りと愛着をもって見守ってほしいものである。






福岡市内で出会った「残した桜、残った桜」




福岡市　愛宕山　市民団体の環境保全活動により再生された桜の森

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	桜巡りの旅⑤	場所	福岡市

「残した桜、残った桜」は筆者の住む姪浜周辺にもたくさん見かけることができる。花の咲く頃でないと目立たない存在であるが、それぞれの桜の木にそれぞれの歴史があることは容易に想像できる。そうしたことを考えながら、まちを歩くことも楽しいものである。

また、市民や企業の厚意によって植えられた桜も、時間が経過し木々が成長することで、「地域の桜の名所」になりつつある場所もある。姪浜周辺にはいろいろな桜が存在し、それらを巡る旅も筆者の「小さなまち旅」のテーマの一つである。さらに、能古島まで足を運ぶと、より広域的なエリアで桜の旅を楽しむことができる。春の博多湾姪浜エリアは「桜の回遊路（海遊路）」でもある。



福岡市姪浜周辺の「残した桜、残った桜」



福岡市姪浜周辺の「市民や企業の厚意により植えられた桜」



福岡市　能古島アイランドパーク「海と桜が楽しめる桜」

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	歴史的建造物と紅葉巡りの旅①	場所	朝倉市、豊後高田市等

桜の時期と同様に四季を感じるのが紅葉の時期であり、赤色や黄色に染まる葉が彩を添える。九州では 11 月中旬から 12 月上旬にかけて紅葉の見ごろの場所が多く、この時期の筆者のまち旅のテーマは「紅葉巡りの旅」に絞られる。特に城郭、寺院、神社等の歴史的建造物と紅葉が見事に調和した風景は、多くの人々に感動を与えている。

筆者がこの時期によく訪問するのが、黒門を背景にカエデの赤色や黄色のグラデーションが美しい秋月城址、重厚で優美な木造建築物とモミジの赤色とイチョウの黄色のコントラストが印象的な富貴寺、樹齢 400 年の大カエデの紅葉が見事な雷山千如寺大悲王院である。




朝倉市 秋月城址




豊後高田市 富貴寺




糸島市 雷山千如寺大悲王院

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	歴史的建造物と紅葉巡りの旅②	場所	熊本市、太宰府市等

お城や石垣を背景とした紅葉が美しい熊本城、水面や築山と調和した紅葉が美しい水前寺公園、階段状の参道に沿って立体的に紅葉したカエデが続く宝満宮竈門神社も、筆者がよく訪問する紅葉の名所である。これらは桜の時期と同様に城郭や寺社等の歴史的空間と一体となって美しさと日本の情緒を醸し出している。

また、小樽や函館では歴史的建造物に蔦を這わす景観をよく見かけるが、紅葉の時期は赤色や黄色、緑色のコントラストが鮮やかである。




熊本市　熊本城




熊本市　水前寺成就園（左）、太宰府市　宝満宮竈門神社（右）




歴史的建造物に這わせた蔦の紅葉：小樽市の事例（左）、函館市の事例（右）

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	歴史的建造物と紅葉巡りの旅③	場所	福岡市

筆者が暮らす身近な姪浜周辺にも紅葉の名所がいくつもある。筆者が姪浜で活動をしていた頃は「歴史的建造物と紅葉巡り」と銘打って毎年のようにまち歩きを実施し、多くの来訪者に喜んでいただいた。桜と同様、普段何気なく過ごしている場所でも紅葉の時期はその魅力が倍増して「紅葉の名所」となり、地域資源を見直すきっかけとなったりする。

こうした視点で改めて地域資源を発掘していくことも、「身近な魅力資源を活かしたまちづくり」を進めていく上で大切である。




福岡市姪浜　モミジの紅葉が美しい興徳寺





福岡市姪浜　姪浜住吉神社（左）に代表される寺社のイチョウの紅葉も姪浜の特徴




福岡市愛宕　愛宕神社参道に展開する桜の紅葉（左）、桜の紅葉も美しい観音寺（右）

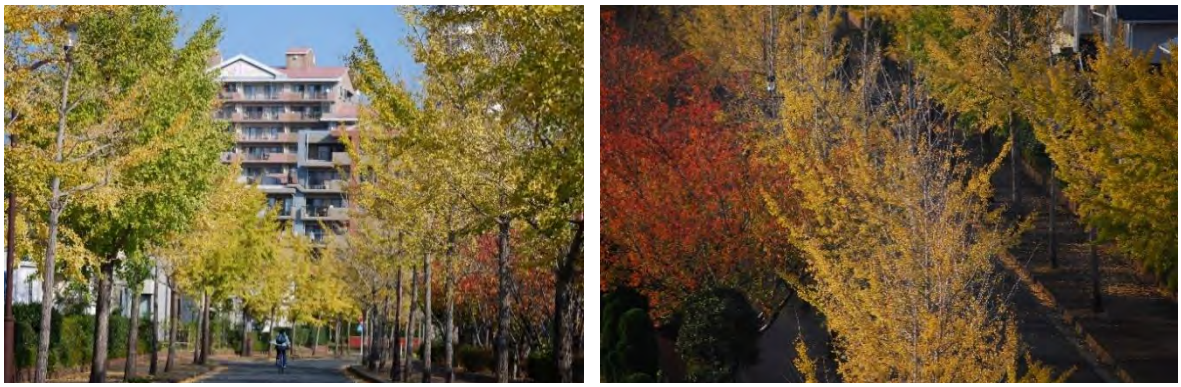
大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	紅葉巡りの旅①	場所	福岡市

紅葉をテーマとした旅は「歴史的建造物と桜巡り」に限らない。筆者は並木を構成するケヤキやイチョウから美しさだけでなく、組織のあり方を感じている。紅葉の名所だけでなく、毎年 11 月になると、筆者の自宅近くのケヤキ並木やイチョウ並木も紅葉し、紅葉の具合により様々な色のグラデーションを感じることができる。桜と同様にこれらの紅葉からも「多様性の中の統一」「組織運営（多様な個人と組織）」を感じることができるのである。

人間社会も身近な自然界から学ぶことがたくさんあるのではないだろうか。桜や紅葉の事例は、ほんの一部に過ぎないのであり、参考になる事例は身近に多く存在するのである。



福岡市愛宕浜　ケヤキの紅葉のグラデーション



福岡市愛宕浜　イチョウと桜の紅葉のグラデーション



福岡市百道浜　ナンキンハゼとアメリカフウの紅葉のグラデーション

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	紅葉巡りの旅②	場所	唐津市、広川町

個人の強い意志によって植えられたモミジやイチョウが成長し「紅葉の名所」になっている場所もある。唐津市の環境芸術の森は鶴田正明さん夫妻が息子さんの死をきっかけに「昔の森を取り戻す 昔の川を取り戻す 昔の海を取り戻す」という想いを胸に 40 年以上の歳月をかけて植栽を続け、今では1万本を超えるモミジやカエデが訪れる人を幻想的な空間へ誘っている。

また、広川町の太原(たいばる)のイチョウ並木は農業を営む丸山元運(もとゆき)さんが 23 年前に奥様が亡くなられた後に、長年ブドウ栽培で使っていた畑の一部をイチョウに植え替えた場所である。植えた当初は低い苗木だったが今では7～8mまで成長し、約 80 本の並木として、今では多くの人々が訪れる「紅葉の名所」となっている。奥様が亡くなられる直前まで2人で紅葉狩りに行くのを楽しみにしていたとのことで、丸山さんと亡き奥様の想いが込められている。






唐津市 環境芸術の森

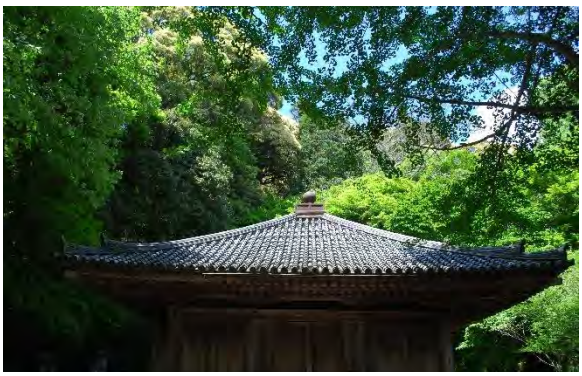



広川町 太原(たいばる)のイチョウ並木

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	四季を実感する旅①	場所	豊後高田市、糸島市等

桜や紅葉の時期だけでなく、新緑の頃も四季を実感できる。4月～5月にかけてイチョウ、モミジ、クスノキ等の新緑が眩く、この時期のまち歩きも楽しいものである。筆者も福岡市内の身近な寺社だけでなく、旅先での寺社の新緑を楽しんでいる。

特に印象に残っているのが、紅葉の名所となっている豊後高田市の富貴寺のモミジやイチョウの新緑、糸島市の雷山千如寺大悲王院の大カエデの新緑である。紅葉の頃はことさらに美しいが、若葉が芽生える初夏も初々しいものである。また、諫早市の諫早神社や大木町の天満神社のクス群の新緑も自然光に映えて眩いものである。





豊後高田市　富貴寺のモミジやイチョウの新緑




糸島市　雷山千如寺大悲王院の大楓の新緑（左）、雷神社のイチョウやモミジの新緑（右）




諫早市　諫早神社のクス群の新緑（左）、大木町　天満神社のクス群の新緑（右）

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	四季を実感する旅②	場所	福岡市

自宅近くや勤務先近くにケヤキ並木やイチョウ並木があり、四季の変化を実感でき、新緑⇒深緑⇒紅葉⇒落葉⇒新緑のサイクルにより季節感を身近に感じている。こうした身の回りの体験が「身近な地域資源を活かしたまちづくり」につながるのではないかと考えている。

また、姪浜住吉神社のイチョウは樹齢 700 年を超える御神木であるが、今でも元気に新緑⇒深緑⇒紅葉⇒落葉⇒新緑のサイクルを繰り返しており、新緑や紅葉の時期は一段と存在感が大きい。大名にある JT 跡地（現在はマンション敷地内）の樹齢 400 年のイチョウは再生治療が進められているが、こちらも眩い新緑が印象的である。




福岡市愛宕浜　自宅近くのケヤキ並木の新緑（左）、イチョウ並木の新緑（右）




福岡市薬院　勤務先近くのケヤキ並木の新緑





福岡市姪浜　姪浜住吉神社の樹齢 700 年を超えるイチョウの新緑（左、中）
福岡市大名　再生治療が進められている樹齢 400 年のイチョウの新緑（右）

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	四季を実感する旅③－１	場所	阿蘇市

身近な場所を除けば四季の変化を定点観測することは時間的、空間的（距離的）に難しいが、1年に数回訪れる阿蘇の草千里は筆者にとってはその典型的な場所の一つである。冬は行ったことがないが、「野焼き後の真っ黒な景観」「初夏の新緑の景観」「盛夏の深緑の景観」「晩秋の紅葉の景観」と四季折々で全く異なる風景を楽しめ、阿蘇を代表する風景の一つとなっている。草原の植物も様々に変化し、一層四季の変化を演出している。

筆者は 2016 年3月 21 日に草千里を訪れているが、2010 年の宮崎県での口蹄疫発生後に牛の放牧が中止され、草原を維持するために 50 年振りに野焼きが行われた後であった。その後同年4月 14 日と 16 日の震度7の熊本地震で阿蘇地方も甚大は被害を受けたこともあり、筆者は特に印象に残っている。

（次ページに続く）




阿蘇市 草千里 野焼き後の景観（2016 年3月 21 日撮影）




同上 初夏の新緑の景観（2020 年5月 23 日撮影）




同上 盛夏の深緑の景観（2018 年8月 14 日撮影）

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	四季を実感する旅③－２	場所	阿蘇市

（次ページから続く）

国の天然記念物である米塚も草千里を訪れた時にあわせて行く場所であり、草千里と同様に「初夏の新緑の景観」「盛夏の深緑の景観」「晩秋の紅葉の景観」と四季折々で全く異なる風景を楽しめる。初夏から盛夏にかけての鮮やかな緑色や、晩秋の茜色に輝くススキとのコントラストもきれいである。

米塚も熊本地震で被害を受け斜面に亀裂が入り、痛々しい山容であったが、少しずつ回復しているようである。完全に癒えるには時間がかかるが、自然の治癒力には驚かされるものがある。




阿蘇市　草千里　晩秋の紅葉の景観（2019 年 10 月 28 日撮影）




阿蘇市　米塚　盛夏の深緑の景観（左：2018 年8月 14 日撮影）
晩秋の紅葉の景観（右：2019 年 10 月 28 日撮影）




阿蘇市　草千里展望所から見た米塚（左）、米塚下園地のススキ（右）※共に 2019 年 10 月 28 日撮影

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	四季を実感する旅④	場所	小布施町、長野市

「四季」が一番わかりやすいのが四季折々の花であろう。筆者が印象に残っているのが地域全体で花のまちづくりに取り組んでいる小布施町であり、メインストリートだけでなく、小さな空き地や民家の軒先、畑の一隅でも心のこもった美しい花壇に出会うことができる。

また、「丹精込めた庭を、より多くの人と楽しもう」「出会いや交流を通じて、花と緑があふれる豊かな生活文化を高めよう」という願いを込めて、個人の庭を公開する『小布施オープンガーデン』が推進されている。2000 年から始まったオープンガーデンは日本で最初の取り組みであり、現在までに約130 箇所の個人庭園が公開されている。その後、長野市の松代でも同様の取り組みが行われている。九州では久留米市の田主丸等で実践されている。




小布施町 まちのそこかしこで展開される花のまちづくり




小布施町 花のまちづくりの拠点であるフローラルガーデンおぶせ（左）、オープンガーデンの案内板（右）




小布施町 オープンガーデンの例（左）、長野市松代 お庭拝見（オープンガーデン）の例（右）

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	四季を実感する旅⑤	場所	長崎市

長崎市では毎年5月下旬～6月中旬に「紫陽花（おたくさ）まつり」が市内の各所で実施されている。長崎市の花にもなっている紫陽花は出島のオランダ商館医シーボルトの愛した女性お滝の名前にちなんで「おたくさ」と呼ばれており、期間中は見ごろを迎えた多くの種類のアジサイが市内各所（出島、中島川周辺、興福寺、グラバー庭園、シーボルト記念館等）に設置され、まちなかを彩る。

より一層風情ある町並みが演出されるこの時期は、紫陽花を通してシーボルトという人物やシーボルトと長崎との関わりを知り、ひいては地域の歴史や魅力を再認識する絶好の機会になるのではないだろうか。









長崎市　市内の各所で展開される「紫陽花（おたくさ）まつり」

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	歴史的町並みとお雛様巡りの旅①	場所	朝倉市、うきは市

春のお雛様巡りは各地で定着している。その中でも歴史的町並みでのお雛様巡りはより雰囲気が出ている。筆者も 2020 年の春に近郊の「歴史的町並みとお雛様巡りの旅」を楽しんだ。朝倉市秋月、うきは市筑後吉井、八女市八女福島、佐賀市柳町と相互に近いエリアであるが、それぞれの地域の特徴が出ている。

秋月は長屋門前の石段に 350 体の雛人形が並べられ、圧巻の景色が広がっていた。テレビや新聞で見ていたが、実際に見ると壮観である。筑後吉井はお雛様や歌舞伎、浮世絵を題材にして各家々の女性が手作りした「おきあげ」や、箱のままでお内裏様が飾れるようになっている「箱雛」が特徴である。筑後吉井では 1993 年から実施されており 2021 年で 29 回目を迎えている。









朝倉市 秋月のお雛様巡り



うきは市 筑後吉井のお雛様巡り

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	歴史的町並みとお雛様巡りの旅②	場所	八女市、佐賀市

八女福島では 1998 年から「雛の里・八女ぼんぼりまつり」と称したイベントが開催され、約 100 軒の民家や商店が江戸期から現在までのお雛様を展示している。なかでも江戸期から昭和 30 年代まで作られていた素朴な「箱雛」が伝統工芸の町・八女福島の特徴である。

佐賀市では柳町を中心としたエリアで「佐賀城下ひなまつり」が開催され、伝統工芸手織り佐賀錦や鍋島小紋の衣装を着たお雛様、生花のお雛様が特徴である。古い町家等を活用したこだわりのお店も続々と誕生しており、あわせて訪問するとより楽しみも広がる。

4つの地域のお雛様巡りを紹介したが、歴史的町並みの中の伝統的な建物の中でこそ、よりお雛様が映えるものであり、毎年多くの人々が訪れ、いずれも春の風物詩となっている。











八女市 八女福島のお雛様巡り



佐賀市 柳町のお雛様巡り

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	歴史的町並みとお雛様巡りの旅③	場所	有田町、伊万里市

2021 年の春に佐賀県有田町と伊万里市のお雛様巡りをする機会に恵まれた。歴史的な町並みが特徴である有田町内山地区では町内の施設や陶磁器店に、焼物のまちならではの有田焼のお雛様やその家に代々伝わる雛人形が展示され、生活と産業、文化、景観が息づく有田町ならではの魅力を醸し出している。有田館では世界最大の磁器製雛人形二段飾りが展示され、深川製磁本店や香蘭社、今右衛門窯等の老舗の窯元でも各社オリジナルの雛人形が展示されている。

また、伊万里市の古伊万里通りでは 2020 年からお雛様巡りが行われており、伊万里焼のお雛様や各家庭に代々伝わる雛人形等が展示され、賑わいの少なくなった商店街を活性化しようという意気込みを感じることができた。なかでも、伊万里市二里町の前田家（古伊万里酒造）に伝わる貝合わせが印象に残っている。











有田町　内山地区の雛巡り

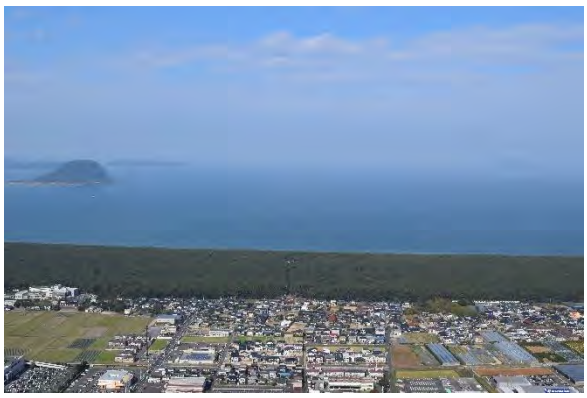


伊万里市　古伊万里通りの雛巡り

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	松原の魅力を実感する旅①	場所	唐津市

松原は防風林として植樹されたものもあれば、海岸に天然の松原が形成されたものもあり、松林越しに砂浜と海が見える風景は日本的な情緒を醸し出している。いろいろな地域に松原と名の付く場所があるが、何らかの形で松原が形成されていたと思われ、今でもその名残を感じることができる。

その中で筆者がよく訪問するのが、唐津市の虹の松原である。ここは国の特別名勝で、三保の松原、気比(けひ)の松原とともに日本三大松原のひとつに数えられる景勝地であり、長さ約 4.5km、幅約 0.5km にわたり、約 100 万本のクロマツが群生している。17 世紀の初めに防風・防潮のため、海岸線の砂丘にクロマツを植林したのが始まりとされており、南側の鏡山から見ると、青い海と空を背景に緑の松の美しいコントラストが印象的である。





唐津市 虹の松原

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	松原の魅力を実感する旅②	場所	福岡市

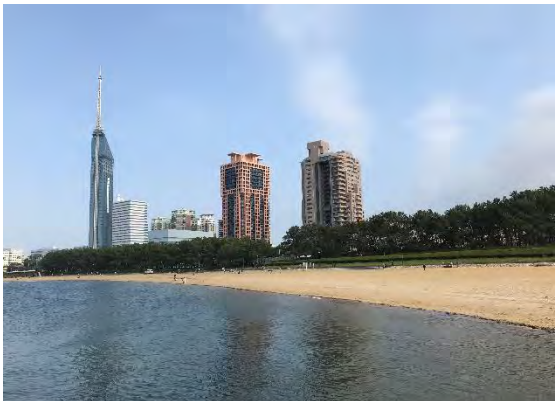
筆者が暮らす愛宕浜の近くにも身近な松原がある。西区の生の松原は、博多湾に面した約 40ha にわたって広がるクロマツを主体とした松林で（旧唐津街道に沿って十郎川河口部から西に展開）、「日本の白砂青松 100 選」にも選定されている。神功皇后が三韓出兵の際に植えた松が起源と伝わり、元寇防塁も残るなど歴史的にも貴重な場所である。福岡市内では百道、箱崎等にも同じような松原があったが、都市化で姿を消し、生の松原だけが現存する。

また、埋め立てによって造られたシーサイドももちや西福岡マリナタウンの海岸線に整備された海浜公園では、植樹された松も成長し、今では新たな松原として白砂青松の空間となっている。これらが埋め立てられる前までは海に面していた百道や豊浜には今でも松林が残り、当時の海岸線の名残が感じられる。こうした視点でまち歩きをすることも楽しい。





福岡市　生の松原





福岡市　シーサイドももち（百道浜）





福岡市　西福岡マリナタウン（愛宕浜）

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	樹木を巡る旅①－１	場所	高森町

樹木を巡る旅も様々なテーマがある。まずは巨樹。神社の境内や人里離れた山の中にひっそりと佇んでいる御神木や巨樹は、樹齢数百年どころか千年を超えるものもある。古い樹木や巨樹には聖霊や神様が宿るとされ、信仰の対象として崇められるようになった。

木の高さや幹回りの太さだけでなく、形や枝ぶり、幹の表情等を観察すると、その樹木の歴史や生き様を想像でき、人間社会と置き換えて考えることもできる。長い間、台風や雷等の自然災害を乗り越えて生き残り、地域や人々を見守ってきた巨樹を巡る旅から、筆者は自然の驚異、季節感、地域性、人の生き様等を学んでいる。











高森町　樹齢 400 年超の高森殿の杉。幹周 10mを超える夫婦杉で、大きな幹からいくつもの枝が四方に広がり神秘的な雰囲気を醸し出している。

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	樹木を巡る旅①－２	場所	霧島市、長崎市等

樹木を巡る旅も様々なテーマがある。まずは巨樹。神社の境内や人里離れた山の中にひっそりと佇んでいる御神木や巨樹は、樹齢数百年どころか千年を超えるものもある。古い樹木や巨樹には聖霊や神様が宿るとされ、信仰の対象として崇められるようになった。

木の高さや幹回りの太さだけでなく、形や枝ぶり、幹の表情等を観察すると、その樹木の歴史や生き様を想像でき、人間社会と置き換えて考えることもできる。長い間、台風や雷等の自然災害を乗り越えて生き残り、地域や人々を見守ってきた巨樹を巡る旅から、筆者は自然の驚異、季節感、地域性、人の生き様等を学んでいる。



霧島市　霧島神宮の樹齢 800 年の杉



長崎市　松森神社の樹齢 300 年のクスノキ



宇佐市　宇佐神宮の樹齢 800 年のクスノキ



鳥栖市　田代八坂神社の樹齢 600 年のクスノキ

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	樹木を巡る旅①－３	場所	南阿蘇村、福岡市等

樹木を巡る旅も様々なテーマがある。まずは巨樹。神社の境内や人里離れた山の中にひっそりと佇んでいる御神木や巨樹は、樹齢数百年どころか千年を超えるものもある。古い樹木や巨樹には聖霊や神様が宿るとされ、信仰の対象として崇められるようになった。

木の高さや幹回りの太さだけでなく、形や枝ぶり、幹の表情等を観察すると、その樹木の歴史や生き様を想像でき、人間社会と置き換えて考えることもできる。長い間、台風や雷等の自然災害を乗り越えて生き残り、地域や人々を見守ってきた巨樹を巡る旅から、筆者は自然の驚異、季節感、地域性、人の生き様等を学んでいる。





南阿蘇村　樹齢 400 年の一心行の桜



福岡市　姪浜住吉神社の樹齢 700 年のイチョウ



南阿蘇村　樹齢 90 年の観音桜



糸島市　雷山千如寺大悲王院の樹齢 400 年のカエデ

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	樹木を巡る旅②	場所	長崎市、福岡市

次は原子爆弾の被害から復活を遂げた樹木や、老化により再生治療が進められている樹木を巡る旅である。長崎市の山王神社境内入口にある被爆クスノキ（樹齢 500 年）は、1945 年８月９日に長崎市上空で炸裂した原子爆弾により幹に亀裂が入り、枝葉も吹き飛ばされ、一時は枯死寸前となったが、次第に樹勢を取り戻し奇跡の復活を遂げた。驚くべき生命力である。長崎市では、被爆樹木は爆心地から約4km の範囲に 47 本が確認されている。

また、福岡市大名の JT 跡地にある樹齢 400 年のイチョウは、都市化で衰え、幹の空洞化も進んだため、2013 年から 100 年計画で再生治療が進められている。「飯田屋敷の大銀杏」と呼ばれる樹木の再生を通して、福岡の歴史を知り、樹木の生命力を感じてほしいものである。







長崎市 山王神社境内にある樹齢500年の「被爆クスノキ」（上、中）。樹木の生命力を伝えている。また、参道にある「一本足の鳥居」（下）とともに戦争の悲惨さや平和の大切さを語りかけている。





福岡市 「飯田屋敷の大銀杏」と呼ばれる樹齢400年のイチョウ。100 年計画で再生治療が進められている。福岡の歴史と樹木の生命力を伝えている。

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	ローカル線の旅①	場所	南阿蘇鉄道沿線

のどかな田園や青い海が広がる風景をのんびりと眺めながら移動を楽しめるのが、ローカル線の魅力である。プライベートでは南阿蘇鉄道、仕事では松浦鉄道や島原鉄道、JR 大村線に乗る機会が多く、沿線の多彩な風景を楽しんでいる。

南阿蘇鉄道は 2016 年4月の熊本地震で被害を受けたが、同年7月末に高森駅～中松駅間が復旧し運転を再開している。職員だけでなく沿線の住民の皆さんが地域に誇りを持っていることをいろいろな場面で感じることができた。最近では 2019 年 11 月、2020 年5月、同年8月に訪問したが、季節によって変わっていく農山村の風景を楽しんでいる。








高森町～南阿蘇村　南阿蘇鉄道沿線の風景

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	ローカル線の旅②	場所	松浦鉄道沿線

仕事でよく乗るのが松浦鉄道である。松浦鉄道は有田町～伊万里市～松浦市～平戸市～佐世保市を結ぶ全長約 94km の鉄道であり、有田焼や伊万里焼、有田内山地区の伝統的な町並み、教会や集落、棚田、アジフライに代表される食等の多くの魅力資源が存在する。

沿線の特徴としては、沿線の学校に協力してもらって駅に壁画を飾る事業を進めており、全 57 駅中 40 駅で心のこもった絵を見ることができる（2019 年3月現在）。また、多くの駅で桜を植えており、桜の咲く頃になると浦ノ崎駅や吉井駅、久原駅は多くの来訪者で賑わっている。

一つひとつの駅は点であるが、松浦鉄道沿線を一つのエリアと考えれば、それぞれの地域の個性がより明確になり、県域や市町村域を超えた様々な広域連携による地域づくりが可能になるのではないだろうか。



松浦鉄道沿線の風景



焼物のまちの風景。有田内山地区（左、中）、伊万里大川内山（右）



沿線の学校の協力による壁画設置（左、中）。各駅に愛称が付けられている（右）。



伊万里焼（左）、佐世保独楽（中）、松浦のアジフライ（右）

松浦鉄道沿線の多彩な魅力資源

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	ローカル線の旅③－１	場所	JR 大村線沿線①

広域連携という視点に立つと、大村湾沿岸の市町（長崎市、佐世保市、諫早市、大村市、西海市、時津町、長与町、東彼杵町、川棚町及び波佐見町）にも多くの魅力資源が存在する。
大村市は大村藩の城下町であり、石垣や花の美しい玖島城跡、今も生活が息づく4つの武家屋敷通りと風情ある石垣、海と密接な関わりがあった大村藩や玖島城跡の性格を示すお船蔵跡、大河ドラマのロケ地となった古松の美しい寺島、斜面を利用した枯山水の庭園である旧円融寺庭園等の歴史的な資源がまちなかに集積し、散策しながらその魅力を楽しむことができる。
また、長崎街道沿いの松原宿にも歴史的な雰囲気の町並みが継承され、500 年の伝統のある松原刃物も受け継がれている。そして、市内の至る所から大村湾の景色を眺めることができ、とりわけ夕日の美しさが印象に残っている。
（次ページに続く）





玖島城跡（左）、オオムラザクラ（中）、草場小路武家屋敷通り（右）





大村藩お船蔵跡（左）、寺島（中）、旧円融寺庭園（右）





歴史と伝統が息づく松原宿の町並み





大村湾の景観

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	ローカル線の旅③－２	場所	JR 大村線沿線②

（次ページから続く）

東彼杵町の千綿駅は大村湾に面した駅で、「海に最も近い駅」として海や電車の撮影にやってくる人が後を絶たない。ホームから見える大村湾の絶景、築 90 年以上のノスタルジックな木造駅舎に加え、駅舎内に併設された千綿食堂の美味しいスパイスカレーも魅力である。

また、「Sorriso riso（ソリッソリッソ）千綿第三瀬戸米倉庫」は以前は JA の米倉庫だったが、現在は地産のそのぎ茶を購入できる体験型のショップとカフェが併設されている。古い米倉庫をリノベーションした空間はおしゃれで心地よい空間を提供している。

すぐ近くには、同様に古い建物をリノベーションしたアンティークショップやパン屋、フランス料理店等があり、エリア全体として魅力ある空間となっている。わずか5年の間に約 20 店舗がオープンし、50 人近くが新規に移住しているとのことである。今後の展開が楽しみなエリアである。





大村湾に面した JR 千綿駅と千綿食堂





Sorriso riso（ソリッソリッソ）千綿第三瀬戸米倉庫





アンティークショップ（左）、パン屋（中）、フランス料理店（右）

以上、大村市と東彼杵町千綿駅周辺の魅力を一部紹介してきたが、大村湾沿岸の地域はそれぞれ歴史、自然、食等の多様な魅力資源を有しており、広域的エリアで対比することでそれぞれの地域の魅力をより明確にすることができるのではないだろうか。特に、地域の個性が明確な長崎市と佐世保市の中間に位置する諫早市や大村市、東彼杵町がその魅力をさらに高め、地域内外に PR することで、大村湾沿岸の地域の一層の広域連携が可能になると思う。筆者は小さなまち旅を通して、「大村湾沿岸の地域は十域十色」というポテンシャルを持っていると感じている。

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	ローカル線の旅④－１	場所	霧島市

ローカル線を旅していると古い木造の駅舎に出会うことがある。明治～大正～昭和～平成～令和の5つの時代を生き抜いてきたものもあり、レトロな佇まいが郷愁を誘っている。筆者が訪問した中では、JR 三角線の網田(おうだ)駅が明治 32 年（1899 年）、JR 肥薩線の嘉例川(かれいがわ)駅と大隅横川駅が明治 36 年（1903 年）、小城駅も明治 36 年（1903 年）となっている。また、前述の JR 大村線の千綿駅が昭和3年（1928 年）、大村駅も大正6年（1917 年）となっている。

昭和後期の国鉄民営化や平成のバリアフリー化・耐震化等の際に駅舎の近代化が進み、古い木造駅舎は次第に姿を消していったが、現存する駅舎については価値を見直し、改修による保存を進めていってほしい。











霧島市　JR嘉例川(かれいがわ)駅



霧島市　JR 大隅横川駅

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	ローカル線の旅④－２	場所	宇土市、東彼杵町等

ローカル線を旅していると古い木造の駅舎に出会うことがある。明治～大正～昭和～平成～令和の5つの時代を生き抜いてきたものもあり、レトロな佇まいが郷愁を誘っている。筆者が訪問した中では、JR 三角線の網田(おうだ)駅が明治 32 年（1899 年）、JR 肥薩線の嘉例川(かれいがわ)駅と大隅横川駅が明治 36 年（1903 年）、小城駅も明治 36 年（1903 年）となっている。また、前述の JR 大村線の千綿駅が昭和3年（1928 年）、大村駅も大正6年（1917 年）となっている。

昭和後期の国鉄民営化や平成のバリアフリー化・耐震化等の際に駅舎の近代化が進み、古い木造駅舎は次第に姿を消していったが、現存する駅舎については価値を見直し、改修による保存を進めていってほしい。





宇土市　JR網田(おうだ)駅





東彼杵町　JR 千綿駅



大村市　JR 大村駅



熊本市　JR 川尻駅

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	ローカル線の旅⑤	場所	諫早市

現在の職場では長崎方面の仕事が多く、博多から長崎に向かう特急電車で気になっていた風景がある。諫早市小長井地域の牡蛎養殖の風景とフルーツをかたどったバス停が続く風景である。小長井地域は牡蛎の名産地ということで、2012 年の「かき日本一決定戦（主催：日本オイスター協会）」では小長井町漁協のブランド牡蛎「華漣」が日本一に選ばれている。JR 小長井駅で途中下車し、海岸線からではあるが、牡蛎の名産地の風景を垣間見ることができた。

また、フルーツバス停は 1990 年に開催された長崎旅博覧会で、長崎県の玄関口として訪れる人々の心を和ませる目的で、当時の小長井町が整備したものである。イチゴやメロン、ミカンなど全5種類 16 基のフルーツを模したバス停が国道沿いを中心に設置されている。「ときめきフルーツバス停通り」と名付けられ、地域の人々のランドマークとして親しまれているという。











諫早市　小長井地域の牡蛎養殖の風景

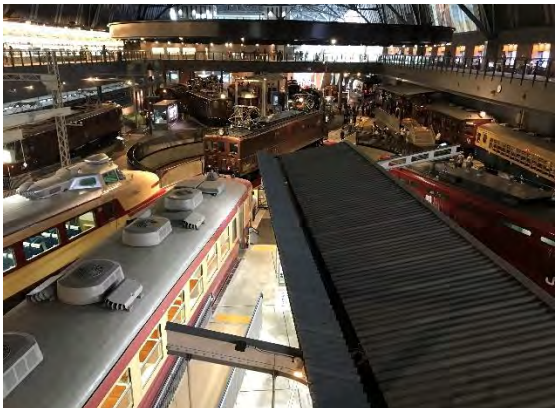


諫早市　小長井地域のフルーツバス停

大テーマ	季節、花、樹木、鉄道		
テーマ	鉄道ミュージアムを巡る旅	場所	さいたま市等

「鉄道博物館」に代表される鉄道ミュージアムは全国各地に存在する。筆者もさいたま市にある「鉄道博物館」の他、北九州市にある「九州鉄道記念館」、人吉市にある「人吉鉄道ミュージアム」等を訪問し、若いころに乗った車両を見て懐かしく思っているところである。鉄道はわが国の近代化を担って開業し、その後の社会の変化に追随しながら変化してきている。

2019 年6月に鉄道博物館を訪問した際、思わぬ発見があった。それは 1997 年に鉄道車両として初めて国の重要文化財に指定された「1号機関車（150 形蒸気機関車）」が 1911 年～1930 年に島原鉄道を走っていたことである。1号機関車は 1872 年に開業した新橋～横浜間に導入され、転属を重ね、1911 年の島原鉄道開業時に同鉄道に移り、創業期の顔として活躍した。仕事でよく利用する島原鉄道の歴史のひとこまを鉄道博物館で知ることになったのである。





さいたま市 鉄道博物館 内部（左）、国指定重要文化財の1号機関車（右）





さいたま市 鉄道博物館 1号機関車の国指定重要文化財等の表示プレート（左）、島原鉄道から国鉄に返還される際に取り付けられた銘板（右）





島原市～諫早市 島原鉄道の現在の車両（左）、大三東（おおみさき）駅の風景（右）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	鳥の目・虫の目・魚の目の旅	場所	函館市、長崎市

政治や経営と同様、地域づくりを考える上では、まずは鳥のように地域全体を俯瞰し地域の状況を把握し、次に虫のように小さな目で地域の状況を知り、魚のように潮流（時代の流れ）を読んで課題を見つけることは重要である。具体的には、地域全体を俯瞰できる視点場（展望空間等）から地域特性を把握し、地域に入って具体的な現況や課題を把握することになる。

例えば、高低差のある地形が特徴である長崎市では様々な視点場が存在し、美しい夜景が大きな魅力となっている（鳥の目）。一方、高台にある住宅地を歩いてみると空き家が増加していることがわかる（虫の目）。それは高台や坂道が魅力である一方、高齢社会の課題を端的に物語っていると言える（魚の目）。また、最近では国の登録有形文化財であった富貴楼や江崎べっ甲店の跡地にはマンションの建設や計画が進み、高台から都心部への人口の移動が進んでいることがわかる。




函館市　立待岬付近から見た市街地（左）、五稜郭タワーから見た五稜郭と市街地（右）




長崎市　稲佐山にあるホテルから見た夜景（左）、グラバー園から見た市街地（右）





長崎市　代表的な坂道であるオランダ坂（左）、マンション建設が予定されている江崎べっ甲店（右）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	一つひとつのストーリーの積み重ねを実感する旅	場所	広川町、熊本市

筆者が紅葉の時期によく訪問する広川町太原(たいばる)のイチョウ並木は、農業を営む丸山元運(もとゆき)さんが 23 年前に奥様が亡くなられた後に、長年ブドウ栽培で使っていた畑の一部をイチョウに植え替えた場所である。植えた当初は高さ30～40㎝だった苗木も今では7～8mまで成長し、約 80 本の並木として、今では多くの人々が訪れる「紅葉の名所」となっている。奥様が亡くなられる直前まで2人で紅葉狩りに行くのを楽しみにしていたとのことで、丸山さんと亡き奥様の想いが込められている。

また、熊本市上及裏通りの「トタン屋根のケーキ屋 ア・ラモート」の店主・新本高志さんは 30 年以上自転車のペダルをこいで、丹精込めて作られたパウンドケーキだけでなく、地域の方々に元気をお届けしている。熊本市内だけでなく、益城町や阿蘇、八代、天草、そして福岡県内にも配達することもあるそうだ。夢の実現に向けて頑張っている姿や、人と人との出会いやつながり、笑顔を大切にされている新本さんから、筆者はいつもエネルギーをもらっている。

丸山さんや新本さんのような一つひとつのストーリーの積み重ねや人と人とのつながりが、地域づくりにつながっていくのだと確信した。




広川町太原(たいばる) 紅葉の名所となったイチョウ並木





熊本市 トタン屋根のケーキ屋 ア・ラモート

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	平和の大切さを実感する長崎巡礼の旅①－１	場所	長崎市

長崎大司教の高見三明氏の言葉に『巡礼とは、すべての人が平和を共有できる世界が来ることを願う「心の旅」なのではないでしょうか。』とある。宗教的迫害や原爆など、様々な苦難を見てきた長崎を訪問することは、平和の大切さを実感できる絶好の機会であり、そうした機会を求めて国内外から多くの方々が長崎巡礼を行っている。

筆者も世界遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」や原爆関連の施設等を巡礼することで、時間を遡って当時の人々の生き方に想いを馳せ、高見大司教の言われるように「なぜ苦しまなければならなかったのか」「同じような不幸を二度と繰り返さないようにするには何をしなければならないのか」自分なりに考えている。



「被爆十字架」の返還式が行われ、ウィルミントン大学平和資料センターのターニャ・マウス所長（右）から、高見三明・カトリック長崎大司教（中央）と信徒代表の藤田千歳さんに渡された＝７日午後、長崎市のカトリック浦上教会、小宮路勝撮影

被爆十字架 長崎に帰る 米国から

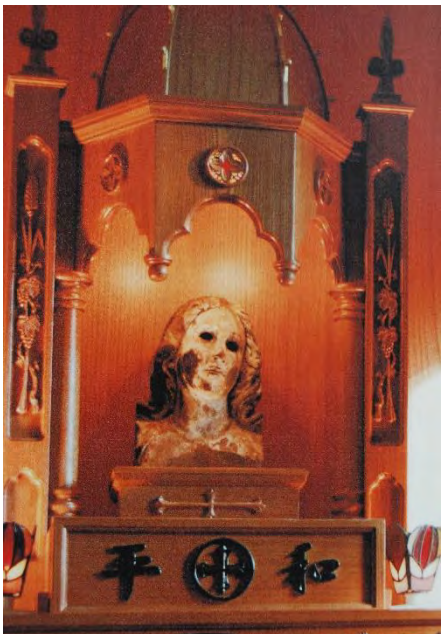
2019.8.8 朝日

米国による原爆投下で崩壊し
崎市の浦上天主堂のがれきの中
つかり、米国で保管されていた
十字架」が7日、被爆から74年
手にしたカトリック長崎大司教
高見三明大司教(73)は「人間の
さを訴えると同時に、希望を与
くれる。生きていてくれてよか
被爆者は亡くなっても、語るが
爆の証人になってくれる」と話
▼32面＝「原爆作った愚かさ伝え
浦上教会などによると、十字
1930年代半ばから旧天主堂
あった。45年秋から長崎に駐留
当時の山口愛次郎司教（故人）
交を結んだ米海兵隊員のウォル
・フークさん（2010年死去
譲り受けたとされる。82年、米
ルミントン大学平和資料センタ
寄贈された。十字架を返還した
ターのターニャ・マウス所長は
の十字架は核兵器を保有する米
各国政府にその使用をやめるよ
している。浦上に返還することに
新たな意味が見いだされるだろ
と話した。（榎本瑞希、田井中雅

2019年8月7日、「被爆十字架」が被爆から74年後に米国から浦上天主堂に返還される。
（2019年8月8日、朝日新聞記事）



被爆十字架返還の2日後の2019年8月9日の「原爆の日」に改めて浦上天主堂を訪問（上）。1945年8月9日の原爆により崩れ落ちた北側の鐘楼は当時と同じ場所で物語る唯一の遺構（右）



瓦礫の中から奇跡的に発見された「被爆マリア像」（現地案内板を撮影）



1945年8月9日の原爆により倒壊した浦上天主堂（現地案内板を撮影）



大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	平和の大切さを実感する長崎巡礼の旅①－２	場所	長崎市

長崎大司教の高見三明氏の言葉に『巡礼とは、すべての人が平和を共有できる世界が来ることを願う「心の旅」なのではないでしょうか。』とある。宗教的迫害や原爆など、様々な苦難を見てきた長崎を訪問することは、平和の大切さを実感できる絶好の機会であり、そうした機会を求めて国内外から多くの方々が長崎巡礼を行っている。

筆者も世界遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」や原爆関連の施設等を巡礼することで、時間を遡って当時の人々の生き方に想いを馳せ、高見大司教の言われるように「なぜ苦しまなければならなかったのか」「同じような不幸を二度と繰り返さないようにするには何をしなければならないのか」自分なりに考えている。




世界遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産である大浦天主堂（左）
同構成資産である外海集落にある出津教会（右）




二十六聖人殉教の地に建つ日本二十六聖人記念館




信仰と建築が一体となった日本二十六聖人記念聖堂　聖フィリッポ教会

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	平和の大切さを実感する長崎巡礼の旅①－３	場所	長崎市

長崎大司教の高見三明氏の言葉に『巡礼とは、すべての人が平和を共有できる世界が来ることを願う「心の旅」なのではないでしょうか。』とある。宗教的迫害や原爆など、様々な苦難を見てきた長崎を訪問することは、平和の大切さを実感できる絶好の機会であり、そうした機会を求めて国内外から多くの方々が長崎巡礼を行っている。

筆者も世界遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」や原爆関連の施設等を巡礼することで、時間を遡って当時の人々の生き方に想いを馳せ、高見大司教の言われるように「なぜ苦しまなければならなかったのか」「同じような不幸を二度と繰り返さないようにするには何をしなければならないのか」自分なりに考えている。





悲惨な戦争を二度と繰り返さないという誓いと世界平和への願いを込められてつくられた平和公園（左）
恒久平和と隣人愛の精神を発信し続けた永井隆先生の病室兼書斎（右）





原爆で約 1,300 名の児童や教師が亡くなった山里小学校（左）
爆心地公園では被爆した浦上天主堂の壁の一部が移設されている（右）





原爆の脅威を伝える山王神社の一本足鳥居（左）、原爆に耐え奇跡の復活を遂げた被爆クスノキ（右）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	平和の大切さを実感する長崎巡礼の旅②	場所	長崎市

長崎市内には長崎四福寺と呼ばれる唐寺がある（崇福寺、興福寺、聖福寺、福済寺）。このうち福済寺は長崎の唐寺の中でも大きな寺院であったと言われ、戦前には現在の国宝にあたる特別保護建築物に指定されていたが、第二次世界大戦中の原爆により焼失し、現在は原爆被災者と戦没者の冥福を祈って建てられた万国霊廟長崎観音が長崎の市街地を見守っている。

貴重な文化遺産は一物も残らず焼失したが、原爆の爆風で焼け落ち、片耳になった雲版（寺で食事等の合図のために鳴らす鐘）や原爆に耐えて生き続けている福済寺ソテツが今でも被爆の歴史を伝えている。




戦前の福済寺（出典：長崎名所唐寺福済寺絵はがき）




長崎の市街地を見つめる観音立像（左）、文殊般若の門と鎮魂の鐘（右）




爆風で焼け落ち、片耳になった雲版（左）
原爆に耐えて生き続け、今でも被爆の歴史を伝える福済寺ソテツ（右）

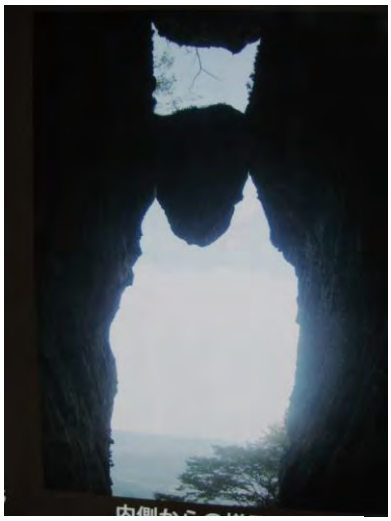
大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	前向き思考の旅	場所	南阿蘇村

免の石は、阿蘇南外輪山の岩山の空洞に挟まっていた巨大な石で、宙に浮いて何万年もここに留まってなかなか落ちない石であった。そのため、受験者や就職等の合格を祈願する人、また、岩と岩を繋いでいたため、縁結び等のご利益があるといわれ、パワースポットとして多くの人が訪れていたが、2016年4月の熊本地震で震度7の激震には耐えられず、落石した。

しかし、落ちた後の空洞は、まるで猫が遥か向こうに見える阿蘇五岳の根子岳を眺めている姿になり、落ちた石は砕けずに下方 50mの場所に留まっていた。地元の人々は、「受験生や就職祈願者の身代わりになって、石が落ちてくれた」と前向きに考え、石が落ちた後の空洞の姿を招き猫に例えてPR していた。私は、逆転の発想に思わず猫のように「ニャッ（ニャー）」としてしまった。これこそ「ピンチをチャンスに」という前向き思考の考え方であろう。







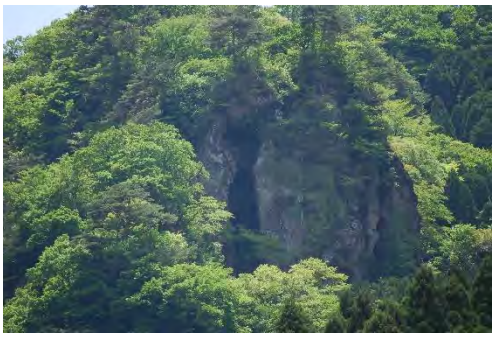
落石前の免の石

yahoo 画像（左2枚）、熊本地震前の現地の案内板の写真（右）



落石後の免の石を招き猫に例えてPR

（南阿蘇村観光協会チラシより）







落石後の免の石

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	一人一花を実感する旅①	場所	小布施町

「一人一花運動」という言葉は、「市民主体の花のまちづくり」の一環として福岡市が 2018 年から推進しているので、福岡市民にとってはよく耳にする言葉である。その先駆的な事例は、地域全体で花のまちづくりを展開している長野県小布施町であり、メインストリートだけでなく、小さな空き地や民家の軒先、畑の一隅でも心のこもった美しい花壇に出会うことができる。

また、「丹精込めた庭を、より多くの人と楽しもう」「出会いや交流を通じて、花と緑があふれる豊かな生活文化を高めよう」という願いを込めて、個人の庭を公開する『小布施オープンガーデン』が推進されている。2000 年から始まったオープンガーデンは日本で最初の取り組みであり、現在までに約 130 箇所の個人庭園が公開されている（※P279 の「四季を実感する旅」でも紹介済）。











小布施町　花のまちづくり



小布施町　オープンガーデン

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	一人一花を実感する旅②－１	場所	大分市、福岡市

筆者は 2018 年 12 月に大分市アートプラザを訪問した際、障がいのある方々が制作した作品の展示会を見る機会があり、その時の「ひとり一人の花を咲かせよう」という言葉が大変印象に残っている。それは、異なる環境にあるすべての人々の生き方が尊重される社会の実現を意味している。

花をよく見ると同じ種類の花でも同じものは一つもなく、異なる個が集積して魅力ある花畑や樹木、並木を形成していることがわかる。それは、人間社会の「個と組織」の関係と類似している（異なる個の集積が魅力ある組織を形成する）。「一人一花」は花の世界だけでなく、人間の世界でも当てはまり、組織のあり方を考える上で参考になるのである。そうした視点で花を見て回ることも楽しいものである。





大分市 障がいのある方々が制作した作品の展示会（大分市アートプラザ）





福岡市西区豊浜 枝垂れ梅





福岡市 能古島アイランドパークの菜の花畑

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	一人一花を実感する旅②－２	場所	長崎市、南阿蘇村等

筆者は 2018 年 12 月に大分市アートプラザを訪問した際、障がいのある方々が制作した作品の展示会を見る機会があり、その時の「ひとり一人の花を咲かせよう」という言葉が大変印象に残っている。それは、異なる環境にあるすべての人々の生き方が尊重される社会の実現を意味している。

花をよく見ると同じ種類の花でも同じものは一つもなく、異なる個が集積して魅力ある花畑や樹木、並木を形成していることがわかる。それは、人間社会の「個と組織」の関係と類似している（異なる個の集積が魅力ある組織を形成する）。「一人一花」は花の世界だけでなく、人間の世界でも当てはまり、組織のあり方を考える上で参考になるのである。そうした視点で花を見て回ることも楽しいものである。




長崎市　紫陽花（左：出島、右：眼鏡橋付近）




南阿蘇村　一心行公園西側のひまわり畑




福岡市　能古島アイランドパークのコスモス畑

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの書店とアートギャラリーを巡る旅①	場所	熊本市、大分市

新聞や雑誌に紹介された書店やアートギャラリーを訪問することも最近の筆者のまち旅のテーマの一つである。その代表的な書店が熊本市の橙書店である。最初に訪問したのが 2015 年5月で玉屋通りと呼ばれる小さな路地沿いにあった頃である。熊本地震前に撮影された映画「うつくしいひと」でもロケが行われた。熊本地震で現在の練兵町に移転したが、オーナーの田尻久子さんのこだわりの本が所狭しと並んでいる。「オレンジ」と呼ばれるカフェも併設しており、常連客のコミュニケーションの場ともなっている。

また、大分市のカモシカ書店も筆者が大分出張時によく訪れる書店であり、新刊書店と古本屋とカフェが一つになったリラックスできる空間である。こちらもオーナーのこだわりの本が並び、レトロな雰囲気が時代を感じさせてくれる。



本屋探見

橙書店

@熊本市

コーヒーの香り 心通わすひととき

初めて入る時は、ちょっとためらうかもしれない。熊本市の中心部にある古い雑居ビル。階段は何だか薄暗い。でも、2階にある扉を開けると、コーヒーの香りがふわり。暖かな色合いの本棚が並んでいる。

「橙書店」別名は、カフェ「オレンジ」。店主の田尻久子さん（50）が2008年、元々経営していたカフェの隣に書店を開いたのがはじまり。3年前、熊本地震で被災したのを機に、一つにまとめて移転した。

翻訳小説や人文書を中心に約2千冊。取次会社を通さず、田尻さん自身が選び、多くは出版社から直接買い取って仕入れる「返本できると、私の場合、本選びに甘えが出そうなので」

カフェスペースのカウンターで一服しながら、おすすめの本をたずねる人も。

田尻さんは言う。「経営はいつもぎりぎり。すべての人の好みに対応できる書店ではありませんが、扉を開けて入って来てくれる知人かの心に寄りそえたらと思って続けています」（上原佳久）

カフェスペースで常連客と談笑する田尻久子さん（右）＝熊本市中央区

売れ筋

●『みぎわに立って』田尻久子著（亀山社） 橙書店の店主によるエッセー集。個性的なお客さんに加えて猫や蜂までやって来る。そんな日常を柔らかな筆致でつづる。

●『苦海浄土』石牟礼道子著（講談社文庫） 生の尊厳を求める水俣病患者を描いた名著。「石牟礼ファンのお客さんは多いです」と田尻さん。

「私もお客さんから教えてもらいます。お客さん同士、好きな本の話で盛り上がることもあります」

くつろいだ雰囲気の店内で、詩人の伊藤比呂美さんが朗読会を開き、思想史家の渡辺京二さんが講演することも。作家で建築家の坂口恭平さんは、書斎がわりに原稿を書きに来る。

熊本市中央区練兵町54松田ビル2階。☎096・355・1276。午前11時半～午後8時（日曜は午後5時まで）。火曜休み。





熊本市 橙書店（左：橙書店に関する新聞記事(2019.5.27 朝日新聞)、右：書店内部）





大分市 カモシカ書店

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの書店とアートギャラリーを巡る旅②	場所	長崎市

筆者は長崎市の田川憲アートギャラリー「Soubi’56」にも 2019 年 12 月の新聞記事を見て以来よく訪問している。田川憲氏は長崎にまつわる数多くの作品を残した版画家で、洋館や居留地の景観保存という願いをよそに、戦後の開発で多くの洋館が失われたことを背景に、失われゆく洋館や居留地等の長崎の風景を「版画として残す」ことを使命として、異国情緒あふれる版画作品として世に出したことで知られている。

現在はお孫さん夫婦が築 70 年のビルの一室を借りてアートギャラリーを開設し、長崎をこよなく愛した田川憲氏の版画を通して古き良き時代の長崎の魅力を伝えるとともに、都市化の進展により次第に減少している歴史的建造物の保存の活動にも携わっている。筆者も福岡県内の町並み保存の活動に関わっており、微力ながらこうした活動をサポートできたらと考えている。



令和元年）12月2日（月）　朝日新聞　（夕刊）

隠れ家の先 長崎愛した版画

木版画家・田川憲の作品展示室

築70年のビルの一室　孫夫婦、魅力伝える

異国情緒あふれる長崎の街並みを愛し、描き続けた長崎の木版画家、田川憲（1906～67）の作品を集めた展示室が、長崎市出島町にできた。築70年ほどの古びたビルの一室で、その魅力を孫夫婦が静かに伝えている。（田中瞳子）

戦後まもなく建ったコンクリート打ちっ放しのビル。ちょうつがいで留められた色あせた扉を開くと、1階の通路の壁には「そうび」とかかれた木製の看板がひとつ。隠れ家のような一室に出合う。

田川の孫の俊さん（49）と妻でオーナーの由紀さん（48）が昨年1月に開いたアートルームだ。店の名「Soubi・56」は、田川が1956年に描いた作品「十字窓(ばら)の窓」から。大浦天主堂の側面のステンドグラスを描いたこの作品の雰囲気とタイトルの響きにひかれた。展示するのは田川の作品や関連する手記で、テーマと作品は2カ月に1度替えている。

田川は長崎市で生まれ、東京や大分、上海などでの生活を経て終戦後に帰郷した。生涯にわたって居留地の洋館や石畳、唐寺など長崎の街並みをモチーフに多くの木版画を残した。

包装紙やお菓子の箱などさまざまなお店のパッケージデザインも手がけている。長崎では日常的に目にする機会が多かったが、没後52年たち、生前を知るファンも高齢化した。俊さんは、祖父の作品をまちで見かけたり、語られたりする機会が減っていると感じるようになった。「常に祖父の版画を見られる場所をつくろう」と思い立った。

「50年以上前につくられた作品だから、少しでも年季のあるところで展示したほうが自然なのでは」。そんな思いで空き部屋を探し、田川が多くの作品を描いた「出島エリア」で、この古びたビルと出合った。

外観からはそこに展示室があるようには見えず、迷ってしまうお客さんもいる。一方で、古いビルのたたずまいにひかれて偶然入ってきて、田川のファンになってくれた人たちもたくさんいた。「芸術とはもっと身近なものだ」と書き残した祖父の思いを受け継ぎ、俊さんは「原画を間近で見て、芸術作品を身近に感じてもらいたい」と願う。由紀さんは「地元の人には『あたりまえ』になっている長崎のよさ、おもしろさに気づき、語ってもらえる場になれば」と話している。

田川憲と棟方志功　2人を描いた小説出版

川憲と青森出身の棟方志功、東西の2版画家を描いた小説「心を彫る」が8出版された。著者は、東京・渋谷にあ小劇場「ジァン・ジァン」の元劇場主の高嶋進さん(87)＝山梨県北杜市。文学のイメージを版画におこした2人の共通点を描いている。

金子光晴の詩を連作版画「十字架鮫（さめ）」に表現した田川と、ドイツの哲学者・ニーチェの「ツァラトゥストラはかく語りき」を板に彫り込んだ棟方。2人の共通点に着目した高嶋さんは「本や新聞が読まれなくなり言葉にこだわらなくなった現代に、言葉に命をかけて死んでいった2人の芸術家をのこしたいと思った」と話す。

田川の孫、俊さんは「長崎の『あたりまえの風景』を多く残してきた祖父の作品も、この本を読んでから見るとまた違って見える。新たな発見を楽しめる小説です」と話した。

税抜き1800円。問い合わせは左右社（03・3486・6583）へ。

田川憲アートギャラリーSoubi’56 に関する記事（2019.12.2 朝日新聞）







田川憲アートギャラリーSoubi’56

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	本や画に魅了されてアートと歴史を巡る旅①	場所	東京都台東区

筆者は書籍で得た情報を基に「アート」「歴史」「旅」「生き方」「哲学」等をテーマに小さなまち旅を実践している。

書籍では、特に小説家・原田マハ氏の本に関心があり、興味を持って読んでいる。筆者が最初に読んだ原田マハ氏の本は、国立西洋美術館誕生に隠された奇跡の物語「美しき愚かものたちのタブロー」であり、ちょうど国立西洋美術館開館 60 周年記念「松方コレクション展」を見た頃である。この本を読んで以来、すっかり彼女のファンになっている。彼女の作品はアート小説が中心であるが、歴史や旅、生き方等の面でも参考になることが多い。





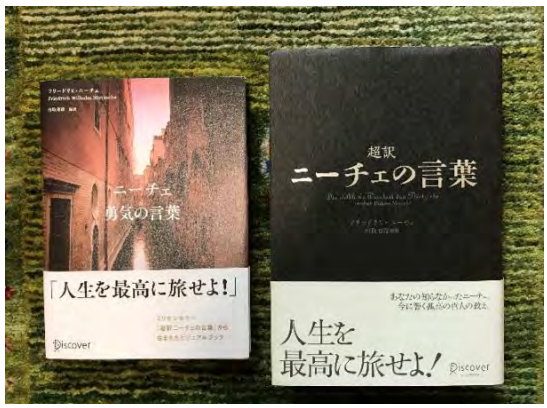
台東区　小説家・原田マハ氏を知るきっかけとなった国立西洋美術館での「松方コレクション展」





原田マハ氏の小説



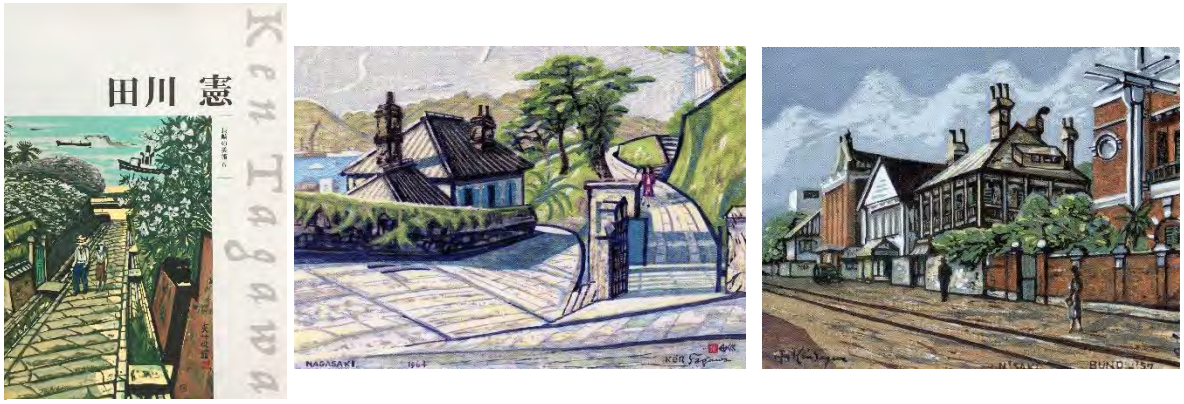


旅や哲学に関する書籍

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	本や画に魅了されてアートと歴史を巡る旅②	場所	長崎市

筆者の長崎への旅は、2018 年1月の福岡市役所の卒業旅行で長崎を訪問したことをきっかけに本格化する。それ以来、教会や寺社、町並み、港等をテーマに長崎ならではの小さなまち旅を実践している。また、2019 年 12 月に田川憲アートギャラリー「Soubi' 56」を訪問し、2018 年に長崎県立美術館で開催された「長崎の美術　田川憲展」の図録を入手後、その図録を基に改めて長崎ならではの風景を求めて、いろいろな場所を訪問している。

町並み保存の活動に関わっている筆者は、失われゆく洋館や居留地等の長崎の風景を「版画として残す」ことを使命として、異国情緒あふれる版画作品として世に出した田川憲氏の想いをいくらかでも感じることで、今後の活動につなげていきたいと考えている。



2018 年に長崎県立美術館で開催された「長崎の美術　田川憲展」の図録（左）、田川憲氏の作品（中、右）



長崎市　田川憲氏の作品を基に改めて崇福寺や聖福寺、オランダ坂、眼鏡橋等を訪問

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの場所を定期的に訪問する旅①	場所	佐賀市

筆者にはこだわりの場所（お店、ペンション等）がいくつかあり、定期的に訪問している。これは「人」や「環境」「味」「その地域ならではの品ぞろえ」をテーマとした小さなまち旅である。

まずは佐賀市三瀬の珈琲豆専門店「珈道庵(こどうあん)」。こんな所にお店があるのかと思わせるほど奥まった緑深い場所にあるが、清流沿いに位置し、川のせせらぎや小鳥のさえずりが心地よい。建物の外観やインテリア、器にもこだわりが感じられ、いつ来ても季節感を満喫できる癒しの空間を提供している。そして何よりも、筆者はお店の方々との会話を楽しみにしている。都会の喧騒を離れ、心身ともにリフレッシュできる場所である。（現在は事情によりカフェは営業していないが、珈琲豆を購入すると美味しい珈琲を入れてもらえ、建物の中や清流沿いのテラスで飲むことができる）。













佐賀市三瀬　珈琲豆専門店「珈道庵(こどうあん)」

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの場所を定期的に訪問する旅②	場所	大分市、長崎市

次は大分市の大分銀行赤レンガ館の1階にあるセレクトショップ「Oita Made Shop」。ここでは「大分の魅力が伝わる商品」「土地や作り手のストーリー」「Oita Made オリジナル商品」をコンセプトに、別府市の竹細工や八湯石鹸、日田市の梨ジャムや下駄、臼杵市の菓子、佐伯市のごまだしなど約 140 種類の厳選された県産品が販売されている。

また、長崎市の「まちぶら案内所もてなしや1号店」も長崎の歴史や文化、空気を伝えるセレクトショップ兼観光案内所で、波佐見町の波佐見焼、長崎市のびわ茶や手作りの祝儀袋等の厳選された県産品の販売とともに、県内の観光情報の提供を行っている。すぐ近くにある2号店では長崎ならではの食品や、空港や駅等の売店ではあまり売っていない通好みの「長崎のよいもの」を取り扱っており、海の幸コーナーも充実している。





大分市 Oita Made Shop





長崎市 まちぶら案内所もてなしや1号店





長崎市 まちぶら案内所もてなしや2号店

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの場所を定期的に訪問する旅③	場所	八女市

最近よく訪問するのが八女市のアンテナショップ「うなぎの寝床」である。ここは「地域文化商社として、土地性を紐解き、流通を担い、交流を生み、風景をつなぐ」をコンセプトに事業を展開しており、文化と風景をつなぐ循環の創出を目指している。伝統的な町家を改修した旧丸林本家、旧寺崎邸、旧大坪茶舗の3つの店舗を中心に筑後地方だけでなく、九州の作家の作品や地域の特産品がずらりと並んでいる。主力商品は、現代風久留米絣のもんぺとその型紙である。

筑後地方を中心に近隣の場と人の魅力を発信し続けており、物販だけでなく、作り手や地域の人々の声に耳を傾けながら、地域文化を継承するシステムを構築することにも力を入れている。











八女市 うなぎの寝床（旧丸林本家）



八女市 うなぎの寝床（旧寺崎邸）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの場所を定期的に訪問する旅④	場所	南阿蘇村

筆者は南阿蘇村のペンション「ふらいんぐジープ」に 2000 年から毎年のように訪問している。最初に訪問した時にお土産としていただいたオオクワガタの幼虫を育て、それが成虫となって「交尾・産卵⇒卵から孵化して幼虫⇒成虫として羽化」という世代交代を繰り返しながら多くのオオクワガタを育ててきた。それをペンションに宿泊に来た子どもたちへのプレゼントとして使わせていただいたこともある。まさにオオクワガタが取り持つペンションとの縁である。

ふらいんぐジープは2016年の熊本地震で被害を受けたが、約3ヶ月後に営業を再開。筆者も同年8月に訪れ再会を喜び合った。熊本地震を乗り越えてのオーナー夫妻の前向きな考え方は、筆者にも大変参考になり、「オオクワガタから始まる縁」を「熊本地震からの復興へと向かう縁」に変えて、今後もペンションのオーナー夫妻との交流を深めていきたいと考えている。









南阿蘇村　ペンション「フライングジープ」（熊本地震後に再開してから1ヶ月後の 2016 年8月訪問時）





南阿蘇村　ペンション「フライングジープ」（2018 年8月訪問時）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの場所を定期的に訪問する旅⑤－１	場所	東峰村

筆者の家族が、九州の優れたものを応援する「消費者と企業のわいわい塾」（㈱ビスネット主催）の会員で、毎月１回程度の催し（商品・サービスの話や企業の想いを直接聞ける場）に参加しており、そこで得た情報を基に、筆者も実際にこだわりの商品やサービスを提供する場所を訪問することもある。

㈲カネダイは、東峰村の山間部で長年にわたって麹と味噌を造っており、顔が見える関係を大切にしたいという方針から、店舗に商品を置かずに通販で販売している。自分たちの目が届く範囲で獲れた地元・福岡県産に限定した大粒大豆や米にこだわって商品を造っており、筆者も時々現地に行って麹や味噌等を購入している。また、その際に東峰村の魅力スポット（日本棚田100選に選定されている竹棚田、JR日田彦山線にかかる鉄橋等）を巡っている。 （次ページに続く）




東峰村にある㈲カネダイの蔵




東峰村　日本の棚田 100 選に選定されている竹棚田




東峰村　JR 日田彦山線にかかる宝珠山橋梁（左）と栗木野橋梁（右）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの場所を定期的に訪問する旅⑤－２	場所	朝倉市

（次ページから続く）

また、朝倉市の㈱藤井養蜂場にも、はちみつ祭りが開催される５月・９月の他、秋月の桜や紅葉が見頃の頃に訪問している。わいわい塾の開催レポートによると、「藤井養蜂場では、花の時期を追いかけて、ミツバチと一緒に毎年種子島から釧路まで大転地を繰り返しながら採蜜している。旅をしながら採取した蜂蜜は、濾過をするだけで、あとは一切手を付けないということで、風味、味、色がそのままの状態のものを自社工場で品質検査を行い、容器へ充填している。生産から販売まで一貫して行っているため、はちみつの純粋さを損なうことがない。」とのことである。

また、藤井養蜂場を訪問した際には、すぐ近くにある三連水車や歴史的な町並みが息づく秋月を訪問している。




朝倉市にある㈱藤井養蜂場




藤井養蜂場のすぐ近くにある三連水車（左）と三連水車近くで見かけた彼岸花（右）




秋月　桜の満開の頃（左）、紅葉が見頃を迎えた頃（右）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	出張先での思いがけない発見の旅①	場所	別府市

いろいろな地域を歩いて観察してみると、ふとした発見をすることがある。その一つが別府石を使った塀である。筆者は仕事で別府市の上人ヶ浜温泉に行った時に、周辺の住宅地で数々の石積み塀を見かけたが、これこそが地域に根ざした景観なのではないかと直感した。

別府では別府駅から山の手にかけて多くの石塀を見かけるが、調べてみると大正時代前後に別荘地や高級住宅地が盛んに造成された時に掘り出された別府石（鶴見山が噴火した時の角閃安山岩が朝見川や境川を下り丸石となってできた小石）が塀として使われたとのことである。

建物は建て替わっても塀を統一することで、多様性の中にも統一感と連続性の感じられる景観が実現でき、それが地域の個性になっていくのである。











別府市　上人ヶ浜温泉周辺の住宅地で見かけた別府石の塀



別府市　別府駅から山の手で見かけた別府石の塀

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	出張先での思いがけない発見の旅②	場所	対馬市

2018 年5月に対馬を初めて訪れた時に石の文化をすぐに感じることができた。空港から移動中のレンタカーから見える風景はいかにも地盤が固い地形であり、そこから取れる石を使った建造物があるのではないかと容易に推測できた。実際に厳原の萬松院や周辺を歩いてみると石の文化が息づいていることがわかった。

調べてみると朝鮮半島との貿易で栄えた宗氏の城下町「厳原」は度重なる火災で困っており、火災の延焼を防ぐために昔の町割に沿って高い石垣が築かれたとのことである。石垣をよく見ると、火に焙られた痕跡があるものもあり、火災から厳原の町を守ったことがわかる。また、石垣には厳原周辺で採掘された四角に切られた石英斑岩が使われている。元々は白い石であるが、時間の経過とともに浮き出した褐色の鉄錆と灰色の苔が独特の味わいを創出している。








対馬市 厳原でそこかしこに見られる石垣

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	出張先での思いがけない発見の旅③	場所	熊本市、長崎市等

煉瓦造りの建造物についても予期せぬ場所で発見することがある。煉瓦造りの建造物は近代化とともに日本に導入されたが、教会堂等の文化財クラスだけでなく、注意深く見てみると、身近な場所で幕末から明治の面影を残す煉瓦造りの建物や塀を発見することができる。

なかには外観からは煉瓦造りの建物に見えないものもあったり、こんな場所にどうして煉瓦造りの塀が集積した住宅地があるのかと思わぬ発見をすることもある。煉瓦の積み方が異なっているのも、見ていて楽しいものである。




熊本市　防火壁の役割を果たしている町家の赤煉瓦の塀（左）
長崎市　外からは煉瓦造りに見えない大浦天主堂（右）





糟屋郡須恵町　旅石で見かけた赤煉瓦造りの塀が続く住宅地




みやき町　JR 中原駅周辺で見かけた製蝋工場の名残の赤煉瓦造りの煙突（左）
宗像市　JR 東郷駅周辺で見かけた線路をくぐる赤煉瓦造りのトンネル（右）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	まちづくり活動を通した思いがけない再会の旅	場所	倉敷市、郡山市等

筆者は地域のまちづくり活動や小さなまち旅を実践する中で、思いがけない人と再会することもある。町並み保存で全国的に活躍されている刈谷勇雅氏とは 2013 年に岡山県倉敷市で開催された第36回全国町並みゼミ倉敷大会で約20年振りに再会した（刈谷氏が京都市役所在籍中の1994年に御供所(ごくしょ)のまちづくり関係で訪問）。また、大学卒業後に勤務した会社で一時同じ現場事務所にいた宗像剛氏と、(公財)日本建築士会連合会主催の第8回まちづくり賞のプレゼンテーションを機会に2014年に福島県郡山市で28年振りに再会した。

最近では、唐津街道姪浜まちづくり協議会時代に取材や記事を通じて、協議会の活動や姪浜の魅力発信に多大な支援をいただいた西日本新聞社の濱口妙華氏と 2018 年の熊本城の復興過程の鯱設置のセレモニーで再会した。こうした出会いを今後も大切にしていきたい。





倉敷市 第 36 回全国町並みゼミ倉敷大会（2013 年9月）




郡山市 (公財)日本建築士会連合会主催の第8回まちづくり賞のプレゼンテーション（2014 年 10 月）




熊本市 熊本城復興過程の鯱設置のセレモニー（2018 年4月）

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本地震の脅威を実感する旅①－１	場所	熊本市

筆者は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことが気にかかり、積極的に熊本県内を訪問している。被害を受けている熊本の現状と復興の過程をしっかり目に焼き付けておきたいからである。ちょうど熊本地震前の 2016 年３月中旬～４月上旬にかけて２回、熊本地方や阿蘇地方に出かけ、熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村等を見てきたばかりだった。訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖され、観光客も激減している。地震前とは違う光景が広がっていた。

熊本城には同年６月、南阿蘇村、阿蘇市、益城町には８月、新町・古町には 12 月に訪問し、改めて熊本地震の脅威を実感した。








熊本市　熊本城の被害状況（2016 年６月。右下のみ熊本大神宮）

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本地震の脅威を実感する旅①－２	場所	阿蘇市、南阿蘇村

筆者は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことが気にかかり、積極的に熊本県内を訪問している。被害を受けている熊本の現状と復興の過程をしっかり目に焼き付けておきたいからである。ちょうど熊本地震前の 2016 年３月中旬～４月上旬にかけて２回、熊本地方や阿蘇地方に出かけ、熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村等を見てきたばかりだった。訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖され、観光客も激減している。地震前とは違う光景が広がっていた。

熊本城には同年６月、南阿蘇村、阿蘇市、益城町には８月、新町・古町には 12 月に訪問し、改めて熊本地震の脅威を実感した。











阿蘇市　阿蘇神社の被害状況（2016 年８月）



南阿蘇村　阿蘇大橋付近の被害状況（上・中：2016 年８月、下：2017 年４月）

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本地震の脅威を実感する旅①－３	場所	南阿蘇村、益城町

筆者は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことが気にかかり、積極的に熊本県内を訪問している。被害を受けている熊本の現状と復興の過程をしっかり目に焼き付けておきたいからである。ちょうど熊本地震前の 2016 年３月中旬～４月上旬にかけて２回、熊本地方や阿蘇地方に出かけ、熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村等を見てきたばかりだった。訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖され、観光客も激減している。地震前とは違う光景が広がっていた。

熊本城には同年６月、南阿蘇村、阿蘇市、益城町には８月、新町・古町には 12 月に訪問し、改めて熊本地震の脅威を実感した。











南阿蘇村　東海大学周辺の学生村の被害状況。２階建てのアパートの１階が押し潰されている。（2016 年８月）



益城町　アパートや戸建住宅の被害状況。２階建てのアパートの１階が押し潰されたり、戸建て住宅が倒壊している。（2016 年８月）

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本地震の脅威を実感する旅①－４	場所	熊本市

筆者は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことが気にかかり、積極的に熊本県内を訪問している。被害を受けている熊本の現状と復興の過程をしっかり目に焼き付けておきたいからである。ちょうど熊本地震前の 2016 年3月中旬～4月上旬にかけて2回、熊本地方や阿蘇地方に出かけ、熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村等を見てきたばかりだった。訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖され、観光客も激減している。地震前とは違う光景が広がっていた。

熊本城には同年6月、南阿蘇村、阿蘇市、益城町には8月、新町・古町には 12 月に訪問し、改めて熊本地震の脅威を実感した。






熊本市 新町・古町の町家。 熊本地震から8ヶ月後で改修が進んでいた（2016 年 12 月）。

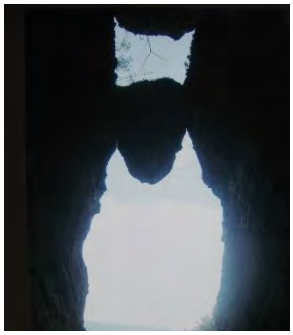



熊本市 新町・古町の町家（2016 年 12 月）。 その後解体され、現在は高層のホテルが建設されている（左）。その後解体され、現在は空地となっている（右）。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本地震の脅威を実感する旅②	場所	南阿蘇村、熊本市

筆者は熊本地震前の 2016 年３月に免の石を訪問したが、事前予約が必要とのことでこの時は見学を断念し、次回訪問時に登ろうと決めていた。しかし、予期せぬ地震で免の石が落石。2018 年５月に再訪し、熊本地震の脅威を改めて実感した（※P304「前向き思考の旅」のテーマでも紹介）。

また、南阿蘇村周辺の山々の土砂崩れの状況や道路の被害状況、阿蘇大橋近くの崖沿いに建っていたコンビニの被害状況を見て、改めて地震の怖さを実感した。この他、熊本県内最古の洋風建築である熊本洋学校教師ジェーンズ邸も倒壊した。





南阿蘇村　落石前の免の石（左、熊本地震前の現地の案内板の写真）、落石後の免の石（右、2018 年５月）



南阿蘇村　周辺の山の土砂崩れの状況（2017 年４月）





南阿蘇村　阿蘇大橋付近の崖地沿いの道路の陥没状況（左）、その道路近くにあったコンビニの駐車場の被害状況（右）。（2017 年４月）





熊本市　熊本地震前のジェーンズ邸（左、出典：熊本市文化財課ホームページ）。熊本地震で倒壊し（右、2018 年３月）、現在は移転先で復元工事が進められている。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅①－１	場所	熊本市

筆者は 2016 年６月の熊本城訪問をきっかけとして「熊本の復興の過程を巡る旅」を始めた。熊本城には 2021 年３月末までに 25 回訪問し、復興の過程と来訪者の喜びの姿を目の当たりにしてきた。熊本地震から１年経った 2017 年４月には満開の桜を見に訪れたが、多くの市民や観光客も訪れ、賑わいを見せており、復興の足音を強く感じた。

また、同年５月の訪問時には、天守閣再建に向けて一部解体工事が始められていた。城内にある加藤神社では、復興工事の様子をバックに結婚式の記念写真の撮影が行われていた。「新郎新婦も熊本城の復興とともに今後の人生を歩んでいくのだろう。」と筆者も思わず記念写真撮影のシャッターを切っていた。

（次ページに続く）





熊本市 熊本城 熊本地震から１年後の桜が満開の頃。石垣と桜の美しさが印象的であった。多くの来訪者の笑顔から復興の足音を強く感じた（2017 年４月）。





熊本市 熊本城 天守閣再建に向けて一部解体工事が始まった頃（左）。「奇跡の一本石垣」で知られる飯田丸五階櫓も櫓倒壊防止のための崩落石材回収工事が進められていた（右）。（2017 年５月）





熊本市 熊本城 建築士会主催の平成 30 年度九州ブロック研究集会「建築士の集い」熊本大会に参加。ボランティアガイドの方から熊本城の復旧状況等について説明を受けた（2018 年６月）。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅①－２	場所	熊本市

（次ページから続く）

その後もマスコミを通して得た情報を基に定期的に熊本城を訪問し、復興の過程を見てきた。特筆すべきことは、熊本市が復興の過程を市民に目に見える形で伝えていることであり、節目節目にマスコミに公開し、それがニュースとして市民に伝わることで市民が復興の過程に興味を持てるようにしていることである。筆者もそのニュースを見て、その都度訪問している。

熊本城全体の復旧完了は 2037 年度と計画されている。私は現在 63 歳であり、熊本城が復興される頃には 80 歳近くになっているが、復興の過程を見に今後も何度も訪問したいと考えている。





熊本市 熊本城 筆者も「熊本城復元整備基金 復興城主」として熊本市長より感謝状を贈呈された（左、2018 年２月）。復興過程の天守閣の鯱設置セレモニーにも参加（右、2018 年５月）。





熊本市 熊本城 特別公開第１弾に参加。復興の過程を間近に見ることができた（2019 年 10 月）。





熊本市 熊本城 特別公開第２弾に参加。二様の石垣や瓦の葺き替えの様子を間近に見ることができた（2020 年６月）。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅②－１	場所	熊本市

筆者は町家や町並みに関心があり、熊本市都心部の新町・古町の町家の復興の過程を見てきた。熊本地震後に最初に訪問したのが 2016 年 12 月。その時には既に改修に着手したものもあれば、傾いたり、屋根や壁が剥がれ落ちたりしたままのものもあった。その後、解体され高層のマンションやホテルに建て替わったものもあれば、駐車場として利用されているものもある。

その一方、行政や財団の財政的支援を得ながら、NPO や市民等の粘り強い取り組みにより、改修されたものも見てきた。その際、熊本大学時代の先生方や先輩、同級生等が様々な場面で活躍する姿も見て、「文化都市・熊本」の歴史は脈々と受け継がれていると感じた。











熊本市　新町の吉田松花堂の改修過程



熊本市　古町の塩胡椒、N・H ピュアリー等の改修過程

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅②－２	場所	熊本市

筆者は町家や町並みに関心があり、熊本市都心部の新町・古町の町家の復興の過程を見てきた。熊本地震後に最初に訪問したのが 2016 年 12 月。その時には既に改修に着手したものもあれば、傾いたり、屋根や壁が剥がれ落ちたりしたままのものもあった。その後、解体され高層のマンションやホテルに建て替わったものもあれば、駐車場として利用されているものもある。

その一方、行政や財団の財政的支援を得ながら、NPO や市民等の粘り強い取り組みにより、改修されたものも見てきた。その際、熊本大学時代の先生方や先輩、同級生等が様々な場面で活躍する姿も見て、「文化都市・熊本」の歴史は脈々と受け継がれていると感じた。











熊本市 古町の西村邸の改修過程



熊本市 古町の清永本店の改修過程

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅②－３	場所	熊本市

筆者は町家や町並みに関心があり、熊本市都心部の新町・古町の町家の復興の過程を見てきた。熊本地震後に最初に訪問したのが 2016 年 12 月。その時には既に改修に着手したものもあれば、傾いたり、屋根や壁が剥がれ落ちたりしたままのものもあった。その後、解体され高層のマンションやホテルに建て替わったものもあれば、駐車場として利用されているものもある。

その一方、行政や財団の財政的支援を得ながら、NPO や市民等の粘り強い取り組みにより、改修されたものも見てきた。その際、熊本大学時代の先生方や先輩、同級生等が様々な場面で活躍する姿も見て、「文化都市・熊本」の歴史は脈々と受け継がれていると感じた。











熊本市　古町の珈琲回廊（コーヒーギャラリー）の改修過程



熊本市　古町のPS（ピーエス）オランジュリの改修過程

【参考】熊本市新町・古町地区の現状

（2017 年 12 月までに執筆したコラムより）

熊本市の城下町である新町・古町地区は、1877 年の西南戦争の際に激戦地となり建物は消失したが、その後、町割りは復元され、多くの町家や寺院が残り、それらを活かした景観づくりの取り組みが地元の市民団体「新町・古町 町屋研究会」を中心に行われている。

しかし、都心部ということもあり、2007 年に 430 軒あった町家は、毎年約 10 軒ずつ減少し、2016 年には 335 軒となっていた。それに追い打ちをかけるように熊本地震で多くの町家が被害を受け、解体を余儀なくされている。2018 年には町家数は 200 軒近くまで減少すると考えられている。また、更地化も進み、マンションへの転用も進んでいくのではないかと危惧されている。こうした中で、城下町という地域性を活かしたまちづくりが模索されている。











熊本地震で損壊した熊本市内の築130年になる町屋の一部が、美術館に移築される。修復への特別な公的補助がなく次々に姿を消しているが、地元の有志が「伝統建築の姿を残したい」と計画。25日に移築部分の取り外しが始まった。

移築されるのは、中央区の古町地区にある森本襖表具材料店。1886（明治19）年の建築で店舗部分は約6㍍四方だが、居間や中庭へと約50㍍の奥行きがある「職住一体」だ。地震で傾き、応急危険度判定では「危険」と判定された。

解体は全額公費で賄えるが、伝統建築の修復には多額の費用

熊本地震で傷ついた町屋 美術館へ

「被災記憶と伝統、伝える」

町屋の一部を移築するための作業。1階部分の店構えを美術館に移して展示する計画だ＝25日、熊本市中央区

H29.5.26 朝日新聞

がかかるため、店主の森本多代さん(58)は解体を決めた。

地区住民らでつくる「新町・古町町屋研究会」の宮野桂輔さん(43)は「少しでも残せないか」と、知人を通じて私立島田美術館（熊本市西区）に相談。

緊急対応として、館内へ移築し公開をめざすことになった。美術館事務局長の清川真潮さん(44)は「展示できれば伝統文化と地震の記憶、両方を伝えられる」と話す。

移築するのは、店構え部分の幅約6㍍、奥行き約2㍍。伝統的なくぐり戸や、商談や井戸端会議をする折りたたみ式の腰掛けなどを残す計画だ。森本さんは「少しでも、生まれ育った家の姿を残してもらえてうれしい」と話す。

25日は研究会メンバーや大工らが移築部分の瓦や戸などを外した。作業に先立ち森本さんは四方に酒と塩を捧げ、家に「ありがとう。お疲れさま」と言葉をかけ、涙を流した。「あれだけの地震だったのに倒れず、一生懸命私を守ってくれた」

熊本城の城下町として形成された新町・古町地区では、地震前にあった町屋343棟のうち282棟が損壊。解体が進み、更地が目立つ。（平井良和）

デジタル版に動画

古町地区の町家に関する記事(2017 年5月 26 日)
左の4枚の写真はいずれも筆者撮影(2017 年5月 27 日)

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅③	場所	阿蘇市

阿蘇神社にも熊本地震後は毎年訪問している。熊本地震前の 2016 年3月に訪問した時には1ヶ月後の大規模地震は到底想定していなかったが、2度の地震で重要文化財である楼門が倒壊するなど神社内の施設が大きな被害を受けた。楼門の両サイドにある還御門と神幸門は 2018 年度に部分解体修理が完了している。倒壊した拝殿及び翼廊は2021 年6月の完了を目標に再建工事が進められている。

また、楼門は 2018 年度までに解体格納工事が完了し、2023 年度の完了を目指して復旧工事が進められている。2020 年8月に訪問した時には仮囲いに楼門の写真がプリントされており、改修を進めている関係者の粋な計らいを感じた。











阿蘇市 阿蘇神社 拝殿の改修過程。2021 年6月の完了を目指して再建工事が進められている。



阿蘇市 阿蘇神社 楼門の改修過程。解体格納工事を経て、現在は 2023 年度の完了を目指して復旧工事が進められている。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅④	場所	南阿蘇村

阿蘇大橋が崩落した周辺にも毎年訪問し、斜面が崩壊した山の対策の状況や九州東海大学農学部があった黒川地区の状況を見ている。崩壊した斜面は、安全対策はもちろん、自然植生の種子飛来・発芽、定着による阿蘇くじゅう国立公園にふさわしい緑化を目指して対策工事が進められている。

また、黒川地区には九州東海大学の学生が多く暮らしていたが、熊本地震により多くのアパートや住宅が倒壊し、解体・更地化が進み、町並みだけでなく地域コミュニティが大きく変貌した。筆者は2019 年4月に開催された復興イベント「南阿蘇・黒川ウォーク」に参加し、地域の方々や東海大学の学生と交流する中で、黒川地区の震災から3年の現状と復興への歩みを知ることができ、大変有意義な一日となった。











南阿蘇村　阿蘇大橋が崩落した斜面の安全対策及び緑化対策工事の進捗状況



南阿蘇村　黒川地区での復興イベント「南阿蘇・黒川ウォーク」に参加し、地域の方や学生から復興への歩み等について説明を受けた（2019 年4月）。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅⑤	場所	南阿蘇村

熊本地震では鉄道も甚大は被害を受け、地域の方々の生活に多大な影響を与えた。南阿蘇鉄道（立野～高森間 17.7km）は熊本地震から3ヶ月後の 2016 年7月に一部区間（中松～高森間 7.1km）で開通。筆者は 2019 年 11 月と 2020 年5月に乗車したが、職員だけでなく沿線の住民の皆さんが地域に誇りを持っていることをいろいろな場面で感じることができた。残りの区間（立野～中松間 10.6km）は 2023 年夏の全線開通を目標に整備が進められている。

また、JR 豊肥本線は熊本地震で肥後大津～立野～阿蘇駅間（27.3km）で不通になっていたが、2020年8月8日に全線復旧。筆者も復旧から8日後の8月 16 日に乗車し（阿蘇～立野往復）、久し振りに車窓からの風景と立野駅でのスイッチバックを楽しんだ。コロナ禍の中での全線復旧となったが、沿線の方々の喜びで溢れていた。











南阿蘇村～高森町　南阿蘇鉄道（中松～高森駅間）に久し振りに乗車。車窓からの風景と沿線の方々の歓迎に感動した（2019 年 11 月）。

※P290 の「ローカル線の旅」のテーマでも紹介



南阿蘇村～阿蘇市　JR 豊肥本線（立野～阿蘇駅間）に久し振りに乗車。車窓からの風景と立野駅でのスイッチバックを楽しんだ。崩落した阿蘇大橋も見ることができた（2020 年8月）。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	自然の治癒力を実感する旅	場所	熊本市、阿蘇市

熊本地震では池を中心とする優美な回遊式庭園で知られる水前寺成就園の池（約1万㎡）もほとんど干上がり、底が露出していたが、少しずつ水が戻り始め、地震から1ヶ月後に公開を再開した。水が枯れた原因や水が戻った理由は不明であるが、地震の影響で湧水の水脈が移動した可能性も推測されている。

また、秀麗な容姿の火山として知られる阿蘇の米塚にも山頂の火口縁等に多くの亀裂ができていたが、周囲から見る限りでは徐々に回復しているように思える。烏帽子岳や杵島岳では山の斜面が崩壊し、山肌が露出するなどの被害があったが、時間の経過とともに美しい景観を取り戻しつつある。

阿蘇へのアクセスも 2021 年3月7日の国道 325 号新阿蘇大橋の開通により、被災した阿蘇地域の幹線道路の復旧はすべて完了した。筆者は今後も、阿蘇の四季折々の美しい風景を見ることを小さなまち旅のテーマの一つにしていきたい。




熊本市 水前寺成就園 熊本地震後に枯れた水も戻り、池を中心とした回遊式庭園として優美な風景を見せている。




阿蘇市 米塚 熊本地震でできた亀裂は徐々に回復し、四季折々の表情を見せている。




阿蘇市 草千里から見た烏帽子岳（左）と杵島岳（右）。熊本地震で斜面が崩壊し、山肌が露出したが、時間の経過とともに美しい景観を取り戻しつつある。

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅①	場所	福岡市

筆者の身近な「職・住・遊・活」の場である博多湾姪浜エリア（シーサイドももち～愛宕・愛宕浜・姪浜・生の松原～能古島～博多湾）を対象に、「眺望」「景観」「回遊」「歴史」「自然（海・山・松原）」「健康」「広域連携」「観光」「フットパス」等をテーマにまち歩きを実践している。

シーサイドももちは、住宅地開発（シーサイドももちクリスタージュ）や都市景観形成地区の指定に深く関わってきており、筆者の福岡市役所時代の思い出のフィールドであり、現在は身近なレクリエーションエリアの一つでもある。近代的な都市景観や建築物が特徴であるが、東西南北の緑道、河川沿いの緑道、海浜公園等の公共空間の他、民有地においても緑豊かな景観づくりが進められてきており、都市的な環境の中にも豊かな自然環境が形成されている。




愛宕浜海浜公園から見たシーサイドももち（左）、福岡タワーからの眺望（右）




よかトピア通りの街並み（左）、世界の建築家通りの街並み（右）




集合住宅地区の街並み（左）、室見川沿いの緑道（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅②	場所	福岡市

室見川を挟んでシーサイドももちに隣接する愛宕・豊浜地区は、愛宕神社をはじめとした歴史資源や愛宕山、室見川といった自然資源が特徴である。筆者は姪浜に住んで 34 年になるが、今でもよく訪れるのが愛宕神社とその参道沿いにある観音寺、音次郎稲荷神社である。桜の咲く頃になると参道沿いの桜だけでなく、観音寺の桜、愛宕山観光道路沿いの河津桜、ケーブルカー山上駅跡付近の桜等が美しさを競演する。冬から初夏にかけては、各種のサギが飛来し営巣の風景を見ることができる。

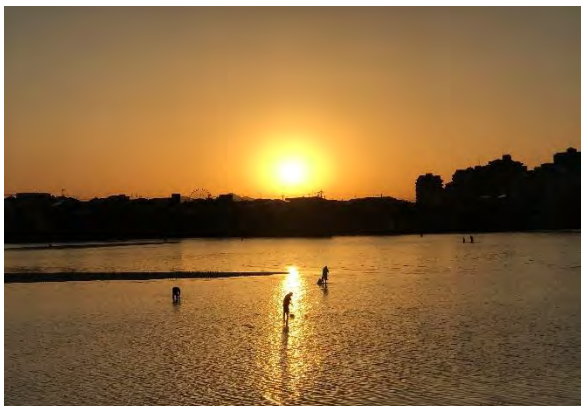
また、豊浜団地を歩くと季節感豊かないろいろな花を楽しむことができる。室見川での初夏の潮干狩りの風景や冬の鴨の群れを見ることも楽しい。朝日や夕日の風景もきれいである。一般的な住宅地であっても、いろいろな個性を発見できるのである。




愛宕神社（左）、参道の桜並木（右）




愛宕神社参道沿いにある観音寺（左）、豊浜団地内の枝垂れ梅（右）

室見川での潮干狩りの風景（左）、室見川の夕景（右）

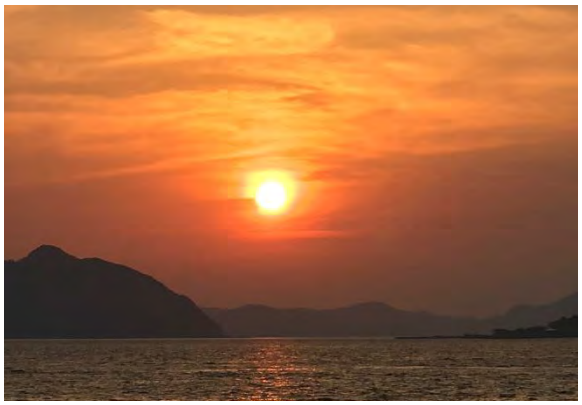
大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅③	場所	福岡市

筆者が現在暮らしている愛宕浜地区は豊浜・姪浜地区の博多湾側に位置し、埋め立てによって生まれた比較的新しい街であり（1980 年代後半から住宅地開発）、博多湾に面した海浜公園と緑豊かな居住環境が特徴である。海浜公園ではウォーキングやランニングをする人、犬と散歩する人、釣りやサーフィンをする人などで賑わいを見せている。海浜公園からはシーサイドももちや能古島、志賀島等を臨むことができ、海に開かれた福岡の景観的な特徴を満喫できる場所でもある。朝日が昇る風景や夕日が沈む風景も愛宕浜ならではの風景である。

また、愛宕浜中央公園や地域を南北に縦断する緑道、外周の道路では樹木が成長し、季節感を演出している。普段何気なく過ごしているまちであるが、テーマを持ってまちを歩くといろいろな発見をすることができる。




福岡タワーから見た愛宕浜の街並み（左）、愛宕浜海浜公園（右）

愛宕浜海浜公園から見たシーサイドももちの朝景（左）、糸島方面の夕景（右）




愛宕浜地区の街路樹の紅葉

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜　夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅④	場所	福岡市

唐津街道を中心とした姪浜地区には寺社、町家、路地、魚市場、古くからのお店等が息づき、福岡市内でも有数の歴史的環境を有している。しかし、近年の町家の減少やマンションの建設に歯止めがかからず、町並みが大きく変貌するとともに、多くのワンルームアパートの進出により古くからのコミュニティも大きく変化してきている。筆者はここで約 10 年間、まちづくり活動を実践してきたが、近年の町並みやコミュニティの変化には危機感を覚えている。

この地域を歩く機会は激減したが、歩く度に様々な課題が見えてくる。地域内にはまちづくりを標榜する団体がいくつかあるが、各団体の連携に加え、広域的な観点で地域を評価し、広域的エリアとして個性を打ち出していく必要がある。筆者が提唱する「博多湾姪浜　夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」はこうした視点から生まれた構想でもある。




姪浜住吉神社（左）、興徳寺（右）




探題塚（左）、唐津街道沿いの西構口付近の町家町並み（右）

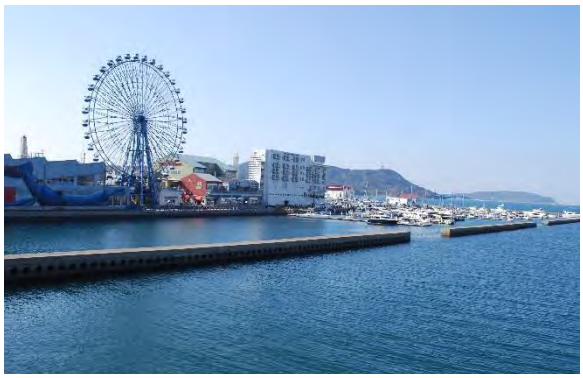



姪浜魚市場（左）、多くの高層マンションの進出による町並みの変貌（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅⑤	場所	福岡市

名柄川を挟んで姪浜地区の西側に位置する小戸・生の松原地区。ここにはマリノアシティ福岡をはじめとする商業施設、小戸公園や小戸ヨットハーバー等のレクリエーション施設、小戸大神宮や元寇防塁跡等の歴史的資源があり、それらを回遊できる博多湾沿いの遊歩道等も整備されている。「都市」「自然」「歴史」の３つの要素を巡る福岡型のフットパスを展開できるエリアである。

また、小戸や生の松原の海岸から見た博多湾の景観はダイナミックであり、海、空、山、島のコントラストが素晴らしい。特に小戸の夕景はきれいであり、古くからの歴史を感じる瞬間でもある。博多湾を行き交うフェリーや漁船、ヨットの風景もこのエリアならではのものであり、筆者の身近なフットパスのコースの一つでもある。




マリノアシティ福岡（左）、小戸大神宮（右）




小戸の夕景（左）、生の松原元寇防塁（右）





生の松原（左）、生の松原から見た博多湾（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅⑥	場所	福岡市

姪浜渡船場からフェリーで 10 分の能古島も筆者の身近なまち旅のエリアである。一番の見どころはアイランドパークであり、桜と菜の花のコントラストが美しい春、コスモスが咲き乱れる秋には毎年のように訪問している。夏のひまわりや冬の水仙など季節ごとに様々な花を楽しむことができる。また、そこで作られたサツマイモを使ったイモ天や能古島名産の甘夏 100%ジュースも久保田睦子さんらの手作りで本当に美味しい。

能古島にはこの他、白髭神社や永福寺、能古焼古窯跡、能許万葉歌碑、能古博物館等の魅力スポットがあり、フットパス感覚で回遊できる。また、能古島から見るシーサイドももちの景観は、「海に開かれたアジアの交流拠点都市・福岡」を象徴する景観である。自然探勝路から見え隠れする博多湾の風景は、大陸との関わりの深い福岡の歴史を感じさせる。




福岡タワーから見た博多湾と能古島（左）、能古島から見た博多湾とシーサイドももち（右）




季節ごとに様々な花を楽しめる能古島アイランドパーク（左）、白髭神社（右）




能古焼古窯跡（左）、自然探勝路（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅⑦	場所	福岡市

今まで紹介してきた「シーサイドももち地区」「愛宕・豊浜地区」「愛宕浜地区」「姪浜地区」「小戸・生の松原地区」「能古島」をつなぐのが博多湾である。筆者は愛宕浜に暮らして 22 年になるが、これらの地区から見る博多湾の景観、博多湾から見る福岡の街並みは筆者のお気に入りの景観である。

オランダ出身で姪浜漁港に停泊するヨットで暮らして 30 年以上になるヤップ・モルダーさん夫妻は、世界 55 ヶ国を旅して博多湾、そして福岡、姪浜に魅了された方で「博多湾に帰ってくるとほっとする。博多湾から見る福岡の景観は素晴らしい。美しい海と山に囲まれた福岡が好き」と語っていた。

筆者は「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」「福岡型フットパス構想」を提唱し、その実現に向けて身近なまち旅を実践している。




福岡タワーから見た博多湾、能古島、糸島半島（左）、博多湾を背景にした花火大会（右）




博多湾に浮かぶヨットの風景（左）、姪浜漁港の漁船が並ぶ風景（右）




筆者のマンションから見た博多湾の朝景（左）、博多湾から見た糸島方面の夕景（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	お気に入りのフィールドを巡る旅①	場所	福岡市

福岡市内での筆者の身近なお気に入りのフィールドは、福岡市役所時代に都市景観形成地区の指定で関わってきた御供所(ごくしょ)地区であり、聖福寺、承天寺、東長寺等の歴史ある寺院、聖福寺周辺の路地、町家をリノベーションした店舗等をたびたび訪問している。休日でも仕事のある日でも気軽に立ち寄ることのできる場所であり、以前からの知人に出会うことも多い。

また、現在の仕事の関係で、景観形成地区指定の基準として筆者が提案した「町並み斜線」や「壁面線」を順守している建物に出会ったこともあるが、とても懐かしく、そして嬉しく思った。筆者にとっては思い出のフィールドであり、今後も福岡市有数の歴史的な環境を大切にしてほしい。




御供所(ごくしょ)地区　東長寺の枝垂れ桜（左）、承天寺の洗濤庭（右）




御供所地区　聖福寺山門（左）、聖福寺境内の路地（右）



御供所地区　聖福寺勅使門と伝統的町家





御供所地区　伝統的町家（左）、町並み斜線や壁面線を考慮した新しい町家（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	お気に入りのフィールドを巡る旅②	場所	福岡市

舞鶴公園や大濠公園も筆者の身近なお気に入りのフィールドである。舞鶴公園は花や樹木を通して四季の変化を実感できる場所であり、梅の花、桜の花、蓮や水蓮の花、イチョウや桜の紅葉の時期等に訪れている。特に桜が満開の頃は、福岡城址の歴史的空間と様々な桜が見事に調和し、美しい風景を創出している。

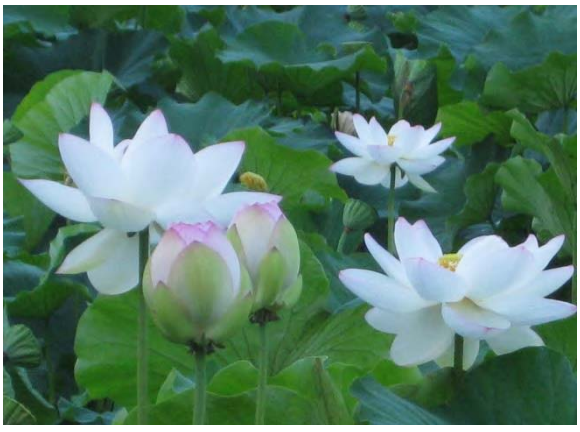
大濠公園は気軽に散歩のできる空間であり、気持ちをリフレッシュしたり、福岡市美術館での美術鑑賞の際に訪れている。福岡市美術館は前川國男氏設計で、筆者も学生時代からよく訪問している建物である。2019 年3月にリニュアルオープンしたが、当初の設計の考え方やデザインが継承されるとともに、大濠公園から直接アプローチできるようになり、大濠公園と一体感のある開放的な空間となった。











舞鶴公園の四季巡り：桜が満開の頃（上）、
紅葉の頃（中）、蓮の花の咲く頃（下）



大濠公園（上）、池越しに見た福岡市美術館（中）、
福岡市美術館の内部（下）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	職場近くや仕事ついでのちょこ旅①	場所	福岡市

現在の勤務先（福岡市中央区薬院）近くを散策したり、仕事の関係で外出した時にも魅力的な空間や気になる空間に出会うことがある。薬院駅近くでは、高層ビルの公開空地に整備されたケヤキ並木が筆者のお気に入りの空間であり、新緑（初夏）⇒深緑（盛夏）⇒紅葉（秋）⇒落葉（冬）が季節感を演出している。ベンチに腰掛けて食事や会話を楽しんでいる人々を多く見かけるが、快適な空間である証である。

また、小烏神社（中央区警固）は住宅街の小高い丘の上にある神社で、鎮守の森として都会のオアシス的な空間となっている。古来より薬院の地に鎮座する古社で、本殿や拝殿等は国の登録有形文化財に指定されている。そして、昼休みによく散策する今泉周辺には多くの寺社がある一方、狭い路地におしゃれで隠れ家的な建ち並び、昼夜問わず賑わいを見せている。




薬院　高層ビルの公開空地に整備されたケヤキ並木　新緑の頃（左）、紅葉の頃（右）





警固　鎮守の森として都会のオアシス的空間となっている小烏神社




今泉　国体道路に面した若宮神社（左）、路地沿いにあるお洒落な店舗（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	職場近くや仕事ついでのちょこ旅②	場所	福岡市

薬院から少し足を延ばした浄水通りや六本松、鳥飼にも筆者がよく訪れる空間がある。浄水通り周辺は特別緑地保全地区をはじめとする緑豊かな環境が特徴で、おしゃれな建物も多く散策には絶好の場所であり、昼休みや仕事での徒歩ルートとして利用している。

また、地下鉄の薬院大通駅から2駅隣りの六本松には、桜の咲く時期によく訪れる場所がある。西日本シティ銀行ココロ館の桜並木、九大六本松跡地に建った裁判所周辺の桜並木、そしてそれらを散策中に見つけた桜並木はいずれも古くからある桜で、筆者は「残した桜、残った桜」として分類している。建物は建て替わり環境は変わっても変わらないもの、それがこれらの桜であり、地域にとっては「記憶の継承」となっていくのである。




平尾浄水町にある浄水特別緑地保全地区（左）、浄水通りの緑豊かな新しいマンション（右）




鳥飼　西日本シティ銀行ココロ館の桜並木（左）、住宅街で見かけた桜並木（右）




六本松　裁判所周辺の桜並木（左）、散策時によく利用する蔦屋書店（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	職場近くや仕事ついでのちょこ旅③	場所	福岡市、熊本市

仕事の関係で外出した時にもいろいろなテーマに沿った空間に出会うことがある。その一つがまちなかのニッチ的な空間であり、軒下空間がバス停の役割を果たしていたり、カフェの一角になったりしているものを目にすることがある。筆者の学生時代に「雨宿りの空間」という建築コンペがあり、その時の最優秀賞が塀をくり抜いて雨宿りの空間としていたと記憶している。

また、神社という空間を通して「ハレとケ」を体験することもある。例えば、早良区藤崎にある猿田彦神社は普段は本当に静かであるが、「庚申祭」の日は猿面や福笹等を求める人々で大変な賑わいを見せる。普段から多くの人々で賑わっている博多区上川端町の櫛田神社も博多祇園山笠の時は祭りの空間化とし、普段とは違う賑わいを見せる。まちなかのちょっとした空間を通して、地域や建築のことを考えることも筆者の小さなまち旅のテーマの一つである。



福岡市と熊本市のまちなかで見つけたニッチ的空間









福岡市　猿田彦神社　普段の様子（上）、初庚申祭の様子（下）





福岡市　櫛田神社　普段の様子（上）、博多祇園山笠追い山ならしでの櫛田入りの様子（下）

おわりに

今回の研究は、熊本地震後の熊本城訪問をきっかけに始めた「地域づくりや建築の原点に返る旅」と「熊本の復興の過程を巡る旅」を中心に、大学時代からの「小さなまち旅」を振り返ったものである。言い換えれば、ここ５年間の旅を中心とした約半世紀の旅の振り返りである。

大学時代からの「現代建築を巡る旅」、会社員時代からの「歴史的建造物と町並みを巡る旅」、公務員時代からの「景観づくりと地域づくりを巡る旅」、そして現在進行中の「地域づくりや建築の原点に返る旅」「熊本の復興の過程を巡る旅」「身近なまち旅」に至るまで、筆者の「小さなまち旅」も進化と深化を重ねてきた。この間、一貫して地域個性を追い求めてきたのではないだろうか。サブタイトルが示すように筆者の小さなまち旅は「画一化する街並みの中で地域個性を巡る旅」である。

筆者の旅先は、人々によく知られた観光名所もあるが、仕事先でふと出会った場所もたくさんある。有明海に広がる海苔養殖や牡蛎養殖の風景、石積みの塀や赤煉瓦塀が続く街並み、住宅地で見つけた美しい枝垂れ梅やミモザの花々、新緑や紅葉の並木、ローカル線沿線の桜並木、残した（残った）一本桜、レトロな商店街や路地、農山村の素朴な風景、多彩な河川流域景観等、数え上げたらきりがない。いずれも地域の人々にとっては、愛着と誇りのある風景であろう。こうした地域個性は至る所に存在するのであり、今後もこうしたものを「地域の宝」として大切にしていただきたい。

また、筆者が小さなまち旅を進めている中で、2019 年 12 月以降、世界各地で新型コロナウィルス感染症が拡大し、国内外で多くの方々が亡くなられ、多くの感染症陽性者が確認されている。国内でも 2020 年４月に緊急事態宣言が発令され、経済にも甚大な影響を与えた。特に観光や飲食分野への影響は計り知れないものがある。

筆者は 2018 年４月から現在の職場で九州各地を飛び回っているが、新幹線や特急列車、高速バスの利用者数は激減し、その影響を目の当たりにしてきた。コロナ発生前に見た長崎港や佐世保港のクルーズ船とそのクルーズ船の利用者を乗せるために港に待機している数多くのバス、観光地の至る所で見かけた多くの外国人旅行者の姿も、2020 年４月７日の第一次緊急事態宣言を機にすっかり見なくなってしまった。



新型コロナウィルス発生前の 2019 年 10 月：佐世保港に入港した大型クルーズ船（左）、港に待機しているバスに向かう多くの外国人旅行者（右）

人口減少が進み、国内の観光需要が縮小する日本は、外国人観光客に経済活性化を期待し、コロナ発生前までは外国人観光客は増え続けてきた。その結果、京都をはじめ多くの観光地でオーバーツーリズムが問題となり、まちなかは外国人観光客で溢れかえり、市民はごみのポイ捨て、落書き等の深刻な観光公害に悩まされていた。しかし、新型コロナでその様相は一変した。

筆者は九州内の主要な観光地を訪問する機会も多く、外国人観光客に過度に依存する傾向を以前から危惧していた。外国人をターゲットにした宿泊や料理、買物のスタイルは、地元の人々のニーズや嗜好に合った内容や料金設定だっただろうか。オールジャパンやオール九州ではなく、それぞれの地域特性を考慮したものであっただろうか。筆者は地元をはじめ国内の人々に喜んでもらえる内容や料金設定でなければ、外国人観光客にも喜んでもらえないと考えている。

筆者はその一方で、外国人観光客の動向に左右されずに地道に頑張っている方々も多く見てきた。筆者は観光のベースにあるのは、グリーンツーリズムに象徴されるような「身の丈に合ったおもてなしのまちづくり」であると考えている。それは、「まず、住民（受け入れ側）が楽しむ。そして、自分たちの暮らしぶりを乱さない程度に来訪者をあたたかく迎え入れる」ということである。「大挙して観光客が訪れる旅のスタイル」ではなく、本物志向で地域の良さを伝える「地に足の着いた旅のスタイル」こそが、地域づくりにしてもツーリズムにしても長期的に持続する秘訣ではないだろうか。

また、コロナ禍の中で「マイクロツーリズム」という旅のスタイルがクローズアップされているが、筆者の小さなまち旅はまさしくこのスタイルである。自宅から１～２時間以内の近場にも様々な魅力スポットがあり、身近な旅を気軽に楽しむことで、それぞれの地域の良さの掘り起こしや地元経済の活性化にもつながる。そして、それぞれの地域のファンとなるリピーターを増やしていくことが何より大切である。それがひいては全国各地からの来訪者の増加につながっていくのではないだろうか。

こういう時期だからこそ、旅も本物志向、こだわりのスタイルが求められていると思う。新型コロナの災禍を前向きに捉え、旅の原点に立ち返って旅のスタイルを考えていく絶好の機会ではないだろうか。

この考え方は、筆者の専門である建築分野でも同じことが言える。建築は景観を構成する重要な要素であり、地域個性に与える影響は計り知れない。一部の地域を除き全国どこに行っても同じような個性のない街並みが形成されている中で、建築の基本に立ち返り、それぞれの地域の歴史や文脈等を活かした建築空間の創出が求められている。そのためには、設計に際してフィールドワークを重ね、その地域ならではの多彩な魅力資源を探求していく必要がある。

また、コロナ禍で学んだことは多く、今後、建築計画や設備計画も大きく変わっていくと筆者は考えている。その際に、日本建築の特徴である中間領域（縁側に代表されるような内部と外部が曖昧な空間）や、伝統的な町家建築が持つ生活の知恵（中庭を活用した彩光、通風、換気方法等）を活かした空間づくりを積極的に進めていってほしい。ポストコロナ時代でこそ空調システムや照明システムに過度に依存しない、自然と共生した建築空間が改めて求められているのではないだろうか。

さて、今回の研究の中で筆者が使ってきたキーワードがいくつかある。まずは「モノ・ヒト・コト」である。モノ（地域資源）があっても、ヒト（人、組織）が機能しなければ、コト（ストーリー）は成り立たない。せっかくの素材があっても有効に活用する者がいなければ、宝の持ち腐れとなり、ひいては宝の消失となってしまうのである。ポテンシャルを有していながらも、「モノ」が活かされずに埋もれている地域が多いと筆者は感じている。地域にある身近な宝を探求し、しっかり活用していくことで、『モノ×ヒト＝コト』を実現していただきたい。

次は「点・線・面」である。魅力ある点（地域資源）は各地に存在するが、それらが増えれば線（地域資源を結ぶ回遊路）になる可能性がある。さらに魅力ある点が増えれば、線も増え、面となっていくのである。こうしてできた面が個性ある地域であり、地域のアイデンティティとなり、地域の人々にとっては誇りや愛着となっていくのである。長野県小布施町の地域づくりの取り組みや北信濃地域の広域連携ツーリズムはその好事例であり、参考にしていただきたい。

最後に「時間 空間 旅」である。冒頭の「はじめに（研究の目的)」で触れたが、時間をかけて目的の地域や場所に行く移動（空間移動）の過程でいろいろなことを想像し、思考を深めることができる。また、実物を見て空間を体験し地域の方々と対話することで、新たな考えが生まれ、地域づくりのヒントを得ることができるのである。

コロナ禍の中でVR（バーチャルリアリティ）を活用したバーチャルツーリズムやオンラインによる体験ツアーが注目されているが、こうしたツールにより得られた情報を参考にしながらも実際に五感で感じる旅をお薦めしたい。新型コロナで旅のスタイルも分岐点に差し掛かっていると思うが、情報化時代の地域づくりにおいてこそ「時間 空間 旅」の視点が求められているのではないだろうか。

また、Part.2で紹介した「地域個性を巡る小さなまち旅の事例集～身近な地域の魅力の再発見～」は、筆者の小さなまち旅を踏まえ、景観づくりや地域づくりの魅力を伝える62のテーマでまとめたものである。冒頭にも述べたが、全国的に個性の感じられない同じような街並みの形成が進む中で、今回の研究が身近にある地域資源を見直すきっかけとなり、景観づくりや地域づくりのヒントにしていただくとともに、皆さま方の身近な旅の参考にしていただければ幸いである。

人生100年時代と言われる今日、いろいろな地域を旅して、いろいろなことを見て、いろいろなことを学んで、いろいろなものを味わって、いろいろな人と交流して、そこで感じたことを持ち帰り、自分の暮らす地域に置き換えて考えていただきたい。筆者が身近な地域の取り組みとして提唱している「博多湾姪浜 夢海道（回廊）&海遊（回遊）プロジェクト構想」も、小さなまち旅から生まれた構想である。旅は地域づくりのいろいろなヒントを提供してくれるのである。

筆者は熊本地震をきっかけとして、それまで精力的にまちづくり活動を実践してきた姪浜を離れ、本格的に小さなまち旅を始めた。小さなフィールドと組織の中にいると見えなかった多くのことを、小さなまち旅で体験し学んでいる。筆者にとって旅の終着点はない。今後も「毎日が発見ならぬ毎日がまち旅」「晴耕雨読ならぬ晴行雨紀（Traveler in fine weather and Writer in rainy weather)」というスタイルで小さなまち旅を続け、いろいろな風景や文化、人と出会い、いろいろなことを吸収していきたい。筆者にとって旅は生涯学習の場でもある。

「人生100年時代　皆さま方もいろいろな旅を楽しみましょう」

最後になりますが、今回の研究に当たりましては、筆者が訪問した際にいろいろとご教示いただいた皆さまにこの場をお借りして感謝の意を表します。また、今回も筆者のとりとめのない研究を会員研究として認めていただき、ご支援いただきました(公財)福岡アジア都市研究所の皆さまに謝意を表します。

２０２１年3月

参考文献等

■参考文献、引用文献

【報告書全般にわたり参考・引用したもの】

○(公財)福岡アジア都市研究所（会員研究員として筆者作成）

・「身近な地域資源を活かしたまちづくり活動記録～姪浜での 10 年の実践活動を中心とした、建築と地域づくりへの想い～」（2016 年度）

・「身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究～姪浜でのまちづくり活動と地域づくりを巡る小さなまち旅を通して～」（2017 年度）

【筆者が直接関わった福岡市役所での業務、唐津街道姪浜まちづくり協議会での活動等から参考・引用したもの】

○福岡市

・1995 年度海外派遣研修報告書「欧州における都市デザインの潮流について」（福岡市都市景観室時代に筆者作成）

・「シーサイドももち都市景観形成地区 景観形成ガイドライン」（1996 年６月発行）

・「御供所都市景観形成地区 景観形成ガイドライン」（1999 年３月発行）

○(財)福岡都市科学研究所

・「URC」Vol.50（2001 冬号）「こだわり、もてなしのまちづくり～小布施町と長野市の地域づくりを巡る旅～」（研究主査として筆者作成）

・「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」（2003 年３月）

○唐津街道姪浜まちづくり協議会（事務局長として筆者作成）

・「唐津街道姪浜 地域の魅力資源集（本編及び概要版）」（2008 年３月）

・「姪浜まち旅プロジェクト計画」（2016 年３月）

【参考文献、引用文献】

○東浩紀 著「弱いつながり 検索ワードを探す旅」（2016 年４月発行）

○出口治明 著「還暦からの底力　歴史・人・旅に学ぶ生き方」（2020 年５月発行）

○苅谷勇雅・西村幸夫 編著「歴史文化遺産　日本の町並み（上巻）」（2016 年１月発行）

○苅谷勇雅・西村幸夫 編著「歴史文化遺産　日本の町並み（下巻）」（2016 年３月発行）

○沢木耕太郎 著「旅のつばくろ」（2020 年４月発行）

○成美堂出版「今がわかる時代がわかる 日本地図 2021 年版」（2021 年１月発行）

○隈研吾 著「ひとの住処」（2020 年２月発行）

○隈研吾 著「14 歳の世渡り術 建築家になりたい君へ」（2021 年２月発行）

○エーディーエー・エディタ・トーキョー「建築への旅 建築からの旅」（2017 年５月発行）

【事例紹介関係等】

○第５回九州町並みゼミ八女福島大会&第５回まちなみフォーラム福岡 配布資料（2017 年９月）

○三浦正幸 著「日本の宝 鞆の浦を歩く」（2010 年５月発行）

○増田「蔵の会」発行「写真集 増田の蔵」（2012年10月発行）

○COMICO ART MUSEUM YUFUIN パンフレット
○ア・ラ・小布施 著「遊学する小布施 信州・小布施コンセプト＆ガイド」（1997 年４月発行）
○祝田秀全 著「近代建築で読み解く日本」（2020年５月発行）
○笠倉出版社「医者がすすめる温泉療行 大分県竹田市 長湯温泉」（2020年11月発行）
○その他、訪問先で入手した各種パンフレット、関連ホームページ等

■掲載写真

※特記なき限り「本報告書の写真はすべて筆者撮影」である。

（公財）福岡アジア都市研究所 会員研究員（2019～2020 年度）
大 塚 政 徳

【所属団体、活動】まちなみネットワーク福岡 代表
地域づくりを巡る小さなまち旅
【連絡先】
〒819-0013
福岡県福岡市西区愛宕浜２－３－２－６０１
TEL&FAX：092-882-3831
携帯：090-7929-7758
e-mail：la-mound.m.63@iwk.bbiq.jp

筆者の旅の系譜

参考資料１

	年齢	筆者の旅に影響を与えた主な出来事		筆者が実際に訪問し印象に残った主な建築物、町並み、都市等		
		筆者の動向	旅や建築に関する動向（旅●、建築▲）	現代建築	歴史的建造物・町並み・集落等	海外都市
子ども時代	0 18	1958.1 誕生	●国鉄ｷｬﾝﾍﾟｰﾝ「ディスカバー・ジャパン」 ●テレビ紀行番組「遠くへ行きたい」 ▲丹下健三（国立代々木競技場） ▲前川國男（東京海上ビル）※美観論争		■寺社（法隆寺、東大寺、富貴寺） ■城郭（会津若松城）	
熊本大学時代	18 22	1976.4 熊本大学建築学科入学 ■建築との出会い ■建築巡り ■卒業論文（三角西港）＆卒業設計（Architectural Complex） 1980.3 熊本大学卒業	●山口百恵「いい日旅立ち」（国鉄ｷｬﾝﾍﾟｰﾝ） ▲新聞記事「九州は現代建築の宝庫」 ▲住宅建築（清家清、篠原一男、吉村順三、宮脇壇、安藤忠雄） ▲熊本の歴史的建造物の保存運動（木島安史、長谷川堯） ▲弧風院（木島安史）	■磯崎新（群馬県立近代美術館、北九州市立中央図書館、福岡相互銀行本店、大分県立大分図書館） ■黒川紀章（福岡銀行本店） ■前川國男（熊本県立美術館、福岡市美術館） ■白井晟一（親和銀行本店） ■木島安史（上無田松尾神社） ■フランク・ロイド・ライト（旧帝国ホテル）	■城郭（熊本城） ■近代建築（熊本地方裁判所、弧風院） ■港・都市計画（三角西港） ■伝統的町並み（飫肥）	
鴻池組時代	22 28	1980.4 鴻池組入社 ■建築巡り ■歴史的建造物への興味 ■歴史的町並みへの興味 ■最初の海外への旅 1986.2 鴻池組退社		■村野藤吾（小山敬三美術館、八ヶ岳美術館） ■内井昭蔵（桜台コートビレッジ、身延山久遠寺宝蔵、東京 YMCA 野辺山青少年センター） ■白井晟一（芹沢銈介美術館） ■山下和正（フロム・ファースト・ビル） ■槇文彦（代官山プロジェクト） ■磯崎新（群馬県立近代美術館）	■寺社等（桂離宮、修学院離宮、三十三間堂、清水寺、銀閣寺、龍安寺、円通寺、詩仙堂、平等院鳳凰堂、法隆寺、唐招提寺、東大寺、薬師寺、室生寺、日光東照宮、伊勢神宮、鎌倉円覚寺舎利殿、金沢尾山神社神門） ■近代建築（京都中京郵便局、東京駅、迎賓館赤坂離宮） ■伝統的町並み（栃木、川越、金沢、倉敷、今井町、飫肥）	■エジプト（ｶｲﾛ） ■ギリシャ（ｱﾃﾈ、エーゲ海） ■イタリア（ﾐﾗﾉ、ﾌｨﾚﾝﾂｪ、ﾍﾞﾈﾁｱ、ローマ、ﾎﾟﾝﾍﾟｲ）
福岡市役所時代	姪浜まちづくり協議会活動前 28 35 42 49	1986.4 福岡市役所入庁 住宅供給公社配属 ■2回目の海外への旅 ■シーサイドももちクリスタージュ 1993.4 都市景観室配属 ■景観形成地区の指定（ｼｰｻｲﾄﾞももち地区、御供所地区） ■海外派遣研修 2000.4 福岡都市科学研究所配属 ■研究「広域連携」 ■国内外都市調査 2006.4 都市景観室配属 姪浜まちづくり協議会活動中 2007.3 唐津街道姪浜まちづくり協議会設立 ●事務局長として約 10 年間、各ステージの地域課題に対応した多彩な活動を企画・実践し、多くの成果を上げる。姪浜及び協議会の名前を全国に発信してきた。		■木島安史（球泉洞森林館） ■安藤忠雄（サントリーミュージアム天保山、熊本県立装飾古墳館、兵庫県立こどもの館） ■伊東豊雄（八代未来の森ミュージアム） ■坂倉準三（神奈川県立近代美術館） ■レム・コールハウス（香椎ネクサスワールド、アムステルダムの集合住宅） ■アントニオ・.ガウディ（サグラダ・ファミリア） ■イオ・ミン・.ペイ（ルーブル・ピラミッド） ■ジャン・.ヌーベル（アラブ世界研究所） ■ガエ・アウレンティ（オルセー美術館） ■ﾐｰｽ･ﾌｧﾝ･ﾃﾞﾙ・ﾛｰｴ(ﾊﾞﾙｾﾛﾅ・ﾊﾟﾋﾞﾘｵﾝ) ■ヨーロッパの現代建築 ■ル・コルビュジェ（国立西洋美術館） ■前川國男（東京文化会館） ■伊東豊雄（せんだいメディアパーク） ■隈研吾（浅草文化観光センター、アオーレ長岡、長崎県立美術館） ■槇文彦（代官山プロジェクト） ■アストリッド・クライン（代官山蔦屋書店） ■安藤忠雄（表参道ヒルズ、秋田県立美術館） ■山下和正（フロム・ファースト・ビル）	■寺社等（桂離宮、修学院離宮、清水寺） ■城郭（五稜郭、松本城、犬山城、姫路城） ■教会（崎津教会、大江教会） ■近代建築（ヨーロッパの近代建築、旧開智学校） ■ニュータウン（幕張、多摩、六甲） ■アーバンデザイン（横浜、神戸、パリ、ベルリン、シュトゥッツガルト、バルセロナ） ■国際建築展（ベルリン、シュトゥッツガルト） ■地域づくり（小布施、京都西陣） ■伝統的町並み（小樽、函館、角館、栃木、川越、金沢、松本、飛騨高山、須坂、彦根、長浜、京都、奈良、富田林、神戸、出石、萩、熊本、飫肥、知覧） ■ヨーロッパの街並み・集落 ■棚田（うきは市つづら棚田、星野村広内棚田） ■寺社（会津さざえ堂、阿蘇神社） ■城郭（会津若松城、熊本城、首里城） ■教会（大浦天主堂） ■近代建築（東京駅、旧岩崎久彌邸、旧唐津銀行、旧高取邸、武雄温泉楼門、旧グラバー住宅、八千代座） ■産業遺産（軍艦島） ■地域づくり（村上、八女） ■伝統的町並み（角館、横手増田、会津若松、喜多方、大内宿、川越、長岡、村上、倉敷、高梁、木屋瀬、八女、吉井、塩田、鹿島、島原、雲仙、杵築、臼杵、山鹿、熊本、那覇）	■ドイツ（ﾊｲﾃﾞﾙﾍﾞﾙｸ、ﾛｰﾃﾝﾌﾞﾙｸ、ﾌﾗﾝｸﾌﾙﾄ、ﾍﾞﾙﾘﾝ、ｼｭﾄｯﾂｶﾞﾙﾄ、ｹﾙﾝ、ﾊﾉｰﾊﾞｰ） ■オーストリア（ｳｨｰﾝ） ■イタリア（ローマ、ﾍﾞﾈﾁｱ） ■スイス（ｲﾝﾀｰﾗｰｹﾝ、ﾕﾝｸﾞﾌﾗｳ） ■イギリス（ﾛﾝﾄﾞﾝ、ｴｼﾞﾝﾊﾞﾗ、ｽﾄﾗﾄﾌｫｰﾄﾞ･ｱﾎﾟﾝ･ｴｲﾎﾞﾝ、ｺｯﾂｳｫﾙｽﾞ） ■スペイン（ﾊﾞﾙｾﾛﾅ） ■フランス（ﾊﾟﾘ） ■オランダ（ｱﾑｽﾃﾙﾀﾞﾑ、ﾕﾄﾚﾋﾄ） ■韓国（釜山、ｿｳﾙ、金海）
	55 58	2013.8 まちなみネットワーク福岡への参加 2016.5 唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業	●2010.4NHK「小さな旅」全国放送番組に移行 ●2016.4 熊本地震			

		年齢	筆者の旅に影響を与えた主な出来事		筆者が実際に訪問し印象に残った主な建築物、町並み、都市等		
			筆者自身	旅や建築に関する動向	現代建築	歴史的建造物・町並み・集落等	海外都市
福岡市役所時代	姪浜まちづくり協議会卒業後	58	2016.6 地域づくりを巡る小さなまち旅開始 ■地域づくりや建築の原点に返る旅 ■熊本の復興の過程を巡る旅 ■身近なまち旅 2016.9 福岡アジア都市研究所会員研究員 ■身近な地域資源を活かしたまちづくり活動記録（2016 年度） ■身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究（2017 年度）		■ル・コルビュジェ（国立西洋美術館） ■坂茂（大分県立美術館） ■隈研吾（根津美術館、サントリー美術館、富岡市庁舎、長崎県立美術館、スターバックス中目黒店、COMICO ART MUSEUM YUFUIN） ■磯崎新（群馬県立美術館、北九州市立中央図書館・文学館、北九州市立美術館、大分市アートプラザ） ■黒川紀章（国立新美術館） ■妹島和世（すみだ北斎美術館） ■伊東豊雄（八代未来の森ミュージアム） ■前川國男（熊本県立美術館、福岡市美術館） ■藤森照信（ラムネ温泉館） ■乾久美子（延岡駅） ■代官山、表参道、銀座等の現代建築 ■各種建築展	■寺社（富貴寺、文殊仙寺、両子寺、萬松院、長崎4福寺(聖福寺、福済寺、崇福寺、興福寺)、諏訪神社、上色見熊野座神社、八幡竈門神社、霧島神宮） ■城郭（五稜郭、松本城、熊本城） ■教会（トラピスチヌ修道院、今村天主堂、出津教会、大浦天主堂、﨑津教会、大江教会） ■近代建築（富岡製紙場、旧開智学校、旧唐津銀行、旧高取邸、旧グラバー住宅、弧風院、大分銀行赤レンガ館、尚古集成館） ■産業遺産（軍艦島、仙巌園及び周辺） ■港・都市計画（小樽運河、松代泉水路、鞆の浦、柳川掘割、川尻、三角西港） ■庭園（水前寺成就園、仙巌園） ■集落（伊万里市大川内山集落、長崎市外海集落、波佐見町中尾山集落、天草市﨑津集落） ■路地・坂道等（谷中、神楽坂、尾道、鞆の浦、長崎） ■ニュータウン（さいたま新都心） ■地域づくり（小布施、八女） ■伝統的町並み（函館、小樽、川越、松代、鞆の浦、木屋瀬、秋月、八女、鹿島、有田、長崎東山手・南山手、島原、美々津、知覧） ■ドイツの街並み・世界遺産 ■石橋（秋月眼鏡橋、長崎眼鏡橋、八代市東陽町種山、鹿児島石橋記念公園） ■風景（函館、洞爺湖、有珠山、定山渓、虹の松原、草千里、桜島、開聞岳） ■棚田（うきは市つづら棚田、東峰村竹棚田、豊後高田市田染荘） ■熊本地震からの復興（熊本城、阿蘇神社、阿蘇大橋、免の石、草千里、益城町、南阿蘇村、熊本市新町・古町、水前寺成就園）	
		60	2018.3 福岡市役所退職				
福岡市役所退職後		60	2018.4 建築確認検査機関に再就職				■ドイツ（ﾘｭｳｰﾃﾞｽﾊｲﾑ、ﾗｲﾝ川、ｹﾙﾝ、ﾊｲﾃﾞﾙﾍﾞﾙｸ、ﾋﾞｭﾙﾂﾌﾞﾙｸ、ﾛｰﾃﾝﾌﾞﾙｸ、ﾎｰｴﾝｼｭﾊﾟﾝｶﾞｳ、ｼｭﾀｲﾝｶﾞｰﾃﾞﾝ、ｶﾞﾙﾐｯｼｭﾊﾟﾙﾃﾝｷﾙﾍﾝ、ﾂｰｸｼｭﾋﾟｯﾂｪ、ﾐｭﾝﾍﾝ、ﾛﾏﾝﾁｯｸ街道）
		61	2019.6 福岡アジア都市研究所会員研究員 ■地域づくりを巡る小さなまち旅～時間 空間 旅～ ■博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想（2019～2020 年度）	●2020.1 新型コロナウィルス感染症発生 ●2020.4 新型コロナウィルス感染症対策第一回緊急事態宣言（福岡県 4/7～5/25） ●2020.7 Go To トラベル実施（7/22～12/27） ●2021.1 新型コロナウィルス感染症対策第二回緊急事態宣言（福岡県 1/7～2/28）			
		63	現在に至る。				

筆者の最近３年間（2018 年～2020 年）の小さなまち旅の訪問地（小さなまち旅３年日記）

参考資料２

主な訪問地			
月	２０１８年	２０１９年	２０２０年
１月	■鹿児島市（仙巌園、尚古集成館、スターバックス鹿児島仙巌園店） ■指宿市（指宿温泉、長崎鼻、開聞岳、池田湖、岩崎美術館） ■南九州市（知覧武家屋敷） ■尾道市（坂道と路地） ■福山市（鞆の浦） ■長崎市（軍艦島、唐人屋敷跡、新地中華街、長崎港） ■鹿島市（祐徳稲荷神社）	■行橋市（思い出の通学路とまちかど遺産） ■福岡市（福岡タワー、愛宕神社、愛宕浜、東長寺、櫛田神社、聖福寺） ■佐賀市（三瀬） ■長崎市（長崎県立美術館、長崎港、諏訪神社、眼鏡橋） ■諫早市（まちなか歴史散策） ■島原鉄道の旅（諫早～愛野） ■富岡市（富岡製糸場、富岡市庁舎） ■高崎市（群馬県立美術館） ■さいたま市（さいたま新都心、氷川神社） ■東京（上野、五反田、浜松町、芝大門） ■大村市（まちなか歴史散策）	■行橋市（思い出の通学路とまちかど遺産） ■福岡市（愛宕神社、愛宕浜、百道浜、福岡タワー、アクロス福岡、猿田彦神社　初庚申、平尾山荘、浄水通り、小烏神社） ■霧島市（霧島神宮、霧島町蒸留所） ■長崎市（日本二十六聖人殉教地(記念館、聖フィリッポ教会)、諏訪神社、松森神社、田川憲アートルーム Soubi ‘56） ■須恵町（旅石の赤レンガ塀の街並み） ■太宰府市（太宰府天満宮、スターバックス太宰府天満宮表参道店） ■大分市（大分市アートプラザ、大分銀行赤レンガ館、大分県立美術館、WAZAWAZA ビル、カモシカ書店、ガレリア竹町、祝祭の広場） ■別府市（まちなか歴史散策） ■川越市（「第 42 回全国町並みゼミ川越大会」参加、伝建地区の町並み、スターバックス川越鐘つき通り店）
２月	■熊本市（「熊本城主感謝状贈呈式」参加、熊本城、新町・古町） ■福岡市（豊浜、高取）	■福岡市（豊浜、愛宕神社、愛宕浜、天神） ■大分市（大分銀行赤レンガ館、大分市アートプラザ、大分県立美術館、カモシカ書店、WAZAWAZA ビル、府内城） ■佐賀市（三瀬） ■八女市（「第6回まちなみフォーラム福岡 in 黒木」参加） ■鳥栖市（長崎街道田代宿）	■さいたま市（さいたま新都心） ■東京（国立競技場、スターバックス中目黒店、森美術館「未来と芸術展」） ■福岡市（舞鶴公園、豊浜、愛宕、福岡市美術館「大浮世絵展」、愛宕神社） ■熊本市（小島地区、浜田醤油、健軍神社、古町、珈琲回廊） ■筑前町（当所地区、森山地区） ■太宰府市（太宰府天満宮、スターバックス太宰府天満宮表参道店） ■鳥栖市（長崎街道秋葉周辺） ■広川町（下広川小学校周辺） ■朝倉市（秋月　お雛様めぐり） ■佐賀市（三瀬） ■北九州市（門司赤煉瓦プレイス、門司麦酒煉瓦館、長崎街道豊前大里宿、スターバックス門司港駅店）
３月	■熊本市（水前寺成就園、熊本城）	■大村市（長崎街道松原宿） ■熊本市（川尻、水前寺成就園、新町･古町、熊本城） ■福岡市（田根剛「未来の記憶」展、百道浜、愛宕浜、姪浜、小戸、生の松原） ■久留米市（日吉神社） ■伊万里市（まちなか歴史散策） ■松浦鉄道の旅（伊万里～松浦発電所前） ■北九州市（門司港、小倉旦過市場） ■太宰府市（宝満宮竈門神社）	■長崎市（眼鏡橋及び周辺、長崎駅、田川憲アートギャラリーSoubi ‘56） ■大分市（大分市アートプラザ、大分銀行赤レンガ館、祝祭の広場） ■佐賀市（柳町　お雛様めぐり） ■うきは市（吉井町　お雛様めぐり） ■鹿児島市（仙巌園、スターバックス鹿児島仙巌園店） ■八女市（八女福島　お雛様めぐり、矢部） ■東彼杵町（大村湾、千綿駅及び周辺のリノベーション建築巡り） ■筑前町（草場川の桜並木と菜の花） ■松浦鉄道の旅（伊万里～調川）
桜巡り	■熊本市（健軍自衛隊通り、水前寺成就園、熊本城） ■朝倉市（秋月　杉の馬場、秋月城址） ■筑前町（草場川の桜並木） ■身近な桜（舞鶴公園、東長寺、愛宕神社、観音寺、姪浜） ■車窓からの桜	■熊本市（健軍自衛隊通り、水前寺成就園、熊本城、一心行の桜） ■朝倉市（秋月　杉の馬場、秋月城址） ■筑前町（草場川の桜並木） ■太宰府市（宝満宮竈門神社） ■大村市（大村公園） ■身近な桜（舞鶴公園、東長寺、櫛田神社、愛宕神社、観音寺、天神中央公園、能古島、姪浜、鳥飼、六本松、赤坂） ■車窓からの桜	■伊万里（松浦鉄道浦ノ崎駅、大川内山、伊万里神社） ■筑前町（草場川の桜並木） ■朝倉市（秋月　杉の馬場、秋月城址） ■久山町（白山神社） ■島原市（島原城） ■大村市（大村公園） ■身近な桜（舞鶴公園、東長寺、愛宕神社、観音寺、平尾山荘、小烏神社、鳥飼） ■車窓からの桜

※黒字：地域づくりや建築の原点に返る旅　　赤字：熊本の復興の過程を巡る旅　　青字：身近なまち旅

主な訪問地			
月	２０１８年	２０１９年	２０２０年
４月	■朝倉市（秋月） ■福岡市（能古島） ■熊本市（熊本城、新町・古町）	■東彼杵町（大村湾、千綿駅） ■大村市（まちなか歴史散策） ■豊後大野市（三重町） ■福岡市（赤坂 JT 跡地のイチョウ） ■南阿蘇村（黒川地区での復興イベント「南阿蘇・黒川ウォーク」参加） ■阿蘇市（阿蘇神社、孤風院） ■柳川市（西鉄中島駅周辺） ■筑後市（羽犬塚） ■大分市（大分市美術館、大分銀行赤レンガ館） ■唐津市（まちなか歴史散策）	■伊万里市（大川内山、まちなか歴史散策） ■有明海フェリーの旅（長洲港～多比良港） ■島原鉄道の旅（島原～諫早） ■大村市（まちなか歴史散策） ■諫早市（まちなか歴史散策） ■福岡市（愛宕浜、百道浜、博多湾、薬院、今泉） ■益城町（熊本地震からの復興） ■筑後市（筑後広域公園、矢部川河川敷、中ノ島公園の大楠林） ■佐賀市（三瀬） ■久山町（白山神社）
５月	■福岡市（能古島） ■南阿蘇村（免の石、阿蘇大橋） ■鹿児島市（城山、天文館） ■唐津市（まちなか歴史散策） ■長崎市（東山手地区） ■八代市（松浜軒、八代城跡、 未来の森ミュージアム） ■B＆S みやざきの旅（新八代～都城） ■対馬市（萬松院及びその周辺）	■行橋市（まちなか歴史散策） ■福岡市（愛宕、愛宕浜、薬院） ■唐津市（まちなか歴史散策） ■北九州市（若松まちなか歴史散策） **ドイツ世界遺産の旅** ■リューデスハイム（つぐみ横丁、市街地の街並み） ■ライン川クルーズ（リューデスハイム～ザンクトゴア） ■ケルン（ケルン大聖堂、市街地の街並み） ■ハイデルベルク（カール・テオドール橋、ハイデルベルク城、学生牢跡、聖霊教会、市街地の街並み） ■ビュルツブルク（市街地の街並み、レジデンツ、マリエンベルク要塞、旧マイン橋） ■ローテンブルク（市街地の街並み、お洒落なお店） ■ホーエンシュバンガウ（ノイシュバンシュタイン城、ホーエンシュバンガウ城、周辺の街並み景観） ■シュタインガーデン（ヴィース教会、農村景観） ■ガルミッシュパルテンキルヘン（市街地の街並み） ■ツークシュピッツェ（市街地の街並み） ■ミュンヘン（市街地の街並み） ■ロマンチック街道	■福岡市（愛宕浜、百道浜、博多湾、姪浜、愛宕神社、生の松原、小戸、能古島、薬院、奈良屋、御供所、平尾、浄水通、港、高宮南緑地） ■糸島市（桜井神社） ■大木町（天満神社、木本宮） ■佐賀市（佐賀駅前、三瀬） ■筑前町（草場川の桜並木） ■朝倉市（秋月　杉の馬場、秋月城址） ■南阿蘇鉄道トロッコ列車の旅（高森～中松） ■阿蘇市（草千里、米塚） ■熊本市（新町・古町、上之裏通り、水前寺成就園）
６月	■太宰府市（宝満宮竈門神社、太宰府天満宮） ■柳川市（掘割、沖端） ■糸島市（二丈） ■北九州市（戸畑、若松） ■長崎市（南山手地区、大浦天主堂、グラバー園） ■島原鉄道の旅（諫早～愛野） ■宗像市（唐津街道赤間宿） ■熊本市（「建築士の集い」参加、熊本城、新町・古町、上及裏通り） ■筑紫野市（長崎街道山家宿） ■鹿児島市（石橋記念公園、天文館、甲突川）	■福岡市（薬院） ■北九州市（小倉鳥町食道街） ■長崎市（紫陽花まつりとシーボルトゆかりの地） ■佐賀市（三瀬、佐嘉神社、柳町） ■有明海フェリーの旅（熊本港～島原港） ■島原市（鯉の泳ぐまち、寺町、武家屋敷、森岳商店街） ■島原鉄道の旅（島原港～諫早） ■行橋市（まちなか歴史散策） ■中津市（まちなか歴史散策） ■さいたま市（鉄道博物館） ■東京（国立西洋美術館開館 60 周年記念「松方コレクション展」＆国立西洋美術館誕生に隠された奇跡の物語「美しき愚かものたちのタブロー」） ■唐津市（鏡山、虹の松原） ■久留米市（久留米市美術館）	■熊本市（小島地区、浜田醤油、新町・古町、熊本城） ■福岡市（西日本シティ銀行本店、唐津街道箱崎宿、筥崎宮、薬院） ■鳥栖市（長崎街道田代宿、鳥栖八坂神社周辺） ■東峰村（宝珠山） ■朝倉市（三連水車、杷木） ■長崎市（眼鏡橋、長崎駅）
７月	■佐賀市（三瀬） ■北九州市（小倉駅北） ■福岡市（薬院、今泉、鳥飼、六本松、愛宕、愛宕浜、室見、博多住吉神社）	■小竹町（長崎街道小竹） ■直方市（まちなか歴史散策） ■福岡市（天神、博多祇園山笠、舞鶴公園、福岡市美術館、唐津街道箱崎宿、博多住吉神社） ※2019 年は約 20 年ぶりに追い山ならしを桟敷席で見学した。 ■小郡市（かえる寺） ■唐津市（虹の松原、浜崎） ■熊本市（熊本城、新町・古町、熊本県立美術館、橙書店）	■由布市（COMICO ART MUSEUM YUFUIN） ■熊本市（熊本城、上通り OMOKEN PARK、上之裏通り） ■福岡市（西日本シティ銀行本店） ■唐津市（旧唐津銀行、中町） ■大分市（大分県立美術館、大分市アートプラザ、大分銀行赤レンガ館） ■佐賀市（三瀬） ■鹿児島市（天文館）

※黒字：地域づくりや建築の原点に返る旅　　赤字：熊本の復興の過程を巡る旅　　青字：身近なまち旅

主な訪問地			
月	２０１８年	２０１９年	２０２０年
８月	■長崎市（平和公園、浦上天主堂、二十六聖人殉教地(記念館、聖フィリッポ教会)、諏訪神社） ■阿蘇（阿蘇神社、阿蘇大橋崩落現場、一心行の桜、水源巡り、草千里） ■朝倉市（三連水車） ■大刀洗町（今村天主堂） ■宇美町（極楽寺入口） ■松浦鉄道の旅（有田～今福） ■宇佐市（宇佐神宮、平和資料館） ■福岡市（櫛田神社、猿田彦神社） ■島原鉄道の旅（諫早～愛野）	■福岡市（大濠公園、福岡市美術館、愛宕浜、生の松原） ■熊本市（川尻） ■長崎市（平和公園、浦上天主堂、長崎県立美術館、崇福寺、新地中華街、唐人屋敷跡、孔子廟、オランダ坂、眼鏡橋及び周辺） ■佐賀市（恵比須様巡り） ■鹿児島市（名山、天文館）	■B＆S みやざきの旅（新八代～都城） ■八代市（東陽町種山　石工の郷） ■鳥栖市（長崎街道秋葉周辺） ■行橋市（行橋赤レンガ館） ■高森町（上色見熊野座神社、高森殿の杉） ■南阿蘇村（南阿蘇鉄道沿線） ■阿蘇市（阿蘇神社） ■豊肥本線の旅（阿蘇～立野） ■南小国町（押上石の丘） ■霧島市（霧島神宮） ■熊本市（上熊本駅、上通り OMOKEN PARK） ■佐賀市（コムボックス佐賀駅前） ■福岡市（西日本シティ銀行本店、唐津街道箱崎宿）
９月	■別府市（上人ケ浜温泉付近の住宅地、竹瓦温泉） ■長崎市（聖福寺、福済寺、本蓮寺、二十六聖人殉教地(記念館、聖フィリッポ教会)、長崎県立美術館） ■福岡市（高取、愛宕、姪浜） ■うきは市（つづら棚田） ■朝倉市（三連水車） ■北九州市（北九州市立美術館） ■八女市（町家散策ツアー、燈籠人形公演） ■大分市（大分県立美術館、ガレリア竹町） ■松浦鉄道の旅（伊万里～今福） ■松浦市（今福街道）	■福岡市（愛宕浜、大濠公園、福岡市美術館、御供所） ■佐賀市（三瀬） ■中津市（まちなか歴史散策） ■大分市（大分市アートプラザ、大分銀行赤レンガ館） ■朝倉市（三連水車） ■平成筑豊電鉄の旅（行橋～直方） ■松浦鉄道の旅（伊万里～調川） ■伊万里市（まちなか歴史散策） ■筑前町（長崎街道山家宿）	■別府市（竹瓦温泉、べっぷ駅市場） ■由布市（まちなか歴史散策、COMICO ART MUSEUM YUFUIN、アルテジオ） ■大分市（カモシカ書店） ■福岡市（大濠公園、福岡市美術館） ■九重町（長者原） ■竹田市（長湯温泉） ■唐津市（まちなか歴史散策） ■久留米市（筑後川河畔歴史散策）
10月	■柳川市（沖端） ■福岡市（古門戸町、御供所、能古島） ■筑後市（九州芸文館、筑後広域公園） ■久留米市（ほとめき通り商店街、筑後川） ■鹿島市（祐徳稲荷神社、肥前浜宿） ■佐賀市（三瀬） ■長崎市（崇福寺、興福寺、寺町通り、眼鏡橋及び周辺、中島川の石橋、唐人屋敷跡、新地中華街、長崎龍馬の道） ■豊肥本線の旅（大分～三重町） ■豊後大野市（三重町市場） ■唐津市（虹の松原、東唐津、唐津城） ■函館市（トラピスチヌ修道院、立待岬、元町、五稜郭、湯の川温泉、函館山からの夜景、朝市） ■函館～札幌（大沼国定公園、洞爺湖、有珠山、洞爺湖有珠山ジオパーク） ■札幌市（定山渓） ■小樽市（運河、歴史的建造物）	■佐世保市（カトリック三浦町教会、佐世保港、佐世保重工業、展海峰、戸尾市場街、とんねる横丁、させぼ五番街） ■久留米市（久留米市美術館） ■唐津市（呼子町） ■大分市（大分市美術館「磯崎新の謎」展） ■熊本市（熊本城、新町･古町、桜町バスターミナル） ■佐賀市（三瀬） ■久留米市（荒木町） ■福岡市（博多湾、今泉、能古島、海の中道海浜公園、愛宕浜） ■筑前町（草場川の桜並木） ■唐津市（鏡山） ■阿蘇市（米塚、草千里） ■南阿蘇村（免の石） ■西原村（俵山周辺）	■福岡市（原田、東長寺、愛宕浜、原、千代、西日本シティ銀行本店） ■霧島市（嘉例川駅、大隅横河駅、霧島神宮、霧島町蒸留所） ■杵築市（北台武家屋敷、南台武家屋敷） ■別府市（べっぷ駅市場、別府駅西口の別府石の石垣の街並み） ■大刀洗町（今村天主堂） ■筑前町（大刀洗平和記念館） ■熊本市（小島地区、浜田醤油、水前寺成就園）

※黒字：地域づくりや建築の原点に返る旅　　赤字：熊本の復興の過程を巡る旅　　青字：身近なまち旅

主な訪問地			
月	２０１８年	２０１９年	２０２０年
11月	■福岡市（愛宕浜、愛宕、百道浜、六本松、薬院、能古島、高取、舞鶴公園） ■松本市（中町通り、縄手通り、松本城、旧開智学校） ■長野市松代（松代城跡、武家屋敷、泉水路） ■小布施町（町並み、路地、古刹） ■久留米市（久留米市美術館「ウィリアム・モリスと英国の壁紙展」） ■熊本市（熊本城、新町・古町、水前寺成就園、熊本県立美術館） ■鹿島市（祐徳稲荷神社） ■朝倉市（秋月） ■北九州市（木屋瀬）	■福岡市（箱崎「第7回まちなみフォーラム福岡 in 唐津街道箱崎宿」参加、能古島、大濠公園、舞鶴公園、博多駅クリスマスマーケット） ■阿蘇市（米塚、草千里） ■南阿蘇村（黒川地区） ■南阿蘇鉄道トロッコ列車の旅（高森～中松） ■西原村（俵山周辺） ■熊本市（熊本城、新町・古町、熊本駅） ■唐津市（虹の松原） ■大牟田市（大牟田市動物園）※映画「いのちスケッチ」と関連して ■筑紫野市（二日市まちなか歴史散策） ■長崎市（水辺の森公園） ■大村市（森林公園から見た大村湾の夕景、まちなか歴史散策） ■佐賀市（三瀬） ■B＆S みやざきの旅（新八代～宮崎） ■鹿児島市（南洲神社、南洲墓地、大龍寺跡） ■朝倉市（秋月、松末、杷木） ■東峰村（宝珠山）	■福岡市（愛宕浜、能古島） ■別府市（八幡竈門神社） ■北九州市（小倉旦過市場、鳥町食道街） ■佐賀市（三瀬） ■糸島市（櫻井神社、桜井二見ヶ浦） ■竹田市（長湯温泉） ■豊後大野市（原尻の滝） ■八女市（八女福島） ■唐津市（鏡山） ■熊本市（熊本城、新町・古町、上熊本駅）
紅葉巡り	■松本市（松本城） ■長野市松代（松代城跡） ■小布施町（古刹） ■広川町（太原のイチョウ並木） ■久留米市（久留米市美術館、柳坂曽根のハゼ並木） ■熊本市（熊本城、水前寺成就園） ■鹿島市（祐徳稲荷神社、事比羅神社） ■朝倉市（秋月城址） ■筑前町（草場川） ■北九州市（木屋瀬） ■身近な紅葉（愛宕浜、愛宕、百道浜、薬院、能古島、紅葉八幡宮、舞鶴公園） ■車窓からの紅葉	■太宰府市（宝満宮竈門神社） ■広川町（太原のイチョウ並木） ■朝倉市（秋月城址） ■豊後高田市（富貴寺） ■身近な紅葉（舞鶴公園、百道浜、愛宕、愛宕浜、曲渕） ■車窓からの紅葉	■糸島市（雷山千如寺大悲王院、雷神社） ■唐津市（環境芸術の森） ■太宰府市（宝満宮竈門神社） ■身近な紅葉（百道浜、愛宕、愛宕浜、姪浜） ■車窓からの紅葉
12月	■佐賀市（三瀬） ■諫早市（まちなか歴史散策） ■鹿島市（肥前浜宿） ■熊本市（熊本城） ■福岡市（百道浜、愛宕、博多駅クリスマスマーケット） ■柳川市（西鉄中島駅周辺） ■太宰府市（太宰府天満宮） ■大分市（大分銀行赤レンガ館、大分市アートプラザ、大分市アートプラザ開館 20 周年記念「磯崎新講演会＆展覧会」） ※2018 年最後のまち旅は学生時代に一番見て回った磯崎新氏の作品の中でも印象に残っている旧大分県立大分図書館（現大分市アートプラザ）。大分に行く楽しみが増えた締め括りのまち旅となった。	■豊後高田市（富貴寺、田染荘） ■佐世保市（佐世保港、喧嘩独楽） ■長崎市（田川憲アートルーム Soubi ‘56、大浦天主堂、グラバー園、南山手美術館「田川憲　版画の世界」展、松森神社） ■福岡市（博多駅クリスマスマーケット、チームラボ福岡城跡　光の祭） ■佐賀市（三瀬、柳町） ■太宰府市（大宰府政庁跡、坂本八幡宮、太宰府天満宮） ■松浦鉄道の旅（伊万里～佐世保） ■八女市（八女福島） ■霧島市（霧島神宮）	■佐世保市（カトリック三浦町教会、とんねる横丁、戸尾商店街、佐世保重工業、赤レンガ倉庫群、第4ドック、展海峰） ■長崎市（日本二十六聖人殉教地(記念館、聖フィリッポ教会)、福済寺、聖福寺、諏訪神社、松森神社、田川憲アートルーム Soubi ‘56） ■太良町（有明海ノリ養殖の風景） ■福岡市（博多駅クリスマスマーケット） ■筑紫野市（二日市温泉街） ■霧島市（鹿児島神宮、嘉例川駅、大隅横川駅） ■鹿児島市（桜島、石橋記念公園） ■宇土市（網田駅、有明海ノリ養殖の風景）

※黒字：地域づくりや建築の原点に返る旅　　赤字：熊本の復興の過程を巡る旅　　青字：身近なまち旅